

早稻田大學
教授

竹野長次著

方丈記、土佐日記
十六夜日記

新
釋

東京 敬文堂書店刊

昭和十四年十月十五日印刷
昭和十四年十月二十日發行

方丈記・土佐日記
十六夜日記
新釋

定價金壹圓五拾錢

不許複製



著作者 竹野長次

東京市神田區司町二ノ一四

發行者 勝畑德太郎

東京市芝區濱松町二ノ一三

印刷者 山本源次郎

發行所 東京・牛込・早稻田鶴卷町四三六

敬文堂書店

發賣所 東京・神田・司町二ノ一四

司書院

電話神田(四)三一一二番
振替東京四七七〇七番

方丈記と解題

本書は鴨長明が世を忍んで、日野山の奥に詫びすまひをしてゐた折、その超俗簡易の生活を傳へたもの、卷末に見えてゐる通りの建暦二年に出來たものとすれば、鎌倉時代の初期、順徳天皇の御代、皇紀千八百七十二年の作で、實に此時代に於ける新文體の先鞭をなしたものと思はれる。

書名を方丈記と名付けた所以は、方一丈の草庵の生活を書いたものであるからで、作者は、昔釋迦在世の頃、天竺に維摩詰といふ者があつて、毘耶黎城の中に一丈四方の室を作り、其處に住んで釋迦の教化を助けたといふ故事から、自己の日野山の草庵をば、この維摩詰の方丈の居室になぞらへて作つたのである。

さて本書には廣本と略本との二種ある。廣本とは今日一般に讀まれてゐる流布本で、類從本、扶桑拾葉集本などは皆それである。然しこの廣本即ち流布本にも、本によつて多少の相違がある。がその相違は僅かに一二の字句の相違に過ぎないので、他の古文學書に見るやうな大したものではない。略本は延徳二年宗祇の手書したのを寫した

ものだと云ふ。これには、地震、大火、旋風などの變災をば記してなく、記事の順序も亦前後轉倒し、文章も廣本よりは遙かに劣つてゐる。廣略二本のうち何れがその原本であるかは今日明かでない。

次に本書の作者についての異論であるが、故藤岡博士は、本書中の記事に源平盛衰記平家物語の記事と相似てゐるものゝあること、本文中に玉葉集山家集の和歌を引用してあること、及び卷末の「月影は云々」の歌が源季廣の歌であること等の理由から、恐らく後人が諸書の一部を釘釘補綴して作つた偽書で、長明の作ではあるまいと論斷して居られる。さりながら、本書の記事と源平盛衰記平家物語二書の記事とが相類似してゐるにもせよ、その何れが本であるか否かは、さう容易に判定し得べきものでない。且本文に古歌を引用してあるなどいふ事は、最も普通なこと、引用の歌が作者と同時代のものか、それ以前のものであるならば、少しも差間がないわけである。たと卷末にある季廣の歌に至つては多少疑はしいのであるが、これも後人が本書を傳寫する際、誤つて書入れたのが、遂ひそのまゝになつて終つたものであらうと思はれる。然るに不透明な理由から、直に本書を偽書とするのは甚だ妄斷な所爲といはねばならぬ。殊に

本書よりも僅か三四十年後に出来た十訓抄には、明かに本書が長明の作であることを書いてある至つては、猶更斯の如き論斷は、輕卒な亂暴な書生論と言はねばなるまい。

方丈記と著者

本書の著者、鴨長明は、族稱を南大路、通稱を菊太夫といひ、鴨神社の氏人長繼の子である。その傳は今日猶明確に知られてゐない。和歌の道に長じ、管絃の技に妙を得てゐたこと、鴨の社司を望んで叶はず、爲に世を果敢なうで出家し、或は大原山の雲に或は日野山の閑境に、淋しい隱逸の生活を送りつゝ、ひたすら聖衆來迎の御惠を待つて居た事は、本書を一讀する者の容易に首肯し得られる所であらう。十訓抄には、近頃鴨社の氏人に、菊太夫長明といふものありけり。和歌管絃の道、人に知られたりけり。社司を望みけるが、叶はざりければ、世を恨みて出家して後、同じく先立ちて世を背ける人の許へいひやりけり、

何處より人は入りけんまくす原、秋風吹きし道よりぞ來し。

深き恨の心の闇は、暫しの迷なりけれど、この思をしも知るべにて、眞の道に入りけるこそ生死涅槃と同じく、煩惱菩提一なりける道理違はざりけりと覺ゆれ。

この人後には大原に住みけり。方丈記とて假名にて書きおけるものを見れば、はじ

めの詞に、「行く川の流は絶えずして、しかも本の水にあらず。」とあるこそ、

川闊^レ水以成^レ川、水滔々而日度、世闊^レ人而爲^レ世、人冉冉而行暮、

といふ文を書けるよと覺えて、いとあはれなれ しかしてかの庵にも 折琴つぎ琵琶などを伴へり。念佛のひま／＼には、糸竹のすさびを思ひ捨てざりけるこそ、すさの程いとやさしけれ。その後、本の如く和歌所の寄人にて候ふべき由を、後鳥羽院より仰せられければ、

沈みにき今さら和歌の浦波に、寄せばやよらむあまの捨舟。

と申して、終に籠りゐて止みにけり。

と見え、新古今集、雑の部には、

身の望みかなひ侍らで、社のまじらひもせで、こもり居て侍りけるに、葵を見
てよめる。

鴨 長 明

見れば先づいと涙ぞもろかづら、いかにちぎりてかけ離れけむ。

とある。その他、撰集にも、千載集に一首、新古今集に十首、續古今集に一首、作者の詠歌が載せられてゐる。家集に鴨長明集がある。中でも新古今集中にある、賀茂歌

合に讀んだ、「石川や瀬見の小川の清ければ、月も流れを尋ねてぞすむ。」といふのが、一番名高いのみで、他にはさまで人口に膾炙されてゐるものもない。

彼が後鳥羽上皇の和歌所の寄人であつた事は、前に引いた十訓抄の文を見ても、或は又古今集中に散見する和歌に依つても、之を信憑するに、さまで難くはない。新古今集中にある彼の歌の中で、三首までは、和歌所の歌合の時に讀んだものである。

同書秋の部に、

八月十五日夜和歌所歌合に、深山月といふことを、
鴨 長 明

眺むれば千々にもの思ふ月にまた、わが身ひとつの嶺の松風。

また、

八月十五日夜和歌所歌合に、海邊秋月といふことを、
鴨 長 明

松島や鹽くむ蟹の秋の袖、月は物思ふならひのみかは。

また、同書雜の部に、

和歌所歌合に深山曉月といふ事を、
鴨 長 明

夜もすがらひとり深山の槇の葉に、曇るも澄める有明の月。

とある。

その他、吾妻鏡、第十九、建暦元年十月十三日の條に、

「十三日、辛卯、鴨社氏人菊太夫長明入道、法名蓮胤、依_ニ雅經朝臣之舉、此間下向、奉_レ謁_ニ將軍家_一及_ニ度々_一云々、而今日當_ニ平幕下將軍御忌日_一、參_ニ彼法華堂_一、念誦讀經之間、懷舊之淚頻相催、注_ニ一首和歌於堂柱_一。

草も木も靡きし秋の霜消えて、むなしき苔をはらふ山風。

としてあるのを見ると、建暦中鎌倉に遊んで、將軍賞朝朝臣に面謁したらしくも思はれる。新古今集羈旅の部に、著者の、

袖にしも月かゝれとは契りおかず、涙は知るやうつつの山越え。

といふ歌があるが、多分之は鎌倉などに下つた時、駿河國宇津の山邊での旅愁を詠んだものであらう。

猶彼の歌集に依ると、美濃國虎溪山に退隱してゐたこと、攝津國昆陽野に草枕の夢を結んだことなども見えてゐる。殊に

世のうさにかへたる山のさびしさを、とはぬぞ人のなさけなりける。

の一首は、虎溪山に居つた頃、人の訪ねて來た折、讀んだものであるといふ。

彼の没年に關しては、流水抄に、

或は云 久壽元年甲戌に生れ、建保四年丙子六月八日寂す、六十三歳ともいへり。

とある。が然し全然信するに足る程のものでない。

また扶桑隱逸傳には、

鴨長明者、河合宮之氏人也。好和歌、愛糸竹、嘗覬觀爲社司而不許、因此息交、蕭然杜門、偶々見葵、詠歌述懷、元曆上皇采錄于勅撰焉、一朝遜世、往大原山變名蓮胤、於後上皇降命、召於和歌所、長明不肯起、詠歌以見志、建曆元年、藤雅經所催、赴鎌倉屢謁將軍實朝、會詣賴朝廟、作和歌一首、顯於法華堂柱、示其感懷、明年之春、在日野外山著方丈記、長明常作一實、縱橫十笏、高不盈七尺、鈎銷自在、而東西南北、隨意所適移之、其具僅可載兩車也、外山有石床、俗名方丈石者也、上皇再微幸于石床云。

とあるが、要するに之は以上に擧げた斷簡を統一したものに過ぎない。また、醍醐隨筆に、

日野の外山に、鴨長明が方丈を作れる遺跡ありと聞きて、ゆかしく思ふまゝ、わが庵より道の程遠からねば、かちよりしてたづね侍りけると云々。

などとも見えてゐる。

上述の如く、彼の傳に就いては斷片的記録によつて、纔かにそれと推測するに止まるのみで、的確なものではない。

次に作者の人物についてとあるが、彼は餘程理屈好きの、情よりも知の勝つた、趣味よりも才に長じた、それに自我の念の強い、負け嫌ひの人であつたらうかと思はれる。本書を一讀しても、初めから終りまで、理論と實證とで經緯し、將に筆をとどめんとする時に至つてすら、猶「佛の人を教へ給ふ趣は、事に觸れて執心なかれとなり。今草の庵を愛するもとがとす。閑寂に著するも障なるべし。いかゞ用なき樂みを述べて、空しくあたらし時をすごさむ。」と、言うてゐる。そして本文中には、豊富な趣味性から然らしめたと思はれる箇所よりは、寧ろ冷かな知の光りで理窟詰めに押して行つた趣、理論と事實との、やゝもすれば角張つて無味乾燥に陥りさうな筆路を、その天稟の才で面白く讀ませてゐるといふ跡が、歴然と見えてゐる。新古今集に出てゐる、

秋風のいたりいたらぬ袖はあらじ、たゞわれからの露の夕ぐれ。

眺めても哀れと思へ大かたの、空だに悲し秋の夕ぐれ。

枕とていづれの草に契るらむ、ゆくを限りの野への夕暮れ。

などいふのを見ても、その理窟屋で、且才氣に富んでゐたことが想像出来よう。

かういふ性格から推して、彼が出家の動機及び其後の心理状態、或は本書を書いた眞意を探ぐつて見るに、それ等は學識才氣ある我的強い男の、世に拗ねた所爲と少しも異ならない。彼の出家は、その志を得ないがための不平憤懣からであると想像出来る。そして本書は、その拗ね坊主が世間に對する消積的不平と負け惜みの議論とを述べたに過ぎないので、決して解説の眞風光、超俗の情味を傳へようとしたものではない。大原山の雲に或は日野の山奥に蟄居したのも、自分を壓迫した當時の權門に對する面當と、我的強い性格とからであつた。然し簡素靜寂の山林生活も、月を重ね年を積む間には、心が自らそれと融和し流通して、捨て難い趣も味ひ得、それを樂しむことも出来、俗世が却つて厭はしくも思はれるやうになつた。さりながら全く俗世を顧みずに居られる、所謂悟達の妙境に入ることとは出来なかつた。自ら都に出でては乞食

となれることを恥づといへども、かへりてこゝに居るときは、他の俗塵に著するを憐ぶ。」とあるやうに、山中に居れば心の平靜を保ち得るのであつたが、矢張り世俗の間に立つては、悲しいかな周囲の誘惑に心を亂されたのである。常住座臥、境涯の如何に不拘、無念無想の状態をば保持し得なかつた。實に俗世と超俗との間に彷徨して藻掻いてゐたのである。「汝が姿はひじりに似て、心はにごりしめり云々。」とあるのは、彼が這般の心情を語つたものであらうと思はれる。そしてこの彷徨してゐる心を、超凡脱俗の眞境に全く悟入せしめやうと願ひつゝ、それを果さぬうちに入寂したもののらしい。卷末にある季廣の歌は、無論後人の書入れではあるが、長明が晩年の人生觀を歌つてゐるものと思ふ。この暗合が後人をして此歌を此處に書入れしめたものであるのかも知れない。月は常に照るものだが、山の端に隠れることのあるのがつらい、不斷の明光の仰ぐよしもあるよといふ歌意は、折角悟りかけた心を、俗界の刺激によつて亂されるのがつらく感じる。願くは絶えずこの悟りの心を持續して行きたいものだと思ふ。望んでゐる作者の心持を、偶然に歌うてゐるものではないか。

方丈記と平家物語

本書の記事が源平盛衰記平家物語のと酷似してゐる箇所が多いことは前に述べた通りであるが、今便宜のため茲に一括して掲げることとする。まづ大火の記事（本書七頁）は、平家物語卷一の「内裏炎上の事」の條に似て、それには、次の如く見え、

同二十八日の夜の戌の刻ばかり、樋口富小路より火出で來て、京中多く焼けにけり。折節巽の風烈しく吹きければ、大きな車輪の如くなる焰が、三町五町を隔て、乾の方へすぢ違ひに飛び越え、焼け行けば、恐しなども愚かなり。或は具平親王の千草殿、或は北野の天神の紅梅殿、橘逸勢の蠅松殿、鬼殿、高松殿、鴨居殿、東三條冬嗣の大臣の閑院殿、照宣公の堀川殿、これを始めて昔今の名所三十餘箇所、公卿の家だにも十六箇所まで焼けにけり。その外殿上人、諸太夫の家々はしるすに及ばず。はては大内に吹きつけて、朱雀門より始めて、應天門、會昌門、大極殿、豊樂殿、諸司八省、朝所、一時がうちに皆灰燼の地とぞなりにける。家々の日記代々の文書、七珍萬寶、さながら塵灰となりぬ。人の焼け死ぬること數百人、牛馬の

類ひ數を知らず。

次に辻風の記事(本書十二頁)は、平家物語卷三「颯風の事」の條に、次のやうにある。

同じき五月十二日の午の刻ばかり、京中に颯夥しう吹きて、人屋多く顛倒す。風は中の御門京極より起つて、坤の方へ吹いて行くに、棟門平門吹き抜いて、四五町十町許り吹きもてゆき、桁、長押、柱などは虚空に散在し、檜皮、葺板の類、冬の木葉の風に亂るゝが如し。夥しう鳴りとよむ音は、彼の地獄の業風なりとも、是には過ぎじとぞ見えし。たゞ舍屋の破損するのみならず、命を失ふ者も多し。牛馬の類數を知らず打殺さる。これたゞ事に非らず、御占あるべしとて、神祇官にして御占あり。今百日の中に、祿を重んずる大臣の愼、別しては天下の大事、佛法王法共に傾き、竝に兵事相續すべしとぞ、神祇官陰陽寮ともに占ひ奉る。

次に福原遷都の記事については(本書十六頁)平家物語卷五「都遷」の條に、

治承四年六月三日の日、福原へ御幸なるべしと聞ゆ。この日ごろ遷都あるべしと聞えしかども、忽に今日明日の程とは思はざりしものをとて、京中の上下騒ぎあへり(中略)軒を争ひし人のすまひ、日を経つゝ荒れゆく、家は賀茂川桂川に毀ち入れ、

筏に組み浮べ、資財雜具舟につみ、福原へと運び下す。たゞなりに、花の都・田舎になるこそ悲しけれ。

と見え、「都がへりの事」の條には、

新都は北は山々聳えて高く、南は海近くして下れり。浪の音常にかまびしう、潮風烈しきなり。

とあり、更に「新都」の條には次の如く見えてゐる。

舊都は既にうかれぬ。新都はいまだ事ゆかず。ありとしある人は皆浮雲の思をなし、もと此所にすむ者は、地を失つて愁へ、今遷る人々は、土木の煩をのみ歎きあへり。すべて唯夢の様なりし事どもなり。(中略)古の賢き御代には、即ち内裏に茅を葺き、軒をだにも整へず、煙の乏しきを見給ふ時には、限ある御貢物をも許されき。是即ち民を恵み、國を扶け給ふに依つてなり。云々。

次に、饑饉及び疫病の記事(本書二十七頁)は、源平盛衰記卷二十七、「天下饑死」の條のと似てゐ、それには、

さる程に去年諸國七道の合戦、諸山の破滅もさることにて、天神地祇恨を含み給ひ

けるにや、春秋は炎旱夥し、秋冬は大風洪水斜ならず、懇に東作の勤を致しながら空しく西收の營絶えにけり。三月雨風起、麥笛不_レ秀多黃死、九月霜降早寒、禾穗未_レ熟皆皆青乾といふ本文あり。かやうによからぬことのみありしかば、天下大に饑饉して、人民多く餓死に及べり。僅かに生ける者は、或は地をすて、境を出で、此處彼處にゆき、或は妻子を忘れて山野に住み、浪人巷に伶俚し、憂の聲耳に滿てり。かくて年も暮れにき。明年はさりともし立ち直ることもやと思ひし程に、今年は又疫癘さへ打副へて、饑えても死に、病みても死ぬ。ひたすら思ひ侘びて、事よろしき様したる人も、形をやつし、様をかくして諂ひゆく。さうかとすれば、やがて倒れ伏して死ぬ。路頭に死人の多きこと算を亂せるが如し。されば馬車も死人の上を通る。臭香京中に充ち滿ちて、道行く人も輒からず。かゝりければ、餘りに餓死に責められて、人の家を片端より壞ちて、市に持ち出でつゝ、薪の料に賣りけり。其中に薄く朱などの付きたるもありけり。是はせん方なき貧人が、古き佛像卒都婆などを破つて、一旦の命を過ぎんとて、かく賣りけるにこそ。誠に濁世亂慢の折と云ひながら、心うかりける事どもなり。

とあり、地震の記事(本書四十頁)は、平家物語卷十二「大地震」の條と殆ど同文で、それには次の如く出てゐる。

同じき七月九日の午の刻ばかり、大地震夥しう動いてやゝ久し。(中略) 皇居を始め、在々所々の神社佛閣、あやしの民屋、さながら皆破れ崩る。崩るゝ音は雷の如く、上る塵は煙の如し。天暗うして日の光も見えず。老少共に魂を失ひ、朝衆悉く心を盡す。また遠國近國もかくの如し。山崩れて河を埋み、海傾いて濱を浸す。渚漕ぐ舟は波に揺られ、陸行く駒は立處を失へり。大地裂けて水湧き出て、磐石破れて谷へ轉ぶ。洪水漲り來らば、岡に上つてもなか助からざらむ。猛火燃え來らば川を避けても暫は避けぬべし。鳥にあらざれば空をも翔り難く、龍にあらざれば雲にもまた上り難し。たゞ悲しかりしは大地震なり。白河、六波羅、京中に打埋れて、死ぬる者いくらといふ數を知らず。四大種の中に、水火風雨は常に害をなせども、大地に於ては異なる變をなさず云々(中略)。昔文徳天皇の御宇、齊衡三年三月八日の大地震には、主上御殿を去りて常寧殿の前に五丈の幄屋を建て御座しけるとぞ承る。そ

は上代なれば如何ありけむ。此後はかゝる事あるべしとも覺えず。
この、大火、大風、都遷り、地震のことは、盛衰記の卷四、卷十一、卷十六等にも
見えてゐるが、之等は平家物語の方が殊に類似してゐるから、平家物語の文を掲げる
だけにして、盛衰記の方は略して置く。

方丈記の概評

何れの時何れの世にも、優勝者と劣敗者とのあるは免れぬことで、雄々しい颯爽たる姿の裏には、痛ましいみじめな影が蠢いてゐる。鎌倉時代は武士といふ荒くれ者が社會の表面に躍り出て、傳統を破り因襲を蹂躪し、思ふ存分の力比べをした活舞臺である。今まで雲の上人として、兎も角も朝政を翼賛して來た公卿の一味は、之等武士の爲に見る影もなく壓迫されて終つた。朝鳥の華やかな鳴聲は東國の空にのみ聞えて、夜陰にすだく蟲の悲しい音が、洛陽のほとりに満ちてゐた。本書はかういふ實力の闘争適者存続といふ、普通人から見ると戦慄すべきあさましい時代を裏面から説明したもので、全篇を通じて陰慘な影が漂うてゐる。前にも言うた通り、作者は或る地位を望んで得られなかつた敗北者である。表面に活躍するだけの力を有たなかつた弱者である。然かも自我の強い性質から、壓迫されたまゝに、泣寝りに終ることも出來ず、その壓迫者に對する憤懣と面當てとから、遂に世を忍んで日野山の奥に姿を隠し、此處に聖の生活を眞似ながら、一生一代の負け惜しみを、僅かに本書に述べたのである。

で言ふ所は、理論の筋の通つた立派なものであるが、神韻の掬すべきものもなければ、至純の情味強烈な感激などいふものもない。皆一種の僻み根性から出た弱者の聲で、眞に悟道に入つた人の超俗高邁な感想だとは、猶更見られない。眞に宗教的感情から世を背いた者の文であるならば、全篇を壓する強い清らかな情調がなくてはならぬのに、本文の如きは知的判断に訴へて、讀者に成程と思はせる正しい理義のあるにも拘らず、その腹底に喰ひ入つて、之を誘引する魅力を缺いてゐる。もしも多少なり、讀者の情感を動かし得るとすれば、そは彼の才筆の力であつて、それで本書の價値を定め得べきものではない。此深刻味を缺いてゐる所から見ても、作者は決して宗教的感情から浮世を果敢なんだ人でもなく、脱俗の眞風光を傳へんが爲に本書を書いたのではない事がわかる。

想ふに、日野の草庵、脱俗の簡易生活は、自我の念の強い弱者である作者の、當時唯一の逃げ場所であつたらう。人を従へるだけの實力もなければ、人に屈するだけの雅量もない、かういふ人間が出家の姿に自己の無能を隠して、却つて世間の物質的偉大を喘ひ、諦めた人生觀を述べて、それでせめてもの腹癒せにしたのである。

本書は古來普通の隨筆記事と見られてゐるが、初めから一つの目的を以て、想を考へ順序を案じ、首尾を一貫させるやうに筆を取つたもので、その時その折の興に乗じて、切れ／＼の思想趣味を語つたものとは、全然その趣を異にしてゐる。まづ「ゆく川の流は絶えずして、しかも本の水にあらず云々。」と冒頭して、作者の人生觀を概括的に述べ、次に火事、旋風、都遷、饑饉、地震、疫病等の凄慘な光景、それに惱まされる世の人の果敢ない状態を寫し、之等具體的事實に依つて、冒頭の抽象的斷案を立證し、進んでは、晉に斯の如き悲惨な出來事のある許りでなく、その他住む場所により身の程に應じて、面倒の多いことを説き、轉じて已が出家のことに言ひ及び、日野山の草庵の模様、閑居の氣味を語り、彌陀の來迎を待つ眞風光をほのめかして筆を結んでゐる。その間に一字一句の無駄がない、論理の筋が整然として、纏つた立派な論文をなしてゐる。

文章は流暢な遒勁なもので、意味も透徹し、難澁な點もない。爽快な調子と、趣のある抑揚があつて、潑瀾たる才氣に満ちてゐる。強ひて難を言へば余り文飾に過ぎた嫌ひがないでもない。勉めて對句を用ゐ、誇張法をとり、修辭のために、却つて文意

を害してゐるやうな點がある。それに語格の違ふところ、漢文から來た生硬な句調もまゝ見える。然し大體に於て、國文學史上、和漢折衷文體の魁をなす、立派な文章だと言はねばなるまい、そして本書の價値の大部分もまた此點に存すると云うても差聞なからう。

方丈記新釋目次

ゆく川の流	一
安元の大火	七
治承の辻風	一二
都うつり	一六
養和の饑饉	二七
元暦の大震	四〇
世のありにくきこと	四五
出 家	五一
末葉のやどり	五六
外山の閑居	五七

閑居の氣味……………	八六
静かなる曉……………	一〇二

方丈記新釋

目次終

方丈記新釋

【通釋】

流れゆく川水は絶えないで、その上、同じ水でない。よどみに浮ぶ水泡は、消える端から一方に新しいのが出来て、同じものの久しく形を存してゐることがない。この世の中に在る人と住家とは、亦流れゆく水や、消えては結ぶ水泡のやうなものである。玉を敷いたが如き、宏壯華麗な町並の都の中に、棟を並べ薨を争うて、

ゆく川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまることなし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。玉敷の都のうち、棟をならべ薨を争へる、高きいやしき人のすまひは、代を経てつきせぬものなれど、これをまことかとたづぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家ほろびて小家となる。住む人もこれに同じ。處もかはらず人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、僅にひとり

ギンシリ建つてゐる、上下貴賤様々の人の邸宅家は、永い年代を経過して、滅び盡きないものであるが、之を元のまゝの家かと思つて尋れると、昔あつた家の今に存してゐるのは稀である。或は去年破損して今年それが出来上り、或は大きな家が廢滅して小さい家となる。その内に住んでゐる人も、家のうつりかはるのと同じで、様々の變遷がある。場所も變らないし、住んでゐる人も多くあるが、もと見知つてゐる人は、二三十人の中で、たつた一人か二人である。世の人の朝には死

ふたりなり、朝に死し夕べに生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず。生れ死ぬる人、いづ方より來りて、いづ方へか去る。又知らず、假のやどり、誰がために心を惱し、何によりてか目を悦ばしむる。その主人と住家と無常を争ふさま、いはゞ朝顔の露に異ならず。あるは露落ちて花残れり。残れりといへども朝日に枯れぬ。あるは花は萎みて露なほ消えず。消えずといへども夕を待つことなし。

◎ゆく川の流。「ゆく川」は流れゆく川。論語子罕篇に、「子在川上曰、逝者如斯歟、不舍晝夜。」とあるを、此句の據所であるやうに説いてゐる註もあるが、本文の冒頭句に典故などいふ深い用意はなく、只當時よく言ひふるされてゐる比喩を、輕妙に淡乎と讀み出したまでのものに過ぎぬらしい、だから何も後世から色々と出所の詮議立てなどする必要もあるまい。文撰卷十六、陸士衡の歎逝賦にも、「悲哉川閱、水以成川、水滔々而日度、世閱人而成世、人冉冉

し、夕には生れる、生滅輪廻の有様は、全く水泡の消えては結ぶのに似てゐる。かやうな果敢ない世の有様であるが、その生れたり死んだりする人々は、何處からやつて来て何處へ立去るのか、わかからない。僅かの間住むこの世で、住家をば誰の爲に苦心して綺麗に造るのか、又はどういふ理由で、目を悦ばせる程美々しく磨き立てるのか、その心持がまた合點が行かない。華麗な家に住む主人と、その住家とが、共にわれ先きにと争ふが如く無常の嵐に消え去るさまは、譬へて言ふならば、朝

而行暮、人何世而弗_レ新、世何人之能故、野每_レ春必華、草無_レ朝而遺_レ露云々。」とある。◎よどみ。水の滯滞し湛へてゐる所。和名抄、「澱・訓與止美、俗用澱字、云與止、所謂澱度也、云々、如淵而澱處也。」散木集、「白川のよどみに宿る月見れば、靡く玉藻ぞ雲となりぬる。」◎うたかた。水上に出来る泡。此語義は、水の泡の空形から出たので、暫時の意にも、危き事にも、または泡をさしてもいふ。賀茂眞淵は、うたかたは潦水の上に浮く泡のことで、空像といふことであるを、はかなく危く定め難いことに譬へるのだと云うてゐる。萬葉集、「鶯の來鳴く山吹うたかたも、君が手ふれず花散らめやも。」とあるは、姑くの意。また同書「うたかたも言ひつゝもあるかあれしあれば、つちには落ちじ空の消ぬとも。」とあるは、危き意。◎かつ消えかつ結びて。かた方は消え、かた方は生じて。「むすぶ」は凝り固まる意。「かつ」ば、同時に二つの動作の起るさまをいふ副詞。千載集、藤原公任。「こゝに消えかしこに結ぶ水の泡の、うき世にめぐる身にこそありけれ。」單に「消え結ぶ」と言はずに、「且消え且結ぶ」と言うた所に、同一の形状を幾回となく繰返す趣を見せて、新陳絶えまなく變る有様を輕妙に叙してゐる。◎またかくの如し。流水の間斷なく流れ去り、泡沫の結ぶ端から消え行

額の花と、その露とが、争つて凋落し消えて行くのと同様である。或は露が消えて花が散らずに残つてゐる。然し残つてゐても、それは朝日の爲に忽ち枯れて終ふ。或は花は凋衰しても露がまだ消えない。然し消えないというても、それが夕方まで残つてゐる事はない。

くやうなもので、永久に存続するものはないといふ意。◎玉敷。玉を敷いたやうに美しい所。萬葉集、十五卷、「玉敷ける清き渚をしほ滿てば、飽かずわれゆく還るさに見む。」夫木集、「百敷や玉しく庭の清き瀬に、光りをそへて宿る月かな。」同集、「荒れにける高津の宮の淺茅原、なほ玉しきのむらさめの露。」などあるは、みな、玉をしき並べたが如く美しいといふ意。また家造りの美麗なのをほめても言ふ、萬葉集。「葎はふいやしき宿も大君の、まさむと知らば玉しかましを。」などあるは、家作りの美しい意。爰では都の枕詞に用ゐてゐる。◎蔓。和名抄に、「蔓、伊良賀、釋名云、屋背曰蔓、言在上覆家屋也。」とある、即ち棟の瓦をのせる所をいひ、轉じて、棟瓦、または瓦屋根のことをいふ。「蔓を争へる」は、屋根の澤山に並び立つてゐるさまをいふ。◎これをまことかと。並び立つてる家々を、眞實に變遷のない、元のまゝのものかと思つて。◎あるは、あるひはに同じ。◎去年破れて今年は作り。この句は語法が照應してゐない。「破れ」はう行下二段の自動詞、「作り」はう行四段の他動詞である、随つて、破れは家を承け、作りは家を承けねばならぬ、然るに破れと作りとが同一主格を受けてゐるのは、前後照對應の具合が齟齬して面白くない。正しくは「去

年破れて今年は建たり」などあるべきであらう。◎處もかはらず。家の在場所も變らない。後漢書、「思其人至其郷、其所存其人亡。」◎古見し人。以前に見た人。◎たゞ水の泡にぞ似たりける。全く水の泡のかつ消えかつ結ぶ有様に似てゐるよ。「たゞ」はひたすら、の意。「ける」は詠歎の意。◎知らず生れ死ぬる人……いづ方へか去る。此句と次の句とは共に倒装法を用ゐて調子を高めてゐる。人間の生れ来る生のはじめも知れなければ、また死んで行く死の終もわからない、つまり生と死とが間斷なく轉廻して、始もなく終もないとの意。◎假のやどり。假住居の意。また此世は住み果てることの出来ぬ世だといふ意から、現世を假の宿ともいふ。李白、「真桃李園」序云、夫天地者萬物之逆旅。撰集抄「生れ生れ、生れ生れて、生のはじめを知らず。死し死し死し死して、死の終をわきまへず。三途つひの住家にあらず。めぐりとめぐるところ、皆しばしのほどのやどりなり。」◎誰がために心を惱し。誰の爲に住家をば苦心して綺麗に造るのか。◎何によりてか目を悦ばしむる。どういふ理由で目を悦ばせるやうな立派な家を磨き立てるのか。發心集「百千年あらん爲に材木を選び、楡皮葺瓦を玉かゞみと磨き立てんも何のせんかある。あるじの命あだなれば住むこと久しからず。あるは他人の住家となり、雨にもれ風に折れぬ。況んや一度火

事出で來ぬる時、年月のいとなみ片時の間の雲煙となりぬるをや。◎無常を爭ふさま。われ先にと無常の嵐に散つて行く有様。「無常を爭ふ」とは、人や住家の果敢なく消えゆく様のいかにも迅速なのを形容して言うたのである。「無常」とは、世間一切の事物は生滅遷流して刹那も住することのないをいふ。涅槃經「此身無常、念々不住、猶如電光暴水幻炎。」釋氏要覽、「生滅輪迴謂之無常。」◎朝顔の露。朝顔の花に結んだ露。然し爰に朝顔の露というたのは、朝顔と朝顔の露との兩意に言ひかけてある。朝顔は牽牛花のこと、花旋科の一年生蔓草夏から秋にかけて花が咲く、白・紫・紺・紅・茶など種類多く、朝早く開いて日中に凋む。大和本草に「牽牛子朝間花容美しく見^{ヒカゲ}觀則萎故朝貌と號く」とある。一説に、木槿を朝顔といふとある、勿論木槿の事をも昔はあさがほというた。萬葉集にも、あさがほを讀んだ歌があるが、それは木槿のことである。此花も朝開いて夕に凋むので、爾雅、「槿……其華朝生暮落。」とあり、韻會にも槿は「木槿朝華暮落取^ニ瞬義。」とある。然し爰にいふ朝顔は牽牛花のこと。「朝顔の露」は、金剛經に、「如露亦如電」とある。の花の上の露「など見えてゐる。◎朝日に枯れぬ。朝日の爲に枯れて終ふ。」には、因つて、の爲になどいふ意。「ぬ」は終ふの意。◎夕を待つことなし。夕を待ち受けることがない。夕方に

【通釋】

大方物心を覺えて以來、四十年以上の月日を暮して來た間に、自分は、世の中の奇怪な事柄を見ることが、次第にたび重なつた。

過ぐる安元三年四月二十八日かと記憶するよ、風が烈しく吹いて驟々しかつた夜、午後八時頃、都の東南の方角から、火事

ならぬ前に消える意。「あるは露落ちて花残れり。」の句と「あるは花は萎みて露なほ残れり。」の句とは對偶法によつて文飾したので、對立の美を鮮かに見せてゐる。殊に、「花残れり、残れりといへども。」と云ひ、「露なほ消えず、消えずといへども。」と言ふやうに、連鎖法を用ゐたあたりは、少からぬ妙味がある。

およそ物の心を知れりしよりこの方、四十あまりの春秋を送れる間に、世の不思議を見ること、やゝ度々になりぬ。

いにし安元三年四月二十八日かとよ、風烈しく吹きて靜ならざりし夜、戌の時ばかり、都のたつみより火出で來て、いぬゐに至る。はてには朱雀門・大極殿・大學寮・民部省まで移りて、一夜が程に塵灰となりにき。火もとは樋口富小路とかや。病人を宿せる假屋より出でたりとなむ。吹きまよふ風に、とかく移り

が起つて来て、西北の方角へ焼けて行く。終には、朱雀門・大極殿・大學寮・民部省まで移つて、一晚の間に、悉く塵灰となつて終つた。火を出した所は樋口富小路だとかいふ事だ。其處の病人をとめてゐる假屋から出火したのだと言ふ事である。一定の方角もなく吹き亂れる風の爲に、彼方此方へ延焼し行く間に、焼けた場所は、恰も扇をひろげた恰好に、元よりも末の方が大きく燃え廣がつた。火に遠い家は、煙で息もつまるやうにひどく包まれ、近い場所は、一途に炎を地に吹きつけ

ゆくほどに、扇を廣げたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙にむせび、近きあたりは、ひたすら焰を地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光に映じてあまねく紅なる中に、風に堪へず吹き切られたる焰、飛ぶが如くにして、一二町を越えつゝ移りゆく。その中の人、うつし心あらむや。あるひは煙にむせびてたふれふし、あるひは焰にまぐれて忽ちに死にぬ。あるひは又、纔に身一つ辛くして遁れたれど、資財を取り出づるに及ばず。七珍萬寶、さながら灰燼となりなき。その費つくえいこそばくぞ、この度公卿の家十六焼けたり。ましてその外は數を知らず。すべて都の中、三分が一に及べりとぞ。男女死ぬるもの數千人、牛馬の類、邊際を知らず。人のいとなみ、皆愚なる中に、さしも危き京中の家を造るとて、寶を費し心を惱すこと

た、空には灰を吹き上げたから、それが火の光に映つて、一面紅の色に輝いてゐる中に、風の爲に堪へきれないで、千切れ千切れになつた焔が、飛ぶがやうに、す早く、一二町、間を置いては遠くに移つて行く。その焔の飛ぶ隅内に居る人々は、正氣がない。或者は、煙で息がつまつて卒倒し、或者は、焔の爲に逃げ道の方角もわからなくなつて、忽ち死んで終つた。或者は、たつた身體だけは、命からく、逃げのびたけれど、財産を運び出すまでには手をとどかない。七珍萬寶が、そのま

は、すぐれてあぢきなくぞ侍るべし。

◎およそ。大方、大體などいふ意の副詞。◎物の心を知れりしより世態人情を知つてから。「物の心」は、俗に、モノゴコロ又はヨゴコロなどいふに同じく、物事の趣、または男女間の情などいふ。源氏物語、紅葉賀「すこしもの、心知るは涙おとしけり。」是は長明自身の廿歳頃をさして云うたのであらう。◎春秋。春に夏を秋に冬をこめて、一年のことにいふ。◎世の不思議。世間の奇怪な事柄。天變地異をさしていふ。「不思議」は、不可思議の略語、考へはかる事の出来ぬ意。◎やゝ。次第に。やうやく。◎いにし。往ぬ」の連用形に過去の助動詞「き」の連體形「し」の加はつたもの。過ぎ去つたといふ意。◎安元三年。第八十代高倉天皇即位の年である。◎戌の時ばかり。午後八時頃。「ばかり」は、頃、程、などいふ意を言ひ添へる接尾語。◎たつみ。東南の方角をいふ。◎いぬる。西北の方角をいふ。◎朱雀門。平安の宮城十二門の一、南面の門をいふ。◎大極殿。大内裡八省院即ち朝堂院の正殿をいふ。「ダイゴクテン」と訓むが正しい。大極とは、易繫辭に、「易有大極、是生二儀」とあるのから取つたもの。大極殿の史に見えたのは皇極帝の御代で、殊に平安寛都以後、國儀大禮は此殿で行はれたのであるが、治承元年に焼亡してからは荒廢して終つた。

全部、灰燼となつて終つた。その損害は、どれだけか見當のつかぬ程多額である。

この度の火災で公卿の家が都合十六焼けた。まして、その外の卑しい者の家は、澤山で數がわからない。總體で都の中が三分の一に減じたと言ふ事である。男女の死んだ者が數千人、馬牛の類は限りなく多い。人間のしてゐる業は、みな愚かである中にも、あれ程にマア危険な都の中の家を造るというて、費用をかけた心苦しめて、壯麗にする事は、一等つまらなくありませう。

◎大學寮。「アंच्याノツカサ」と訓む。京都二條の南、朱雀の東、神泉苑の西に在る、學生を簡試し、釋奠の事を掌つた。廊内に本寮以下紀傳明經等の大學の講舎がある。◎民部省。「タミノツカサ」と訓む。大内裡太政官の南、美福門大路の西に在る。諸國の戶籍、賦役をはじめ、山川田野のことを掌る所。◎塵灰。ちりと灰。張説の詩に、「奮迹灰塵散、枯墳故老傳。」とあるが如く、物の滅び盡きるのに喩へる。◎樋口富小路。樋口は五條の南を東西に、富小路は京極の西を南北に通じる通。此火事のこと、平家物語一の卷、源平盛衰記四の卷等にも見えて、筆法が酷似してゐる。その他後段の大風、遷都、飢饉、大地震の記事も、平家物語や源平盛衰記の文に似てゐる、それ等は皆卷首序文のところに摘出して置いた。◎假家。假に造つた家の事。◎吹きまよふ風。一定の方向へきめて吹かずに、彼方此方と吹き亂れる風。古今集戀之部、「吹きまよふ野風を寒むみ秋萩の、うつりも行くか人の心の。」◎とかく。かれこれ、いろいろ、あちこち、どうともなどいふ意の副詞。源氏物語、帚木、「さうらうしくてとかくまざれありき侍りしを。」などあるは、あちこちの意。◎末廣。扇をひろげたやうに、本よりも末のひろがつてゐるのをいふ。随つて扇のことを末廣と

いふ。◎煙にむせび。煙のため呼吸の塞がる意で、ひどく煙に包まれた有様をいふ。此句は、所謂擬人法を用いたのである。◎ひたすら。いちづに、ひとむきに。◎あまねく。洩れる所なく一面に。◎うつし心。現心ウツ、ココロと同じ。強く確な心。◎うつし心あらむやの「や」は反語。◎焰にまぐれて。焰のために自分の逃げ行く方向もわからなくなつて。「まぐれ」は「まぎれ」に同じ。◎死にぬ。是は「死ぬ」とあるを、「死にぬ」と讀み誤つたものであらうか。「死しぬ」とあるべきだ。「死ぬ」といふ奈行變格の語には、「ぬ」といふ助動詞は連らない。◎身一つ。身體だけ。◎からくして。やう／＼の事で。命から／＼で。◎資財。生活のもとになる財産。◎取り出づるに及ばず。取り出すに至らない。取り出すまでに行かない。此句は漢文から來た句法で、純國語法でない。國語法では、取り出す必要がないといふ意になつて、文義が異なる。◎七珍萬寶。澤山の寶物、七珍は七寶とも云ひ、經文によつて多少其説を異にする。阿彌陀經には、金・銀・瑠璃・玻璃・砗磲・赤珠・瑪瑙としてある。◎さながら。そのまますべて。全部。伊勢集九に、「あさましくいみじく悲しくて、つかまつりし人さながら集りて夜晝なきこひ奉るに。」とあるも、すべて残らずの意。清水濱臣は、「さながらはすべてといふ意なり、……此詞そのままにてといふ義もあれどそれはいと

いとまれなり。」というてゐる。◎灰燼。はひともえぐひ。物の焼け減びるをいふ語。◎その費。焼失の損害。◎公卿。上達部のこと。位は三位以上、官は大・大納言・参議をいひ、猶参議は四位でも卿といふ。貞丈雜記「公卿と云は、攝政關白・太政大臣・左大臣・右大臣・内大臣は公なり、大納言・中納言・散一位並三位以上の人々は卿也、参議は四位にても卿と云也云々。」◎邊際を知らず。はてしを知らない。限りなく多い意。◎人のいとなみ。人間のしてゐる業、◎さしも。さやうにマア。あれほどにマア。「さ」は然の意、「し」は強める助詞、「も」は感動詞。◎危き。何時火事が起つて焼けるかも知れぬ危険をいふ。即ち無常の境に在る意をいふ。◎寶。金銀財貨。◎あぢきなく。「アドケナイ」と云ふに同じ、思慮分別のないさまをいふので、つまらない、面白くもない、とりとめもないなどの意。

【通釋】
 また治承四年四月二十九日ごろ、中の御門と京極通との交叉する邊から、大きな旋風が起つて、六條通の邊まで、烈しく吹

また治承四年卯月二十九日の頃、中の御門京極のほどより、大いなる辻風起りて、六條わたりまで、いかめしく吹きけること侍りき。三四町をかけて、吹きまくる間に、その中にこもれる家ども、大きなるも小さきも、一つとして破れざるはなし。さ

いた事がありました。渦巻の區域が三四町の廣さに亘つて吹き捲くる爲に、その渦巻の中に入つてゐる家どもは、大きいのも小さいのも、一つだつて破壊しないものはない、全く平潰しに倒れたのもある。或は桁や柱だけ残つてゐるものもある。また門の屋根を吹き飛ばして、それを四五町離れた邊に置き、また垣根を吹きとつて、庭を隣家とひとつゞきにしました。まして家の内の貨財器具は、悉く空に舞ひ揚り、檜皮や茸板の飛び舞ふ有様は、恰も冬の木の葉の風に亂れ散るやうである。塵を

ながら平に倒れたるもあり。けた柱ばかり残れるもあり。また門の上を吹き放ちて、四五町がほどに置き、また垣を吹き拂ひて、隣と一つになせり。いはんや、家の内の寶、數をつくして空に揚り、檜皮・茸板の類、冬の木の葉の風に亂るゝが如し。塵を煙の如く吹きたてたれば、すべて目も見えず。おびたゞしく鳴りよとむ音に、ものいふ聲も聞えず。かの地獄の業風ごふうなりとも、かくこそはとぞ覺えける。家の損亡せるのみならず、これをととりつくるふまに、身を害ひてかたはづけるもの數を知らず。この風、ひつじさるの方に移りゆきて、多くの人のなげきをなせり。辻風は常に吹くものなれど、かゝることやはある。たゞごとにあらず。さるべきものゝさとしかなどぞ、疑ひ侍りし。

◎治承四年。第八十一代安徳帝の年號。安徳帝は治承四年正月受禪、同年四月

煙のやうに吹き立てたから、何處も薄暗くて見えない。ひどく鳴り轟く音の爲に、話聲も聞えない。假令地獄の業風であつても、このやうに烈しくはあるまいと思はれた。單に家の破壊したばかりでない。これを修繕する時に、怪我をして不具になつたものが、數知らぬほど澤山ある。この旋風が西南の方向に移つて行つて、大勢の人々の愁嘆を作つた。旋風はふだんに吹くものであるが、このやうな猛烈な事はありはしない。然るに、このやうなひどいのあるのは、然るべき何事かの前

廿二日に即位せられた。◎卯月。四月の異名。卯花月ウノハナツキの意。賀茂眞淵は萬葉考別記に、「四月を字月と云は空木花月ウノハナツキてふ事也、集中に宇の花の咲月立はと、四月を云ひて、これはこの月専らなる物故に名とすること、早苗月霜月などの如し。かくて此木は中虚なれば宇都木といへば、其花をうつ木の花といふべきを略きてうの花といふ、そを月の名に呼時はいよく略きて字月といふなり。」と述べてゐる。◎中の御門。一條通から數へて南に七つ目の、東西に通じる道路。◎京極。京都の東端を南北に通じてゐる道路。◎辻風。つむぢかぜのこと。渦のやうに吹きめぐる風。和名抄「颯暴風從下而上也、和名豆無之加世。」◎六條。六條通のこと。◎わたり。あたりと同じ。「われ(吾)といふを「あれ」と云ふが如く、「わ」と「あ」とは相通の音である。◎いかめしく。猛烈に。◎三四町をかけて。三四町にわたつて。「かけ」は、かねもつ意。◎大きなるも小さきも。大きい家も小さい家も。◎一つとして。俗にいふ「つだつて」の意。◎平に倒れたるも。ひら潰しに倒れたるも。◎けた柱ばかり残れる。屋根も壁も諸道具家財も、皆もぎ取られた有様である。「けた」は屋根の横木。◎吹き放ちて。吹きとつて。◎隣と一つになせり。隣の庭と此方の庭とを區別の無いひと續きのものにした。◎數をつくして。數の限り残らず。悉皆。源氏物語、「い

兆であるよと、怪しみま
した。

とゞしき御いのかずをつくしてせさせ給へれど。「同少女、「春の花の木、か
ずを盡して植ゑ、池のさまおもしろく云々。」○檜皮。檜のはだについてゐる薄
皮。檜皮葺に用ゐるもの。○葺板。屋根に葺く薄い板。板葺に用ゐる
もの。○おびたゞしく。仰山に。○鳴りとよむ。鳴りとゞろく。「とよむ」は響
き轟く意。○ものいふ聲。話をする聲。「ものいふ」は、物語ること。○地獄。
佛教でいふ地獄は、六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上)輪廻の最下層にあ
るもので、最悪人が其苦果を受ける所、其處の主宰には閻魔及び其部下の鬼類
があつて、罪人を苛責する。地獄を等活・黑繩・合會・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱
無間(阿鼻)の八大地獄に別ける。○地獄の業風。「業風」とは、惡業所感の猛
風、劫末大風災の時及び地獄などに吹く風である。また善惡の業が能く人を轉
じて三界に輪廻せしめるから、之を譬へて風といふ。爰に「地獄の業風」とい
ふは、惡業の力が能く諸の衆生を率ゐて、惡所に苦を受けさせるのを、風に譬
へたのである。大乘義章「業力如風、善業風故吹諸衆生、好處受樂、惡業風
故吹諸衆生、惡所受苦。」○かくこそはとぞ。「かくこそはあるまじとぞ」の略。
このやうにひどくはあるまいと。○損亡。破れ滅びること。○とりつくろふま
に。修繕する間に。○身を害ひて。負傷して。怪我をして。○かたはづけるも

のかたはとなつた者。「かたは」は、人並でない不具者。◎ひつじさる。西南の方角をいふ。坤の字を書く。◎多くの人のなげき。澤山の人の憂ひ悲み。◎かゝることやはある。この様な甚しい事があるか、ありやしない。「や」反語。「は感動詞。◎たしこと。世の常の事。尋常一通りの事。◎さるべきものゝさとしかな。然るべき何者かの知らせであるよ。「さる」は、確かにそれと定めずに言ふ時用ひる詞で、「ある」といふに同じい。

【通釋】
また同じ治承四年の六月ごろ、突然都遷りがありました。甚だ思ひがけなかつた事である。大體、平安京の起源を聞くと、ここは嵯峨天皇の御代に都と定まつて以來、最早五六百年を経過してゐる。然るに格別の理由がなく、無雜作に改める筈のものでもないから、この

また同じ年の水無月の頃、俄に都遷り侍りき。いと思ひの外なりしことなり。おほかたこの京のはじめを聞けば、嵯峨天皇の御時、都と定まりにけるより後、既に數百歳を経たり。ことなる故なくて、たやすくあらたまるべくもあらねば、これを世の人、たやすからず憂へあへるさま、ことわりにも過ぎたり。されど、とかくいふかひなくて、御門より始め奉りて、大臣・公卿・悉く攝津の國難波の京にうつり給ひぬ。世に仕ふるほどの

都遷りをば、世人が一通りならず心配し合つてゐる有様は、道理といふにも過ぎてゐる。然しながら、かれこれと嘆きあふのも、その甲斐がなくて、主上をはじめとして大臣公卿が、みな攝津國難波の京にお遷り遊ばした。官職についてゐる身分の者は、誰一人、平安の京に残つてゐようか、誰も残つてゐない。官位を得ようとの野心を抱き、或は主君の御蔭を力頼みにするほどの人は、一日でも早く引越さうと、精を出し合つた。榮えた時を失ひ、世間から除けものにされて、前途の希望の

人誰か獨り故都ふるさとに残りをらむ。官位に思をかけ主君のかげを頼むほどの人は、一日なりとも、とく移らむと勵みあへり。時を失ひ世にあまされて、期ひする所なきものは、憂へながらとまりぬたり。軒を争ひし人のすまひ、日を経つ、荒れゆく。家は毀たれて淀川に浮び、地は目の前に島となる。人の心みな改りて、たゞ馬鞍をのみ重くす。牛車を用とする人なし。西南海の所領をのみ願ひ、東北國の莊園をば好まず。

- ◎同じ年。治承四年。◎水無月。六月のこと。語義については、此月は農事もみなし盡きたので、みなし月といふのを誤つたのだとも、水が涸れて盡きる義で、水なし月といふべきを誤つたのだとも、或は雷鳴月の意で、「かみなり」の上下を省いたのだとも、此月は田毎に水を湛へるので、水月の義であるとも、六月は陽の盡きる月だからみなつきと云ふとも、種々の説があるが詳でない。
- ◎都遷り。清盛の計畫で攝津の福原に都を遷したのをいふ。◎嵯峨天皇の云

ないものは、嘆きながら舊都に留まつてゐた。ギツシリと立ち並んでゐた人家は、日一日と、住む人がなくなつて、淋しくなりゆく。家は取壊されて、その材木は淀川に浮び、土地は見る間に畠となる。人の心持はすつかり變つて、たゞ馬鞍をばかり大切にする、そして牛車を使用する人はない。西南海の所領のみ得たいと願ひ、東北國の莊園をば好まない。

々。嵯峨天皇は桓武天皇の第二皇子。帝都が京都へ遷つたのは桓武天皇の延暦十三年で、治承四年まで三百八十六年過ぎてゐる。爰に嵯峨天皇とあるは、作者の思ひ違ひであらう。◎ことなる故。普通と變つた格別の理由 ◎あらたまるべくもあらねば。こゝの語法は正しくない、「あらたまる」は、自動詞である、然るにこゝの主格は「都」ではなく、主宰者であるから正しくは、「改む」と他動に言はなくてはならぬ。即ち「あらたむべくもあらねば」とあるべきである。改めるはずのものでもないからといふ意。◎これを。都うつりを。◎たやすからず憂へあへるさま。人々が一通りならず心配し合つてゐる有様。◎ことわりにも過ぎたり。道理だと言ふにも過ぎて、それ以上であつた。事の非常に甚だしい意。◎とかくいふかひなくて。かれこれと口に出して言ふ甲斐がなくて。かれこれと言つても役に立たないで。◎御門。安徳天皇をさす。◎大臣公卿。大臣公卿といふ時は、大臣は太政大臣・左大臣・右大臣・内大臣をいひ、公卿は、大中納言・參議をいふ。貞丈雜記、「大臣公卿といふ時には、公卿は大中納言・參議、散一位并三位以上の事なり。散一位とは官はなくして位ばかり一位にてある人を云。」◎難波の京。福原の新都をさす。平清盛が別業を此處に置いて福原莊と稱へ、治承四年に造都の計畫をし、遂に里内裏を興

したのである。本文に、「内裏は山の中なれば。とあるが、内裏の跡は詳かでない。◎世に仕ふるほどの人。官職に就いてゐる身分の者。◎官位に思をかけ。官位を得ようといふ野心を抱く意。◎かげを頼む。世話になる意。恩恵を力に頼む意。「かげ」は、恵みといふ意。源氏物語、桐壺、「かしこきみかげをば頼み聞えながら。」古今集、「筑波ねのこのもかのもにかげはあれど、君がみかげにますかげはなし。」◎時を失ひ。盛んな時を失ふ意で、志を得ないこと。軼軻不遇の意。◎世にあまされて。世間の人々から除けものにされて。世に用ゐられないこと。◎期する所。あてにする所。前途の希望。◎軒を争ひし。軒を並べて、ギツシリと立つてゐた有様をいふ。◎日を経つ。月を経過すると共に。日一日と。◎荒れゆく。人が住まなくなつて、淋しくなりゆく意。◎目の前。まのあたりと同じ、見るまの意。◎人の心みな改りて。今まで朝廷を尊び公卿を羨んでゐた人の心がみな變つて。◎馬鞍をのみ重くす。武士の振舞ばかりを貴ぶ意。平氏は武家であるが故に、平氏の歡心を得んとて、武士の所作を貴び、その振舞を真似たのである。◎牛車。「うしぐるま」「ぎつしや」などいふ。牛に牽かせる屋形車、中古貴人の乗用に用ゐたもの。◎西南海の所領をのみ願ひ。西南海は新都に近く交通が便利であるので、其處の領地を得

その時、しとりでに用事のついでがあつて、攝津の國なる新都へ行つた。其處の様子を見るに、土地の區域が狭くて、東西南北の大通りを區劃するに、充分でない。北方は後方に山があつて地が高く、南方は海に近くて、低くなつてゐる。波の音が常にやかましく聞えて、海の方から吹いて來る風が格別に烈しい。内裏は山の中であるから、かの齊明天皇の御代に筑紫國朝倉に建てられた木の丸殿も、このやうであつたかと想像せられる程で、舊都の御所とは却つて趣が違つて、優雅

たいと願うたのだ。◎東北國の莊園をば好まず。◎東北の國々は都に遠いので其地方の莊園をば好まなかつたといふ意。莊園は、王朝時代以後、勢力ある寺社及人々の私有地の莊號ある土地をいふ。此莊園には租税を免除されたものと、さうでない輪租地との二種がある。

その時、ちのづから事のたよりありて、攝津の國、今の京に到れり。處の有様をみるに、その地ほどせばくて、條里を割るに足らず。北は山にそひて高く、南は海に近くて下れり。波の音常にかまびすくして潮風殊にはげし。内裏は山の中なれば、かの木の丸殿もかくやと、なか／＼様かはりて、優なるかたも侍りき。日々に毀ちて、川もせきあへず運び下す家は、何處に造れるにかあらむ、猶空しき地は多く、造れる屋は少し。ふるさとは既に荒れて、新都は未だ成らず。ありとしある人は、みな浮雲の思をなせり。もとよりこの處にゐたるものは、地を失

な點もありました。毎日取壊して、川も塞ぎきれない程に、す早く運び流す家は、何處に造つたのであらうか。まだ空地は多く、建てゝある家は僅かである。平安京は早や荒れて、新都はまだ出来上らない。あらゆる人は皆不安の念を抱いてゐる。初めから此處に土着してゐた者は、地所を失うて愁へ、今新たに移住する人は、普請の面倒のあることを歎く。街頭を見ると、車に乗るはずの者は馬に跨り、衣冠布衣を着るはずの人は直垂を着てゐる。その有様は、都の優雅な風俗が忽

ひて愁へ、今移り住む人は、土木の煩あることを歎く。道の邊を見れば、車に乗るべきは馬に乗り、衣冠・布衣なるべきは、多く直垂を著たり。都のてぶり忽ちに改りて、たゞ鄙びたる武士に異ならず。これは世の亂るゝ瑞相とか聞きおけるもしるく、日を経つゝ世の中浮きたちて、人の心もをさまらす。民の愁遂に空しからざりければ、同じ年の冬、猶この京に歸り給ひにき。されど毀ちわたせりし家どもは、いかになりにけるにか、悉くもとのやうにしも造らず。ほのかに傳へ聞くに、古のかしこき御代には、憐をもて國を治め給へり。即ち御殿に茅を葺きて、軒をだにもとのへす。煙のともしきを見給ふ時は、限あるみつぎ物をさへゆるされき。これ民を恵み、世を助け給ふによりてなり。今の世の中の有様、昔になすらへて知りぬべし。

ち變つて、全く田舎臭い武士同様である。人々が不安の念に驅られて嘆き悲しんだり、又は世の風俗が一變したなどいふ事は、天下の亂れる前兆であるとか聞き置いた、その兆候も著しくあらはで、日一日と、世間が騒しくなつて、人の心も落着かない。斯の如き有様で、人民の愁嘆が遂に空しくなかつたから、同年の冬、矢張この平安京にお還りになつた。然しながら取りくづし運んだ家どもは、どうなつて終つたのか、全部もとのやうには造らない。かすかに傳へ聞くに、昔の聖

◎おのづから。ひとりでに。これ以下は、作者の新都見聞記である。◎事のたより。事のついで。◎今の京。福原の新都。◎程せばくて。都とすべき區域が狭くて。「ほど」は字書に限也量也など見え、もと量數から出た語で、分限をいふに用ゐる、ほどらひの意である。◎條里を割る。東西南北を通じる道路を區劃すること。條は南北に、里は東西に通つてゐる道、拾芥抄、「條起_レ從_レ北行_ニ於南_ニ里起_レ從_レ西行_ニ於東_ニ」◎潮風。海の上を吹く風。爰は、海から吹いて來る風。◎かまびすしく。やかましく。◎内裏。皇居。天皇の居られる宮殿。◎木の丸殿。荒木のまゝの削り磨かない木で造つた殿をいふ。黒木の御所といふに同じ。爰に木丸殿といふのは、齊明天皇の六年に、天皇親ら新羅百濟を征伐なさうとして、筑紫國朝倉に行宮を造られ、其處を駐蹕の地となされた、その朝倉の行宮をさす。新古今集、天智天皇、「朝倉や木の丸どのにわが居れば、名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ。」◎かくやと。かくやありけんとの略。このやうであつたらうかと。◎なか〜。却つて。「なか〜」は、中途半端で、どちらにもつかない意、ナマナカニ、ナマジヒニなどいふ意、轉じて、却つての意にも用ゐられる。◎様かはりて。平安京の宮殿とは趣が變つて。◎優なるかた。優美な點。◎川もせきあへず。川も塞きとめおほせない。此句は、壞して

明な天子の御代には、惠みで國をお治めなされた。即ち御殿の屋根をば茅葺きにして、その檐端をすら綺麗に剪り揃へない。または高殿に御登りなされて、民の竈に立つ煙の少ないのを御覽になる時は、一定のきまりある租税をまでも免ぜられた。之は民を愛し世間の人を御助け遊ばす御思召からである。然るに、人民が安堵の思なく、愁嘆の裡に目を暮しゐる現代の有様は、昔の聖代に比して、如何に劣つてゐるかが、わかるであらう。

は投げ込みくする材木を、川の方では、投げ込まれる端から流して、材木が川をも塞ぎとめおほせない程、迅速に運びゆく有様を叙したので、どしどし家を壊しては投込むのを、また滞りなくいかにも迅速に運び下すといふ心持が見えてゐる。至極面白い句である。此句を「川も流れあへず」の意に解く人もあるが、どうであらうか、語句の有つてゐる深い心持を察せず、みだりに語をかへるのは、忠實な解釋でない。◎ありとある人。あらゆる人。世間にある悉くの人。◎浮雲の思。浮べる雲のやうな安堵しない思。不安の念。◎この處。福原の土地。◎地を失ひて。自分の所有地をば、新しい建物、例へば皇居官衙邸宅などの敷地にとられた意。◎土木。普請のこと。◎道の邊。道のほとり。街頭。◎車に乗るべきは云々。牛車に乗るはずの身分の人は馬に乗り。此句と次の「衣冠布衣云々」の句とは、前の「馬鞍を……人なし」の句に應じて書いたもの。◎衣冠。袍に指貫を着た装束。衣冠は、王朝時代、公卿の略式の朝服になつてゐて尋常の参内の時用ゐた。◎布衣。昔は狩衣のことを布衣ホフイというたのであるが、江戸時代になつてから兩者を區別し、織文のあるを狩衣、織文のないを布衣ホフイと云ひ習はした。狩衣は昔の鷹狩の時に着た服で、後には太上天皇以下六位以上の常服に用ゐられた。◎直垂。もとは貴人の寢具であつ

たが、後には公武諸人の常服となつた。殊に兵範記に、「直垂、元武士之服也、爲直仕聽之、文門之直衣相同也。」とあるのに因つて見ても、早くから武士の着用した事は明かである。然し常服となつたのは保元以後であらう。◎てぶり。風俗。◎鄙びたる。田舎めいてゐる。鄙びは鄙風ヒナヤで、田舎の風俗をいふ、それから引いて、下品な意にもいふ。「び」は「ぶり」の約言で、らしいといふ意の接尾語。◎これは。此代名詞は何を指してゐるのか、意味が曖昧ではあるが、然し「ふるさとは既に荒れて……鄙びたる武士に異ならず。」とあるを、概括して指してゐるらしく思はれる。即ち世の人々が安堵の思をせず、に嘆き悲み、或は世の風潮の改まつたのをさしてゐるのである。◎瑞相。前兆の意。本來支那では吉事のしるしといふ意に用ゐてある語であるが、吾國では單に前兆の意に用ゐる。◎聞きおけるもしるく。聞き置いた、その世の亂れる兆候も著しくあらはで。「も」は「雖」の意ではない。◎日を経つ。日を経過すると共に、◎世の中浮き立ちて。世間が驕がしくなつて。源頼朝が伊豆に兵を起し、源義仲がまた信濃に兵を擧げて頼朝に相應じ、諸國の源氏が驕ぎ立つたのをいふ。◎心もをさまらず。心も鎮まらない。心も落着かない。◎民の愁つひに空しからざりければ。人民が都遷りを嘆いた、その愁嘆が、とう／＼無

駄に終らなかつたからして、こゝは正しくは「民の愁つひに空しからずして」とあるべきだ、何となれば平安京に還つたのは、民の愁が空しくなかつたといふ事が原因になつてゐるわけではない。都に還つたのは民の愁の空しくなかつた具體的事實に過ぎない。要するに、都還り、民との愁の空しくない事とは、同じ事實の両面である。然るに、原因結果を聯ねる助詞「ば」を用ゐて、「空しからざりければ」とあるのは、不穩當の語法たるを免れない。「民の愁」は、前に「これを世の人たやすからず愁へあへるさま」とあるを受けたのである。◎「毀ちわたせりし家ども。こはして新都へ送つた家ども。此句は、「日々に毀ち」「川もせきあへず運び下す家は。」とあるに應じて書いたもの。「わたせり」は、わたらせた意で、運んだこと。これを「霧立ちわたる」などいふ場合の「わたる」と同意に考へて、一面になど釋くは穩當でない。◎ほのかに。微かに。◎賢き御代。よく天下が治まつた聖天子の御代。これは支那の堯舜時代、吾國の仁徳天皇の時代を指していうたのである。◎御殿に茅を葺きて云々。支那の堯帝が位にあらせられた時、非常に質素な御生活をなされて、茅で屋根を葺き、其櫓端を綺麗に剪り整へなかつたといふ故事をさすのである。◎煙のともしきを云々。仁徳天皇が難津高津宮に居られた時、一日高臺にお登り遊ばして、民

の煙の妙ないのを御覽になり、三年の間課役を免ぜられた御聖徳をさすのである。◎限あるみつぎ物。制限のある租税。無限に取立てるのでなく、一定のきまりある租税。「みつぎ物」は、租税調賦などをいふので、即ち、人が年その高を定めて天皇に奉るもの。「みつぎ」の語義は詳でないが、本居翁は、「み」は、御で尊稱である、「つぎ」は「つぐ」の體言で、「つぐ」は、續くる意である、即ち「みつぎ」は、公に用ゐる賜ふ諸の物を下から供給奉る意の名であると云うてゐる。◎なずらへて。比較して。◎今の世の中の有様……知りぬべし。此文は意味が徹底しない、即ち時の天皇が別に豪華な生活をなされたといふ趣も見えて居らぬのに、今茲に、古の聖天子の質素な生活をなされた御話を例に引き出して、此時の世の劣つてゐる事を諷したのは、本文とのつぎ合ひが面白くない。引例と本文との間に隙があつて意味が明瞭でない。思ふに帝堯及び仁徳帝の故事を例に引いたのは、單に「民を恵み世をたすけ給ふ」といふ爲政者の念頭にとゞめ置かねばならぬ第一義を強く云ふ爲で、「今の世の中の有様云々」というたのは、人民が浮雲の如き思で日を暮し、地を失うて愁へ、土木の煩を嘆いたのをさすので、人民が一般に安堵の心なく愁嘆の裡に日を送つてゐる現代の有様は、昔の聖天子時代の人民が楽しく其日を送つてゐた、そ

【通釋】

また養和の頃かと記憶するよ、年月が久しく経過して、はつきりとは覺えない。二年の間飢饉があつて、驚き呆れる事がありました。或は春夏の季節に日でりがし、或は秋冬の季節に大風大水などがあり、よくない事どもが打ち續いて、五穀は、何もかもすべて熟さなぬ。春田畑を耕し夏苗を植ゑつける仕事だけがいたづらにあつて、秋刈取

の御代に比較して、如何に劣つてゐるかわかるであらうといふ意である。「ぬべし」は、現在完了の助動詞「ぬ」と、推量の助動詞「べし」との相合したもの、單に「知るべし」といふよりも意味が強い。

また養和の頃かとよ、久しくなりてたしかに覺えず。二年が間世の中飢渴してあさましきこと侍りき。あるは春夏日でありあるは秋冬、大風大水など、よからぬ事どもうち續きて、五穀悉くみのらず。空しく春耕し夏植うる營のみありて、秋刈り冬收むるぞめきはなし。これによりて、國々の民、あるは地を捨てゝ境を出で、あるは家を忘れて山に住む。さまざまの御祈はじまり、なべてならぬ法ども行はるれども、更にそのしるしなし。京のならひ、なにわぎにつけても、みなもとは田舎をこそたのめるに、たえてのぼるものなければ、さのみやは操も作り

り冬倉に收める騒ぎはな
い。之が爲に、國々の人
民は或は永住の地を捨て
て他郷に行き、或は家を
出て山中に住む。五穀豊
熟、息災安穩などいふ様
様の御祈禱が始まつて、
尋常一通りでない大法祕
法どもが行はれるけれど、一向その靈驗が見え
ない。京都の習慣は、何
事についても、その原料
は田舎を頼りにしてゐた
のに、全く都に上つて來
る物品がないから、都の
人々も、さう／＼本心を
取守つて常の體裁を變へ
ずにはゐきれない。我慢
し兼ねて、家財を片端か
ら棄てるやうに安價に賣

あへび。念じわびつゝ、さまざまの寶物、かたはしより棄つる
が如くすれども、更に目み立つる人もなし。たま／＼換ふるも
のは、金を軽くし粟を重くす。乞食道のべに多く、愁ひ悲ぶ聲
耳にみたり。

◎養和。安徳天皇の年號。◎養和の頃かとよ。養和年間の頃かと記憶するよ。
◎久しくなりて。長い年月を經過して。◎飢渴。飲食物のないこと。飢は五穀
の熟さないこと。渴は喉が乾いて飲水を欲する義、即ち旱魃の意。然しこゝは
湯は軽く添へたまゝで、饑渴は飢饉のこと。字書に、「穀不熟爲飢、菜不熟
爲饉。」とある。◎あさましきこと。興のさめること。情ないこと。「あさまし」は
アサムベクあるといふ意で、驚き呆れる義。◎五穀。五種の穀類で、其名日に
數説ある。稻・黍・稷・麥・菽であるとも、麥・麻・稷・麥・豆であるとも、稻・稷・麥
豆・麻であるともいふ。爰は單に穀類の意。◎ぞめき。騒ぎ立ち働き。◎これ
によりて。飢渴によつて。◎地を捨て。住みなれた土地を捨て。◎境を出
で。土地の境域を出て他國に行くこと。他に流浪すること。孟子、「父母凍餓、

拂ふけれど、一向それに目をとめて見る人もない。稀に交換する人は、寶物を軽く見て穀類の値を高くする。乞食が路傍に澤山あらはれ、飢渴を嘆き悲しむ聲が盛んに聞えた。

兄弟離散。」又「凶年飢饉、君之民老弱轉_ニ於溝壑、壯者散之_ニ四方、者幾千人。」
◎家を忘れて。家をすてゝといふ意。◎山に住む。草根木皮を捕り食ふ爲に山中へ入つたのをいふ。◎さまゝの御祈。五穀豊熟、息災安穩の爲に、諸國の寺社に祈禱するをいふ。◎なべてならぬ法。大法祕法など一通りでない嚴かた修法をいふ。重大な祈禱。◎そのしるし。祈禱のきゝめ。◎京のならひ。京都の習慣。◎みなもとは田舎をこそたのめるに。生活の爲の原料は田舎を頼りにしてゐたのに。「たのめる」は「頼む」の已然形に現在完了の「り」の加はつたもの。「に」は、甲乙の語句を連ね、事の裏返る意を示す助詞。◎たえて。全く。◎のぼるものなければ。田舎から都に運んで来る食料がないから。これは領地などから上納し来る穀類のないのを云ふのであらう。◎さのみやは操もつくりあへむ。さうばかり本心を取守つて常の體裁を維持することに堪へられようか堪へられない。「みさを」は、本心を取守つてかはらぬこと、常の體裁をかへずにゐること、常の顔色をかへぬこと。「あへ」は、堪へる、我慢する、強ひてするなどいふ意。◎念じわびつゝ。我慢し兼ねる意。「念じ」は、忍ぶ、こらへるなどいふ意。「わび」は、人が志を得ないで呻吟する時、ワと嘆聲を出す、そのワを波行に活用したもの、つまり物足らぬ心持、望の叶は

ぬ心持などにいふ、轉じて、つらい、淋しいなどの意にも用ゐる、又、何々し兼ねる意に用ゐる。◎かたはしより棄つるが如くすれども。片端から棄てるやうに安價に賣り拂ふけれども。◎目み立つる人。買はうと、目をつけて見る人。◎たま〜。稀に。たまさかに。◎金を軽くし粟を重くす。單に粟の價格の高といふのを、金の價値を軽くし粟の價値を重くすると、兩面から述べたのであらうか、然し前に「さまざまの賣物」とあるを、爰で「金」と受けたでは續き合ひがある。また賣物と交換するに、金ならば惜し氣なく大金を出し、粟ならば出し惜んで澤山出さないといふ意であらうといふ説もあるが、之も餘り穿ち過ぎて面白くない。思ふに金というたのは、金錢の意味でなく、金は黄金の意で貴いもので、七賣の第一位に置かれてある位であるから、爰でも「さまざまの賣物」の總名に「金」というたのである。だから粟の蓄のある人が稀に「さまざまの賣物」に目をつけて、交換しようとする場合、それらの賣物をば軽く見て、自分の持つてゐる粟の價値を重く見るとの意であらう。

さきの年、かくの如くからくして暮れぬ。明る年はたちなほるべきかと思ふに。あまさへ、えやみうちをひて、まさるや

【通釋】

前年はこのやうに命からがらで暮れた、翌年は景

氣が回復するだらうかと思ふに、その上、流行病が加はつて、前年よりも惨状がまさるやうで、景氣の回復するやうな形跡は少しもない。世間の人がみな餓死したから、一日と、壽命が終りに近づいてゆく有様は、少い水の中に棲む魚が次第に衰へゆくといふ譬に、當て箠つてゐる。終りには笠を着、脚絆や足袋で足を包み、可なりな身なりをした者が、一途に一軒々々食を乞ひ歩く。このやうに生活難で精神の朦朧となつた者どもが、歩くかかと見ると、直に行倒れて死ぬ。土塀の外側や

うに跡かたなし。世の人多く餓ゑ死にければ、日を経つゝ、きはまりゆくさま、少水の魚の譬にかなへり。はてには笠うち著足ひき包み、よろしき姿したるもの、ひたすら家ごとに乞ひありく。かくわびしれたるものども、ありくかと思れば、則ち斃れ死ぬ。ついひぢのつら、路のほとりに、餓ゑ死ぬるたぐひは數も知らず。とり棄つるわざもなければ、臭き香世界に充ち満ちて、變りゆく形有様、目もあてられぬこと多かり、いはんや、川原などには、馬・車の行きちがふ道だにもなし。怪しきしづ山がつも、力つきて薪さへともしくなりゆけば、頼む方なき人は、みづから家を毀ちて、市に出でてこれを賣るに、一人が持ち出てたる價、猶一日が命をさゝふるにだに及ばすとぞ。あやしき事は、かゝる薪の中に、丹つき、白がね黄がねの箔など、處

處につきて見ゆる木のわれ、相まじれり。これを尋ねれば、すべき方なきもの、古寺に到りて佛を盗み、堂の物の具を破り取りて、割りくだけるなりけり。濁惡の世にしも生れあひて、かゝる心うさわざをなむ見侍りし。

路傍に餓死する者どもは、澤山にある。それを取片付ける事もしないから、臭氣が四方に充満して、死體の腐り爛れて變りゆくかたち有様は、目もつけられね程に氣味のわるい事が多い。まして鴨川原などには、一面屍骸が轉がつてゐて、馬車の往來する道すらもない。

賤しい田夫野人、樵夫柚人も力が盡きて、薪を運び出さないから、都では薪にまで缺乏して行つたから、頼みとする財産のない者は、自ら家をとりに運び出て賣るに、一人

◎さきの年。養和元年をさす。◎からくして。やう／＼の事で。命から／＼の目に逢うて。◎立ちなほるべきかと。世間の景氣が回復するだらうかと思つて。◎あまさへ。あまつさへに同じ。あるがうへに、なほまた、などいふ意の副詞。◎えやみ。わらはやみ、即ち、今いふおこりのこと。和名抄「瘧病、説文云瘧音虛、俗云衣夜美、一云和良波夜美、寒熱並作二日一發之病也。」又は、疫病の事。爰は後者の意。◎まさるやうに跡かたなし。前の年より慘狀がまさるやうで、平穩の有様にかへる形跡がないといふ意。即ち、「跡かたなし」は、前の「立ちなほるべきかと思ふに。」といふ句をうけてゐるので、立ちなほる形跡がないと云ふ意。一説に「跡かたなし」を祈禱の効驗のない意に解いてゐるが無理な解き方である。殊に前に「なべてならぬ法ども行はるれど更にそのしるしなし」と

の持つて出た材木の値段は、まだ一日の命を支持する額にすら達しないといふ事である。奇怪な事には、このやうな薪の中に、赤い色がつき金銀の箔などの所々に付いて見える木の片端が相交つてゐる。この理由を尋ねると、暮しを立てる萬策の盡きたものが、古い寺に行つて、佛像を盗み、御堂の道具を破り取つて、之を割り碎いたのであるよ、自分は濁惡の世に丁度生れあうて、このやうなつらい事柄を見ました。

言うてゐるのに、突然またこゝに前後の關係もなく、突然祈禱のしるしのない事を言つてゐる筈もない。◎きはまりゆくさま。終焉に近づいてゆく有様。

◎少水の魚。少い水の中に住む魚が次第に衰へてゆくといふ意。文珠出曜經に、「是日己過、命則衰滅、如少水之魚、斯有何樂。」とある句によつて書いたもの。◎かなへり。當て箝つてゐる。◎よろしき姿。かなりな身なり。◎わびしれたるもの。難儀をした爲に、精神もぼんやりして、何の分別もつかなくなつたもの。生活難に苦んだ爲に、心もぼんやりとなつたもの。◎ついひぢのつら。土塀の外側。「ついひぢ」の「つい」は築の音便、「ひぢ」は土の古言。土を盛りあげて築いた垣。和名抄、「築塙、和名都以加岐、一云豆以此知。」「つら」は外に面したところ。◎臭き香。死體から發する臭氣。◎世界。世の中。自分の住んでゐる都の中といふ意を誇張してさう云うたのである。◎變りゆく形有様。死體の腐爛して顔かたちなどの變りゆくをいふ。◎目もあてられぬ。目もつけられない。慘憺たる光景をいふ。◎川原。鴨河原。◎しづ山がつ。田夫野人、樵夫炭焼人。「しづは」賤男賤女。「山がつは」山賤と書く、山縣の人の意で、山里に住む樵夫山人の類。拾遺集、「山がつと人はいへども時鳥、まづ初聲はわれのみぞきく。」◎ともしく。とほしくに同じ。渺い意。◎頼む方なき人。頼み

とする物資のない人。◎猶一日が命を云々。やはり一日の命を持ちこたへるまでにすら達しないと云ふ事である。◎あやしき事。奇怪な事。案外な事。「あや」は驚く聲、それに「し」といふ尾辭が添はつて、「あやし」となつたもの、奇妙な事、不思議な事、世の常でない事など、すべて打ち驚かれる程のものに廣く用ゐる。◎丹。あかいろ。丹はあかつち、又は、あかつちで染めた色をいふ。◎すべき方なきもの。萬策のつきたもの。どうにもかうにも暮しを立てる方法のつきたもの。◎物の具。道具。調度。◎濁惡の世にしも生れあひて。濁惡の世に、丁度生れ合うて、「濁惡の世」は、五濁の惡世をいふ、即ち五濁の深つてゐる惡い世である。「五濁」は、劫濁見濁煩惱濁業生濁命濁の五つをさすのである。◎心うきわざ。つらい事柄。

又いと哀れなる事も侍りき。さがたき女男など持ちたるものは、その志まさりて深きは、必ずさきだちて死しむ。その故は、吾が身をば次になして、男にもあれ女にもあれ、いたはしく思ふかたに、たま／＼乞ひ得たるものを、まづ譲るによりて

【通釋】

また、ひどう可哀相な事もありました、棄て置き難いといし妻や夫を持つてゐる者は、その相手を愛する情のすぐれて深

い何れか一方の者は、屹度相手よりも先立つて死んだ。その理由は、自身をば第二にして、男にもせよ女にもせよ、己が可愛く思ふ方の者に、たまま貰ひ得た食物を、第一番に譲り與へるからである。さうであるから、親と子とある家は、どの家でも、一樣に定まつてゐる事で、親が先立つて死んだ。また自分の母の命數がつきて横はつてゐるのをも知らないで、幼稚な兒が、その母の乳房に吸ひつきながら、近寄り臥してゐるのなどもあった。

仁和寺に居る慈尊院の大

なり。されば、親子あるものは、定まれるならひにて、親ぞさきだちて死にける。又母が命つきて、ふせるをも知らずして、いとけなき子の、その乳房に吸ひつきつゝ、ふせるなどもありけり。仁和寺に、慈尊院の大藏卿隆曉法師といふ人、かくしつづ數を知らず死ぬる事を悲みて、ひじりをあまたかたらひつゝ、その死首の見ゆるごとに、額に阿の字を書きて、縁を結ばしむるわざをなむせられける。その人數を知らむとて、四五兩月がほど數へたりければ、京の中、一條より南、九條より北、京極より西、朱雀より東、道のほとりにある頭、すべて四萬二千三百あまりなむありける。いはんや、その前後に死ぬるものも多、川原・白川・西の京・諸の邊などを加へていはゞ、際限もあるべからず。いかにいはんや、諸國七道をや。近くは崇徳院の

藏卿隆曉法印といふ人が、このやうに食に飢ゑながら、人々の數も知れぬ程澤山に死ぬことを可哀相に思うて、僧侶をば大勢説得し頼んで、それら死人の首の見付かる一つづつに、その額に佛の記號である阿の字を書いて、成佛の縁を結ばせる事をせられた。その死者の數を知らうとして、四、

五の二ヶ月間數へたれば、都の中の一條通りから南、九條通りから北、京極通りから西、朱雀大路から東の間で、道路に轉つてゐる頭が、總體四萬二千三百以上あつた。ましてその二ヶ月間の前

御位の時、長承の頃かともよ、かゝるためしはありけりと聞けど、その世の有様は知らず。まのあたり、いとめづらかに悲しかりしことなり。

◎いと哀れなる事。甚だ可哀相な事柄。「あはれ」は「ア、く」と嘆息する時に出る詞で、悲しい事、面白いこと、美しい事等、すべて心に沁み、感じ程のものにいふ「いと」は、甚だといふ意の副詞。◎さりがたき。遁れることの出来ない。捨て置き難い。源氏物語、夢浮橋、「たのもしげなき身ひとつをよすがにおぼしたるが、さりがたきほどしに覺え侍りて。」とりかへばや日記、「をとこぎみさへ生れ給ひにしかば、またなくさりがたきものに思ひ聞え給へり。」◎その志まさりて深きは。その相手を大切に思ふ愛情が相手の自分を思ふ情よりも一層すぐれて深い者は。即ち、夫でも妻でも、その相手を大切に思ふ情が、相手の自分を愛して呉れる情よりも、すぐれて深い者はいふ意。◎次になして。第二位にして。◎男にもあれ女にもあれ。男であるにもせよ、女であるにもせよ。「男にもこそあれ、女にもこそあれ」の「こそ」を省略したのである。◎いたはしく思ふかたに。可愛く思ふ方の者に「いたはし」は、大事

にも後にも、死んだものが多く、その他賀茂河原白川西の京及び京都在の諸の田舎などの死者をも加へて數へるならば、あまりに澤山できりがつかないであらう。まして、畿内の諸國、東海東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の七道に於ては、猶更多い事であらう。近頃では、崇徳院の御在位當時の長承年間の頃かと記憶するよ。このやうな慘狀を極めた例はあつたと聞けれど、然しその當時の模様は知らない。この度の事は、自分の目前に展げられた、珍らしく且つ悲かつた事柄であ

に思ふ心、かはゆく思ふ心。◎定まれる事にて。きまつてゐる事で。親が子よりも先立つて死ぬといふ事は、どの家も一樣にきまつてゐる事柄といふ意。此即ち句は、下の「親ぞ先だちて死にける。」といふ句を説明してゐる挿入句である。一説に、子の親を思ふ情よりも、親の子に對する愛のすぐれて深いといふ事は、きまつてゐる事柄でと、解いてゐるが、之は餘り深く讀み過ぎた結果の誤解であらうと思ふ。◎命つきて。絶命して。◎いとけなき子。をさない子。◎乳房。乳の房のやうに垂れ下つてゐるところ。◎仁和寺。山城國葛野郡花園村御室の中央にある寺。宇多天皇が御出家後、延喜元年、此寺に御庵室を營んで住まはせられたので、一に御室ともいふ。◎慈尊院。仁和寺の支院彌勒寺のことであらう。東鑑に、「建久三年六月、若公渡御子彌勒寺、法印隆曉仁和寺坊。」とある。◎大藏卿隆曉法印。源俊隆の子で、大僧正寬曉の弟子、彌勒寺法印とも云うた。大藏卿は大藏省の長官、大藏省は、諸國の貢賦を始めとして、金錢の出納などを司る所。法印は、僧位の第一位、法印大和尚の略。◎かくしつゝ。このやうに、相互に愛する者にまづ食を與へ、自分の身を顧みないやうにしつゝといふ意。◎ひじり。此語はもと、日知ヒジリの意で、天皇の御事を申したのであるが、漢土で王の徳ある者を聖人といふた關係から、

る。

日知に聖の字を充てゝ用ゐる。後に聖人の事をヒジリといふやうになり、更にまた。法師の德行ある人を聖人シヨウニンというた所から、高德の僧を呼ぶに用ゐる詞となり、更に一般の僧侶の敬稱に用ゐるやうになつた。◎かたらひ。説得して頼む意。源氏松風に、「宿もりのやうにてある人をよびとりてかたらふ。」◎阿字を書きて。阿は梵音の根元で、本來本有のものである。眞言帳では、宇宙の本體をこの阿の字で代表させた、宇宙の本體は即ち眞如である。眞如は即ち佛である。斯の如く阿字は有難い字であるから、此字を死者の額に書くと、その功德で、死者が成佛すると考へたのである。◎縁を結ばしむるわざ。結縁せしむるわざ。結縁は佛法と縁を結ぶこと。未來に成佛の出来る縁を創めること。◎一條より南九條より北。一條から九條までの間といふ意を、あやなして書いたのだ。一條は都の北端、九條は南端にある、東西に通つてゐる大路。◎京極より西朱雀より東。京極から朱雀までの間をいふ。京極は東端に、朱雀は中央に「共に南北に通つてゐる大路。要するに、「一條より南…朱雀より東」とあるは、東の京全體をさすのである。◎その前後。四月五月の前後。◎白川。比叡山の南麓から出て賀茂川に入る川。爰に、白川といふは、此川の沿岸を汎く指すのである。◎西の京。朱雀大路から西をいふ。昔の平安京は南北に通じ

【通釋】

また元暦二年の頃、大地震の揺れ動くことがありました。その有様は通常一通りでない。山は崩れて川を埋め、海水は溢れて陸地を浸した。大地が裂け割れて其處から水が湧き上り、巖が割れて谷に轉び込み、渚に漕いでゐる船は、波の上に漂ひ、

る、朱雀大路を中心として、東を左京、西を右京とし、左右に各四條の大路、十一の小路を開いた。◎諸の邊地。京都在の田舎をいふ。◎際限。かぎり。はてし。◎いかにいはんや。漢文に「何況」などある句から來た語法で、「まして」といふ意。◎諸國七道。畿内の諸國及び東海東山北陸山陰山陽南海西海の七道。◎崇徳院の御位の時。崇徳院の帝位にあらせられた時。崇徳院は、人皇第七十五代の天皇。◎長承。崇徳天皇の御代の年號。◎めづらかに。めづらしくて。世の常でない意。

また元暦二年の頃、大なること侍りき。そのさま世の常ならず。山は崩れて川を埋み、海はかたぶきて陸をひたせり。土裂けて水湧きあがり、いはほわれて谷にまろび入る。渚こぐ舟は波に漂ひ、道ゆく駒は足のたちどをまどはせり。いはんや都のほとりには、在々處々、堂舎塔廟、一つとして全からず。あるは崩れ、あるは倒れぬる間、塵灰立ちのぼりて、盛んなる

道を行く駒は、足の踏み場にまごついた。まして都の附近では、到る所、堂舎塔廟のやうな大きな建物が、一つだつて完全でない。或は崩落し或は倒壊したので、塵灰が立ち上つて、その光景は、盛んな煙の立ちのぼるやうである。大地の震動したり、家の倒壊する響が、恰も雷鳴のやうである。家の中に居ると。梁や天井が落ちてでも来さうで、忽ちに壓し潰されて終はうとするやうだ。さりとて戸外へ走り出ると、また大地が割れ裂ける。羽がないから、空中へ飛び揚る事も出来な

煙の如し。地のふるひ家のやぶるゝ音、いかづちに異ならず。家の中にをれば、忽ちにうちひしげなむとす。走り出づれば、まれ地割れ裂く。羽なければ、空へもあがるべからず。龍ならねば、雲にのぼらむこと難し。おそれの中に恐るべかりけるはたゞなるふりなりけりとぞ。覺え侍りし。その中に、ある武士のひとり子の、六つ七つばかりなりしが、ついひぢのおほひの下に、小家を造りて、はかなげなる跡なし事をして遊び侍りしが、俄に崩れうめられて、あとかたもなく、平にうちひしがれて、二つの目など、一寸ばかりうち出されたるを、父母かゝへて、聲も惜まらず悲みあひてありしこそ、あはれに悲しく見はべりしか。子のかなしみには、猛きものも恥を忘れけりと覺えて、いとほしく、ことわりかなとぞ見侍りし。かくおびたゞしくふる

い。龍でないから、雲にのぼらう事も六ヶ敷い。此世での恐ろしいもの、中で、一番恐れねばならなかつたものは、全く地震であるわいと、思はれました。

その被害者の中で、ある武士の、一人息子の、六七歳位でありましたのが、土塀の屋根の下に小さい家を作つて、とりとめもない戯れ事をして遊んで居ましたが、俄かに土塀が崩れ、その下に埋められて、身體の原形もない程に、平たく押潰されて、二つの眼球など一寸も、外へ打ち出されてゐたのを、父や母が抱いて、聲

ことは、しばしにて止みにしかども、そのなごりしばしくたえず。世の常に驚くほどのなる、二三十度ふらぬ日はなし。十日、二十日過ぎにしかば、やうくまどほになりて、あるは四五度、二三度、もしいは一日ませ、二三日に一度など、おほかたそのなごり、三月ばかりや侍りけむ、四大種の中に、水・火・風は、常に害をなせど、大地に至りては、異なる變をなさず。

◎元暦二年。人皇第八十二代後鳥羽天皇の年號、同年八月文治と改元した。◎大なる。大地震。◎ふる。揺れうごくこと。◎世の常ならず。尋常でない。一通りでない。◎海はかたぶきて。海嘯が起つて。即ち、海の傾いたかと思はれる程に、海水の溢れ出たのをいふ。◎まろび入る。轉び込む。◎たちど。立つところ。足の踏み場所。續千載集「さをしかの峰のたちどもあらはれて、妻とふ山をいづる月影。」◎まどはせり。まごつかせた。何處を踏んでよいか、わからなくさせた。此句は、「道ゆく駒は足の踏み場所にまごついた」といふ意で、正しくは、「道行く駒は、足の立ち所にまどへり。」と自動に言ふべき所である。

をも惜まずに、あるたけの大聲で、泣き悲み嘆いて居りましたのが、身にしみて可哀相に見ました。子供に對する切なる愛情の爲には、心の剛健な者も、武士の恥を忘れたと思はれて、氣の毒に感じ、かく悲しむのも、いかにも道理な事であるわいと思つて見ました。このやうに大層揺れ動く事は、暫時で止んで終つたけれど、その餘勢が屢屢揺れて絶えない。一通りに驚く程度の地震が、二三十度揺れない日はない。十日、二十日と過ぎたから、次第に揺れる間が遠くなつて、或は日に

さうでなくては、「土裂けて水湧きあがり」「いはほわれて谷にまろび入る」「渚漕ぎ船は浪に漂ひ」と、三句ともみな自動の相であるのに對して照應しない。文相の不調和である。◎在々處々。到る所。◎堂舎塔廟。堂は大なる家又は寺、舎は家、塔廟は塔のこと、單に廟ともいふ。思ふに寺院は建築が大いから、大なる家屋といふべきを、堂舎塔廟といふ特稱を用ゐたのであらう。塔は土石を高く積んで遺骨を藏するもの、又は骨を藏せざるものをもいふ、之は顯密二教でその別がある、顯教では之を高徳を掲る標幟所謂墓標に用ゐ、密教では、之を大目如來の三昧耶形として、五輪塔を作り、結緣追福の爲に一般僧俗の墓所に建てる。俗に石塔、塔婆、卒都婆といふは五輪塔のことである。◎いかづち。雷のこと。◎うちひしげ。壓されてつぶれる意。「うち」は接頭語。◎おそれの中。恐るべかりけるは。此世に於ての恐しいもの、中で、一番恐れねばならなかつたものは。◎その中に。その被害者の中で。◎武士。武事の職を以て仕へ奉る建士タケテの總稱。◎おほひ。屋根のこと。土塀の屋根。◎はかなげなる。ちよつとした。とりとめもない。「はかなげ」は「はかなし」といふ形容詞の語根に、「げ」といふ接尾語の添うたもの。「はかなし」は、凡て長持ちのしない、脆くかりそめな意。とりとめもない、ちよつとした、何のかひもない、たよわ

四五回、二三回、若しくは隔日、二三日に一度などいふやうな有様に減退し、大體その餘震が三ヶ月くらゐありましたらうか。四大種の中で、水、火、風の三つは、常に害をなすが、大地に至つては、格別の變災を起さない。

いなどいふ意。◎あとなし事。遣つてゐるあとかたもない事柄。眞實でない事戯れごと。◎あとかたなく。身體の形も残つてゐないほどに。◎かゝへて。抱いて。◎あはれに悲しく。身に沁みて可哀相に「悲し」は、身に沁みて感じることに廣く用ゐる詞、哀れなことも、淋しいことにも、愛することにもいふ。◎子のかなしみ。子供に對する切なる愛情。◎猛きものも恥を忘れけり。心のきつい武士も恥を忘れた。武士は、古來剛健な氣象を貴び、人前で涙を流すなどいふ事は、女々しい事として、之を卑下したものである、然るに今、此武士が我子の愛にほだされて泣き悲しんだのを、恥をも忘れたと言うたのである。◎いとほしく。氣の毒で。◎ことわり。道理。「ことわりかな」は、尤もであるよ、無理がないよなどいふ意。◎おびたゞしく。此語は元は數の多いことにいふ語であるが、轉じて、甚しくの意にも用ゐる。◎なごり。此詞は、「波残り」の略で、海上に立ち竦いだ波が、風が止んでからも猶鎖らずに残つてゐるをいふ、それから轉じて、事柄の果てた後に、その氣の残つてゐるをいふ。愛は、大きな地震のあとに、小い地震の揺れるのをいふ。餘勢などいふ意。◎世の常に驚くほどのなる。餘りひどりは驚かないが、然し尋常普通に驚く程度の地震。◎まどほ。間が遠くなること。◎あるは四五度、二三度……二三日に一度など。

【通釋】

昔文徳天皇の齊衡年間の頃かと記憶するよ。大地震が揺れて、爲に東大寺の盧舍那佛の御頭が纏ちなどして、大變な事などがありましたが、それでもまだ、今度のやうに甚だしくはないといふ事である。このやうな變事に逢うたから、その時、人はみな此世のとりとめもなくつまらぬ事をば語

此句は漸降法を用ゐて、地震の餘勢の消えゆく状態を述べたのである。◎一日ませ。一日おきの意。地震の無い日を、間に一日まじへる意。「ませ」は交の字の意。◎四大種。地水火風の四元素といふ。此四つは一切の色法に周遍するから、大と名付け、一切の色法を生ずるから、種と名付ける。即ち一切の有形有質のものは、みな四大種の所造であり、和合であるというてゐる。

むかし齊衡の頃かとよ、大なるふりて東大寺の佛のみぐしおちなどして、いみじき事ども侍りけれど、なほこのたびには如かずとぞ。すなはち、人みなあぢきなきことを述べて、いさゝか心のにぎりもうすらぐかと思しほほどに、月日かさなり年越えしかば、後は言の葉にかけていひ出づる人だになし。すべて世のありにくきこと、わが身と住家とのほかなくあだなるさま、かくの如し。いはんや、所により身のほどに従ひて、心を惱すことは、擧げて數ふべからず。もし、おのづから身數ならずし

つて、幾分は心の煩惱濁も薄くなるかと見た間に、多くの月日が経過し、年が改まつたから、後は此世の果敢ない事などを、言葉に出して言ひ出す人すらもない。總て此世の常住でありにくいこと、例へば我身と住家との果敢なく跪い状態は、この通りである。まして住む場所により、身分に應じて、種々様々と心を苦しめることは、澤山で一々擧げて數へ立てることが出来ぬ。

て、權門の傍にをるものは、深くよろこぶことはあれども、大いに樂ぶに能はず。歎きある時も、聲をあげて泣くことなし。進退やすからず、立ちゐにつけて、恐れをののく。譬へば、雀の鷹の巢に近づけるが如し。もし、貧しくして富める家の隣にをるものは、朝夕すぼき姿を恥ぢて、へつらひつゝ出で入る。妻子・僮僕の羨めるさまを見るにも、富める家の人のないがしろなるけしきを聞くにも、心念々に動きて、時としてやすからず。もし、狭き地にをれば、近く炎上する時、その害をのがることなし。もし、邊地にあれば、往反わづらひ多く、盜賊の難はなれがたし。勢あるものは貪欲深く、ひとり身なるものはかろしめらる。寶あればおそれ多く、貧しければなげき切なり。人を頼めば、身他の奴ヤッコとなり、人をはごくめば、心思愛に

ことはあつても、それを大いに楽しみ慰む事が出来ぬ。心に悲歎のある時も、聲を立て、泣く事がない。一舉一動が氣樂でない。立つたり坐つたりするにつけて、恐ろしさに慄へる有様は、譬へると、恰も雀が鷹の巢近くに行つたやうなものである。もし、自分が貧乏で、富豪の家の隣に住んで居るものは、朝夕自分のみすぼらしい姿をば恥しく感じて、お追従を言ひ、その家に入入する。妻や僮僕が富者を羨んでゐる有様を見るにつけても、または富豪の家の者の尊大な態度を聞く

使はる。世に従へば身苦し。また従はねば狂へるに似たり。いづれの所を占め、いかなるわざをしてか、しばしもこの身をやどし、たまゆらも心を慰むべき。

◎齊衡。第五十五代文德天皇の年號。文德實錄に「齊衡二年乙亥五月庚午、(二十三日)東大寺奏言、毘盧舍那大佛頂、自落在地。」と見え、平家物語、卷十二、大地震の章に、「昔文德天皇の御宇齊衡三年三月八日の大地震には、東大寺の佛の御ぐしをゆり落したりけるとかや。」とある。◎東大寺。奈良に在る、所謂南都七大寺の一で、本尊は金銅盧舍那佛、世に奈良の大佛ともいふ。是は聖武天皇の御願によつて建立せられ、本尊は天平勝寶元年に、大佛殿は同四年に、各竣工した。本尊大佛の高さ五丈三尺五寸、吾國に於ける古今の大作である。◎佛のみぐし。盧舍那佛の御頭。◎いみじき事。大變なこと。「いみじき」は、大事などのある時、もの齋み慎しむ事から出た詞、隨つて、甚しい事、重大な事に廣く用ゐる。口語では、エライ、ヒドイなど譯すが、然し文の前後の關係によつて、その譯も變るから、一概に定めることは出来ない。◎このたびには如かずとぞ。今度の元暦の大地震には及ばないと云ふ事である。◎あぢきなき

につけても、願毒貪欲の念が時々刻々に湧き立つて、一時でも氣樂でない。もし人家の立並んだ狭い處に居ると、間近い處で炎焼する時は、類焼の災害を免れることが出来ない。さりとて又、もし片田舎の人家の少ない所に住んでゐると、都への往復の面倒が多く、盜賊のわざはひを脱する事が六ヶ敷い。高位高官に昇り同族の者ども多くて勢力のある者は、名利の欲が甚しく、一本立ちの者は、人から輕蔑される。家財があると盜賊の心配が多く、貧乏であると不自由の悲嘆が深い。人を頼

こと。とりとめのない事。即ち、人の此世といふものは、とりとめもないつまらぬものであるをいふ。◎心のにごり。心の煩惱をいふ。◎月日かさなり。多くの月日を経過する意。◎年越えしかば。その年も暮れて、新しい年になつたから。◎言の葉にかけて。言葉に出して。◎世のありにくきこと。此世が永久に變らぬ姿ではあり得ないこと。此世の萬物が常住し難いこと。此處の文は此世の萬物は常住不滅であり難いものと、概括的に立言し、次に再び「わが身と住家とははかなくあだなるさま」と具體的に繰返したのである。◎あだ、脆くかりそめである意。貫之集、「あだなれど櫻のみこそ故郷の昔ながらのものにはありけれ。」◎身のほど。身分。分際。◎擧げて數ふべからず。あまり多くて一々擧げて數へる事が出来ない。◎數ならず。身分の賤しい意。此身が人數にもいらぬ程のつまらぬものであるをいふ。◎權門。權力の盛んな家。◎權門の傍にをるもの。權門に仕へてゐる者。親王・攝關・大臣以下の家人などといふのであらう。◎深くよるこぶことはあれども大いに樂ぶに能はず。心に喜ばしく思ふ事はあるけれども、周圍に遠慮氣兼ねをする爲に、その喜ばしい情を顔に表はしたり動作に移して、大いに樂しみ慰む事が出来ないといふ意。「樂ぶに能はず」は、矢張漢文から來た語法で、樂ぶこと能はずの意。◎進退やすか

んで恩を受けると、その身が他人の奴隸となり。人を養育すると、その心が恩愛の私情の爲に驅使される。世俗の習慣に隨うて暮すと、虚偽の生活をするので、心が苦しい。さりとして習慣に背いて暮してゆくと、俗業と變つて、狂人のやうである。上述のやうな有様であるから、何處の土地を占有し、如何なる家業を營んだなら、暫くの間でもわが身を此世に宿し、僅かの間なりとも、心を慰める事が出来ようか。

らず。一舉一動みな主人の氣兼をしなければならぬので、自分の自由勝手に振舞ふことの出来ないのをいふ。◎立ちぬにつけて。立つたり坐つたりするについて。◎をのゝく。わなゝくに同じ。恐しさに慄へる意。◎雀の鷹の巢に云々。本朝文粹、卷十二、池亭記、「近勢家容微身者、雖破不_レ得_レ棄、垣雖_レ壞不_レ得_レ築、有_レ樂不_レ能_レ大開_レ口而咲、有_レ哀不_レ能_レ高揚_レ聲而哭、進退有_レ懼、心神不_レ安、譬猶_レ鳥雀之近_レ鷹、矣。」◎すばき姿。すばまつて細い姿。貴人の所も狭いまでに着飾つた立派な姿に對して、賤民のみすぼらしい身なりをいふ。◎妻子僮僕。貧しい人の妻子僮僕をいふ。僮僕は下部のこと。◎ないがしろなるけしき。尊大な態度。横柄な様子。「ないがしろ」は、無き部分にする、といふ意で、人のあるあるともしない有様をいふ。蔑如、輕蔑などの意。◎念々。刹那々の意。刹那は時の極少をいふ。凡物の極少時に變化するは心念に如くもがない。依つて刹那を念と義譯する。維摩經方便品、「是身如_レ電、念々不_レ住。」◎時として。一時でも、暫時でも。◎狭き地。都會などの、貧民町に見るやうな、家の周圍に空地のない、家と家との並んである狭い土地をいふのである。池亭記に、「高屋比_レ門連_レ堂、少屋隔_レ壁接_レ簷、東隣有_レ火災、西隣不_レ免_レ餘炎、南宅有_レ盜賊、北宅難_レ避_レ流矢。」とあるによつて書いたのであらう。◎炎上。

火災のこと。炎燒の義である。◎邊地。都會をはなれた片田舎。◎往反わづらひ多く。都への往復に面倒の多い意。◎勢あるもの。高位高官に昇つて、一族徒黨が多く、勢力のある者。◎食欲。世間の色欲財寶等を貪愛して厭くことのないのをいふ。「貪」とは、凡て五欲の境に染著して離れないのをいふ、貧愛、貪欲などと熟して用ゐられる。◎ひとり身。味方のない、一本立ちの人。◎寶あればおそれ多く。財産があると盜賊などに逢ふ危険が多い。◎貧しければなげき切なり。貧乏だと生活の不自由な悲嘆が深い。本朝文粹卷六、源順の奏狀に、「年老家貧、愁深歎切。」とある。◎人を頼めば。人を力頼みにしてその御蔭を蒙ると。◎奴。召使ひ。奴僕。◎はこくめば。養育すると。「はこくむ」は「はぐくむ」に同じ、鳥が雛を羽の下にはさみ包む事から出た詞。萬葉集、九、「旅人の宿りせむ野に霜降らば、わが子羽裏うら天のつるむら。」◎心思愛に使はる。自分の心が思愛の爲に使役される。思愛の情に驅られて様々に心配し苦勞する意。「思愛」は、父母妻子などの間柄で、互に恩を感じ愛に溺れる情をいふ。◎世に従へば身苦し。世間一般の習慣に隨うて生活すると、自然心にもない虚偽の生活もしなくてはならぬから、心に苦痛を感じるとの意。「身苦し」とあるは、心こゝろの苦しいといふ意に用ゐたのである。◎従はねば狂へるに似たり。習慣に隨

はないと、一般の人とは異なつた、狂者のやうだとの意。沙石集、行基菩薩遺誠の文「淨土にあらざれば、心に叶ふ所なく、聖衆にあらざれば、思ふにしたがふ友なし。世に従へば望あるに似たり。俗にそむけば狂人の如し。あなうの世の中や、いづれの所にかこの身をかくさむ。」◎たまゆら。暫しの意。「たまゆら」は、物についてゐる玉の相觸れて鳴る音で、さて其音が微かである所から、少く乏しい意に用ゐ、轉じて、暫時の意にも用ゐるやうになつたのであるといふ説がある。新古今、「玉ゆらの露も涙もとゞまらず、なき人こふる宿の秋風。」とあるは、幽かな意。堀河院百首、「かきくらし玉ゆらやまず降る雪の、幾重つもりぬ越の白山。」などあるは、暫時の意。

【通釋】
自分は父方の祖母の邸宅を傳へ受けて、久しい間その家に住む。その後、賀茂神社の社務職といふ累代世襲の頼み所がなく、身がおちぶれて、此世を隠れ忍ぶ事どもが

わが身父方の祖母の家を傳へて、久しくかの處に住む。その後、縁かけ身衰へて、しのぶかたぐしげかりしかば、遂にあととむることを得ずして、三十あまりにして、更にわが心と、一つの庵を結ぶ。これをありしすまひになすらふるに、十分が一なり。たゞ居屋ばかりを構へて、はかしくしくは、屋をつく

多かつたから、とうとう家の跡を後まで残し置く事が出来ないで、取りくづし賣拂ひ、三十歳あまりで、新に我心から一つの小さい家を作る。之を以前の住家に比較するに、その廣さは十分の一である。たゞ居室だけを作つて、客間、部屋、物置などいふ附屬物をば、立派に造るまでに至らない。いささか土塀を築いたけれど、門を建てる資力が無い。竹を柱に立て、其處を車の置き場とした。ザツとした構へであるから、雪が降り風が吹く度毎に、危険でないでもない。場所は鴨河原

るに及ばず。僅かについひぢをつけりといへども、門を立つるにたつきなし。竹を柱として車やどりとせり。雪降り風吹くごとに、危からずしもあらず。所は川原近ければ、水の難ふかく、白波の恐もさわがし。すべてあらぬ世を念じすごしつゝ、心をなやませることは三十餘年なり。その間、折々のたがひめに、おのづかみじかき運をさとりぬ。すなはち五十の春を迎へて、家を出で世をそむけり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとどめむ。空しく大原山の雲に、いくそばくの春秋をか經ぬる。

◎父方の祖母。父長繼の母をいふ。祖母の傳は詳かでない。◎家を傳へて。邸宅を受け繼いで「家」とあるは、家系の意ではない。◎かの處。祖母の邸宅。◎縁かけ。據所が缺ける。頼りと頼む所がなくなる。長明の家は先祖代々賀茂の社務職をして來たのに、長明の時に至つて、それを許されないので、退隱した

に近いから。水の災難も多く、盜賊の心配も物騒である。

總體、思ひがけない不遇の此世を我慢し過しつつ、心を苦しめた事は、三十年あまりである。その間、四季折々の變る時に、自然、人生の果敢なく短い運命をば悟つた。そこで、五十の春になつて、出家して俗世を通れた。始めから妻子が無いから、離れにくい肉身の者もない。身には官位封祿を持つてゐない。だから何物につけて此世に執著を残さうぞ、何も執著を残す縁となるものがない。かくの如き有様

ので、社務職といふ累代世襲の頼み所がなくなつたといふ意から、「縁かけ」と言うたのであらう。◎身衰へて。おちぶれて。失意不遇の身となつた意。◎しのぶかた／＼。世をしのぶ事ども。此句は、金葉集、雜、「家を人に放ちてたつとて、柱に書きつけ侍る、周防内侍。」住みわびてわれさへのきの忍草、しのぶかた／＼しげき宿かな」といふ歌からとつたのであらう。歌の意は、住み悩んで、悩んだ上に、自分までも其處を立ち退く事になつて、なつかしく思ふ事どもが多い宿であるわいといふので、「のき」に、退く意と軒との兩意を懸け、「しのぶかた／＼」は、懐かしく思ふ事どもに讀んである。それを長明は世を忍び隠れる意にとりなして、かく書いたのである。◎あととむることを得ずして。家の跡を保存し置くことが出来ないで。家を壊して賣拂つた意。「あととむる」は、跡を残す、形跡を存し置くなどの意、源氏物語、檣柱、「この世にあととむべきにもあらず、ともかくもすべうなん。」◎わが心と。自分の心から。夫木集、「他人の心を、圓空上人、見てもしれわれとはなれぬ夢のよの、闇をてらしていづる月影。」とあるも、わが心からの意、◎庵。假に設け造つた小さい家。此詞はもと、いほである、それをいほり、いほるなど活用して用ゐ、更にまた、いほりと體言にも用ゐた。いほりを構へ造る事を、いほりつくる、いほ

で、その後自分は、大原の山奥に、どれ程の歲月を經過したらうか。

り、むすぶなどいひ、草葺きの庵を、草のいほり、柴ぶきのを、柴のいほりなどいふ。◎ありし住居。昔住んで居た家。祖母の家をさす。◎なずらふる。比較する。◎居屋。住まつてゐる家。◎はか／＼しくは。確と立派には。◎はか／＼しは。はかどるなどいふ。「はか」を重ね、それを形容詞にした語で、「埒の明く」「ハキ／＼する」「しつかりとした」などの意。「はか／＼しくは」と、はといふ動詞を置いたのは、意味を強める爲である。源氏物語、夕顔、「はか／＼しくはさの給ふとも、かゝる道にゐて出奉るべきかは。」◎はか／＼しくは屋を造るに及ばず。客間、部屋、物置など、其他凡て附屬建物の完備した立派な邸宅を、造るまでに至らない意。こゝの「及ばず」も、漢文から來た書振である。◎つけり。築いた。◎たつき。「手著」の意、「手」は接頭語、「著」は寄付く意。たより、寄付く所などいふ意、爰に、「たつきなし」とあるは、資力のない意。◎車やどり。車を入れ置く所。◎危からずしもあらず。危険でないでもない。「し」は強めの助詞、「も」は感動詞。◎白波。後漢書靈帝記に、「靈帝中平元年、張角反、皇甫嵩討之、角餘賊在ニ西河白波谷、爲盗、號ニ白波賊」とある故事から、盜賊の異稱に用ゐる。爰は、川の縁語で白波といひ、兼ねて盜賊の意に用ゐたのである。拾遺集、雜、「しらなみの立田の山に入りけり、おなじかざしの名にやけ

がれむ。」とあるも、盜賊の意。◎さわがし。物騒だ。波の縁語で、さわがしというたのである。◎すべて。祖母の家を賣拂うて、小い庵を結んだ以後のみでなく、それ以前にまで遡つて、全體の上から見ても、すべてというたのだ。長明出家したのが五十の春であるから、二十歳前後をさしてゐるのであらう。◎あらぬ世。思ひがけない世。代々世襲して來た社務職を、長明の時に至つてさしとめられようとは豫て思はなかつた、その思ひがけない失意の世をいふのであらう。◎折々のたがひめ。春夏秋冬のかはりめをいふ。こゝにいふ「折々」は、後に「折々の美景」とある「折々」と同意。本朝文粹、紀齊名の賦に、「花以春榮、葉以秋落、感三春林之遞換、知一盛衰之所託。」とあると、同じ心持である。一説に、長明の志を遂げられなかつた場合場合をいふのであると解く註もある。◎みじかき運。人生の短く果敢ない運命。◎家を出て世をそむけり。出家遁世した。俗世を脱離した意。◎よすが。親身の者。身内のもの。◎官祿。官位と封祿。◎執。執者の意。物に固著して離れない意。◎何につけてか執をとどめむ。何者につけて此世に執著を残さうか、執著を残すべき縁となる何者もないとの意。◎空しく。何もせず、ぐずぐずとして。◎大原山の雲に。大原山の中にの意。山には雲のたなびく所から、山中といふを單に雲というたのであ

【通釋】
爰に六十歳といふ露の如
き脆い齡の終らうとする
頃になつて、新に晩年の

る。◎いくそばくの春秋をか經ぬる。若干の年を送つたといふ意味を「か」といふ疑問詞を用ひて、應と設疑法に述べたのである。「いくそばく」は、數も知れぬ程に數多なる意をいふ語で、「いくばく」といふに同じい、語義は「幾十許の轉であらうといふ。前に、「五十の春を迎へて云々」と述べ、後に、「六十の露云々」と叙してあるので、爰は應と「いくそばく」といふやうな不定代名詞を用ひて、その年數を朦朧ときかせたのである。一本に「大原山の雲にふして、五つかへりの春秋を」とある。然し五年では旧家してから日野山の草庵を結ぶまでの年月と辻褄が合はなくなる。或は大原山以外の地で他の五年をば暮したのか、然し本文が年代の順を追うて洩れなく叙してあるのに、爰に大原山以外の生活だけを除外したと見るのも變である。思ふに大原山の中で、作者が出家後日野山の草庵にうつる迄の十年間を暮したものと見える。「いくそばくの春秋」とあるのがいふであらう。

こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉のやどりを結べる
ることあり。いはゞ狩人のひと夜の宿をつくり、老いたる露の
蔭をいとなむが如し。これを中頃のすみかになすらふれば、ま

住家を作つたことがある。例へて言ふならば、餘命のいくばくもないわが住家であるから、狩人が山中に一夜の假の宿を作つて夜を明かし、老いた獵が藪を作つてそれに籠るやうなものだ。之を、中頃賀茂川のほとりに作つた庵に比較すると、またその百分の一にすらもといかない。

かれこれする間に、年齢は年一年と死期に近づき、住家は居を移す度毎に狭い。此度の家の有様は、世間普通のに似ない。廣さはたつた一丈四方、高さは七尺以内である。此處に永住しようとい心に

た百分の一にだも及ばず。とかくいふほどに、齡は年々にかたぶき、すみかは折々にせばし。その家のありさま世の常ならず。廣さは僅に方丈、高さは七尺ばかりなり。處を思ひ定めざるがゆゑに、地を占めて造らず。土居を組み、うちおほひを葺きて、つぎめごとにかねをかけたなり。もし心になはぬことあらば、やすく外に移さむがためなり。その改め造る時、いくばくのわづらひかある。積む所わづかに二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に他の用途いらす。

いま、日野山の奥に跡をかくして後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に闕伽棚あかだなをつくり、うちには、西の垣にそへて、阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日を請けて、眉間の光とす。かの帳のとびらに、普賢ならびに不動の像を掛

考へ定めぬいから、一定の土地を占有して作らない。土臺を組み合せ、屋根を葺いて、材木の継ぎ目毎には鈎カガサ匙をかけてある。これは、若し此住家が意に充たぬ事のある場合に、容易に他所へ移さう爲である。その改造する時、何程の面倒があるか、何程の面倒もない。積んで運ぶ所のもの、は、たつた車二輛である。だから、移轉するに車力の代を拂ふ以外、少しも他の入費がいらぬ。

自分は今、日野山の奥に浮世を遁れあとをくらまして、其處の草庵の南面に、假初の庇をさし出し

けたり。北の障子の上に、ちいさき棚を構へて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌・管絃・往生要集ごときの抄物を入れたり。傍に箏・琵琶、おの／＼一帳を立つ。いはゆる折箏・つぎ琵琶これなり。東にそへて、蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の壁に窓をあけて、こゝに文机を出せり。枕のかたにすびつあり、これを紫折りくぶるよすがとす。庵の北に少地を占め、あばらなるひめ垣をかこひて園とす。すなはち諸の藥草を栽ゑたり。假の庵の有様かくの如し。

◎六十の露消えがたに及びて。六十歳といふ露のやうな脆い齡の終らうとする時になつて。六十歳の末頃になつてといふ意。露は、金剛經に、「如_レ露亦如_レ電。」とあり、涅槃經に、「是壽命常爲_レ無量怨讐所_レ邊、念_レ滅損無_レ有_レ增長……亦如_レ朝露_レ勢不_レ久停。」などあつて、人の命の脆いのに譬へる。「消え」は露の縁語に用ゐたので、終りといふ意。◎末葉のやどり。晩年の住居。末葉は、露は葉

て、その下には竹を並べて作つた縁側をつけ、その縁側の西の端に閑伽棚を設け、家の中には、西の壁に添へて阿彌陀如來の畫像を据ゑ奉り、壁の隙間からさしこむ夕日の光を迎へうけて、その明りを如來の眉間に輝く白毫相の光とする。あの畫像の前に垂れてゐる帳なる扉に、普賢菩薩並に不動尊の像をかけてある。北方の障子の上に小さい棚を作つて、その上に黒塗の葛藤三四箇を置く。その中には、和歌管絃の書物、及び往生要集などいふ類の書抜き本を入れである。その傍に、琴瑟

末に宿るといふ縁から、單に末といふ意に用ゐたので、普通漢語に末葉といふは末代の意であるが、爰はさうでない。◎むすぶ。露の縁語で、造り構へる意。◎いはじ。例へていふならば。◎狩人。獵師。鳥獸をかりする人。◎ひと夜の宿。獵師が山野に露營などするときに假の宿を作るをいうたのである。◎いとなむ。作る。こゝは保胤の池亭記に、「亦猶行人之造旅宿」老蠶之成獨繭と夫、其住幾時乎。」とある句によつて書いたのであらう。◎中ごろのすみか。祖母の家を賣つてから、作者が三十餘歳の時自分の心から一つの庵を結んだといつてある家を指すのである。◎百分が一にだも及ばず。百分の一にすらも達しない。長明は餘程の法螺吹である、勿論本文全體が彼の誇張した筆に成つてゐることは、誰もいたむことの出來ぬ事實であるが、殊にこゝの書振りなど最甚しいものゝ一つである。日野山に造つた方丈の居室が、中頃の賀茂河畔の住家の百分の一にも及ばないと言つてゐるが、更に前に、賀茂河畔の家は祖母の家の十分の一であると書いてある、して見ると祖母の家は日野山の草庵の千倍以上もある事になるが、斯様な大屋高樓は當時の高位高官の人すらも持ち得なかつた所のもの、況んや數ならぬ身の長明をやである。◎とかくいふ程に。かれこれいふ間に。此句は作者が、或は祖母傳來の家を賣つて賀茂川畔の家に移り、或

蓍の各々一張を立てる。之が世に謂はれる所の折筍とつき琵琶とである。東の壁際に添へて、蕨の穂の延びたのを敷き、その上に藁で編んで作つた敷物を置いて、そこを夜の寢床とする。東の壁に窓をあけて、こゝに書物を讀む爲の机を出してある。枕の方に陶爐裏がある。これを柴を折りくべる爲のものとす。庵の北方に僅かの土地を占め、疎な丈低い垣根をその周圍に作つて、庭園とする。其處には種々の藥草を植ゑてある。暫時の間この身を置く庵の有様は、このとほりである。

は大原山の中に暮した過去を概括して、漠然といふたのである。◎齡は年々にかたぶき。年齢は年一年と死期に近づいてゆく意。即ち年老ゆるを、日や月の山の端近く傾くの比して、かく書いたものである。徒然草にも老年を譬へて夕の日といひ、増鏡にも、「山の端近く傾きぬめる月影かな、我身の上の心地こそすれ。」などある。◎折々にせばし。居をうつす度毎に狭い。「せばし」は「せまし」に同じ、「ば」と「まし」は唇音の相通である。◎方丈。一丈四方の室、釋迦在世の頃、天竺に維摩居士といふが在つた、毘耶離城の中に、一丈四方の居室を作つて、其處に居られ、釋迦の教化を輔けられた。爰に方丈といふは、この維摩居士の方丈の居室に倣うたのである。◎處を思ひ定めざるが故に。住む場所をば何處と心に考へ定めなから。此土地に永住しようと考へ定めなからといふ意。出家遁世の身であるから隨つて住所も一所不住である意をいふのである。◎地を占めて。一定の土地を占領して。◎土居。土臺のこと。◎組み。組み合せること。◎うちおほひ。屋根。◎つぎめ。材木をつぎあはせてある所。◎いくばくのわづらひかある。何程の面倒があるか、何程の面倒もない。◎二輛。車二臺のこと。◎車の力を報ゆる外は。車力に報酬をする以外は。車代を拂ふ以外は。◎用途。ものいり。入費。◎いま日野山の奥に跡をかくして。「日野山」

は、山城國宇治郡木幡山の東北に當る處に在る。「跡をかくす」は、行衛をわからなくする意、即ち隱遁すること。俗界を離れて山林に隠れるなどいふ意。此句からは、前の方丈の庵の有様を詳細に繰返すので、「こゝに六十の露云々」から「車の力を報ゆる外は更に用途いらず。」といふまでは、要するに日野山の草庵の一般的叙述に過ぎない。一説に、「末葉のやどりを結べる云々」とある方丈の庵と、これから述べる日野山の草庵とは、同一物でなく、「こゝに六十の露云々」から「更に用途いらず」までは、作者が日野山に草庵を結ぶ以前に何處にか別の方丈の庵を結んだ事があつて、それを記したのであらうと言うてゐるが、それは謬見であらう。◎日ヒがクシ。日隠で、庇のこと。◎竹の簀子。竹を並べて作つた縁側。「簀子」は、和名抄に、「簀ハ、功程式、板敷、簀子、須乃古」床上簀ハ竹名也。」とあるが如く、元來竹の編んだものをいうたのであるが、後には轉じて、竹を並べて作つた床、又は、幅五六寸の板を少しづつ間を置いて並べ作つた床をいふ。◎敷キ。簀子は元來敷くものであつた所から、それを造る事を敷くといふたのである。◎閑伽棚。水桶を載せ置く棚。「閑伽」は阿伽とも書く、水の梵語、佛に奉る水、即ち水に香花を入れたものをいふ。◎西の垣。西の壁。◎阿彌陀の畫像。阿彌陀佛の繪にかいた像。「阿彌陀」は、如來の名、無量壽と譯す。西

方極樂淨土にいます教主である。◎安置。やすらかに据ゑおくこと。◎落日を請けて。夕日の光を畫像の上に迎へとること。こゝなども文意の明瞭でない箇所、畫像が東の壁に西向きにかけられてあるならば、西の方からさし込む落日を容易に請けることが出来るから、少しも面倒はないが、西の壁に東向きに安置されてある畫像に、何處から落日をうけることが出来ようぞ、或は畫像の後の西の壁に、丁度適當な場所を見計らつて、其處から畫像へ落日のさすやうにこしらへたものであらうか、兎に角、本文は草庵の有様を如實に描寫したものではなく、作者の法螺の交つてある、出鱈目に近いものだと思はれる。

◎眉間の光。如來三十二相の一に白毫相といふがある、即ち、世尊の眉間に白色の毫相があつて、右に旋つて宛轉し、光明を放つてゐる、その白毫相の光明を眉間の光といふのだ。法華經序品、「爾時、佛放眉間白毫相光。」大般若三十一、「世尊眉間有白毫相、右旋柔軟。」◎帳の扉。帳は戸張トビラをいふ。佛を安置してあるづしの前に懸ける帳で、布帛を豎に縫ひ合せたもの、是は元は佛像を掩ふ爲の具であるが、今は佛前の莊嚴に用ゐる。扉は戸片トビラの義、開き戸のこと、即ち佛像を奉る厨子の扇扉をいふのである。然し爰にいふ「帳の扉」とは、帳なる扉の意で、帳と扉との二者あるのではない。思ふに長明は、西の壁に添へ

て彌陀如來の畫像を安置し奉り、その前に帳を垂れて、その装置をその儘佛龕に比したので、別に佛像をまつる厨子などは無かつたものであらう、故にその帳を厨子の扉に見立て、「帳の扉」というたのである。然るに諸註は「帳のかゝつてゐる扉」と解してゐるが、是は大なる誤である、佛龕のあるのに、何を好んで阿彌陀如來の像をば西の壁に安置しようぞ。◎普賢。普賢菩薩のこと。諸菩薩中の最も勝れてゐるもので、禪定を代表するものとして、常に白象に乗つてゐる。普は福德普遍の義、賢は仁慈惠悟の意。◎不動。不動明王のこと。不生不滅不増不減の心を表す佛で、大日如來が惡魔を退治する爲に忿怒の形相を現はした變化身。五大尊の中尊、諸明王の總主である。その像は顔色瘳猛、右手に降魔の劍左手に縛の繩を持ち、脊に火焰を負うてゐる。◎障子。古くサウジといひ、後世はシャウジといふ。室の隔てに立てるもの、襖障子、明障子、衝立障子などの類がある。昔は單に障子といへば、襖障子をさし、今は明障子をさす。◎皮籠。革で包んで作つた箱。即ち葛籠のこと。◎三四合。三四箇。◎和歌管絃往生要集ごとき抄物。和歌管絃の書や、又は往生要集などいふ類の書抜きもの。往生要集は、比叡山横川の楞嚴院の惠心僧都(源信)の作で、西方淨土の往生を願ふ者に肝要な經文を抜萃して之を集め、淨土念佛に歸

依すべきことを勧めたもの。「ごとき」は、ども、など、類ひ等の意を添へる接尾語。「抄物」は、抜き書きものにも、寫しものにもいふ。◎箏。十三絃の琴。昔は箏の琴というたのであるが、後世は此琴が一番流行するので、略して單に箏とのみいふ。之は支那で出来たもの、吾國に渡來したのは仁明帝の時、平安朝時代の流行を追ふ人は、大抵此箏の琴、琵琶などを弾いて慰んだものである。琴には此他に、和琴というて六絃のもの、琴の琴として七絃のもの、八雲琴として二絃のもの、須磨琴として一絃のものなどがある。◎琵琶。昔琵琶の琴というたこともあり、また胡國から傳はつた所から胡琴ともいうた。歌には四つ絃とも、また單に琴とも詠んでゐる。箏、和琴と共に樂器の三絃といはれてゐる。◎一張。琴などを數へるに用ゐる語。◎折琴。二つに折ることの出来るやうに作つたもの。◎つき琵琶。分解することの出来るやうに作つたもの。◎ある時は、接合せて弾く。◎蕨の穂の延びたもの。「ほどろ」は、蕨の穂などのほうけ亂れたもの、散本、「春くれば見る人もなきさわらびは、いつかほどろにならんとすらん。」山家、「なほざりにやき捨てし野の早蕨は、折る人なくてほどろとやなる。」◎つかなみ。東並の意で、藁を編んで作つた敷物。◎文机。書づくゑの略。書物を載せる机。◎すびつ。炭櫃と書く、今いふ角火

【通釋】

その場所の有様を言ふならば、南方に筧があり、その端の地上に岩を重ねめぐらして、筧から落ちる水をためてある。林が軒先に近く續いてゐるから、薪を拾ふに不自由がない。土地の名をば外山といふ。あたりには、正木のかづらが一面に生えて、人の往來の跡を塞いでゐる。谷は草木が澤山に茂つてゐるが、西の方は明るく開いて、眼を遮

- 鉢又は圍爐裏のこと。◎柴。木の枝、又は小さい木。◎よすが。たより。てだて。
 ◎あばらなるひめ垣。まばらな丈の低い垣根。「ひめ垣」とは、女牆と書く。
 ◎園。庭園のこと。園があつて、蔬菜または果木など植ゑる地。

その所のさまをいはず、南に筧あり。岩をたゞみて、水をためたり。林軒近ければ、つま木を拾ふにともしからず。名を外山といふ。まさきのかづら跡をうづめり。谷しげけれど、西は晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらず。春は藤浪を見る。柴雲の如くして、西の方に匂ふ。夏は時鳥を聞く。かたらふごとくに、死出の山路をちぎる。秋は日ぐらしの聲耳にみたり。うつせみの世をかなしむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。積り消ゆるさま、罪障にたとへつべし。もし念佛ものうく、讀經ますならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、ま

るものがない。だから、西の方にあるといふかの極樂淨土の諸佛をば觀祭思念する便宜がないでもない。春は藤の花を見る。その紫色が、恰も聖衆來迎の折の紫雲のやうで、西の方につやゝかに棚引いてゐる。夏は時鳥の聲を耳にする。その鳴く度毎に、人生の無常を感じて、その鳥の名に持つてゐる死出の山路を、自分も早晚越え行かうと、心に深く約束する。秋は蛸の聲が耳一杯に聞える。恰も此世の中の無情を悲しむのかと思はれる。冬は雪景色を賞美する。その積つたり消えたりする

た恥づべき友もなし。こと更に、無言をせざれども、ひとりをれば、口業をさめつべし。必ず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ、何につけてか破らむ。もし跡の白浪に身をよする朝には、岡の屋に往きかふ舟をながめて 満沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風、葉をならすゆふべには、潯陽の江を思ひやりて、源都督の流をならふ。もしあまりの興あれば、しばしく松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれつたなけれども、人の耳を悦ばしめむとにもあらず。獨りしらべ獨り詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

◎寛。懸樋カケヒの義、地中に竹を埋めて水を通はせる埋樋ウツミヒに對しての名である。地上に高く架けて水を通じる樋。◎岩をたゞみて。周圍に岩を重ねめぐらすのをいふ。◎つま木。爪先で折りとる事の出来る程の木で、薪の細いのをいふ。詩註に、「粗曰薪、細曰蒸」◎外山。山城國宇治郡醍醐村に屬して、その南に接

有様は、人の身の上につもる罪障の消滅するに譬へる事が出来よう。もし念佛が太儀で、讀經に身の入らぬ時は、わが心から休み、わが心から怠るに、それを妨げる人もなく、またその怠慢を恥かしく感じるやうな友もない。故意に無言をしないけれども、一人で居るから、言語から招く罪業を犯さないでゐることが出来る。佛の制定せられた戒律に背かぬやうにと、是非共勤めるといふのではないけれど、自分の心を刺戟する外物がないから、何事につけて之を破らうぞ。

してゐる日野の東の山上に、長明の閑居の跡があると言ひ傳へてゐるが、其處の土地をいふのであらう。◎まさきのかづら。一説に、四時常に綠色の蔓草で、「薛」といふものゝことであるといひ、また一説に、葉は南天に似て、黒みがあり、冬の初、美しく色づく蔓草であるともいひ、その名義についても、眞幸の意で、常に綠色である所から言ふのだとも、また、眞折マサキに裂いて鑿としたことから付けたのだともいふ。古今集神遊の歌に、「深山には霞ふるらし外山なる正木のかづら色づきにけり。」などあり、神樂をするには、眞折の葛で頭を結ぶことがあつたといふから、何れも後説が正しいであらう。◎跡をうづめり。正木のかづらが一面に茂つて、人の往來の路を塞いでゐる。誰も訪ひ來る人のない閑居の様をいふのである。紀齊名の賦、「山遠雲埋ニ行客迹。」◎谷しげけれど、路は木が茂つてゐるけれど。◎西は晴れたり。西の方は明るく開いて、木々の梢の目を遮るものゝない意。是は前に「落日を請けて」とあるに應じた句で、更に次の「觀念のたより」といふ句を引き起す用意に用ゐたのだ。即ち西は極樂淨土のある方角である、この西方が晴々と開いてゐるから、自然西方極樂淨土を想ひやつて、觀念の便宜とするといふ意から、次に「觀念の云々」と續けたのである。◎觀念のたより。西方淨土の諸佛を觀察思念する便宜。「觀念」は、眞理又は

もし船の漕ぎ去つた跡に立つ白波の果敢なきに、わが身のはかなきをば、比較し考へる朝には、岡の屋に住反する船を眺めて、滿齋沙彌の風流をひそかに倣うて歌をよみ、もし桂の木を吹き渡る風が葉に音立てる日暮れには、桂の葉音から楓の葉を聯想し、唐の詩人白樂天が「楓葉荻花秋瑟瑟」と歌うた淨陽江のほとりの秋景色を想像して、琵琶に思を寄せ、かの桂流で名高い源都督の流儀を習うて琵琶を弾く。もしも盡きせぬ深い興味の湧く時は、しばし松吹く風の響をきくにつけて、

佛體を觀察思念すること。○藤波。藤の花房の風に靡く様をいひ、轉じては、藤の花をいふ。○紫雲の如くして西の方に匂ふ。阿彌陀佛を念じて、往生を願ふ者に對しては、淨土の二十五菩薩が紫雲に乗つて迎へに來るといふ考から、藤の花の紫色に靡くさまを、諸佛來迎の紫雲に比し、更に西方淨土の縁で、「西の方に匂ふ」と言ひつゞけたのである。西行の山家集に、寄藤述懷といふ題で、「西をまつ心に藤をかけてこそ、その紫の雲をおもはめ。」といふ歌がある。此歌などから思ひついた句であらう。「匂ふ」とは、元來色のつややかに輝くを云ふ詞であるが、轉じては、香の意にも用ゐるやうになつた、即ち、眼に映ずる方と、鼻にかゝる方との兩様に用ゐる。爰はつややかに輝いてゐる意。聖衆來迎のことは、十往生經に、「若有衆生、念阿彌陀佛、願往生者、彼極樂世界阿彌陀佛、即遣(中略)此二十五菩薩、擁護行者」とあり、往生要集卷五に、「二十五の菩薩、百千の比丘衆もろとも來り給ふや、西の方紫雲たなびき云々。」とある。○かたらふごと。時鳥の鳴く度毎に。「かたらふ」は「語る」の延語。單に鳴くといふ意。然るに此語を、山家集に見えてゐる。「特賢門院の女房、堀川の局のもとよりいひおくられる歌に、「この世にてかたらひおかん時鳥、死出の山路のしるべともなれ。」返し、西行法師、「時鳥泣くくこそはかた

之に「秋風の樂」を合はせて弾き、水の流れる音を耳にするにつけ、之に「流泉」の曲を副はせて、琵琶を彈奏する。自分の藝は拙いが、人の耳を喜ばしめようとして、するのではない、獨り彈奏し獨り詠つて、みづから己れの心を養ひ慰めるだけである。

らはめ、しでの山路に君しかゝらば。」といふ二首の歌を引いて、談合の意に解くのは面白くない、勿論こゝの句は右の二首の歌から思付いて書いたものではあらうが、意味は鳴くといふまでのもの。◎死出の山路をちぎる。自分も早晚死出の山路を越え行かうと心に深く約束するとの意。「死出の山路」は、別譯阿含經四に、「死山能壞一切壽命。」とある中の死山をさすので、死といふ險難を山に譬へ、人の死んで行くを死出の山路を越すなどといふまで、別に死出の山といふ實際の山があるわけではない。然るに十王經に、「閻魔王國境死天山南門云々。」とある句から、「死出の山」といふ實物があるかの如く考へられ、人が死んで往つてかへらぬ所、即ち、冥土の意に用ゐられてゐる、さて、時鳥の異名を死出の田長タチサといふ所から、時鳥の鳴聲を聞くにつけて、死出の山路を聯想し、此世の無常を觀じ、時鳥の名に持つてゐる死出の山路に、自分も早晚行かうといふ意に書きつづけたのである。「死出の田長タチサ」は「賤の田長シツ」の訛で、時鳥の鳴く頃は五月で、丁度田植の頃であるから、その鳴き聲を勸農の意に聞きなして、さういふのであるといふ説と、古今集に、「しでの山越えてや來つる時鳥、戀しき人のうへ語らなむ。」とあるが如く、此鳥は死出の山を越えて來るから、さういふのだといふ説とある。「契る」は、心に約束する意。◎日ぐらし。

茅蜩と書く、蟬の一種、秋の夕方に鳴く。○うつせみの世をかなしむかと聞ゆ。「うつせみ」は、顯青身の約言なる宇都曾美の曾を轉じて、世としたのであらう。現在この世に在る人の身といふ意の詞であるが、また「命」「世」「人」などいふ語に冠する枕詞に用ゐる。「うつせみの世」は、單に此世といふ意。「うつせみ」を、蟬に言ひかけて、蟬の鳴く聲が、果敢ない現世を悲しむのかと聞えるといふ意。一説に、「うつせみ」は、空蟬で、蟬の蛻のこと、世の果敢なきを之にたとへて、人の此世に在るは、蟬が蛻の殻を置いて去るに等しいといふ意で、さういふのであるというてゐるがどうか。○あはれむ。面白く思ふ。身に沁みて賞美する。○積り消ゆるさま罪障にたとへつべし。雪の積つては消える有様は、人の身に積る罪障の消滅するのに、譬へる事が出来よう。罪障は、往生の障となる罪、善果を得る障となる罪。「つべし」の「つ」は現在完了、「べし」は可能の助動詞。單に「べし」といふよりも意味が強い。○念佛。稱名念佛、觀想念佛、實相念佛に區別する。普通、單に念佛と云へば、南無阿彌陀佛の名號を唱へる稱名念佛のこと、衆生は念佛を唱へることに依つて救済されるといふのである。觀想念佛とは、靜座して佛の相好功德を觀念するをいひ、實相念佛とは、佛の法身非有非空中道實相の理を觀するをいふのである。

●ものうく、氣の進まぬこと、たいぎなこと、厭氣のさすこと。新古今集。梅が枝にも、のうき程に散る雪を、花ともいはじ春の名だてに。○讀經、經を讀むこと。●まめならざる時。身の入らぬ時。「まめ」は「眞實」「深切」などいふ意、轉じて、元氣よく立ち働くこと、身體の健全であることなどにも用ゐる。●こと更に。故意に。わざと。●無言。無言行又は無言戒といふ。口を守り言を慎み語を少くして、極樂往生を願ふのである。●口業。身口意の善惡無記の所作中、口の所作、即ち一切の言語をさす。身口意の所作の善性惡性は、必ず苦樂の果を感じるものであるから、之を慎むのである。報恩經。「一切衆生禍從口生。○禁戒。佛の制定した法律で、非を禁じ惡を戒めたもの。所謂五戒八戒沙彌戒具足戒等をいふ。●境界。自家勢力の及ぶ境土、またはわが得たる果報の領域をいふので、境遇の意。即ち自己の心に觸れる周圍の世界のこと、併し爰に「境界」というたのは、自己の心を刺激する周圍の外物をさすのである。●跡の白浪に身をよする朝には。わが身の果敢ない事をば、舟の漕ぎ去つた跡に立つ白浪の果敢なさに、思ひくらべる朝には。「跡の白浪」とは、萬葉集卷三、滿沙彌の歌、「世の中を何にたとへむあさびらき、漕ぎにし船のあとなきがごと。」とあるを、更に拾遺集哀傷の部に、「世の中を何に譬へむあさばらけ、漕ぎ行く

船のあとの白浪。」として見えてゐるのに依つて書いたもの、袋草紙に、横川の僧都源信といふ人は、常に和歌は綺語狂言で、求法の障であるといふて貶してゐた、然るに或人が、恵心院から、或日の曉に湖水を眺めて、満沙彌の此歌を吟じたに、源信がそれをきいてひどく感心して、觀念の助縁ともなるものは和歌であつたのにならうて、以後は多くの和歌を讀んだといふ話が見えてゐる。思ふに此歌は當時人口に膾炙してゐたものゝ一つであらう。「満沙彌」は、満誓沙彌のこと、在俗の時は、美濃尾張守左大辨正五位上笠朝臣麻呂と云ひ、養老五年四月、太上天皇の病氣平癒の祈願の爲に出家した、「沙彌」は、始めて剃髮して佛道に入つたものゝ名稱。○岡の屋。和名抄に、「宇治郡岡屋郷、訓乎加乃也。」とある、今日の宇治郡宇治村大字木幡五箇莊をさす、五箇莊に岡之屋の字がある、宇治川に臨んでゐる、名跡志に、「方丈記に岡屋に行きかふ舟といふは此地なり、古より近衛殿の傳領にして、兼經公(基通孫)は岡屋關白と號し、今に近衛の別館址並に墓所あり。」とある。◎満沙彌が風情をぬすみ。満沙彌の風流を心ひそかに倣ひ學ぶ意。「風情」は、景色、趣、味ひなどいふ意。◎桂の風葉をならすゆふべには。桂の木を渡る風が葉に音立てる夕には。此句は白樂天の琵琶行といふ詩にある「浔陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟。」とある

句によつて書いたものと見える。「楓」は、和名本草には、「楓、馳脂、和名加都良。」和名抄には、兼名苑を引いて、「楓、一名攝、爾雅云、有_レ脂而香、謂_ニ之楓、和名乎加豆良、桂一名、和名女加豆良。」としてあるが如く、昔はカツラといつた所から、「楓葉」とあるのを、「桂の風」と言ひかへたのである。さて、「桂の風」から「楓葉荻花」の句を聯想し、續いて「楓葉荻花」の句の出來た淨陽江を想像するといふやうに言ひ下したのである。爰に特に「桂の風」としたのは、經信の桂流に縁を持たせる爲で、「淨陽江を思ひやる」というた琵琶に深い關係があるからで、要するに「桂の風」「淨陽江」の二語は「源都督の云る」の句を修飾したのである。○淨陽江を思ひやりて。琵琶行の詩に詠まれてある淨陽江の趣を想像して。淨陽江は、白樂天の配所の名、唐の元和十年に、白樂天は、九江郡の司馬に左遷せられ、翌年の秋こゝで琵琶行を作つた。琵琶行の序、「元和十年、左遷于九江郡司馬、明年秋、送客湓浦口、問船中夜彈琵琶者、聽其音、年々然有_ニ京都聲、問其人、本長安娼女、嘗學_ニ琵琶於穆曹二善才、年長色衰、委身爲_ニ賈人婦、遂命_レ酒使_ニ快彈_ニ數曲、曲罷憫然、自叙_ニ少小時歡樂事、今漂淪憔悴、轉_ニ徙於江湖間、予出官二年、恬然自安、感_ニ斯人言、是夕始覺_レ有_ニ遷謫意、因爲_ニ長句歌、以贈_レ之。凡六百十一言、命曰_ニ琵琶行。」○

源都督の流をならふ。源都督の流儀を倣ひ真似る。「流」は潯陽江の縁語に用いたので、流儀の意、「源都督」は桂大納言源經信のこと、嘗て杜の里に住んだので桂大納言と稱へる。嘉保元年に太宰權帥に左遷せられたから、源都督といふた。「都督」は太宰帥の唐名。源經信は宇多源氏中納言道方の六男で、博學多藝、詩歌管絃の道は勿論、和漢の學に富み、故實にも通じてゐた、その中でも琵琶を太宰少貳資道に學び、その奥妙を極め、その流儀を桂流といふた。曾て白河天皇が西河に幸して、詩・歌・管絃を三船に設け、一時の名輩を選んで、其の長ずる所の技に隨うて各分乘させた、時に經信が後れて來て、沙汀に跪いて、「請ふ船を回せ」と呼び、遂に管絃船に乗つて、琵琶を弾き詩歌を獻じ、大いに主上の御満足を受けたといふ話がある。◎もしあまりの興あれば、もし盡きない所の興があると。「興」とは、物に感じて起る面白い心持。「もし」といふ假定の意の副詞が上にある時は、下も「あらば」といふ假定にしないで上と下とが照應しない。然るに「あれば」は既定の意を表はす句で、正しくは「もしあまりの興あらば」とすべきである。◎松の響に秋風の樂をたぐへ。松吹く風の颯颯たる響は何となく秋風の氣色をあらはしてゐるやうに感じるので、松の響を聞くにつけて、之に秋風の樂をたぐへて、かの樂を彈ずるといふ意。「たぐへ」

は、ならび副はせる、通はせる、伴はせるなどいふ意。「秋風の樂」は、樂の曲名、磐渉調である。◎水の音に流泉の曲をあやつる。水の音を聞くにつけて、流泉の曲を弾じる。「流泉の曲」は、一名菩提樂、仁明帝の御代に、掃部頭貞敏が入唐して、琵琶の名手廉承武から傳授された秘曲、後に逢坂山に住んだ蟬丸が。之を啄木の曲と共に敦實親王から傳へ受け、源博雅が更に蟬丸から習ひ受けたといはれてゐる。「あやつる」は、漢字の操の字の意、爰は彈奏する意。「水の音」というたから、その縁で流泉の曲と續けたので、「松の響に云々」の句と同じ工である。◎しらべ。樂器を弾く意。奏すること。◎詠じて。聲を長くして歌ふこと。◎心を養ふ。心を養ひ慰める道。「心を養ふばかり」の「ばかり」は「のみ」といふ意、強く指す意の助詞。

【通釋】
また山の麓に柴葺きの小さな家がある。とりもなほさず山番の居る所である。あそここの家に小さい童が居る。それが時々やつて来て、共に心を慰め

また麓に一つの柴の庵あり。即ちこの山守がをるところなり。かしこに小童あり。時々來りて相とぶらふ。もし、つれづれなる時は、これを友として遊びありく。彼は十六歳、我は六十、その齡ことの外なれど、心を慰むることは、これ同じ。あるは

る。もし怠惰な時は、この小童を相手として遊んで歩く。童は十六歳、自分分は六十歳。其年齢の相違は意外に甚しいけれども、心を慰める一點は、兩人共に同じである。或時は茅花の穂を抜きとり、岩梨を採る。また山の芋の子を籠に澤山盛り入れ、芹を摘む。或時は藪のめぐりの田に行つて、落ち散つてゐる稻穂を拾うて、それで穂掛を作る。もし天氣の晴朗である時は、嶺によち登つて、遠く故郷の方を見渡し、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師などいふ方面を眺める。勝れてゐる

つばなを抜き、岩なしを採る、またぬかごを盛り、芹を摘む。あるはすそわの田居にいたりて、落穂をひろひて穂組ほぐみを作る。もし日うらゝかなれば、嶺に攀ちのぼりて、遙に故郷の空をのぞみ、木幡山・伏見の里・鳥羽・羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさはりなし。あゆみ煩なく、志遠く至る時は、これより峯つゞき、炭山を越え、笠取を過ぎて、あるは岩間にまうで、あるは石山を拜む。もしはまた栗津の原を分けて。蟬丸の翁が跡をとぶらひ、田上川を渡りて、猿丸太夫が墓を尋ね、歸るさには、折につけつゝ、櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、且は佛に奉り且は家づとにす。もし夜静なれば、窗の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は、遠く槇の島の篝火にまがひ、曉の雨は、おのづから

景色は、持主がないから、それを眺めて心を慰めるに、誰ひとり故障をいふ者もない。

歩くのに太儀でもなく、遠くまで遊ばうと思ふ時は、こゝから峰傳ひに、炭山を越え、笠取を過ぎて、或は岩間寺に参詣し、或は石山寺の觀音を拜む。或は又栗津の原を通つて、蟬丸の翁の遺蹟を見舞ひ、田上川を越して、猿丸大夫の墓を尋ねる。歸る時には、四時の季節につれて、櫻の花をあさつて見たり、紅葉を探し求めたり、或は蕨を折り、或は木の實を拾うて、一つには佛に奉り、一つに

木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろ／＼と鳴くを聞きて、父か母かと疑ひ、峯のかせぎの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。あるは埋火をかきおこして、老の寐ざめの友とす。おそろしき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景色、折につけてつくることなし。いはんや、深く思ひ深く知れらむ人のためには、これにしも限るべからず。

◎柴の庵。柴葺きの小さな家。「柴」は、木の枝、または小さい木をいふ。源氏物語、若菜、「おなじ柴の庵なれど、すこしすゞしき水の流をも御覽せさせんと。」新古今、「何處にも生まれずばたゞすまやあらむ、柴の庵のしはしなるよに。」◎この山守。この日野山を守つてゐる番人。◎小童。ちひさい童。「童」は十歳前後の男女をいふ。和名抄には、「禮記云、童未冠之稱也、和名和良波。」とある。◎とぶらふ。慰める意。◎つれづれ。閑散無聊の意、怠屈なこと。爲す事もなく暇で淋しい心持。◎遊びありく。遊んでゐる。「ありく」は「あるく」に同じ。◎その齡ことの外なれど。長明と小童との年齢は、意外の相違

は土産にする。

もし夜の静かな時には、窓に照る月の光に向つて、心に故人を思ひ出してはなつかしがり、猿の鳴き聲を聞くにつけて悲しいの情を催して、涙で袖をぬらす。草むらに飛びちがふ螢の光は、遠く櫛の島に焼く篝火であるかのやうに見え、曉に降る雨の音は、自然、木の葉を吹き渡る嵐のやうに感じられる。山鳥のほろほろと鳴く聲を聞いて、父が呼ぶのか母が呼ぶのかと疑ひ、峰の鹿の軒近く來馴れたのを見るにつけても、わが身の俗社會から遠く離れてゐる程合

であるけれど。◎心を慰むることはこれ同じ。長明と小童と年齢も異なれば、その思想や趣味も懸絶してゐるのであるが、共に心を慰めるといふ一點は、同じであるといふ意。◎つばな。茅の花。茅といふ草の穂の萌え出たばかりのもの、この草は春の野邊に芽を出し、小兒など、好んで取り食ふものである、是は本來は、ちばなといふが正しい、つばなといふは後世の事である。芽は今いふ茅草のこと、この草は高くのびずに淺く生えるので、淺茅ともいふ。◎つばなを抜き。つばなを抜き取ること。即ち食用にするのだ。萬葉集卷八、「我奴がため我が手もすまに春の野に、ぬける茅花ぞ食して肥えませ。」「我が君に我奴は戀ふらし賜ひたる、茅花を食めどいや瘦せに瘦す。」◎岩なし。灌木で、よく高山の頂などに生える。高さは二三寸許りで、地に這ふやうに近く茂る。實は南天のやうで秋に赤く熟する。◎ぬかご。漢字では零餘子と書く、山の芋の子である。當時はこの零餘子を賞美したらしい。大臣大饗の折の食用にもなつた事が江次第に見えてゐる。◎ぬかごをもち。零餘子を籠などにとり入れる意。◎芹。野菜の名、莖の高さ四五寸ばかりで、葉は末が尖つて、枝毎に三葉づゝ三葉づゝ相對して附く。野菜の中では上品なもの、根の白い所からねじり草とも稱へ、また根を専ら賞美する所から、根芹などともいふ。◎すそわの田居。

ひを知る。或は埋火をかき起して、年寄りが夜中に眼覺めた折の相手とする。恐しい深山ではないが、父母をまで捕り食ふといふ鼻の聲を、身に沁み、と聞くにつけても、山中の景色が、春夏秋冬の折々につけて盡きる事がない。まして自分よりも、物の情趣を深く考へ深く味ひ知つて居らう人にとつては、自分の今感じた之だけに限るまい。無量無限の面白味があるであらう。

山の麓のめぐりにある田。「すそわ」は、山の裾のまはり、山の麓をめぐつてゐるところ。「川居」は、單に田のこと。「居」は添へていふ辭、雲を雲居といふに同じである。續千載集、「足引の山下水を引分し、すそわのたゐの早苗とるなり。」萬葉集、「筑波嶺のすそわの田居に秋田刈る、妹がりやらむのみち手折らな。」◎稻穂。落ち散らばつてゐる稻穂。◎穂ぐみ。稻の穂を組み合せて作つたもの、穂掛ともいふ。もとは神に奉る爲に作つたものであるといふ。新六帖、信實、「秋の田のかりほのほぐみいたづらに、つみあまるまで賑ひにける。」◎日うららか。天氣の晴々としてもしのぶかなこと。◎もし日うららかなれば。此句も前に説明した如く、「もし日うららかならば」とあるべきである。◎よぢのぼり。物にとりついて登る。◎故郷の空。故郷の方向。「故郷」とは、作者の生れた下賀茂をさすのであらう。◎木幡山。山城國に在る、古は宇治郡に屬してゐたが、今は紀伊郡の地籍になつてゐる。伏見山の東面をいふので、木幡の里の西方に傍うてゐるから此名があるのである。◎伏見の里。山城國紀伊郡に在る、伏見山の西方をさすので、日本書紀には、俯見に作り、中古はまた伏見莊と稱へた、船戸村、森村、久米村、法安寺、石井村、北尾村、北内村、山村、即成院等に分れ、隱々たる郊外で、所々に高貴の山莊が散在してゐた。◎鳥羽。紀伊郡鳥

羽。鳥羽郷は鳥羽田と稱へ、其地は郡の中央に在る、然し和名抄に制定した鳥羽郷は、今の上鳥羽村東九條村の中であらう。西行法師、「何となく物悲しくぞ見えわたる、鳥羽田のおもの秋の夕暮。」◎羽束師。和名抄に、「山城國乙訓郡羽束郷、訓波豆賀之。」とある、即ち久我村、羽束師村が此郷に屬するのである、羽束師村は、現今、志水古川菱川等の大字がある、有名な羽束師森は、古川の北、志水の西に在る。◎勝地は主なければ心を慰むるにさはりなし。風景の勝れてゐる土地は、そのよい風景の持主がないから、人が自由にそれを眺めて心を慰め樂しませるに、それを禁じたり故障したりするものがない。白氏文集、「勝地本來無定主、大都山屬愛山人。」◎あゆみ煩なく。歩くのに足の疲れない意。◎志遠く至る時。遊ばうと思ふ心が遠くまで馳せる時といふ意で、遠くまで遊ばうと思ふ時をいふ。◎炭山。山城國宇治郡御室戸山の東北に在る。◎笠取。山城國宇治郡なる醍醐村宇治村の東で、山城と近江との國界に接してゐる。古今集、元方、「雨降れど雨も洩らじを笠取の、山はいかでもかみぢ染めけむ。」後撰集、頼基、「笠取の山を頼みし甲斐もなく、時雨に袖をぬらしでぞ行く。」◎岩間。岩間寺をさす、近江國滋賀郡石山村南郷の西嶺にあつて、其地は西北笠取山に連り、近江山城の國界に當つてゐる。此寺は正法寺と號

し、醍醐院の別院で、西國巡禮第十三番の札所である。◎石山。石山寺のこと。近江國滋賀郡石山村にある。聖武天皇の御代に僧良辨の開基したもの、勅願所であつた、本尊は如意輪觀音。本堂の傍に源氏間といふ一室がある、紫式部の源氏物語を書いた所だといつてゐる。◎粟津の原。近江國滋賀郡に在る。大津から膳所を経て石山に至る湖邊の地。◎蟬丸。百人一首に載つてゐる「これやこの往くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の關。」といふ歌の作者で、晩年に隱遁して、逢坂の關の邊に庵室を結び、琵琶を弾くを樂みとしてゐた、當時有名な琵琶の名手であつた源博雅も、流泉啄木の二曲は、蟬丸から傳授されたといふ。蟬丸の所持してゐた琵琶は無名といふ名器である。さて彼の姓氏は詳かでない、醍醐帝の第四子であるなどいふ説があるが信じられぬ。宇多天皇の皇子敦實親王の雜色であつたと普通に言はれてゐる。蟬丸が琵琶に長じたのも、敦實親王が非常に琵琶の名手であらせられて、流泉啄木の二曲を彈ぜられ、然もその曲をば深く人に秘して傳へられなかつたのを、蟬丸が聞きおぼえたのだといふ。◎田上河。勢多川の支流で、大戸川のこと、また信樂川ともいふ、近江國粟太郡下田上村黒津で勢田川に合する。拾遺集、兼輔、「月かげの田上川に清ければ、綱代の氷魚のよるも見えけり。」◎猿丸大夫。平安朝

時代の歌人で、三十六歌仙の一に加へられてゐるが、その時代も官姓も詳かでない。古今集にその歌が多く載つてゐる所から、元慶の頃の人であらうなどいふ。また攝津國菟原郡深草郷の人で、後近江の曾東山中に隱遁したのであるともいひ、或は稱徳天皇の朝の弓削の道鏡だとも、聖徳太子の孫なる弓削王の別名であるともいうてゐる。猿丸大夫の墓は近江國栗太郡大石村なる曾東にある。◎歸るさ。歸る時の意。「さ」は時の意、時といふを、古言で之太とも、左太とも云うた、そのシダ、サダ共に約めると「さ」となる。「往くさ來さ」あふさきさなどあるは皆時の意である。萬葉集などに、「此時過ぎて」といふを「このさだ過ぎて」「率宿てむ時哉」といふを、「ゐねてむしだや」など讀んでゐる。◎折につけつゝ。季節に應じて。◎櫻を狩り。櫻をあさつて見る。「狩り」は、元は狩獵の意で、鳥獸などを探し捕ることに云うたが、後には魚など漁ることにも、又は野山に入つて、花など探し見ることにいふやうになつた。思ふに、昔は「櫻狩り」「紅葉狩り」などいふは、實際に櫻や紅葉の枝を手折つて持ち歸つたもので、隨つてその事をば「何々狩り」というたのであつたらうが、後には、枝を手折らなくとも、此處彼處の花や紅葉を尋ね見ることを「狩る」といふやうになり、「狩る」といふ語義も、それにつれて單

に探し見るといふ意に轉じたものであらう。◎紅葉をもとめ。紅葉をば探して見る意。櫻は春、紅葉は秋で、對照したのだ。◎蕨を折り木の實を拾ひ。これも春のものと秋のものとを對照して文飾したのである。「木の實」とは、木の實の食へるもの、椎の實や栗などの類をいふ。◎家づと。土産物。家へ持ち歸る菴の意。「菴」は裏物といふ語の約つたもの。昔は物を持ち歩くには、それを藁や草などに包んだもので、そのつゝみをつとというた。轉じて、その土地の産物を携へ行きて、人にも贈り、家へも持ち歸る所から、贈り物、みやげものなどいふ意に用ゐるやうになつた。◎もし夜靜かなれば。前に説けるが如く矢張「もし夜靜かならば」とあるがよい。◎窓の月に。窓に照る月に向つて。◎古人をしのび。古人を追想してなつかしく思ふこと。「古人」は、今は世に亡き人をさすのだ、それが故舊であらうと、見ぬ世の人であらうと差鬮はない、別に深い詮議立てに及ぶ必要はなからう。「しのぶ」とは、その人を心に思ひ出してなつかしく思ふ意。◎猿の聲に。猿の啼き聲を聞くにつけて。古樂府に、「巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚沾衣。」とあり、陸游の詩に、「三聲最怕聽猿鳴。」などある。昔から猿の鳴聲は悲哀の情を起させるものやうに歌うてある。◎袖をうるほす。涙を流す意。◎槇の鳥。山城國久世郡に在る、宇治川と亘棕池と

れぬらん恨しき思ひ思ふさても、待つべきにあらす問はんさもいはじ』さいふ歌あり。これも卅六字あるを、よからぬ體の中に書きつられ給へる云々」

○えあらで。黙つては居られないで。

○歌ぬし。字餘りの歌の作者。

○けしきあしく。機嫌がわるく。

○まれべども云々。その卅七文字の歌を、そのまゝ眞似て言うても、眞似ることが出来ない。「まれぶ」は、そつくりそのまゝ、寫し出して言ふこと。

○えよみあへがたかるべし。讀まうさしても、讀み果すことが出来難からう。「あへ」は、敢^{あへ}で、さう爲^しようとして、未だ爲^し果てない意の詞、古今集「心ざし深くそめてし折りければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ」は、消えやうとして、未だ消えて終はない意。

○けふだにいひ難し云々。その歌を聞いた今日すら、眞似び言ふ事が出来ない。まして後には、その歌の意味を知る事は、どうあらうか甚だ覺束ない事ださいふので、こゝに記しとめぬない理由を斷つたもの。

十九日 日あしければ、舟出さず。

薩の、山鳥の鳴くを聞いて讀んだ、「山鳥のほろく」と鳴く聲聞けば、父かと思ふ母かと思ふ。」といふ歌がある、是から思付いて書いたのであらう。◎かせぎ。鹿のこと。是は玉葉集、西行、「山深みなるゝかせぎのけ近きに、世に遠ざかる程ぞ知らるゝ。」とあるに依つて、書いたものであらう。◎埋火。爐などの灰に埋めてある炭火。埋火を獨り居る折の友とするなどいふ思想は歌にも多く見えてゐる。堀川院百首、國信、「言ふこともなき埋火をおこすかな、冬の寢覺の友しなけれ。ば」◎老の寢ざめの友。年寄りが夜中に眼の覺めた折の慰み相手。◎おそろしき山。恐しい獸の出る深い山。こゝは西行の「山深み云々」の歌を、裏からして、恐しい深山ではないが、父母をまで捕へ食ふといふ梟の聲が聞えるといふやうに述べたのである。◎ふくろふの聲をあはれむ。梟の鳴き聲を身に沁々と聞く。是は西行法師の、「山深みけぢかき鳥の音はせで、ものおそろしき梟の聲。」といふ歌に基いて書いたのであらう。「ふくろふ」は、木兔ミ、ジツに似てゐる、晝は隠れてゐて夜に出て鳴く、和名抄、「梟、和名、布久呂不、辨色立成云、佐介、食父母不孝鳥也。」◎いはんやふかく思ひ深く知れらん人のためには云々。自分のやうな考の淺く識見の狭い者でさへ、山の中の四季折々の景物に對しては、無限の感慨無量の興味がある、まして物の情趣を深く考へ深く味

【通釋】

大體、自分がこの土地に住みはじめた時は、ほんの暫時の間だけと思つたけれど、今日までに五年の月日を経てゐる。だから、假りに作つた庵も、幾分か古い家となつて、軒には朽葉が深く積り、土臺には苔が生えた。自然、事のついでに都の様子を聞くと、自分がこの

ひ知つて居らう人にとつては、自分の今感じた興味だけでも限るまい、一層多くの面白味を感じ得る事であらうといふ意。是は作者自身が謙遜して言うたのである。「知れらん」は「知る」といふ語の已然形「知れ」に、現在完了の「り」の加はつた「知れり」の將然形「知れらん」に、未來の助動詞「む」の添うたもの、知つてをらうといふ意。「是にしも」の「し」は強める助詞、是、だけでもといふ程の意。

おほかたこの所に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今既に五とせを経たり。かりの庵もやゝふる屋となりて、軒にはくち葉深く、土居に苔むせり。おのづから事のたよりに都を聞けば、この山に籠りゐてのち、やむごとなき人のかくれ給へるも、あまた聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ、つくしてこれを知るべからず。たび／＼の炎上にほろびたる家、またいくそばくぞ。たゞかりの庵のみ、のどけくしておそれなし。ほど狭

山に籠つて居てから後に、高貴の人の死なれた者も數多く聞える。ましてや人數にも入らぬ卑しい身分の者どもの死んだ數は、悉く之を知る事は出來ない。たび／＼の火災の爲に、焼け亡びた家は、また、何程あるか、随分澤山あるであらう。

たゞ假の庵だけが、心靜かにのんびりとして心配がない。家の中は狭いといつても、夜分臥す寢床があり、晝間すわる座席がある。

かくてこの一つの身を宿すには、何の不足がない。寄生蟲は小さい貝を好んでその中に生活する、之

しといへども、夜ふす床あり、晝ゐる座あり。一身をやどすに不足なし。がうなは小さき貝を好む。これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯にゐる。即ち人を恐るゝがゆゑなり。われまたかくの如し。身を知り世を知らば、願はず、まじらはず、たゞ靜なる望とし、愁なきをたのしびとす。

◎あからさま。かりそめ、「あ」は「いや」からさまは「かりそめ」である。「いやかりそめ」の意で、普通にいふ「かりそめ」よりも意味が重い。明々白々の意のあからさまは明様の義で、これとは語源が異なる。◎今までに。本書の文を書いた時まで。◎やま。少しばかり。◎くち葉。朽ちた木の葉。「くち葉深く」は、朽葉が澤山に積る意。◎苔むせり。苔が生えた。◎おのづから。巖々するのでなく自然にといふ意。ひとりで。◎事のたよりに。何かのついでにつけて「事」とは、それと確に言はずに朦朧とさすので、俗にいふ「何か」といふ程の意。◎やむごとなき人。高貴な人。「やむごとなき」は、無三止事といふ意、等閑にしがたい、捨て置かれぬなどいふ意、轉じて、高貴な人の世の常

はよく身の分際を知るからである。鴟鳩は人の足跡も達しない巖濱に居る。とりもなほさず之人に捕へられるのを心配するからである。自分も亦その通りである。わが身の分際を知り、この世の無常を知つてゐるから、榮耀榮華を願はない、俗世間とも交際しない。たい俗縁を離れて身の静かであるのを望とし、氣苦勞のないのを樂とする。

ならず貴いものにもいふ。即ち、捨て置かれぬ格別な事柄、又は非常に貴い人の上に用ゐる詞である。◎その數ならぬたぐひ。その人數にも入らぬ卑しい身分の者ども。「たぐひ」は、ともがら、者どもなどいふ意。◎つくして。悉く。◎たび／＼の炎上に。度々ある火災の爲に。◎いくそばくぞ。どれ程あるか、随分深山ある。「いくそばく」は、「いくそ」といふに同じで、限りもなく多い意。六帖、「夕かげに來鳴くひぐらしいくそばく、日毎に聞けど飽かぬ聲かな」◎のどけくしておそれなし。心閑かにゆるやかで、心配がない。◎ほど狭し。庵の内の廣さが狭い。◎床。寢床のこと。◎がうな。寄生蟲ヤドカリともいふ、蟹の種類。海岸に住み、大きさは寸に足らぬ程で、空の貝殻を見付けてその中に生活する。◎身を知るによりてなり。身の分限を知るからである。◎みさご。鴟鳩、魚鷹、又は、鶡字を書く、形は鴟に似て大きく、高く翔り、鳴聲も亦鴟に似てゐる。水邊の山中に棲んで、魚を捕へて食とする。萬葉集にも、「鴟鳩ゐる荒磯に生ふるなのりその、名は告らしてよ親は知るとも。」「鴟鳩居る渚スエにをる舟の棹き出なば、うら懸しけむ後は會ひぬとも。」など、多く見えてゐる。◎荒磯。あらいそ、又はライを約めてありそともいふ。「あら」は、荒野・荒山などいふ「あら」と同じく、人の足跡の達しない意、「いそ」は、海濱の石巖をいふ、即

ち、人の影も見えぬ岩濱のこと。または、浪の荒々しい磯邊をもいふ。◎身を知り世を知らば「知れらば」は「知れ、ば」の誤寫であらう。自分の身の程を知り、無常といふものゝ襲ひ来る果敢ない此世の状態を知つてゐるから。「身を知り」は、寄生蟲の身を知るに應じ、「世を知らば」は、鴟鳩の人を怒るゝといふに應じて、共に文飾したもの。◎願はず。身の程を知るといふに應じたので、榮耀榮華を願はないといふ意。◎まじらはず。世の果敢ない状態を知るといふに應じたので、俗社會と交際しない意。◎静かなるを望とし。俗縁を斷ち、煩惱苦患を離れて、心の亂れずに静かなのを、自分の望とする。◎愁なきをたのしびとす。氣苦勞のないのを樂みとする。

【通釋】
すべて、世間の人の住家を作る習慣は、必ずしも自身の爲にはしない。或は妻子や身内のものゝ爲に建て、或は親しいものや朋友のために造る。又は主君や師匠を迎へた

すべて世の人の住家を造るならひ、必ずしも身のためにはせず。あるは妻子眷族のためにつくり、あるは親昵朋友のためにつくる。あるは主君師匠、及び財寶馬牛のためにさへこれを造る。われ今、身のためにむすべり。人のために造らず。故いかんとなれば、今の世のならひ、この身のありさま、伴ふべき人もな

リ、財寶や馬牛を置いたりする爲にまでも作る。然るに、今自分は自身の爲に作つた。人の爲に作らない。その理由は何であるかと云へば、現今の世態人情や、わが身の上の事情も、伴ふべき妻子もなく、頼みとすることの出来る召使ひもない。だから、假令廣々と家を作つてあつても、誰を宿らせ誰を据ゑようぞ、宿める者も据ゑおく人もない。一體、人の友達なる者は、之を觀察するに、金満家を貴んでそれを友とし、親切な者を喜んでそれと第一に交る。必ずしも、眞に情愛のある正

く、頼むべきやつともなし。たとひ廣く造れりとも、誰をか宿し、誰をか据ゑむ。それ人の友たるものは、富めるをたふとみねんごろなるをさきとす。必ずしも情あると、すなほなるとをば愛せず。たとひ絲竹花月を友とせむにはしかじ。人の奴たるものは、賞罰のはなはだしきを顧み、恩のあつきを重くす。更にはごくみあはれぶといへども、やすく靜なるをば願はず。唯吾が身を奴とするにはしかず。もしすべき事あれば、すなはちみづから身を使ふ。たゆからずしもあらねど、人を従へ、人を顧みるよりはやすし。もしありくべき事あれば、みづから歩む。苦しといへども、馬鞍牛車と心をなやますには似ず。いま一身を分ちて、二つの用をなす。手のやつこ・足の乗物、よくわが心にかなへり。心また身のくるしみを知れれば、くるしむ時は休

直な者をば、大切にしない。このやうな状態であるから、下らぬ友達を持つよりも、音楽や自然を相手としよう事に、越したものはあるまい。人の奴僕である者は、褒美の甚しい事を念頭に持ち、恩惠の厚いのを大切に思ひ、さういふ家に仕へ度いと望み、たとひ心からその者の爲を思うて、大切に養育し、可愛がるといふても、それが爲に身の安全で、事の少ない家には、一向仕へようと願はない。だから他人を使役するよりは、たゞ自分の身體を使ふに越した事はない。もしも爲さねばな

めつ、まめなる時は使ふ。使ふとても、たび／＼過ぎず、ものうしとても、心をうごかすことなし。いかにいはんや、常にありき常にはたらくは、これ養生なるべし。何ぞいたづらに休みをらむ。人をくるしめ人をなやますは、また罪業なり。いかゞ他の力をかるべき。

◎ならひ。風習、ならはし。◎眷族。一家親族をいふ。◎親昵。親しく睦み合ふ間柄。◎師匠。技術を教へる人。◎故いかんとなれば、その理由は何かといふと。漢文から來た調子である。◎今の世のならひ。現今の世態人情といふ程の意。當時の世人の輕薄な人情や、名聞利欲に走るあさましい状態をいうたのである。◎この身のありさま。世俗を脱離して隱者の生活をしてゐる作者の無援孤獨の生活をさしていふのである。◎伴ふべき人。妻子眷族をさす。◎頼むべきやつこ。頼みとするべき召使人。◎廣く造れりとも。廣く家を造つてあつても。◎誰をか宿し誰をか据ゑむ。「か」は二字とも反語。◎それ。前を受けて下の句を起すに用ゐる語。一體。◎人の友たるものは。人の友達である者は

らぬ用事のある時は、自分の身を働かせる、それはこの身が懈ズルくないでもないが、他人を従へ他人の氣兼ねをするよりは、氣樂である。若しも歩かねばならぬ用事のある時は、自身が歩く、それは若しいというても、やれ馬鞍だ、やれ牛馬だと、様々に心配するやうに甚しくはない。

今一つの身をわけて、二つの働きをする。即ち一つは手といふ奴僕、一つは足といふ乗物で、此二者はよく自分の心の思ひ通りになつてゐる。心はまたわが身の苦痛を知つてゐるから、苦痛を感じ

「たる」は「とある」の約つたもの、指定の助動詞。「人の」は軽く添へたまでのもの、單に、友達なる者はといふ程の意。◎富めるをたふとみねんごろなるをさきとす。金満家を貴んで友とし、自分に手厚く親切である者を喜んで第一に交る。「さきとす」とは、他の者よりも一番先にする意。「ねんごろ」とは、愛では只表面上親切らしくして呉れる意。◎情あるとすなほなるとをば愛せず。情愛のある者と正直である者とをば大切にしない。「情ある」は「富める」に對し、「すなほなる」は「ねんごろなる」にむかへて云うたのだ。前に「ねんごろなるをさきとす」というて、今「情あるとすなほなるとをば愛せず」と云ふのは、一寸論旨が撞着するやうに聞えるがさうでない。「ねんごろなる」というたのは、たとひ心の底はどうあらうとも、表面だけ自分に體裁よく親切にして呉れるのをさしたので、「情あるとすなほなる」というたのは、眞の愛情と、飾り氣のない眞率な眞心とをさしたのである。◎絲竹。琴と笛。音樂のこと、詳しくは、絲とは三絃、即ち箏の琴、和琴・琵琶、竹とは三管、即ち笛・笙・篳篥をいふ。◎花月。花と月。併し爰に花月というたのは、單に花と月とだけの意でなく、花と月といふ特稱を以て、自然といふ總稱に用ゐたのである。◎たゞ絲竹花月を……しかじ。此句の上に「されば」といふ意の語を置いて解く。◎賞罰のは

る時は休息させたり、遠者な時には使ふ。使ふといふても度を過ぎない。仕事に気が進まぬというても、爲に心を苛々イライラさせる事がない。まして常に歩いたり常に働いたりするのは、身體の爲になることであらう。然るに、どうしてむだに休んで居らうぞ、休んでゐない。人に苦痛を與へ心配をかけるは、また未來生に苦果を受くべき罪惡である。さうだから、どうして他人の力を借りようぞ借りはしない。

なはだしきを顧み。賞の甚だしいのを念頭に持つ。「賞罰」は、「緩急」「多少」などの語と同じく、「賞」と「罰」といふ反對の意の二語を連ねて賞の一方にだけ意味を有たせたもの。「罰」は軽く添へたまでである。◎恩のあつきを重くす。恩惠の厚いのを心に大切に思ふ。爰に「恩」というたのは、努力に對する報酬の意で、前に「賞罰のはなはだしきを云々」とある句と同じ意味を對句に述べたまでである。◎更に。一向に。少しも。「願はず」にかゝる副詞。◎はごくみあはれぶ云々。この句は前の「賞罰」「恩」というたに對して、眞實に心から其者の爲を思うて、身の危険な仕事もさせずに愛してやるをいうたもの。◎あはれぶ。かはいがる意。◎やすく靜なるをば願はず。身の安全に靜かである事を欲しないで、假令危険な事をしても功名を得ようと願ふといふ意。◎たゞわが身を云々。此句の上にも、「されば」といふ意の語を置いて解く。◎すべき事。爲さねばならぬ用事。◎たゆみならず。たゆまない。懈ユルくない。疲れない。◎人を顧みる。人の氣兼ねをする意。◎馬鞍牛車と心をなやますには似ず。馬鞍だとか牛車だとかいうて、心配する程ではない、それよりも氣樂であるとの意。◎手のやつこ。手といふ奴僕。手は用事を辨ずるものであるから、之を奴僕にたとへたのだ。◎足の乗物。足といふ乗物。足は身體を載せて歩くのだから

【通釋】
衣食の類も亦住居と同じ

ら、是を乗物にたとへたのだ。◎手のやつこ足の乗物よくわが心にかなへり。一つは手といふ奴、一つは足といふ乗物で、此二者はよく自分の思ひ通りになつてゐる。◎知れ、ば。知つてゐるから。◎まめ。眞實の意、日本紀には「忠」「忠誠」を「マメ」と讀んでゐる、心に誠のあるをいふ、轉じて、壯健・丈夫などいふ意にも用ゐる。たび、過さず。度々使つて度を過ぎない。◎ものうし。氣の進まない「いやきな」などいふ意。◎心をうごかすことなし。心をはら、させることがない。心を使はずに平氣で居ること「◎養生。莊子、養生篇に、「文惠君曰、善哉、吾聞庖丁之言、得養生焉。」とある句から出た語で、人智を以て自然の理法に逆ふやうな事をせずに、自然の理法に順うて無理をしなければ、それで生を全うし身體を保つ事が出来るのをいふ。適度に歩き適度に働いて、自然の理法に適うた生活をするのは、養生の道である。◎いたづらに。空しく。甲斐がなく。何もせずになどいふ意で、益のない事にいふ。◎罪業。罪惡の所作。即ち罪惡の所作の未來の苦果を感じる因となるものをいふ。業は、身口意の三業をさす、故に身口意の三業に涉つて總て理に背くものをいふのである。◎いかど。どうしてか。

衣食のたぐひまた同じ。藤の衣、麻のふすま、得るに従ひて飢

く質素である。即ち藤の衣、麻の衾など、自然と手に入るにまかせて、それで肌を隠し、野邊に生えてる茅花、峰にある木の實などいふ類を得て、それで命をつないでゆくだけである。世人と交際しないから、みすばらしいわが姿を恥しく思ふなげきもない。食料が缺乏してゐるので、粗末なものではあるが、舌鼓打つておいしく食べる。すべてこのやうな事柄は、樂しく富んでゐる人に向つて言ふべき事でない。たと自分の一身の上に考へて、在俗の昔と脱俗の今日とを、比較するだけで

をかくし、野邊のつばな、峯の木の實、命をつなぐばかりなり。人にまじはらざれば、姿を恥づる悔もなし。かてともしければ、おろそかなれども、なほ味を甘くす。すべてかやうのこと、たのしく富める人に對していふにはあらず。たゞわが身一つに取りて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。大方世を遁れ身を揃てしより、うらみもなく、おそれもなし。命は天運にまかせて、惜まず、厭はず、身をば浮雲になすらへて、頼まず、まだしとせず。一期のたのしびは、うたゝねの枕の上にきはまり、生涯の望は、をりゝの美景に残れり。

それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば、牛馬七珍もよしくなく、宮殿樓閣ものぞみなし。今、さびしきすまひ、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出でては、乞食とな

ある。

大體、俗縁を脱離し、浮世の希望を捨て、からは、世に對する怨恨もなく、わが心の上の心配もない。壽命は天運にまかせて、長命をも欲しない、さればとて、死に度いとも思はない。此身をば空に浮ぶ雲に比して、頼みにもしない、然しながら、不足だとも考へない。一生での最上の樂みは、假寢の枕邊のよい心持に盡きる。生涯での第一の希望は、四季折々の美しい景色を眺めることに残つてゐる。

一體宇宙間のものは、全く心の状態一つである。

れることを恥づといへども、歸りてこゝにをるときは、他の俗塵に著することをあはれぶ。もし、人このいへることを疑はゞ魚鳥の分野を見よ。魚は水に厭かず。魚にあらざれば、その心を知らず。鳥は林をねがふ。鳥にあらざれば、その心を知らず。閑居の氣味も亦かくの如し。住まずして誰かさとりむ。

◎衣食のたぐひまた同じ。衣食の類もまた住居と同じく甚だ質素で、單に身を蔽ひ命をつなぐだけのものである。◎藤の衣。藤の皮の纖維で織つた布で作つた衣。是は甚だ粗末な衣で、濱邊の海人や田夫野人の著たものである。また喪服を作るにはこのやうな粗末な布を用ゐた所から、轉じて藤衣を喪服の意にも用ゐる。◎麻のふすま。麻市で作つた衾フヘ衾フヘは、臥す裳モから轉じて來た語、寢る時、上から被ぶるやうにして着るもの。他に襖障子のことを、「ふすま」ともいふ。◎得るに従ひて。手に入るにまかせて。故意に求めないで自然と手に入るにまかせてといふ意。◎姿を恥づる悔。自分の見すばらしい姿を恥づかしと思ふなげき。往生要集に「龜服なりといへども、肌をかくし、寒をふせぐに

心がもし不安の状態にある時には、牛馬七珍のやうな財寶も、何のとりへもなく、宮殿樓閣の美しい住居も、何の甲斐もない。自分は今、寂しい住居即ち方丈の庵を、自ら愛する。都へ出ては、自然乞食となつてゐることを、心に恥しく感じるけれど、然し、歸り來てこの閑かな家に居るときは、他の俗界の人々が世間の俗事に執着してゐるのを、可哀相に思ふ。もしも人が自分の言うてゐる事を不審がるならば、魚や鳥の有様を見なさい。魚は水に棲みつつ、水中の生活に飽かない。

足れり、惣じて内心の徳をたふとぶ時は、外動おのづから軽くして、人の錦繡をもうらやまず、おのれが蔽衣をも恥づることなし」とある。◎かてともしければ。食物が不足してゐるから。◎おろそかなれども云々。粗末であるけれど、矢張舌鼓を打つておいしく食べる。史記秦本記に「寒者利短褐、飢者甘糟粕」などある。◎たのしく富ある人に對していふにはあらず。富貴で楽しい生活をしてゐる人に向つて言ふのではない。即ち富貴な楽しい生活に在る人には、この超俗の簡易素朴な生活の眞味は解し得られるものでないとの意。◎わが身一つにとりて。自分一身の上について。榮華な生活と素朴な生活との兩者を経験して來た作者自身の身の上について。◎昔と今とを。榮華な生活を送つた在俗の昔と、脱俗の簡易生活を營んでゐる現在とを。◎たくらぶるばかりなり。比較するだけである。比較して言ふだけのものである。「たくらぶる」の「た」は接頭語。◎世を遁れ身を捨てしより。俗世を脱離して妻子眷族との俗縁を斷ち浮世の希望を棄て、から「身を捨つ」は、人を救ふ爲に命を捨てる意であるが、爰は身の希望をすてる意である。◎うらみもなくおそれもなし。此世に對して怨恨もなく、わが心の不安もない。虚心坦懷で不平も心配もない意。◎天命は天運にまかせて。壽命は天運にまかせて心にかれこれと思はない意。◎天

魚でなければその心持が
わからない。鳥は林の中
を願うて、其處に巢を作
つてゐる。鳥でなければ、
その心持がわからない。
わが閑居の味ひも亦この
通りである。實際その境
遇の中に暮して見ない
で、誰かその眞の心持を
知らうぞ、知りはしない。

運は、めぐり、合せ。。「命」は、いのち、壽命。即ち爰は、史記高祖本紀に「命乃、
在天、雖三扁鵲何益」とあると同じ意であらう。「命」を「天命」の意に解く説も
あるが、それは誤だと思ふ、何となれば、「天命を天運にまかせる」といふ事が既
に變である、それに、「天命」では、次にある「惜まず厭はず」といふ句が生きて
來ない。◎惜まず、命を惜まない。なが生きを欲しないこと。◎厭はず、長命を
厭はない。死にたいと思はないこと。◎身をば浮雲になずらへて。此身をば空に
浮ぶ雲に比して。即ち人の肉身の變滅測り難い果敢なきをば、空に浮ぶ雲の定
めないのに考へ比べたのである。維摩經、是身如浮雲、須臾變滅。◎まだし。
「いまだし」の意、時のまだ早い意、「まだしとせず」は、未熟なものだと不足
に思はない意。◎一期。人の一生をいふ。◎一期のたのしび。一生涯中の最上
の樂。◎うたゝねの枕の上にはまり。假寢をする時の枕邊のよい心持に盡き
てゐる。即ち假寢をしてゐる時のウツラ／＼したよい心持以上に楽しいものは
ない、それが最上の樂であるといふ意。一説に、人間社會の樂みは假寢の夢の
如く儂いものだと解する註もあるが、それは謬見のやうに思はれる、一體この
「一期のたのしびは云々」の句と、「生涯の望は云々」の句とは、共に對句になつ
てゐるので、その思想も相對偶してゐるのだ。然るに、もし此句を夢の如くは

か、い、意に解するならば、「をりく」の美景に残れり」の句と、相對立しないこととなる、矢張此句は假寐のよい心持でつきてゐるといふだけの意に見るが穩當であらう。「枕の上」は、枕のほとり。◎生涯。人の一生の間。◎生涯の望。一生の間に於ける最上の望。◎をりをりの美景に残れり。春夏秋冬の美しい景色の上に残つてゐる。即ち、それらの美景以上によいものを求めようとは望まないといふ意。徒然草第二十段に、「某とかや言ひし世すて人の、「此世のほだしもたらぬ身に、たゞ、空の名残のみぞ惜しき。」といひしこそ、まことにさも覺えぬべけれ。」とあるは、此句をさしたのであると言はれてゐる。◎三界はたゞ心一つなり。「三界唯一心、心外無別法、心佛及衆生、是三無差別。」といふを、古來華嚴經の偈として言ひ習はしてゐる、此句も右の偈によつて書いたものであらう。此句の意味は、唯心論の見地から、三界の事物は盡く一心から起つてゐるので、この心以外には別の事物がない、譬へば、悟りの佛も迷妄無智の衆生も、悉く源を一心に歸してゐるので、心、佛、衆生の三は無差別であるといふのである。「一心」は萬有の實體即ち眞如をいふ。「三界」とは、凡夫の生死往來する世界を、欲界・色界・無色界の三に別け、之を三界といふ。欲界は、淫欲食欲の二欲を有する有情の住所。色界とは、欲界の上に在つて淫食を離れ

た有情の住所で、物質的のものは凡て殊妙精好であるから色界といふ。無色界とは、物質的のものは一つもなく、唯心識を以て深妙な禪定に住するものである。即ち、「三界」とは、全世界といふ程の意。本書にいふ「三界は唯心一つなり」といふ意は、主觀の見地から、此全世界に於ける凡ての事物は、自分の心に依つて始めて存在するので、心がその土臺になつてゐる、故に心がもし不安の状態にある時は、宮殿樓閣も何の樂がなく、心が楽しい状態にある時は、あらゆる養羅萬象が楽しく思はれるとの意。◎よしなく。とりどころのない意。やくに立たない、しかたがない、つまらぬなどの意。◎宮殿樓閣。高莊華麗な建物。◎望なし。甲斐がない、つまらないなどいふ意。◎一間の庵。方丈の庵をさしていふ。「一間」は、柱と柱との間をいうた名で、その間は一丈乃至六尺である。「さびしきすまひ」と抽象的に云うたのを、再び、「一間の庵」と具體的に言ひ換へたのである。◎おのづから。「乞食となれる」といふに連る詠詞。◎乞食。乞食坊主の意。◎こゝに。一間の庵に。◎俗塵。凡俗の塵垢で、一切世間の人事を斥けて言ふ語。◎著す。執着する意。俗塵に固着して離れないのをいふ。◎このいへること。方丈の庵に世を遁れて暮してゐる簡易素朴な生活について述べ來つた感想。◎分野。アリサマと訓む。やうす。下學集

【通釋】

一體、一生涯といふ月影が、晩年―西の空に傾いて、餘命が死に際に近い。忽ちに冥土へ旅立たうとする今になつて、何事を嘆かうとするのか、何事も不平を言ふべきでない。釋迦牟尼佛の人をお諭しになる趣旨は「物事について執心するな。」と言ふのである。だから今自分がこの草の庵を愛するのも、罪科とするのである。閑寂の境に執着するのも、佛果を得る故障となるであらう。然るに

に「分野は有様之義也。」とある。◎その心。その眞の味ひ。莊子秋水篇、子非魚安知魚之樂。◎氣味。香と味との意、轉じて、趣、心持、氣持などの意。

そもく、一期の月影かたぶきて、餘算山の端に近し。忽ちに三途の闇にむかはむ時、何のわざをかかたむとする。佛の人を教へ給ふおもむきは。「事にふれて執心なかれ。」となり。いま草の庵を愛するもとがとす。閑寂に著するも障なるべし。いかゞ用なき樂をのべて、空しくあたら時を過ぎむ。しづかなる曉、このことわりを思ひつゞけて、みづから心に問ひていはく、世を遁れて、山林にまじはるは、心を修めて道を行はむがためなり。しかるを、汝が姿はひじりに似て、心はにごりにしめり。すみかはすなはち淨名居士の跡を汚せりといへども、たもつところは、わづかに周利槃特が行にだにも及ばず。もしこれ貧賤

どうしてか、この草庵や閑寂の生活に關する無用の樂みを逃べて、惜しむべき貴い時間を、むだに過ぎさうぞ。

靜かな曉に、上述の道理を考へつゞけて、さて自分からわが心に尋ねて言ふことに、俗縁を離れて山林寂寞の境に入るは、心を修養して佛道を行はん爲である。然るに、汝の外形は高德の僧に似て、その心は煩惱に染まつてゐる。その住家は維摩居士の居室の跡を眞似てゐるとはいへ、禁戒を保ち守つてゐる點は、佛弟子中での愚人である。周利業特の實行にすらも及

の報のみづから惱すか。はたまた、妄心のいたりて狂はせるか。その時、心更に答ふることなし。たゞかたはらに舌根をやとひて、不請の念佛、兩三遍を申してやみぬ。時に建曆の二とせ、やよひのつごもりごろ、桑門蓮胤、外山の庵にしてこれをしるす。

月かげは入る山の端もつらかりき、

たえぬ光を見るよしもがな。

◎一期の月影かたぶきて。人の一生を、大空を渡る月影に譬へ、晩年になつた事を、月の中天よりも西方にかたよつた事に言ひなしたのである。晩年になつてなどいふ意。晩年を、夕日や傾いた月影に譬へた例は、古文や古歌にいくらかもある。後拾遺、「眺むれば月傾きぬあはれわが、この世の程もかばかりぞかし。」◎餘算山の端に近し。残りの命が死際に近い。餘算は、餘命、餘齡、餘生などいふ意。「山の端に近し」とは、一生を月に譬へた所から、死際に近づいてゐる意に言うたのだ、即ち、人の死ぬのを、月の山に入るに譬へたのである。

ばない。或は是は、汝は今前世の應報で貧しい生活に居るのであるが、その前世の應報そのものが汝を惱まして、尊い行をさせないのか、或はまた、妄心が湧き出て、本心を亂し狂はせたのか。」と。その時、心は一向問に答へる事が無い。たゞ一方に舌をやとつて、口ずさみの念佛を二三遍申しして止んだ。この時丁度建暦二年三月の末頃である。桑門蓮胤が外山の庵で、この文を書き記す。

月かげは入る山のはもつらかりき、たえぬ光を見るよしもがな。

◎三途の闇にむかはむ時。冥土へ旅立たう時。「三途」とは、火途（地獄趣の猛火に焼かれる處）、血途（畜生趣の互に相食む處）、刀途（餓鬼趣の刀劍杖を以て逼せられる處）の三惡道をいふ。三途は惡道である所から闇と言うたのである。

◎何のわざをかかこたむとする。何事を不平を言はうとするのか、不平など言ふべきでないとの意。即ち、作者が此處迄書いて來た筆を轉じ、さて今まで述べて來た事は畢竟はかない愚痴に過ぎない、今はさ様な事を言うてゐる折ではないのであると、論旨を轉じて、本文の結尾をつける趣である。「かこつ」は、カコツケル、嘆きを言ふ、言ひ譯けするなどの意。◎事にふれて。物事につけて。◎執心。事物に固著して離れない心。◎とが。罪科。◎閑寂に著するも。俗界を離れ煩惱苦患を絶つた靜かな生活を、深く愛して、それから離れないのも。「著す」は執着する意。◎障。佛果を得る故障。妙法を聞く妨げとなるもの。◎あたらし。「あたらし」といふ形容詞の語幹で、惜しむべきといふ意。人は一刻でも佛の道を心に忘れずに、惡を斷ち善を修めて、後世の冥福を願はねばならぬ、この意味から、佛の理に背いた行をして時を過すのは、貴重な時を空費するのである、故に爰に「あたらし」というたのは、佛道を修むべき貴重な時をさしてゐるのである。◎このことわり。この道理。出家の人は、俗世に對

する一切の執著を拭ひ去つて、ひたすら後世の冥福を願はねばならぬ、執著は佛果を得る障となるものであるといふ道理。◎山林にまじはる。山林寂寞の境涯に入ること。◎心を修めて。心を修養して。◎道を行はむがため。佛道を行うて悟を得ようが爲。◎濁。五濁の中で特に煩惱濁をいふ。これは煩惱濁は五濁の中でも最も甚しいものだからである。即ち、貪瞋痴等の一切修惑の煩惱をさす。◎淨名居士の跡。維摩居士の居られた室の跡。維摩居士の居室は其廣さが一丈四方であつた、いま長明の方丈の庵は、維摩居士の居室を眞似たのである。淨名居士は維摩居士のこと。「けがせり」は、眞似てゐる意、謙遜してさういふたのだ。◎たもつところは。佛の禁戒を破らずに守つてゐる點は。◎周利槃特が行。周利槃特といふ佛弟子中での愚人の行。周利槃特は槃特の弟で。佛弟子中の極めて愚かな人、この母はもと大福長者の女で、その家奴と通じて他國に逃れ、歸國の途中で長子の槃特を生み、また路上で弟の周利槃特を生んだ、槃特は路、周利槃特は小路の意である。兄は聰明であつたが弟は極めて愚鈍で、佛の法を聞いても少しも覺える事が出来なかつた、然し釋迦がその愚を憐んで、種々の方法を用ゐて、遂に彼を悟道に導いたといふ事である。◎行。身口意の所作をいふ。實行の意。◎貧賤の報。佛教では、現世に於て貧賤である

のは、前世に於ける惡業の應報であるといふ考から、特に「貧賤の報」というたのだ。貧賤といふ報。◎はたまた。或はまた、たゞしは、もしくはなどの意、漢文の訓讀から轉つた語である。◎妄心。みだりな心。妄に分別する心。實に當らないのを妄といふのである。◎至りて。起つて來て。◎狂はせるか。心を亂して正しい考を失はせるのか。◎舌根。舌のこと。六根の一である、舌は味を知り言を發す根本であるから舌根といふ。◎不請の念佛。「不請」は「不請の友」「不請法」など用ゐる「請求しない」意である、然し「不請の念佛」といふは、俗語で、その「不請」の意も本義と多少異なつてゐる。「不請の念佛」の不請は不請不請などいふと同じで、厭々イヤイヤ何か仕事をする時にいふ。「不請の念佛」は、自分の心に左程請ひ望まないで、たゞ口ずさみに念佛するをいふ。是は作者が自身の道心の深くないのを卑下して言うたのである。◎建曆の二とせ。第八十四代順徳天皇の御代の年號。◎やよひ。三月の異名。此月は草木がいよ／＼生ひ茂るので、いやおひ月といふ義である。◎つごもり。月籠りの意で、月の末頃をいふ。◎桑門。沙門といふに同じ。意味は、勞働して佛道を修する義、勤修して煩惱を息める義である。出家者の惣名に用ゐる。◎蓮胤。長明の法名である。◎外山の庵にして。外山の庵に於て。◎月かけは。歌意は、「照り輝いてゐる月の光は、

涅槃の境を想ひ浮べさせる程に有難いものであるが、隠れ入る山の端のあるのも、つらく感じた。どうか阿彌陀佛の絶えない不斷の光を仰ぐ方法があつてほしい」といふのである。此歌は長明の作でなく、源季廣の歌で、新勅撰集の釋教の部に、「十二光佛の心をよみ侍りけるに、不斷光佛をよめる」といふはしがきがついて出でゐる。此歌は本書の傳寫されて行くうちに、何人かの書き添へたのが、元からのものゝ如くに、譏入して終つたものであらうか、此歌の無い本もある。或は作者が自分と同時代の人である季廣の此歌を借りて、終尾に自分の心持を言ひ添へたものであらうか、詳かでない、兎に角斯様な事は何れとも速斷することは亂暴である、今普通の流布本に従うて茲に載せて置く。

方丈記新釋終

貫之と土佐日記

土佐日記に關して一言する前に、その著者紀貫之について考へて見たい。彼の閱歴は今日詳しく傳つては居らぬ。古今集目錄・三十六人歌仙傳・勅撰作者部類・和歌色葉集・羅山文集・等に見えてゐる所のものは、その補任の點だけであつて、享年については知るべくもない。延喜六年二月越前權少椽・御書所預となつたのを緒いとちに、内膳典膳・少内記・大内記を経て、延喜十七年五月には從五位下に叙せられ、同月加賀介となり、次いで美濃介・大監物・右京亮・土佐守・玄番頭を歴任して、天慶八年三月木工權頭に補せられ、同九年に易簪してゐる。

貫之が古今集を撰進したのは延喜五年四月で——景樹は六年であると云うてゐる。古今集正義に引いてゐる古傳には、此時の貫之の年齢を二十三歳——一説には三十二歳であるとしてゐるのに對し、景樹は之等の説を否定し、當時四十五六歳で、

享年は八十五歳位であつたらうと斷じてゐる。その理由としては、貫之が如何に絶世の才能があつても、二十三歳程の弱年で撰集の魁首たることは覺束なからう、殊に寛平后宮の歌合に貫之も歌人の一人として列してゐた事は古今集に見えてゐる歌によつても明かである。その歌合の年月は明確ではないが、寛平五年頃と推定すると、貫之の八九歳の頃である。僅か八九歳の幼弱の身で歌人の列に加はる筈はない。随つて撰集の當時を四十五六歳と見ると、古今集・冬之部に見えてゐる「行く年の惜しくもあるかなます鏡見る影さへにくれぬと思へば」といふ自作の歌の語調にも叶ふし、寛平后宮の歌合の作者であつた事實も首肯せられると云うてゐる。

貫之と云へば古今集が聯想される。萬葉の人麿・古今の貫之といつたやうに肩を並べて、歌聖として尊敬された。殊に崇敬された度に於ては、平安朝以後徳川時代に至るまで、人麿を凌駕してゐたやうに思はれる。誰でも詩人と云へば情熱家を思ふ。如何にも人麿は雄大な氣魄と燃えるやうな情熱の持主であつた。然し貫之は情

熱家といふよりも寧ろ理智の人である。四十年前後の歳月を官吏で過した彼は、詩的天分に恵まれた人ではなくて、事務家として俗吏として成功すべき常識家であつた。今彼の作歌を少しく拾ひ上げて見るに、

河風の涼しくもあるか打ち寄する波と共にや秋は立つらむ

青柳の糸よりかくる春しもぞ亂れて花の綻びにける

櫻花散りぬる風の名残には水なき空に波ぞ立ちける

櫻花とく散りぬともおもほえず人の心ぞ風も吹きあへぬ

時鳥人まつ山に鳴くなればわれうちつけに戀ひまさりけり

誰が秋にあらぬものゆる女郎花なぞ色に出でゝまだき移ろふ

ちはやぶる神のい垣に這ふ葛も秋にはあへず移ろひにけり

見る人もなくて散りぬる奥山のもみぢは夜の錦なりけり

霞立ち木の芽もはるの雪ふれば花なき里も花ぞ散りける

など、内部に感情の興奮があつて、それが自ら口を衝いて出たといつた、一氣呵成になつたものは見當らない。想を練り句を案じた慘憺たる苦心は認めるが、それだけまた實感から離れた概念的な技巧的なものになつてゐる。もつとも此時代の美的生活のめやすが典雅といふことに在つた。「程よい」ことが彼等の理想であつた。だから露骨を忌み極端を嫌ふ。勢ひ技巧的になる。またならざるを得ない。文字の上の技巧のみでなく、作意の上にも技巧を凝らすやうになる。縁語や懸語を用ゐたり、機智を誇るといふ種類のものが多いのは當然である。「見る人もなくて」の歌のやうに、「夜の錦」といふ支那の故事に基いて、さて奥山の紅葉を當篋めたといつた、知的聯想に過ぎないものもある。「青柳の糸よりかくる」の歌のやうに、柳の枝を糸に、花の咲くを衣の綻びる事に譬へ、糸を繕ふこと、綻びること、の反對の現象を春のなかにとり合せて、さても不思議な事よといつた、驚きの心を表はして、機智を誇りとしてゐるに過ぎないものもある。「ちはやぶる神の」の歌のやうに、永久堅

固な神威のもとにおる齋垣の葛を取り上げた點に、着想の新奇を見るだけのものもある。「櫻花とく散りぬとも」の歌のやうに、一語兩義の語に基いて人の心の移るのを花の散るのにたとへ、さて櫻花と人の心とを對比し、風を標準にして、兩者の別を立てゝゐるといつた概念的な理窟がかつたものもある。

君戀ふる涙しなくばから衣胸のあたりは色燃えなまし

わが戀は知らぬ山路にあらなくに惑ふ心ぞわびしかりける
色もなき心を人にそめしより移ろはんとはおもほえなくに

戀の歌でさへ智的技巧を認める以外、何等感情的効果を收めてゐるものがない。戀の思ひに、胸の焦れる事と、涙の流れ落ちる事との、兩者を巧みに取合せて、婉曲に言ひ廻したり、「惑ふ」といふことから「知らぬ山路」に聯想して、説明的な理窟めいた詠みふりをしたり、「移ろふ」といふ事が色彩の上の事である所から、色もない心であるから、移ろふとは思はないといふ理窟を立てたりしてゐる。技巧的な理窟めいた

ものであることの是非は兎に角、その理窟の筋が首尾の一貫した纏つたものにはなつてゐる。理智の人、常識の人である所以である。土佐日記、二月四日の條にも、昔の人をのみ戀ひつゝ、船なる人の詠める、

寄する浪うちも寄せなむわが戀ふる人忘貝おりて拾はむ

といへば、ある人の堪へずして、船の心やりによめる、

忘貝ひろひしもせじ白玉を戀ふるをだにも形見と思はむ

となんいへる。女兒の爲には親をさなくなりぬべし。玉ならずもありけんをど人いはんや。されど死にし子顔よかりきといふやうもあり。

とある。

舟なる人は貫之の妻で、ある人とあるは貫之である。亡兒を白玉に譬へた常識家は、同時に親馬鹿の謗を受けはしまいかといふ事が懸念された。「忘貝」の歌には詩人としての貫之が表れてゐるやうに思はれる。愛兒の追憶それは悲しい事であるに

もせよ、また一種甘美な陶酔の境に誘はれるものだ。現實の影が失せてひたすら美しいもの可愛いものへの憧憬である。追憶の世界はやがて詩の世界である。それに引きかへて「女兒の爲には云々」以下の文字は、何といふ注意深い常識的な言葉であらう。此一節の中に貫之の兩方面、詩人として又常識家としての彼が、よく表はれてゐるやうに思はれる。更に家に歸り着いた時の叙述の中に、

家をあづけたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば望みて預れるなり。さればたより毎に物も絶えず得させたる。今宵かゝる事と聲高にももの言はせず。いとつらくは見ゆれどこしろざしはせんぞす。

とある。家を預けた人の薄情な仕打は憤つても餘りある。然かも先方から望んで預かつたのであるに至つては猶更である。然し従者達に家の荒れてゐる不平を聲高にも言はせない。當然すべき謝禮だけはしようといふ。老練な常識家、後で自分だけは笑はれまいと用心する理智の人があるではないか。

貫之の文學史上の功績は何と云うても古今集の撰者であつた事がその一で、古今和歌集序・大堰川行幸和歌序・及び土佐日記を残した事がその二である。奈良朝の淳仁天皇天平寶字三年正月元日の歌を最後にして、和歌は文献の上から跡を絶つた。かくて時代は平安朝に入った。漢文學の隆盛は目覺ましいもので、凌雲集・文華秀麗集・經國集などいふ勅撰詩集が撰進され、和歌は少しも顧みられなかつた。此沈滞の後をうけて歌道の中興に貢献したものは貫之である。のみならず萬葉の歌とは、その聲調に於てもその着想に於ても、一種異なつた新しい優麗典雅な新體を創始した功は没すべからざるものがある。彼は或意味に於て文學史上の革新家である。歌では新派の一體を確立して遠く後世まで範を垂れた、——勿論平安朝の典雅な歌風は彼の創始したものではない。六歌仙殊に在原業平小野小町の先輩がある。然しそれから先輩の創めた歌風を繼承して、その歌風を確立した功は、之を認めねばならぬ。古今集序に於ても、始めて國文の序を創始した。よしそれが好んで對句疊語を用ゐ

て駢麗の體に擬し、艶治流麗、漢文の風格を脱する事は出来なかつたとはいへ、從來の序が皆漢文で作られて居り、殊に假名文は女子の文章として卑下せられ、男子の書く所のものは漢文であつた時勢に在つて、堂々と國文の一體を創始して、之を勅撰集の冒頭に載せた、その識見と、自覺と、慘憺たる苦心とは、炳乎として歴史を照すに足るものがある。

土佐日記は、醍醐天皇の延長八年に土佐國守となつて赴任した彼が、任期が満ちて、朱雀天皇の承平五年二月に都に歸つた。その歸りがけの旅日記である。冒頭に「男のすなる日記といふものを女もして見むとてするなり」とある如く、男性の日記は漢文を用ゐるのが慣習となつてゐる時に、女に擬して假名文の日記を創始し、爾後踵を接して出てゐる日記隨筆類の魁をなしてゐる。——もつとも紀行文の魁は小品ではあるが伊勢物語の中の「東下り」に見えてゐる。

土佐日記の文章は後世の俳文にも比すべき輕妙な洒脱な筆致である。之を古今集

序に比較すると同人の作とも思はれぬ程の懸隔がある。一は流麗優艶である。一は閑素淡雅である。古今集序は人も知る如く漢文の序に倣うて書いたものであること、勅撰集の冒頭に戴せるべき性質のものであることなどの理由から、自然絢爛莊重の體に書かれたものでもあらうが、貫之壯年の作で自然華麗濃艶を好む時代であつたからででもあらう。それに比してこれは其日々々の出來事を記すといつた極めて肩の凝らぬものでもあるし、老來俗臭を脱して淡雅簡樸を好む時代の作であつたからでもある。兎に角古今和歌集の序が未だ漢文の風格を脱しないのにこれは雅馴な純粹な國文で書かれてある。

之を書いた動機について、景樹は「鍾愛の女子を失はれたる其歎に堪へかねて、ひそかに思ひをやり給へる書なり」、富士谷御杖は「土佐の任に不平を抱き、之を倒語せるものなり」と云うてゐる。本書の所々に亡兒を追憶して思慕の情を寄せることが見えて居り、その單調を破る爲に海賊の恐れのあることを點出し、然かも滑稽

的筆致で巧みにかすめてゐるのを見ると、いかにも亡兒への紀念に書いたものであらう。土佐國は貫之にとつては愛兒の墳墓の地である。此世に於ける別は無論悲痛斷腸の極みであるが、遺骸を獨り遠い島國に残し置いて京都に歸る親の心は更に悲しかつたに相違ない。「昔こそよそにも見しか吾妹子が奥津城と思へば愛しき佐保山」「言問はぬものにはあれど吾妹子が入りにし山をよすがとぞ思ふ」(萬葉)で、いとしい人を葬つた土地に一種の懐かしい情を寄せるのは人情の自然である。殊に「忘貝拾ひしもせじ白玉を戀ふるをだにも形見と思はむ」とあるやうに、せめて亡兒の追憶に慰藉を得ようとした彼にとつては、愛兒の墳墓の地を去ることはいとも悲かつたであらうと想像される。かうした悲痛遣る瀨ない心持から、追慕憐愍の情は凝つて、歸京の紀行文をなりと書いて亡兒に捧げようといふ心持になるのも自然である。「見し人を松の千年に見ましかば遠く悲しき別れせましや」の歌には、此世の別れを悲しむのみではなく、墳墓の地を異にする悲しみをも併せ歌うてゐるではな

いか。舟行は遅々として春日は永い。風浪の爲に妨げられて心ならずも碇泊をつゞける日がつゞく。さうした消閑の心遣りに筆を執つたと解するのも一種の見方である。然らば未だ見ぬ新しい土地へ一種の憧憬と抱負とを持つて輝しく赴任する時の日記をなせに書かなかつたか。

「男のすなる日記といふものを女もして見むとてするなり」冒頭、女に装うて此日記の筆を起した理由は何か。女兒の事をあらはに歎く女々しさを恥ぢて、表面女を装うたのであると真測は説いてゐる。然しそれは武士道以後の思想から勝手な臆測を下したので一顧の價値もない。事實又貫之が亡兒を追慕する心持は本書の中にあらには書いてもゐるではないか。それよりも當時假名文を女文といひ、官府の公用文や男子の目録なども皆漢文であつたのに、特に假名文を用ゐた爲にわざと女を装うたものであらうと云ふ解釋の方が當つてゐる。想ふにこれは當時男が漢文のみを書いて自國の言葉を輕んじてゐる無自覺な輕薄な態度を揶揄弄して言うたもの

で、今一つは、女を装うて貫之自身を第三者の地位に据ゑる、「舟君」「舟の長しける翁」「御舟」などいふ敬語をわざと自己の上に用ゐて、例の滑稽味を添へる準備としたものと、見るべきでは無からうか。貫之自らが既に相當漢文の素養のあつた事は、新撰和歌集の序が漢文で書かれてゐるのを見てわかるし、次に述べるやうに、此日記の中にも漢詩の句を引いたり、支那の故事を引いてゐるのでもわかる。自ら漢文の素養があつてこそ、他人の自國語を輕じる態度の輕薄さを皮肉ることが出来るのだ。殊に此一篇の中には、召使や童たちの酔うた時の有様を叙しては、「一文字だに知らぬものしが足は十文字にふみてぞあそぶ」といふ諧謔と皮肉とを、自分の出發を見送り來た人々のことを叙しては、「守がらにやあらん、國人の常として今はとて見えすなるを心あるものは恥ぢずになん來ける」と云つた、一種の滑稽と皮肉とを、「ゆくさきにたつ白波の聲よりもおくれて泣かんわれやまさらん。」の歌に對しては、「いと大聲なるべし」といつた、不遠慮な皮肉を放つてゐる。また「其歌よめる文字、三十

文字あまり七文字、人みなえあらで笑ふやうなり。歌主いとけしき悪しく笑ます。まねべどもえまねばず、かけりともえよみあへがたかるべし。今日だにいひ難し。まして後には如何ならん」とか、「櫂取は日もえはからぬかたのなりけり」といふ悪罵に類したとさへ言うてゐる。「黒鳥のもとに白き浪をよす」と云つた櫂取の詞に對しては「人の程にあはねば咎むるなり」といひ、同じく櫂取の「御舟より仰せたふなり朝北の出でこぬさきに綱手はや引け」と云つたのに對しては「聞く人の怪しく歌めきてもいへるかなとて、書き出せれば、げに三十文字あまりなりけり」といひ、或は「櫂取の心は神の御心なりけり」と云ふやうな、擲揄戯弄も、口をついて出てゐる。また「京へいくに島坂にて人あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりくる時ぞ人はさかくありける」と云つて、人々の現金な心持に彼一流の皮肉を浴せてもゐる。もしそれ「ほやのつまのいすし、すしあはびをぞ、心にもあらず脛にあげて見せける」の如きは、老人の老巧な擲揄の言葉でなくて何

んであらう。かうしたやうに此日記には皮肉があり揶揄があり滑稽がある。冒頭の一句はやがて書中の皮肉と揶揄と滑稽とを招牌にかゝげたものでは無からうか。單に國文で書いた爲に女を装うたのであるといふならば、彼にはその壯年の時既に古今集序といふ立派な堂々たる國文があるではないか。何を苦しんで今更ら女を装ふ必要があらうぞ。

諧謔もまた隨所に用ゐられてゐる。「いとあやしく潮海のほとりにてあざれあへり」「船路なれど馬のはなむけす」「口網もろもちにて此の海邊にてはひ出せる歌」「たゞ押年魚の口をのみぞすふ。この汲ふ人々の口を、押年魚もし思ふやうあらんや」「春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞありける」「七十八十は海にあるものなりけり」「家をあづけたりつる人の心も荒れたるなりけり」などがそれである。之等は多くは言語上の遊戯で、一種の駄洒落に過ぎない。極めて調子の低いものであるが、又當時の風尚と貫之の人となりとを知ることが出来る。

要するに土佐日記には貫之の全人格が現はれてゐる。詩人としての彼、理智の人、常識家としての彼、その他、人民に對して傲慢な官吏としての彼、人を勝手氣まゝに擲擧鬪弄して平氣でゐられる彼、辛辣な皮肉に北庾笑む彼、幼稚な駄洒落に得意がる彼、寂びのある淡雅冲澹の趣味を好む老人の面影が髣髴としてゐる。

最後に土佐日記の註釋書を二三擧げて置く

土佐日記抄 午村季吟著

土佐日記考證 岸本由豆流著

土佐日記創見 香川景樹著

土佐日記舟の直路 橘守部著

土佐日記燈 富士谷御杖著

之等が古註の主なもので明治以後は澤山あるやうであるが、皆古註の説の何れかの範圍を出でない。その中で吉川秀雄氏の校定土佐日記詳釋は出色のものである。

新釋土佐日記目次

十二月二十一日	一
二十二日	六
二十三日	八
二十四日	一〇
二十五日	一一
二十六日	一三
二十七日	一五
二十八日	一四
二十九日	一五
正月 元日	一六
二日	一九
三日	二〇
四日	二二
五日	二三

正月 六日	三三
七日	三五
八日	三七
九日	三九
十日	四一
十一日	四三
十二日	四五
十三日	四七
十四日	四九
十五日	五一
十六日	五三
十七日	五五
十八日	五七
十九日	五九

正月	廿日	八四
	二十一日	九一
	二十二日	九七
	二十三日	九八
	二十四日	一〇〇
	二十五日	一〇〇
	二十六日	一〇〇
	二十七日	一〇五
	二十八日	一〇八
	二十九日	一〇八
	三十日	一四
二月	一日	一六
	二日	三〇
	三日	三〇

二月	四日	三三
	五日	三六
	六日	四三
	七日	四六
	八日	五〇
	九日	五一
	十日	五九
	十一日	五九
	十二日	六二
	十三日	六二
	十四日	六三
	十五日	六三
	十六日	六五

新釋土佐日記目次終

新釋土佐日記

竹野長次著

【通釋】

男のしるす日記といふものを、女も書いて見ようと思つて、書くのである。或年の十二月二十一日、午後八時、旅に出かける。その趣をすこし紙にかきつける。

男のすなる日記といふものを、女もして見むとてするなり。その年、十二月の二十日あまりひとひの日の戌の時にかごです。其の由いさゝか物に書きつく。

【語釋】

○男のすなる日記。男子のしるす日記。「すなる」は「爲るなる」の略。「日記」は、日々にある事柄を順を追うて書き記した記録。當時は、人も知る如く、支那文化崇拜の熱が高く、公の文章は漢文であり、男子の學問は漢文學であった。假名は製作されても、それは女文字として卑しめられた。男の手になる日記は筆日記・平仲日記のやうに漢文で書かれるのが一般の風習であつた。今、

貫之が假名文の日記を記さうとして、女の假面を被つたのも、「男のすなる日記」と冒頭したのも、上述の時代の風習を物語るものである。流布本には「男もすなる」とある。

○女もして見ん。貫之自ら女の假面を被つて、斯う言うたもの。

○その年。貫之が土佐國から都に歸つたのは、承平四年のこゝである。この日記を表面上貫之自身の筆さししないで、女の筆に見せかけた所から、年號などわざと漠然と言うたもの。

○しはす。奥儀抄「この月は僧を迎へて、經を讀ませ、東西に馳せ走るが故に、師走月の意なり」とある。東雅に「シハスとは歳の終りをいふなり。シはトシのシなり。ハスはハツなり。國語に事の終りをハツともハテさもいふなり。されば萬葉集に、極の字をハツさよみ、俗に極月の字を用ゐて、シハスさも云ふなるべし。」

○戌の時。午後八時。

○その由。その趣。その様子。

○物に書きつく。「物」さば、直接にそれさ指さすに漠然さいふ詞。爰は懷紙などに書きつけるのをいふ。

【通釋】

或人が國司の任期、……それは滿四年、足掛け五年の……が満ちて、事務の引繼などが濟み、解由状など受取つて、住んでゐた國司の官舎を出て、舟にのる筈の場所へ引き移る。知つて居る人も、知らぬ人も、皆、誰も彼も、見送りする。中でも數年このかた召使つてゐた人々が別れを惜んで、盛に何やかさ喧しく言うてゐる中に、夜が深くなつた。

ある人、縣の四とせ五とせはて、例の事ども皆しをへて、解由など取りて、住む館より出で、船に乗るべき所へわたる。かれこれ知る知らぬおくりす。年頃よく具しつる人々なむ、別れがたく思ひて、しきりにどかくしつゝのゝしる中に、夜ふけぬ。

【語釋】

○ある人。紀貫之をさす。女の筆に装うたので、自身を第三者の地位に置いたのである。

○縣。國司がその任國をさしていふ。古事記傳に「阿賀多は上り田にて、元は島のことなり。田さいふは、田をも島をも統べたる名にて、其中に、水のつかぬを島とも上田とも云、水田よりは、高く上りたる由なり。……祈年祭祝詞に御がたますめかみたちまへにまをまくたけちかつらぎとをらしきまのべそふと、みなはまをしてこの縣爾坐、皇神等、前爾白、高市、萬、木十市志貴山邊曾布登、御名者白且、此むのみあなにおひいづるあまなからなをもちまゐきて、すみみあみこのながみけのとはみけときこ六御縣爾生出、甘菜辛菜乎持參來且、皇御孫命能長御膳能遠御膳登聞食、故……此六御縣は殊に近く京畿に在て、朝廷の御料ふ産田物を作りて奉るをすかゆるに

地なるが故に、其神を重く祭り賜ひて、かく祈年の祝詞もあるなり。かゝれば縣と云ふは、もと御上田より起れる名にて、又其に准へて、諸國にある朝廷の御料^{たま}ふ地をも云ふ。……さて後世まで諸國の司人の其任國を指して、縣と云ふも、古に京より國々の御料の縣に、官人なごの往來^{ゆきかひ}しころの名目の遺れりしなり。萬葉七に、青みづら依網原^{よさみの}に人もあはぬかも、石ばしの淡海縣の物語せむ。此歌遠江國司の下る道に、參河國の依網原にて詠めるにて、淡海縣さは、任國の遠江をさして云ふなり。又古今集端詞に文屋康秀が參河椽になりて縣召には得出でたゞじやと云ひやれりける。土佐日記に、或人縣の四させ五させはて、なごあるも、縣さは其任國を指して云ふなり。然るに此らの縣をたゞ田舎を云とのみ心得來つるは非なり。たゞに田舎のことを縣と云へることなし。さて又縣^{あがためし}召と云ふことも、御料の縣の官人を任すよしの名目なり、たゞに田舎の官人を任すこと云ふ意にはあらず。かくて漢字を用る世になりて、此阿賀多に縣の字を當て書きならひて、やゝ後には、必しも朝廷の御料^{やしたま}ふ地なられども、彼の漢國にて、縣^{けん}といふにあたる程の地をば、凡て何^{なにのあかた}縣と云ふことになれるなり。古今集打聽に「本は班田にて、古へ六年毎に一度づゝ、國々の田を班ち替へて作らしむる事あり、仍て田舎の稱さなる」とあり、或は「在方^{あしかた}にて、音に

在まゐさ云ひ、國郡中、人民部落を爲し、田畠を開き家屋をたつる所をいふ。今も田舎を在まゐさ云ふも、在處の義なり」といふ説もある。

○四よさせ五ごさせ。國司の任期は、大寶令では六年となつてゐるが、慶雲三年二月改めて四年となり、その後或は六年、或は四年といつたやうに變替があつて一定して居らぬが、承和二年三月また四年に改め以後永式となつた。爰に「四よさせ五ごさせ」と言つたのは、滿四ケ年、足かけ五年を意味する。

○例の事ごとも。いつもの事ごとも。事務引繼ぎの事ごとも。

○解由。解由状のこと。王朝時代、内外の官の任期が満ちて交替の際、新任の人から前任者に對して、任官公事の取扱上、毫末も懈怠のなかつた由を記して渡す文書。

○住む館。今まで自分が住んでゐた國司の館。「館」は舍宅のこと。

○船に乗るべき所。船に乗る筈の場所。「大津」をさしていふ。當時國府は長岡郡に在つた。

○わたる。移つてゆく。

○かれこれ。數多なるを總べいふ詞、物にも人の上にもいふ。古今集序「詠める歌多く聞えればかれこれを通はしてよく知らず」は、數多の歌を通じての意。

後撰春下「春のくれかれ、これ花をしみける所にて」は、多くの人が皆意。

○年頃。年來。數年來。

○具しつる。近く召使うてゐた。

○さかくしつゝ。かれこれと色々しの事を爲しい爲しして、色々旅立ちの世話をしたり、別れの杯を汲みかはしたりするのをいふ。

○のゝしる。聲高に呼ぶこと。やかましく物をいふこと。

【通釋】

二十二日、和泉國まで、波が静かであれかしと、心の中に願ひおこす。藤原言實が、舟路であるが馬のはなむけ(送別の宴)をした。その酒に上中下の者が皆酔ひすぎて、甚だ常態を逸し、潮海ほしほみのほとりほとりで、奇怪にもあざれ(戯れ)合つた。

二十二日 和泉の國まで平かにと、ねがひ立つ。藤原の言實ときざね船

路なれど、馬のはなむけす。かみなかしも酔ひすぎて、いとあやしく、潮海ほしほみのほとりにて、あざれあへり。

【語釋】

○和泉の國まで云々。和泉國まで海上平安にあれかしと心に願ひ起す。特に「和泉國まで」と言うたのは、それ迄が海上に危険が多く、それから先は内海で安全であるからである。「願ひ立つ」は、諸註には「和泉國まで平らかに舟つけかしと願うて舟出する」意に解いて居り、又「立願」の意に解いてゐる説も

あるが、さうではなく、廿二日はまだ海に漕ぎ出る日ではないが、その舟に乗るべき場所に來た第一日で、航海の事實に直面した日であるから、自然海上の平安を心に願うたので、「願ひ立つ」の「立つ」は「思ひ立つ」などいふ「立つ」と同じく、今迄格別心に思はなかつた一路の平安をいよく願ひおこす意であらう。「立願」の意ならば、「願ひを」とある方が妥當であり、「出發」の意ならば「願ひて」とあるべき所であらう。

○藤原言實。傳不詳。

○馬のはなむけ。旅立つ人の馬の鼻を、その行くべき方向にむけて、祝言する事から出た言葉で、送別の宴を聞くこと。又は饒別の意に用ゐる。「馬のはなむけ」といふ言葉が陸路の旅に基いて出來た言葉である所から、例の駄洒落で「舟路なれど」と言つたのである。

○かみなかしも。上中下のあらゆる階級の人々。

○いさあやしく。甚だ奇怪に。此語は、「あざれ」に連る副詞句で、酔つた態度の奇怪な意と、潮海のはざりで腐れ合ふことの奇怪な意とに言つたもの。「あやし」の「あや」は、驚いて嘆く聲、「しく」は形容辭、凡て奇妙なことを、不思議なことなど、世の常ならぬ事にひろくいふ言葉。

【通釋】

廿三日、八木康教といふ人がある。此人は國司の廳に何時も吃度出仕して使はれるさいふ程度の人でもなかつた。この人こそ眞の正しい心で、送別の宴を開いた。この國の人々の心の習はしめて、今はこれ限り別れると言つて、お別れに顔も出さなくなるのに、國司がら

○あざれ。字鏡「鰯、魚肉爛也、阿佐禮太利」魚肉などの腐ること、又は戯れる意、源氏帶木「手な殘い給ひそなご、いたくあざれか、れば」は、戯れる意、爰は一語兩義の語をもつて、海邊で戯れたことを、鹽さいふものは腐爛を防ぐものであるのに、奇怪にも潮海の邊で腐り合うたと、諧謔を用ゐたもの。この諧謔を弄する下心から、「海のはさり」と言ふを、特に「潮海」と言うたのだ。

二十三日 八木の康教といふ人あり、此の人、國になならずしもいで使はるゝ人にもあらざりき。これぞたゞしきやうにて、うまのはなむけしたる。守がらにやあらむ、國人の心の常として、今はとて見えすなるを、心ある者は、恥ぢすになむ來ける。これは、物によりてほむるにしもあらず。

【語釋】

○八木の康教。傳不詳。一本に「山の康教」とある。
○國になならずしも云々。國司の廳に、いつもきつと出仕して、使はれる人では

のよいからであらうか、人情のある者は國人のてまへをきまりわる。思はずに、見送りに来た。これは錢別の品物を貰つたからさて、讃めるのではない。

ない。「いで使はる」は、出で仕へる意、「仕へ」といふは「使はれ」の約。一説に「いで」は「率^ひて」の誤であるを解いてゐる。

○たゞしきやうにて。眞の正しい心で。義理や形式的ではないのをいふ。一説に「禮儀正しく」の意に解いてゐる。

○守がらにやあらむ。國守のよろしいからであらうか。「がら」は、性質・狀況・品格などの意の接尾語。此句は下の「心あるものは恥ぢずになむ來ける」に連る副詞句。一説に此句を直に「見えざる」につゞく副詞句と見て、國守柄のわるい爲であらうかと、紀氏自らの謙遜の詞に解してゐる。然しさう解いては、「國人の心の常として」といふ句と矛盾する。國人の人情の常であるならば、特に國守のわるい爲といふ理由が成り立たない。また代々の國守のわるい結果、國人の人情がかく浮薄になつたものとすれば、紀氏自らの謙遜ではなく、寧ろ潜越の暴言である。思ふに爰は、「心ある者は恥ぢずに来た」事について、紀氏自ら軽い誇りを感じ、つい口を辻らかしたもので、老人の穉氣を表はしたものだ。

○今はさて。今はいよく別れると言つて。

○見えざるを。お別れに顔を出さなくなるのに然るに。一本「見えざるを」とある。「見えざるを」の略。

○心ある者。人情のある者。

○恥ぢずに。國人一般の風習に背いて、見送りに来るさいふ事をば、きまりわるく感じないで。

○物によりて。錢別の品物のために。

二十四日 講師かうじうまのはなむけしに、いでませり。ありとある、かみ、しも、わらはまで酔ひしれて、一文字ひともじをだに知らぬ者しが、足は十文字ともぢにふみてぞ遊ぶ。

【語釋】

○講師。僧侶の職名。昔諸國にあつて、其國の僧尼を統べ、佛教を講説する事を掌る僧。文武天皇大寶二年に、諸國に國師を置いたのがその始めて、最初は國師と言うたが、寶龜十四年に講師と改めた。

○ありとある。有る限りの。すべての。

○わらは。和名抄「禮記云、童、未冠之稱也、和名和良波」とある。男女の十歳前後の者をいふ。爰は召使ひの子供をさすのであらう。

【通釋】
廿四日、講師が祖道の宴を張りにお出でなされた。上・中・童まで、あらゆる人々が酔ひたはけて、目に一丁字のない者が、足だけは十文字に踏んで遊ぶ。

【通釋】

廿五日、國司の官舎から、招待状をもつて呼びに來た。招かれて行つて、終日終夜、色々管絃の遊びなどするやうで明けてしまつた。

○酔ひしれて。酒に酔うて正氣を失ひ心のうつけること。「しれ」は、癡しれで、馬鹿なこと。竹取に「心ち唯しれにしれてまもりあへり」とあるも、魂のうつけて愚鈍になること。

○一文字をだに云々。文字を一字も知らない者が、「者しが」の「し」は強めの助詞。○足は十文字に云々。足もこの亂れてゐるのをいふ、今の千鳥足などいふに同じい。目に一丁字ない者が足だけは十字形に踏んで遊ぶといふので、例の駄洒落である。

○遊ぶ。普通、管絃の遊びをいふのであるが、爰は、踊つて遊ぶのである。

二十五日 守の館たちより、よびに文もて來たれり。よばれて至りて、日ひと日夜ひと夜、とかく遊ぶやうにて明けにけり。

【語釋】

○守の館。新任の國守の舎宅。

○日ひと日。終日。ひれもす。

○夜ひと夜。終夜。夜もすがら。

【通釋】

廿六日。今日もやはり、國司の官舎で、御馳走をし騒いで、召使までに物を與へた。漢詩を聲に出して吟じた。和歌をば、主人も客もその他の人も詠み合つた。漢詩はこゝに記さない。主人なる新任の國守の詠んだ歌。都出で、君にあはむこゝ來しものをこし甲斐もなく別れぬるかな。さ詠んだから、都に歸る前任の國守の詠んだ歌。しる妙の浪路を遠く行きかひてわれに似べき

○さかく。色々々。

○遊ぶやうにて。管絃の遊びをする様子で。

二十六日 なほ守の館にて、あるじしのしりて、をのこまでに物かづけたり。からうた聲あげていひけり。やまと歌、あるじもまらうごもこと人も、いひあへりけり。からうたはこれには書かず。やまと歌、あるじの守のよめりける、

都いで、君にあはむこしものを

こしかひもなく別れぬるかな

となむありければ、かへる前の守のよめる、

しるたへの波路をとほく行きかひて

われに似べきはたれならなくに

こと人々のもありけれど、さかしきもなかるべし。さかくいひ

は誰ならなくに。
他の人々の歌もあつたが、すぐれた歌もなからう。色々々歌など詠んで、前任の國守も、新任の國守も、共に階から庭におりて、二人とも互に手を握り合せて、酔うて愉快さうな話をして退出した。

て、前の守も今のものもろともにおりて 今のあるじも前のもの、手とりかはして（みまこと）酔言にこゝろよげなることとして出でにけり。

【語釋】

○なほ。今日もやはり。

○あるじし。響應し。「あるじ」は、主人のこゝ、轉じて、主人となつて酒肴をさゝのへ馳走すること。

○をのこ。召使。従者。こゝは紀氏の召使をさしていふ。

○物かづけたり。物を與へた。「かづく」は、裝束を人に與へる時にいふ詞で、そのもさは與へる人の肩に懸けて與へたからかく言ふのであらう。昔、歌舞遊宴佛法の儀の後當座の報酬として與へる物品を「かづけもの」といふも、（かづけもの）被物の義で、元は衣服を肩にかけて與へたからの名である。伊勢「女の裝束かづけんさす」源氏須磨「御衣ぞもかづけさせ給ふを生ける甲斐ありと思へり」一説に「今日もやはり守の館にてもてなし響應し、そのもてなしも丁寧なりければ、此方よりも、上中の人をばじめ、それん従者どもにまで物つかはしたり」と解いてゐる。

○からうた。漢詩。

○まらうご。稱人の音便で、客のこと。

○こそ人。主人・主賓・以外の其席にゐる人々。

○都いで、云々。自分は京都を出で、君に會はうと思つて來たのに、來たしるしもなく、すぐに別れて終ふことである、それが悲しい。「來し」といふ語を疊ねて、語路を圓滑にし、なだらかに率直に詠んでゐる。眞情が見えてゐる。

○しろたへの云々。白浪の海路を遠く往來して、自分の境遇に似る筈の人は、誰でもない、貴君であるのに、然るにその貴君に別れるのは名殘惜しいこの意。境遇の類似に一種のなつかし味を感じて惜別の情を述べたもの、末の句の「われに似べきは誰ならなくに」といふ言ひ方に貫之の理屈ほい辭が見えてゐる。「しろたへ」は、白布で、穀の皮の纖維で織つた布。「しろたへの」は、衣・袖・

袂・褌・領布・紐・帶などの枕詞。爰は、「白い」といふことの譬喩に用ゐたもので、「しろたへの波路」は、白波路といふに同じい。古今集「わたつみのかざしにさせる白妙の涙もてゆへる淡路島山」萬葉集、「春過ぎて夏來たるらし白妙の衣乾したり天の香具山」「眞澄鏡照るべき月を白妙の雲か隠せる天つ霧かも」などあるは、白浪・白衣・白雲の意で枕詞ではない。「われに似べき」を、諸註

は、「恐しい海路を過ぎて来て、つらい目にあふ」その點が自分に似てゐるさ
いふ意に解いてゐるが、單に海路の往來さいふ點のみでなく、廣く同國の國守
さいふ點に境遇の類似を見出して言うたものであらう。「なく」は打消の助動
詞「ぬ」の延音。

○さかしき。すぐれた歌。「さかし」は、記に「明達」「叡智」の字をサカシと訓み。ま
た「賢女」をサカシメなど訓んでゐる如く、愚癡の反對で、智深く賢きをいふ語。
○もろさもにおりて。諸共に、館の階から庭におりて。

○醉言。酔うていふ言葉。

○こゝろよげなることして。愉快さうな話をして。「こゝ」は「言」の意。お互に
未來の祝福を言ひ合ふのであらう。

○出でにけり。國守の館を退出した。

【通釋】
大津から浦戸を目がけて
漕ぎ出る。都で生れた女
の兒が、この土佐の國で
急に亡くなつたから、昨

二十七日 大津より浦戸うらどをさして漕ぎいづ。かくあるうちに、
京にて生まれたりしをんなを、こゝにしてにはかにうせにしか
ば、此の頃のいでたちいそぎを見れど、何事もいはず。京へ歸

今の出發の準備を見て、悲しさの情が胸一杯で何事も言ひ得ない。かうして都へ立戻らうとしてゐる間にも、その都に歸るにつけて、女の子の思ふて戀ひ慕ふ事だ。一行の人々も悲しみに堪へられない。此の間に或人の紙にかきつけて出した歌、

都へさ思ふも物のかな
しきは歸らぬ人のあれ
ばなりけり。

又、或時には、

あるものと忘れつゝな
ほ亡き人をいづらさ間
ふぞ悲しかりける。

さ云うてゐる間に、鹿兒

るに、をんなごのなきのみぞ、悲しみ戀ふる。ある人々もえ堪へず。此の間にある人の書きて出せる歌、

都へさ思ふも物のかなしきは

かへらぬ人のあればなりけり

また或時には、

あるものと忘れつゝなほなき人を

いづらさ問ふぞ悲しかりける

さといひける間に、鹿兒かごの崎さきといふ所にいたるに、守のはらから、又こと人、これかれ酒なども追ひ來て、磯いそにおりゐて、別れがたきことをいふ。守の館の人々のなかに、このくる人々ぞ、心あるやうにはいはれほのめく。かく別れがたきいひて、彼の人々の口網くみづなももろもちにて、此の海邊うみべにてになひ出せる歌、

の崎と云ふ所に着く。新任の國守の兄弟や他の人など、誰も彼も、酒など携へて後について来て、舟から磯邊におりて居て、別れの惜しい事など言ふ。國司の官舎の人々の中で、この後を墓うて来る人々こそ、人情のあるやうに、舟の人々からほのかに囁される。か様に別れ惜しく言うて、彼の人々が、この海邊で口重くうなりだした歌、惜しと思ふ人やとまるさ芦鴨のうちむれてこそわれは來にけれ。さ詠んでゐたから、大層ひどく感心し褒めて、歸り行く人の詠んだ歌、

惜しと思ふ人やとまるさあしがら蘆鴨の

うち群れてこそ吾は來にけれ。

さひてありければ、いさいたくめでて、行く人のよめりける、

竿させごそこひも知らぬわたつみの

ふかきころを君に見るかな。

さといふ間に、舵取もの、哀れも知らで、おのれし酒をくらひつ

れば、早くいなむとて、「潮満ちぬ、風も吹きぬべし」とさわげ

ば、舟に乗りなむとす。

此の折に、ある人々、をりふしにつけて、から歌ごも、時に似

つかはしきをいふ。又あるひと、西國にしくになれど、甲斐うたなごう

たふ。かくうたふに、ふなやかたの塵もちり、空ゆく雲もたゞ

よひぬとぞいふなる。こよひ浦戸にとまる。藤原の言實ときざね 橘の

卒させどそこひも知らぬわだつみの深き心を君に見るかな。

と詠んでゐる間に、舵取は人情も知らないで、自分だけが酒を飲んだから、早く行かうとて、「潮が満ちた、風も吹くであらう」とせきたてるから、舟に乗つて終はうとする。此時、其場に居る人が、さうした折に應じて、漢詩などの、似合はしいのをうたふ。かくうたふので、その美聲に感動して、舟屋形の塵も散り、空ゆく雲も歩みを止めて漂うて終ふ程であるといふのだ。今晚浦戸に淀泊する。藤原言實、橘

季衡、こゝ人々追ひ來たり。

【語釋】

○大津。土佐國長岡郡、國分川の南岸に在る。

○浦戸。土佐國吾川郡、浦戸灣の入口に在る。

○かくあるうちに。このやうに都へ戻らうとしてゐる間にも。此句は下の「悲しみ戀ふる」につゞく副詞句。

○こゝにして。土佐國で。「此處にて」といふ同じであるが、たゞ「此處」を強くさりたてゝ言ふ爲に、「し」といふ強めの助詞を添へたもの。萬葉集「旅にして物戀しきに山したの朱のそほ舟沖に漕ぐ見ゆ」とあるも旅さいふ事を強くさりたてゝ言うたもの。

○いでたちいそぎ。出發の用意。「いそぎ」は、準備、支度。徒然草「公事ども繁く春のいそぎにさり重れて催し行はる」萬葉集「水鳥の發の急ぎに父母に物言す來にて今ぞ悔しき」とあるは、支度の意。新古今集「急がれぬ年の暮こそ哀れなれ昔はよそに聞きし春かは」の歌について、美濃家裏には「すべて歳暮の歌に、いそぐさよむは來ん年の始のまうけをいそなむ事なり、春を早く來よかしと待つ事さ心得るは誤也。」尾張家裏には「物語の類に元服・女御入内などや

の季衝、その他の人々も、
後について見送つて來
た。

うの事ありて、其まうけを營むを、御いそぎさいふ、體の語也。こゝばそれな
用に、いそがれぬさいひて何の儲する事もなき也」とある。

○えいはず。言ひ得ず。悲しい情で胸も塞がつて、何事も言ひ得ないのである。

○ある人。一行の中の或人。

○都へこ云々。都へ歸るのだと思ふにつけても、物悲しく感ずるのは、諸共に都
へ歸らぬ、死んだ人があるからであるよといふ意で、「歸らぬ人」に、不歸客
と、都へ歸らぬ人との兩意を兼ねしめたもので、かうした一語兩義の語を用ゐ
て、智的技巧を弄んだのが、當時の風尙の一つである。此歌は説明的の詠み方
をしてゐる爲に、全體の調子が低い。「物のかなしきは」、「物悲し」と同じで、
見る物聞く物につけて悲しいこの意。「けり」は詠嘆。

○あるものこ云々。死んだといふ事を忘れつゝまだ存命してゐるものと思つて、
矢張亡き子供を何處に居るかを尋ねるのが、悲しくあるよこの意。かうした事
は、人の亡き後の實感であらうし、實感を歌つたものであるだけに、讀む人の
心に迫るものがあるけれど、「あるものこ」の一句は餘分のやうに思ふ。「ある」
は存命してゐること、六帖「ある時はありのすさびに憎かりき亡くてぞ人は
戀しかりけり」「いづら」は、何處にあるかを問ひかける詞。枕草子に「翁丸いづ

ら、命婦の御許くへ」

○鹿兒の崎。土佐國長岡郡大津村。

○守のはらから。新任の國守の兄弟。

○追ひ來て。別の舟で、後を追ひかけて來たのであらうか。或は、一方は舟、一

方は磯傳ひに此處まで來たのであらうか。

○磯におりゐて。舟から磯におりてゐて。

○心あるやうに。眞情のあるやうに。

○いはれほのめく。それとなく遠廻しに噂されること。貫之一行の人々に言はれるのである。「ほのめく」は、その氣色を幽かに見せる意の詞。

○口網ももろもちにて云々。口重く歌を詠み出した事を、場所柄の海邊である所から、魚をさる口網を引くに大勢の人で引き出すのに譬へて、諧謔交りに云うたもの。口網に口の意、「もろもち」に重い意、「擔ひ出す」に詠み出す意を、それ／＼兼ねてゐる。口網は「今の世に、海人のしわざに引網といふありて、それに、口網・奥網といふあり。其の口網は廣さ六七尺ばかり、長さは五六十丈もあるを、海中へはへおきて、魚をさる、それを引きあぐる時に、海人ども、大勢なみ立ちて、擔ひ出だすことあり。これなるべし。歌よむこと、口重きを、

戯れに、彼の口網のおもくて、大勢の人のかゝりて擔ひいだすに譬へたりけん〔本居宣長〕又一説に、「魚の名の鮠うなぎをこる網なるに、人々の口を鮠網よせていへるなるべし。鮠は今いふいしもちの類なり。もろもちは諸共に持ちあふないへり。鮠網を口網によせ、網といふより海邊さもいひ、擔ひ出すさもいへるならん〔岸本由豆流〕

○惜しと思ふ云々。名殘惜しく思ふ人がさゞまるかと思つて、あゝ鴨のやうに群がり連れだつて、自分は後を追うて來たのであるとの意、調子が重くるしく出來てゐる。「口網も云々」を評されたのは、それが爲であらう。「蘆鴨」は、蘆邊に居る鴨で、群れ飛んでゐるものであるから、「群れ」の譬喩的枕詞としたもの、一説に求食鴨の意だともいふ。

○いさいたくめで、甚だひごく感心し褒めて。「めで」は「愛で」の意。

○ゆく人。都に歸り行く人で、貫之つらゆきとさす。

○卒させど云々。卒つとさせても、底のはてしもない海のやうな深い真心を、君に見ることであるの意。平凡な歌ではあるが、例の厭味のある技巧がないだけ、素直に感じられていゝ、「君に見る」といふ言ひ方が、漢文から脱化した新しい言ひ振りであらうか。上三句は、「深き」の序。「そこひそこひは、「退き」の延音、遠

く難れた處をいひ、又その極みの處をいふ。「わだつみ」は、海神の名、轉じて海のこと。「わだつみ」と「つ」を濁り、又「わたつうみ」など「う」の音を入れていふは、後世誤つて用ゐられたもの。

○舵取。「かざり」「かざり」などともいふ。船頭のこと。楫又は櫂を使ふ人。

○ものゝ哀れ。物の情趣。人情。

○おのれし。自分だけが。「し」は意味を強める助詞。

○くらひ。昔は、酒など飲む事をも、「くらふ」と言つた。

○潮満ちぬ云々。潮も満ち追風も吹いて、舟出するに都合のよくなつた事を言ふのであらう。萬葉集「熱田津に船乗りせむと月待てば潮も叶ひぬ今は漕きてな」
○ある人々。其場に在る人々。

○をりふしにつけて。舵取に促されて舟に乗つて別れようとする、その場合にさつて。

○時に似つかはしき。其折に似合しいもの。此處は、「から歌ども、折節につけて似つかはしき」とあるべきを、「から歌ども」の句を間に挿入が爲に、重複するのを嫌はず、「時に似つかはしき」と、「時に」の語を入れたもの。

○西國なれど云々。自分等の今居る所は、西國であるが、東國の甲斐歌を誦ふと

いふので、「舟路なれど馬のはなむけ」などいふと、同じ巧みの駄洒落である。

○甲斐うた。古今集大歌所御歌中の甲斐歌、「甲斐が嶺をさやにも見しがけられなく横はり臥せるさやの中山」「甲斐が嶺を嶺越し山越し吹く風を人にもがもことごとや言傳やらむ」の二首をさす。前の歌の意は、「故郷の甲斐の嶺をはつきりさ見度いものだ、然るに無情にも横はり臥して、それを遮り隠してゐる佐夜の中山である」といふので、一面には「情なく」の句に、舵取の無情を恨む意を含め、一面には、懐しい都を望むと、それは沖つ浪の千重に隠れてゐるといふ意を寄せたもの。後の歌は、「嶺を越し山を越して甲斐の山を吹く風を人にしたいものだ、さうしたなら、都の戀しい人の許に言傳をしてやらうに」との意、舵取が「風も吹きぬべし」と言つた詞をさつて、直に、その風が人であつて欲しい然らば都へ言傳を頼んでやらうといふ心持を寄せたもの、二首共に望郷の情を托してうたつたもの。

○ふなやかたの塵。歌をうたふ聲がよい爲に、船屋形の梁の塵も、それに感じて散るさいふので、聲の美しいのを誇張して讀めたもの。事類全書「善歌者有虞公、發聲動梁上塵」爰は、舟に乗りゆく人達の事であるから、場合柄「船屋形の塵」と言つたもの。

【釋通】

廿八日、浦戸から漕ぎ出
て、大湊に向つて航行す
る。此間に、以前の國守
の子の山口千岑が酒やよ
い肴などを持つて來て舟
に入れた。行きながら飲
みかつ食ふ。

○空ゆく雲もたゞよひぬ。これも歌の上手なのを讀めた詞で、うたふ歌の聲調が

空ゆく雲を感動させて、それを遇めたこの意。列子湯問篇「薛譚學謳於秦青、
未レ窮三青之技、自謂盡レ之矣。遂辭歸、秦青弗レ止、饒ニ於郊衢、撫レ箏悲歌、
聲振ニ林木、響馭ニ行雲、薛譚乃謝、求レ反、終身不三敢言歸。」

○橘の季衡。傳不詳。

○追ひ來たり。見送りの爲に、後について來たのである。

二十八日 浦戸より漕ぎ出で、大湊をおふ。此の間に、早く
の守の子、山口の千岑、酒よき物どももて來て、舟に入れたり、
ゆくゆく飲みくふ。

【語釋】

○大湊をおふ。「大湊」は、長岡郡と香美郡との間あたりに在る地であるらしい。

「おふ」とは、風に舟を追はせる意で、其所に向つて航行すること。

○早くの守。以前の土佐の國守。

○よき物。よい肴の意。

【通釋】

廿九日、大湊に滞在してゐる。醫師がわざ／＼屠蘇や白散、それに酒を添へて持つて來た。眞情があるやうだ。

○もて來て。持ちて來て。「もて」は「持ちて」の約。
○ゆく／＼。行きながら。

二十九日 大湊にとまれり、醫師くすしふりはへて、さうそ、白散びやくさん酒くはへてもて來たり。こゝろざしあるに似たり。

【語釋】

○くすし。王朝時代の職名、當時は大寶令の制により、宮内省典藥寮に三十人、衛門府・左右衛士府・左右兵衛府に各一人・諸國に各一人・太宰府に二人を配置したもので、諸病を治療したり又は診候する事を掌る、又、諸國に置いた醫師は、醫方を醫生に教授する事をも掌つた。こゝは土佐國の醫師である。

○ふりはへて。わざ／＼。古今集、貫之「春日野の若菜摘みにや白妙の袖ふりはへて人の行くらむ」とあるも、袖を振る意を、「ふりはへ」に言懸けたもの。

○さうそ。屠蘇。藍尾酒ともいふ。赤木桂心・防風・菝葜・蜀椒・桔梗・大黃・烏頭・赤小豆・等を混和して製つたもので、緋の袋に盛り、酒中に入れて飲む。之を飲めば、邪風毒氣をさけ、痘疫にかゝらぬと云ひ傳へ、嵯峨天皇の弘仁年間よ

【通釋】

元日。今日も矢張同じ泊りに碇泊してゐる。白散を或人が、夜の間にだけ云うて、舟屋形に挿んで置いたから、風に吹かれしくさせて、その結果海に吹き落させて、飲む事が出来なくなつた。葶もあらめも齒固もない。本來この様なもの、無い國

り起り、爾來、上下一般に正月元日の佳儀に用ゐた。

○白散。屠蘇の類で、神明白散ともいふ。白朮・桂心・桔梗・細辛等を調合したもので、歳首に酒に浸して之を飲むと、一年の邪氣を避け齡を延ぶといふ。公事根源正月一日供三御藥一條に、「一獻に先づ屠蘇を酒に入れて薬子に飲ましむ……二獻には神明白散を供す」とある。

○志あるに似たり。厚い志があるやうだ。「似たり」は、何々のやうだの意。確かに親切心があるかどうかは断定出来ないが、それらしく見えるといふ意。

元日。なほ同じとまりなり。白散を、あるもの夜の間に、ふなやかたにさしはさめりければ、風に吹きならさせて、海に入られて、え飲ますなりぬ。いもも、あらめも、はがため齒固もなし。かうやうの物なき國なり。求めしもおかず。たゞ押年魚おしあゆの口をのみぞ汲ふ。此の汲ふ人々の口を、押鮎おしあもし思ふやうあらむや。けふは京みやこのみぞ思ひやらるゝ。「九重の門かどのしりくめなは、なよしのかしら、ひゝら木らいかに」とぞいひあひあへる。

である。だから、求めても置かない。たと押年魚の口だけを汲ふ。この汲ふ人々の口を、もしや押年魚が、好きな口、嫌ひな口と言ふやうに思ふことがあらうか。今日は都ばかり想像される。宮門のしりくめ繩や、なよしの頭や、ひすら木などじんなであらうか」と評判し合つた。

【語釋】

○夜の間とて。夜の間だけさ云うて。

○ふなやかた。舟の上に設けた屋形。唐韻云「篷庫、和名布奈夜加太、舟上ノ屋也」

○風に吹きならさせて。風に吹かれる事に馴れしめての意で、風に吹かれくさせること。一本に「風に吹き流させて」とある。風に吹かせて海に吹き落させること。又、一本に「風に吹き無させて」とある。

○いも。多分、自然薯ヤマのいものことであらう。この芋は大饗の時の「いもがゆ」などにも用ゐた。

○あらめ。「め」は、海藻中の食用となるべきもの、總名。和海藻にぎめ・稚海藻わかめ・滑海藻あらかなどある。滑海藻は、ひろめの類で、葉は廣くて長く、色は黒く茶色がうつてゐる。

○齒固。古、正月元旦の日に、長壽固齡の祝として食ふ、大根・押鮎・爪串刺・猪鹿の肉等はいふ。後には、猪鹿の代りに、雉・鳴を用ゐた。花鳥餘情「齒固は元旦の日の事なり、齒はよはひと訓めり、齒固はよはひを固むる心なり云々」
○押年魚。鹽押にした年魚。「押年魚の口をのみぞ汲ふ」さは、乾した年魚は固

い爲に、頭から食ふに齒も立たないので、幾度となく嘗め食ふさまを戯れて云うたもの。

○押鮎もし思ふやうあらむや。押鮎に若し心があるならば、好きな人の口さか好かぬ人の口さか言ふやうに、何か思ふ事があらうかさいふので、「口を汲ふ」さいふ事から戯れて言うたもの。

○思ひやらるゝ。想像される。「るゝ」は、動作の自ら起つて止められぬ意の助動詞。

○九重の門。宮城の門。「九重」は、禁裏のこゝ、天に九天あるに擬して宮城には九門があるといふ所から、九重さいふ。楚辭「豈不三爵陶而思君兮、君之門以三九重」

○しりくめなは。しめ繩のこゝ。汚穢を隔てるに用ゐるもので、門戸や社殿の四周に引き繞らす。古事記傳、「尻は藁の本をいひ、久米は許米にて、藁の尻を断すて、さながら許米置たる繩なり、書紀に端出之繩を作て此云三斯梨俱梅籬波」とあるにて知るべし。端出とは断ざる藁の尻の出たる由にて、即後世の志米繩の状なり。貞丈雜記「しめ繩の事、藁にて左繩になふなり、なひながら、所々に七五三の藁を下ぐるなり、三筋下げて間を置きて五筋下げ、又間を置きて七

【通釋】
二日。やはり大湊に碇泊して居る。講師が肴や酒を贈り届けた。

筋下げ、又間を置きて三五七、三五七ささげるなり、繩の兩端をば切り揃ふる事なし、其のまゝ置くなり、是れ取りつくるはず直なる姿なり、七五三の藁の間々には、ゆふしてを下ぐるなり、ゆふしてをしないでさ許りも言ふなり、ゆふしでは紙を \square 如し此切目を入れて、真中を取りて上へ折り上ぐれば \square 如し此なるなり、紙二枚重ねて切るなり云々」
○なよし。鱷いなのこと、「ほら」の小さなもの。
○ひら木。木犀屬の常綠樹。葉は厚く光澤があり、鋭い鋸齒を供へてゐる。鱷の頭や柀を矢張りしくめ繩に挟んで飾つたものであらう。柀は常綠樹で、嚴冬に雪をも消す勢があり、「なよし」は、名吉なよしで、出世の魚であるから、共に縁起を祝うて歳首の飾に用ゐたのである。

二日 なほ大湊にとまれり。講師もの酒おこせたり。

【語釋】

○とまれり。泊つてゐる。「り」は完了の助動詞、四段活用 of 動詞の已然形、サ行變格の未然形にのみ連る。

○もの酒。「もの」は、それと直接に指さず漠然と言ふ詞で、爰は「酒」に對して

【通釋】

三日。同じ場所にある。このやうに海の暴れるのは、もしや浪や風が、しばしとまれと、矢張別を惜しむ心があつてするのであらうか。待遠しい事である。

着をさして言うたもの。

三日 同じ所なり。もし、風浪のなほしばしと惜む心やあらむ。こゝろもとなし。

【語釋】

○風浪のなほしばしと云々。心なき風や浪が、暫く逗留してなれど、やはり別を惜しむ心があつて、してゐるのであらうか。「しばしと」は、「しばしあれと」の意。「なほ」は、直接「しばし」に連るのではなく、「惜む心やあらむ」につゞく副詞であらう。「もし、なほ、風浪の云々」とあれば紛はしくないが、斯くしては副詞が二つ重なる所から、かうした言ひ方をした爲に、不明瞭なものになつたのであらう。玉簪に、「なほに三ツの差別あり、一にはまだの意、二には俗語やはりさいふ意。三にはいよくの意也、此うちはまだとやはりは相通する所も多し、又いよくの意に用る事は、後世の事にて、古き歌には見えず、古歌にまだの意やはりの意によめるが、ふとさきとては、いよくの意と思はるゝが多き故に、中頃より紛れてそれらなはいよくの意と見るから自歌にも其心によむ事出来たるなり。頓阿の頃になりては、其意によめるもいと多し。然

【通釋】

四日。風が吹くから出發し得ない。昌連が酒や食物を進上した。この様に物を持つて来る人に、ただでは居れないで返禮をしようと思ふが、僅かの返禮もさせる品物が無い。賑やかなやうではあるが、内心氣が引けるやうな感がある。

れども又まだの意やはりの意なるも多し、然るを近代の人はいよいよの意を本義と心得る故に、まだの意の猶をも、やはりの意の猶をも多くは誤ていよいよの意とせり、よく古歌を見知らざれば紛れ易き事多し」

○惜む心。別を惜しむ心。

○心もさなし。待遠に思ふこと。待ちきれないで心のいられること。玉小櫛「すべて此詞は物の飽かぬ事あるを、かくあれかしと願ふやうの意なり、遅きを待つことにいふも其意なり。皆俗にいふことは少しことなり」

四日 風吹けば、え出で立たず。昌連、酒よき物たてまつれり。かうやうに物もて来る人に。なほしもえあらで、いさゝけわざせさす物もなし。にぎはしきやうなれど、まくることちす。

【語釋】

○昌連。傳不詳。

○酒よき物。酒よよい食物。

○たてまつれり。献上した。「たてまつる」は、「たて」を「まつる」その二つを重

【通釋】
五日、風や浪が止まぬか
ら、今日も矢張同じ場所
に居る。人々がしつきり
なしに見舞に來る。

れて出來た語、「たて」も「まつる」も、共に物を献上すること、大神宮儀式帳
「佐古銅五十鈴の宮に御食たつき」は、御食を奉るとの意。爰は、本文の記
者を女に擬してある爲に、貫之を第三者の地位に置いて、敬語を使つたもの。
○なほしもえあらで。何もせずには居られないで。「なほ」は、默の意。事を起し
たてる事なくたゞにあること。萬葉集「久方の天路は遠しなほなほに家に歸り
て業をしまさに」は、かれこれと言ふ事なくの意。また、「なほ人」などの「な
ほ」の如く、尋常の意にも用ゐる。「しも」は意味を強める助詞。此句の次に「何
か返禮をしようさは思ふが」といふ意の語を補ふ。
○いさゝけわざせさす物。僅かの返禮をさせる品物。
○にぎはゝしき云々。人々が見送りに來て、酒を飲み物を食ひなどして、賑やか
なやうではあるが、先方に對して氣が引けるやうな心持がする。

五日 風浪やまねば、なほ同じ所にあり。人々たえずとぶらひ
にく。

【語釋】

【通釋】

六日、昨日の通りだ。

【通釋】

今日は七日になつた。同じ湊に居る。白馬の節會などを想像するけれど、しるしがない。白馬は見えないで、海にたゞ白浪を見ることだ。かうして居る間に、池さいふ名のある土地に住む人の家から、鯉はなくて鮒をはじめとして、河の魚も海の魚も、その他のものも、長櫃に幾枚か擔ひつゞいて、持つて來た。若菜は籠に入れてあり、雉などは花の枝につけてある。若菜が今日はどういふ日

○さぶらひ。逗留の無聊を慰める爲に見舞に來るのである。

六日 昨日のごとし。

七日になりぬ。同じ湊にあり。今日はあをうまなご思へど、かひなし。たゞ波の白きのみぞ見ゆる。

かゝる程に、人の家の池と名ある所より、鯉はなくて鮒よりはじめて、河のも海のもこと物も、長櫃になひつゞけておこせたり。若菜籠に入れて、雉など花につけたり。若菜ぞ今日を知らせたる。歌あり。そのうた、

あさぢふの野邊にしあれば水もなき

であるかさいふ意味を知らせてゐる。歌がつけてある。その歌、

淺孝生の野邊にしあれば水も無き池に摘みつる若菜なりけり。

甚だ面白い。

この池さいふは土地の名である。自分の貴い人が男に隨うてその土地に来て、住んでゐたのであるよ。此長櫃の品物は皆の人、童までに與へたから、腹一杯食べて、太鼓腹を打つて喜んで、同船の人々は勿論海まで驚かして、波を立て、終ふであらう。この様にして、此間に出来事が多い。今日従者に破子を持たせてや

いけに摘みつるわかななりけり
いとをかしかし。

此のいけさいふは、所の名なり。よき人の、男につきて、下りて住みけるなりけり。此の長櫃の物は、みな人わらはまでにくれたれば、飽きみちて、舟子どもは、腹鼓はらつみを打ちて、海をさへおごろかして、波立てつべし。かくて此の間に、事おほかり、今日わりご持たせてきたる人、その名なごぞや、今思ひ出でむ。此の人、うたよまむと思ふ心ありてなりけり。さかくいひいひて、「波の立つなること」と、うれへいひてよめるうた、

行くさきに立つ白波の聲よりも

おくれて泣かむわれやまさらむ

とよめる。いと大聲なるべし。持て來たる物よりは、歌はいかがあらむ。此の歌をこれかれあはれがれども、ひとりもか

つて来た人は、その名を
なげ忘れたのか。おきに
思ひ出すであらう。此人
は歌を詠まうこの下心が
あつてやつて来たのであ
つた。色々それからそれ
へと物語などして、その
擧句「波の立つ事よ」と心
配して言つて、詠んだ歌、
行くさきに立つ白浪の
聲よりもおかれて泣か
むわれやまさらむ。
と詠んだ。その泣く聲は
思ふに大層大聲へ、あら
う。持参した品物に比べ
て、歌はどうあらうか、
感心しない。此歌を誰も
彼も讀めるけれど、一人
も返歌をしない。返歌の
出来る人も中に居るけ

へしせず。しつべき人もまじれど、これをのみいたがり、物
をのみくひて、夜ふけぬ 此の歌ぬし、「またまからず」といひ
て立ちぬ。ある人の子のわらはなる、ひそかにいふ、「まろ此の
歌のかへしせむ」といふ。驚きて、「いとをかしき事かな。よみ
てむやは。よみつべくば、はやいへかし」といふに、「まからず
といひて立ちぬる人を待ちて詠まむ」とて、求めけるを、夜ふ
けぬとにや、やがていにけり。「そもくいかがよみたる」と、
いぶかしがりて問ふ。此のわらは、さすがに恥ぢていはず。し
ひて問へば、いへる歌、

行く人もとまるも袖の涙川

みぎは
汀のみこそぬれまさりけれ

となむよめる。「かくはいふものか。うつくしければにやあらむ、
いと思はずなり。わらははごごにては何かはせむ、
姫おんな、翁おきなにをし

れど、この歌をばかり、稱讚して、物をばかり食うて、夜がふかくなつた。此歌を詠んだ主人は、「また参りませう」と言うて中座した。或人の子である童が、「つそり」と言うて此歌の返歌をさせう」といふ。驚いて「甚だ面白し事よ。まさか詠む事が出来まい。詠めるならば早く詠めよ」と促すに「参りませうと云うて、中座した人の來るのを待ちつけて詠まう」と言うて、その人を見付けたに、夜が深くなつたからといふのか、その人はそのまゝ歸つて終つた。「一體どう詠んだのか」と、不審に思

つべし。あしくもあれ、いかにもあれ、たよりあらばやらむ」とて、置かれぬめり。

【語釋】

○あなうま。白馬節會で、正月七日に朝廷で行ふ恒例の公事。此日天皇は紫宸殿に出御せられ、左右馬寮の馬二十一頭を、南庭に引渡らせて御覽になる。馬は陽の歌、青は春の色、正月七日に青馬を見ること。年中の邪氣を攘ふといふ。此儀式の起源は明かでない、支那の帝皇世紀「高辛氏之子、以三正月七日、恒登レ崗、命三青衣人、令レ列三青馬七疋、調三青陽之氣、馬者主レ陽、青者主レ春、崗者萬物之始、人主之居、七者七曜之清、微三陽氣之温一始也」とある故事などを倣うたもので、萬葉集、家持「水鳥の鴨の羽の色の青馬を今日見る人は限なしといふ」といふ歌があつて、天平寶字二年正月の作であるから、其頃には既に行はれてゐたものであらうか。昔は青馬さて白に青味を帯んだ馬を用ゐたのであるが、後世、白馬を用ゐるやうになり、文字にも白馬と書きながら、訓は矢張昔のまゝに「あなうま」と唱へて來たものである。白馬とした理由については、伴信友は「年中行事秘抄を引いて、十節記云、馬性以レ白爲レ本、天有白龍地有白馬、是日見白馬、即年中邪氣遠去不レ來と云ふかたの説に、さらに據

うて尋れる。この童は返歌をしようとは言うたもの、恥しく思うて言はない。たつて尋れるから、言うた歌。

行く人も止まるも袖の涙川水際のみこそぬれまさりけれ。

と詠んだ。

「このやうに巧みに讀むもんか。可愛いからさう思ふのであらうか、甚だ案外にうまい歌だ。子供の言葉では、どうしてこのやうに詠めやうぞ。老女や翁の作に擬する事が出来やう。まア兎に角よくもわるくも幸傾があれば言ひ送らう」と云うて、書きさめて置かれたや

り給へるものなるべし」と言うてゐる。

○たゞ波の白き云々。白馬は見えす、たゞ白波だけが見えるといふので、白馬から白波に聯想して、例の駄洒落を用ゐたもの。

○人の家の池と名ある所より。池といふ名のある所に住む人の家から。「池」は地名で、「池と名ある所の人の家より」と言ふべきを、形容詞句を下に置いて、「人の家の池」とつられ、其人の家の池から捕つた鯉といふやうな心持を添へた諧謔である。一本に「人の野の池と名ある所より」とある。之は、「野の池といふ地名の所の人から」の意。

○鯉はなくて。池ならば鯉がある筈であるに、その鯉はなくて、これも洒落て言うたもの。

○河のも海のも。河の魚も海の魚も。

○長櫃。長唐櫃のこご、衣服調度の類を入れる具。貞丈雜記「唐櫃に二品あり、長唐櫃と荷唐櫃なり、長唐櫃は長持の如く長し、是は一つを二人して擔ぐ也、荷唐櫃は長唐櫃の半分にて短し、是は二つを棒の兩方にかけて、一人して荷ふ也、何れも唐櫃には足六本あり、云々」

○になひつゞけて。幾つかの長櫃を大勢で擔ひ連れて來たのである。

うだ。

○籠。和名抄「唐韻云。籠ハ竹籠也、和名古」

○雉なご花につけたり。雉なごを花の枝につけて贈つて寄越したのである。「花」さあるは、梅の花であらう。竹取物語「或山寺にびんづるの前なる鉢の、ひた黒にすゝづきたるを取りて、錦の袋にいれて、造り花の枝につけて、かぐや姫の家にもて来て見せければ」「(火鼠の裘を)箱に入れ給ひて、物の枝につけて、……歌よみ加へて持ちていましたり」なごあり、其他、伊勢物語にも、梅の造り枝に雉をつけて奉つた事が見えてゐ、源氏物語にも、鞍馬寺の僧都から、五葉の枝に物をつけて源氏の君に贈つた事、鳥を萩の枝につけ、又は、雉を木の枝につけて贈つた事も見え、凡て昔は、物、こまに鳥を贈る場合に、木の枝や造花の枝に附けて贈るのが禮式になつてゐたらしい。萬葉集にも「從ニ吉野一折三取こけむせるまつがえ蘿生 松、柯一遺時、額田王奉入歌一首、み吉野の山松が枝は愛しきかも君がみ言を持ちて通はく」なごあつて、手紙を松の枝に附けて贈つた趣が見えてゐる。

○若菜ぞ今日を知らせたる。若菜がはじめて今日の意味を知らせたといふので、若菜によつて始めて正月七日らしい感じのしたのをいふ。昔は正月初子の日に人々が野邊に出て子松を引き長壽延命を祝したもので、後には一種の祝日となり、朝廷では此日曲宴を催し、また若菜を供し、主上はそれを羹として聞召し

たものである。子の日の遊びが何時頃から行はれたものか分らないが、萬葉、家持の歌に「初春の初子の今日の玉簪手にさるからにゆらく玉の緒」といふがあるから、稱徳光仁の頃は既に行はれてゐたらしい。斯の如く正月初子の日に若菜の羹を調じて食する事は早くからあつたが、正月七日に七種の若菜を調ずる事は何時頃から始まつたか詳かでない。子の日の羹の轉じたものであらう。枕草子に「七日は雪まの若菜青やかに摘み出でつ、」「七日の若菜を人の六日にもてさわぎ」などあるから、當時は七日に若菜を調じた事が明かである。慈鎮和尚拾玉集に「今日ぞかし齊紫菜芹摘みてはや七種のおものまゐらむ」とあつて、七種の名目が見えてゐる。公事根源に「供三若菜。内藏寮並に内膳司より、正月上の子日。是を奉る也。寛平年中より始れる事也。延喜十一年正月七日に後院より七種の若菜を供す。……若菜は七種の物なり。齊・紫菜・芹・蒔・御形・酒々代・佛の坐也。正月七日に七種の菜羹を食すれば其人病なく邪氣を除く事侍る也とぞ」とある。「若菜」は新しい菜の意。

○あさぢふの云々。淺茅の生えてゐる野邊であるから、池といふはたゞ名ばかりで、矢張野の邊りて摘んだ若菜であるよとの意で、同時に、「淺茅生の野邊」といふに、贈る人の心の荒れてゐる意味を持たせ、「水もなき池に摘みたる」と

いふに粗末なさいふ意を寄せたもの、要するに野の池さいふ名のある地で摘んだ若菜であるさいふ事を、洒落て詠んだまでのもの。「水もなき池」は、それが地名である事を知らせる爲に、「水もなき」さいふ説明句を附けたもの。「あさぢ」は、茅葺のこと、茅葺は丈高くのぼらぬものであるから淺茅さいふ。「なりけり」の「けり」は詠嘆の助動詞。

○いさをかしかし。甚だ面白いよき、右の歌を讀めて言うたもの。此時代は、右の歌のやうな地名に基いて、巧みに洒落て詠んださいふだけで、歌さしては何の面白味もないが、かうした小才の利いた智的な技巧のある言ひ振りを喜んだものである。

○此のいけさいふは云々。歌の中の「池」さいふ語を説明したもの。

○よき人。自分の貴い人。右の贈物の主の素性を説明したもの。

○男につきて。夫に付き隨うて。

○飽きみちて。十分に腹一杯食べて。

○舟子。舟を操る人。綱を引く者を綱子、田を作る者を田子、櫂をとる者を櫂子、獵に立つ者を獵子、馬を使ふ者を馬子などいふ類。

○腹鼓を打ち。此語は、十八史略「有ニ老人一含レ哺鼓レ腹撃レ壤而歌」さある如

く、食に飽きて太平を樂しむ狀。爰は、滿腹の太鼓腹を撃つて喜ぶのである。
○海をさへおごるかして。同船の人々は言ふまでもなく、海までも驚かして。「さへ」は、あるが上に更に事の加はる意の助詞で、「海をさへ」と云ふ句に、船中の人々は勿論と言つた意味が含まれてゐる。所謂、複雜を單純化した言ひ方である。

○事。出來事。

○わりご。中に仕切りのある、辨當箱の一種、和名抄「裸、俗ニ所謂破子。和利古、裸子中有レ障之器也」とある。貞丈雜記には、「わり子は、白木にて折の如くに作り、かぶせ蓋にしたる辨當箱なり、形は圓くも四角三角にも扇形にも様々風流にするなり。かぶせ蓋にて蓋も身も同じ深さなる故、兩方同じ如くなるを以てわり子と名づく。漆なごにて漆らず、白木にて作り。一度きりに、かけ流しにするなり」ともある。

○持たせて。從者に持たしめて。

○その名なごぞや。「その名なご忘れしぞや」の略で。その名を何故忘れたのかさういふ意。「なご」は、古今集「やどりせし花橋も枯れなくなご時鳥聲絶えぬらむ」とある如く、疑問の副詞。諸註は、「その名なごは忘れたが今思ひ出せるだ

らう」さいふやうに解し、「なご」を接尾語に見、「その名なご」を主語にしてゐる。又一説に、「なご」を「何ご」の意に解し、「その名は何ご云ひしか忘れたのを、今思ひ出すであらう」と解いてゐる。

○今。おつつけ。ぢきに。

○うたよまむま云々。此人の見舞に來たのは、單に別れを惜しむ心からばかりでなく、歌を讀まうと思ふ下心があつて來たのであるよ。

○さかくいひひく。歌詠む切掛けを作る爲に、色々な物語をして。

○波の立つなること。波の立つことよ。次の歌を詠む切掛けに波の事を言出したのである。歌は既に腹案があつた、その腹案をさうさは見せず、其場で突嗟の思付きで詠んだやうに見せかける爲に、その豫備的物語に波のことを語り出したのである。

○うれへ。心配すること。

○行くさきに云々。貴君の舟路の行く先に立ち願ぐ白波の聲よりも、獨り残り残されて悲しみ泣くであらう私の聲の方が、まさつて大きくあらうこの意。

○いさ大聲なるべし。「行くさきに」の歌は、着想も幼稚、殊に自分の悲しみ泣く聲を大濤の聲に比較した點に虚偽があり、拵へた歌といふ感じが強く、それだ

け眞實味が稀薄である。だから、それは甚だ大きな聲であらうと、擲揄ひ素見したのである。

○持て來たる物よりは、持つて來た品物に比して。枕草子「鶯は……さまかたちもさばかりあてにうつくしき程よりは、九重の内に鳴かぬぞいさわるき」の「よりは」も、比べてはの意。

○歌はいかゞあらむ。歌はごうあらうか、あまりよくはあるまい。「いかゞ」は、危ぶむ意。

○あはれがれども、感心するけれど。これは心にはさう思はないが口先だけ讚めるのである。

○しつべき人。返歌の出來る人。

○まじれゝど。交つてゐるけれど。

○いたがり。「いたし」の語根に「がる」といふ接尾語の添うたもの、いたく思ふこと。感心すること。「いたし」は、すぐれてよい意。源氏「口おほひて居たるまみいといたし」とあるも、優れてゐる意。

○またまからず。また參りませう。「まからず」は「まからんず」で、「ず」は「ます」の意。さて、「まゐる」は卑しい所から高貴な所に行くこと、「まかる」は、

高貴な所からさがること。王朝時代には此區別がはつきりしてゐたのであるが、爰は「まゐるこいふべきをわざと「まがる」と言つて、歌主の田舎臭い訛を見せたものである。人々が物をばかり食うて返歌をせぬので、歌主は手持無沙汰なので、不淨か何かに立つたのであらう。其時に「歸るのではない」事を斷る爲に、中座の挨拶に斯く言つたものである。一説に「まだまからず」の意にこり、未だ歸るのではないと云ふ意に解してゐる。また、「またまからず」の「また」を言葉と見ず、「この歌主また」とつゞくものとし、「まからず」だけを歌主の言葉と見て、「お暇致しませう」の意に解してゐる説もある。

○ある人。貫之をさす。

○まろ。自稱代名詞。

○いとをかしき事かな。甚だ面白い事であるよ。子供が突然返歌をしようと言つたので、果して出来るかどうか疑つて、好奇心から斯く言つたもの。

○よみてむやは。歌を詠むであらうか詠む事が出来まい。

○よみつべくば。詠む事が出来るならば。

○まからずさいひて云々。ぢきに参りませうと云うて、中座した人の、座に歸るのを待つて、それから詠まう。

○夜ふけぬこにや。夜が深くなつたと思つたからか。

○やがて。中座して座を起つたそのまゝ。

○いに。往くこと。立去ること。

○いぶかしがり。不審に思ふ。

○さすがに。私が返歌をしませうと言つたものゝ然し。

○行く人も云々。都に歸り行く人も、こゝに止る人も、共に別を悲んで袖に落ちる涙が川と流れる事である。そしてその川の水嵩が増して、水際がいよゝゝ濡れまさる事だこの意、涙の繁く流れるのを川に譬へて涙川といひ、涙川と言つた縁で、涙のいよゝゝ繁く、はげしくなりまさるのを、「みぎはのみこそぬれまさる」と言つたもの。譬喩が大袈裟で切實でない爲に概念的になつてゐるが、かうした智的な技巧的な歌が當時の好尚に合したのである。一説に、「みぎは」に傍の意を持たせ、傍なる我々までが、もらひ泣きをして、袖が涙に濡れてゐる意にさり、或は「みぎは」に「身」を言懸け、自身の意にさり、行く人も止る人も袖の濡れる中で、此方こそ濡れまさる意だと説き、又は、袖を流れる涙川の水際は矢張袖で、袖こそ濡れまさる意だと説いてゐるが、さう讀み過ぎずに、涙川の縁で、たゞ涙の甚しく落ちるの言つたものと見るがよからう。

○かくはいふものか。このやうにうまく詠むものか、「ものか」は、驚き怪しむ意を表はす詠嘆の助詞。枕草子「伏し拜みて、肩に打ちかけて舞ふものか」

○うつくし。可愛いこと。萬葉集「愛しき人の纏きてし数妙の音が手枕を纏く人あらめや」古義に「美貌かほよきなうつくしさいふは、美麗かほよければ人の愛賞めでたふるが故なり。然るを今の世には、うつくしきさいふを美麗かほよき本義と意得たるは非なり」「うつくしければにやあらむ」は、可愛いからであらうかさいふ意、次の「いと思はずなり」といふ句の心持を説明したものの。

○いと思はずなり。甚だ案外にうまい歌である。

○わらはごこにては何かはせむ。子供の言葉では、いかでこのやうにうまく詠めようぞ、詠めはしない。「何かは」は、いかでかはの意。諸註は「何かはせむ」を、「なににかはせむ」の意にとり、子供の作と言つても、何にしようぞ何にもならぬ、甚だ不似合で誰も信じないを解いてゐる。

○嫗翁になしつべし。嫗や翁の作に擬する事が出来る。「おんな」は老女のこゝろ。爰に嫗翁と言つたのは、貫之夫妻を暗にさす。「を」は強く思はせる意の助詞。萬葉集「生るれば途にも死ぬるものにあれば此世なる間は楽しくをあらな」
「つべし」は可能の意の助動詞。

【通釋】

八日、故障があつて、矢張同じ場所に居る。今晚月は海に没する。これを見て、在原業平朝臣が詠んだ「飽かなくにまだきも月のかくる、か山の端逃げて入れずもあらなむ」といふ歌が思ひ出される。もしもかの場合に業平が海邊でかの歌を詠まうならば、「波立ちさへて入れずもあらなむ」と詠んだであらうか。今その歌を想像して或人の詠んだ歌。

○置かれぬめり。翁、即ち貫之の手許に書きとめて置かれたやうだ。「めり」は、みえあり所見有で、ト見エルの意。推量の助動詞。

八日 さはる事ありて、なほ同じ所なり。こよひ月は海にぞ入る。これを見て、業平の君の「山のはにげて入れずもあらなむ」といふ歌なむおぼゆる。もし海邊にてよまゝしかば、「波立ちさへて入れずもあらなむ」とよみてまじや。今この歌を思ひ出でて、或人のよめりける、

照る月の流るゝ見れば天の河

いづるみなとは海にざりける

とや。

【語釋】

○さはる事。故障。

○業平。在原業平。阿保親王の第五子、右近衛中將であつた所から、在五中將と

天の川いづる湊は海に
ざりける。

と言ふのであらうか、

もいふ。六歌仙の一人。

○山のはにげて云々。古今集「惟喬の親王の狩しける供にまかりて、宿りけるに、歸りて、夜ひさ夜、酒のみ、物語をしけるに、十一日の月も隠れなむさしける折に、親王酔ひて、うちへ入りなむさしければ、よみ侍りける。なりひらの朝臣、飽かなくにまだきも月の隠るゝか山のはにげて入れずもあらなむ。」歌意は、何程眺めてゐても、これで十分だと思ふ事はないのに、早くも月の隠れる事よ、あの月の隠れるべき山の端が逃げて、月を入れないであつて欲しいといふので、月を親王に譬へて、親王の早くも寢所に入らうとするのを惜む意を述べたもの。

○おぼゆる。思ひ出される。

○もし海邊にてよまましかば。もし業平朝臣が、「飽かなくに」の歌を、海邊で詠んだならば。「ましかば」は、「ませば」を併んで、之は既定の條件彼は假定の條件を表はす。文の中に「ましかば」又は「ませば」さある時は、その文の終りを「まし」で結ぶことになつてゐる。

○波立ちさへて。波が立ち遮つて。

○この歌。「彼の歌」といふに同じで、業平朝臣の歌を指す。宣長云「すべてかの

さ言ふべきをこのと言へるこそ多し、心得置くべし、歌に是やこのさよめるも皆これや彼の也」源氏帯木「見るめこそもなく侍りしかば、此さがなものを、打さけたる方にて」さあるも、彼のさがな者の意。

○照る月の云々。照り輝く月の大空を西へ西へと流れて海に入るのを見るさ、天の河の流れ出る湊は矢張海であるよこいふ意で、天上の月が下界の海に流れ入るのから類推して、銀河も矢張流れ出る湊は、同じく下界の海であるさ断定したものの、論理を弄んだ調子の低い歌である。時代の風尙ではあるが、厭味のあるのは事實だ。「流るゝは、月の運行を、天の河の縁で、斯く言うたもの。」「みなさ」は、水門で、水の出入する口。「ざりける」は、「ぞありける」の約。「ける」は、詠嘆の助動詞。船の直路に「大川の湊へかゝる處を見渡せば川上より直ぐに見えわたりて、月夜ならば、まことに天の川よりつゞきて見ゆるさまなるべし。彼の出づる湊は海にざりけるこの詠を味ふれば、そのまゝよく叶ひて感情あるべし。大川の流れより、海に入るさまを心得ざれば此歌は解けざるべし云々」○さや。さかいふ歌であるの意。

九日 つとめて、大湊より那波なはのとまりをおはむとて、漕ぎ出

九日、早朝大湊から那波の湊に航海しようとして漕ぎ出た。誰も彼も皆國境内に見送らうとして、見送りに来る人が數多い中で、藤原言實、橋季衡、長谷部行政たちなど、國司の官舎を出かけた日から舟の泊てる、この湊かしこの湊に、後を追うてやつて来る。此人々こそ、眞情のある人々であるよ。此の人々の眞情の深さは、此の海の深さにも劣らないであらう。この大湊からこそ今はそれらの人々を別れて漕ぎ離れてゆく。これを見送らうとして、此人たちは後について來たのだ。このや

でけり。これかれたがひに、國の境の内はとて、見おくりに来る人あまたが中に、藤原の言實、橋の季衡、長谷部の行政らなむ、御館みだちより出で給ひし日より、こゝかしこに追ひ來る。此の人々を心ざしある人なりける。此の人々の深きこゝろざしは、此の海にも劣らざるべし。

これより今は漕ぎはなれて行く。これを見送らむとぞ、この人ごもは追ひ來ける。かくて漕ぎ行くまに、海のはとりにとまれる人も、遠くなりぬ。舟の人も見えすなりぬ。岸にもいふ事あるべし。舟にも思ふ事あれど、かひなし。かゝれど、此の歌をひとりごとにしてやみぬ。

思ひやる心は海をわたれども

ふみしなれば知らずやあるらむ

【通釋】

うにして漕いで行くにまかせて、海邊に残つて居る人も遠くなつた。舟の人も岸からは見えなくなつたであらう。岸の人々にも言ひたい事があらう。舟の人々にも思ふ事があるが、しるしがない。さうではあるが、次の歌を獨語して止んだ。

思ひやる心は海を渡れどもふみしなければ知らずやあるらむ。

○つさめて。早朝又は翌朝などいふ意。枕草子「冬はつさめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず」さあるは、早朝の意。同「橋の濃く青きに、花いさ白く咲きたるに、雨の降りたるつさめてなどは、世になく心あるさまになかし」さあるは、翌朝の意。

○那波。土佐國安藝郡奈牛利村。

○國の境の内はさて。國境内は見送らうさて。爰に國境内ミ言うたのは、土佐全國をさすのではなく、國司の廳のある長岡郡の内をいふのである。萬葉集「吉野の國の花散らふ秋津の野邊に」古義云「此は吉野は郡の名にて國にはあられど、郡郷などを國といふこそ古の常なり。堺をたて、人の住む地をば、なべて國さいひしなり」

○長谷部の行政。傳不詳。

○御館。國司の館。

○こゝかしこ。こゝの港かしこの港で、大津・浦戸・大湊などをさす。

○これより今は漕ぎはなれてゆく。大湊から今は漕ぎ離れて、見送りの人達からも別れて行くこの意。「國の境の内はさて見送りに来る人たち」に最後の別れをしてゆくのであるから、特に「今は漕ぎはなれてゆく」と言つたもの。

【通釋】

このやうにして、宇多の松原を過ぎてゆく。その松の數は何程多く、幾千年経過したともわからぬ。松の根も毎に波が打ち寄せ、枝毎に鶴が飛び違つてゐる。面白いと思つて見るに、だまつて

○漕ぎ行くまに／＼。漕ぎ行くにまかせて。

○舟の人も見えすなりぬ。陸の人々からは、舟の人も見えなくなつたであらうといふ意を「なりぬ」と斷定的に言うたもの。

○かひなし。しるしがない。

○かゝれど。漕ぎ離れたから、如何に思ふ事があつても、言ひ送る方法がなく、しるしのない事ではあるが。

○思ひやる云々。舟の中から陸の人々を色々想像して慥しく思ふ心は、海を渡つて通ふけれど、文をやる方法がないから、先方では自分の心を知らずに居るであらうかといふので、「ふみ」に文を踏みの意を言懸け、「渡る」の縁語としたもの。

かくて宇多の松原を過ぎゆく。其の松の數いくそばく、いく千年へたりと知らず。もどごとに波うち寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。おもしろしと見るに、堪へずして、或人のよめる歌、

見渡せば松のうれごとにする鶴は

見ては居られないで、或人の詠んだ歌。

見渡せば松のうれごこにすむ鶴は千代のごちさぞ思ふべらなる。

さ云ふのであらうか。此歌は場所の景色のよいのを見るに、それよりは劣つてゐる。

このやうな景色を眺め眺めして過ぎゆくにまかせて、山も海も夕暮の色がこめて、夜がふかくなり、東西の方角もわからなくなつて、日和の事は撮取の心に一任した。男性でも船の旅になれない人は、甚だ心淋しく感じる。まして女性ば舟底にうつぶして聲をたて、泣く。

千代のごちさぞ思ふべらなる

とや。此の歌は、所を見るにえまさらず。

かくあるを見つゝ漕ぎ行くまに、山も海も皆くれ、夜ふけて西東も見えずして、てけの事かちどりの心に任せつ。をのこもならはぬは、いとも心細し。まして女は、舟底にかしらをつきあてゝ、音をのみぞ泣く。かく思へど、舟子かちどりは、舟歌うたひて、何とも思へらず。其のうたふ歌は、

春の野にてぞ、音をばなく、わが薄にて、手をきる、摘んだる菜を、親やまほるらむ、しうとめやくふらむ、かへらや、よんべのうなるもがな、錢こはむ、おぎのりわざをして、せにも持て来ず、おのれだに來ず。

これならず多かれど、書かず。これらを人の笑ふを聞きて、海は荒るれど、心はずこしなきぬ。かく行きくらして、泊に至り

人々はこのやうに頼りなく淋しく思ふけれど、水夫や撮取は、舟歌をうたうて、何とも思つてゐない。平氣なものだ。そのうたふ歌は、

春の野にてぞ、音をばなく、わが薄にて、手をきる！、摘んだる菜を、親やまほらむ。しうこめやくふらむ。かへらや。よんべのうなぬもがな。錢乞はむ。おぎのりわざをして、錢も持て来ず。おのれだに來ず。

歌はこればかりでなく、澤山にあるけれど、書きしるさない。これらのうたふ歌を、人々の笑ふの

て、おきな人ひとり、たうめ一人、あるがなかにこゝちあしみて、物もものし給はで、ひそまりぬ。

【語釋】

○宇多の松原。香美郡赤岡の北に兔田村さいふがある。その「兔田」を昔は「うた」と呼んだものであらう。

○いくそばく。幾十許で、數の測り知れぬ程に多いのをいふ。古今集「花毎に飽かず散し、風なれば、幾十許わが憂しさかは思ふ」爰は、「いくそばくぞ知らず」さいふ意を、中止形を用ゐて、終りの「知らず」に應ぜしめたもの。

○もこ。根もこ。

○飛びかふ。飛び交ふで、飛び違ふここ。

○堪へずして。たと面白いと見えて居るだけでは居られないで。

○舟人。舟中の人の意で、貫之自身をさす。

○見渡せば云々。見渡すは松の梢毎にさまつてゐる鶴は、松をば永久の仲間と思つてゐる様である。淮南子「鶴千歲極三其游」李白「花暖青牛臥、松高白鶴眠」などある。此歌は、青松の梢に白鶴の遊んでゐる光景を、主觀的理窟で説

を聞いて、海はあれるが、自分の心は少し慰んで穩かになつた。このやうに一日中航行して日が暮れて、湊に着いて、翁一人、老女一人だけが、多くの人々の中で、心持がわるくて、食物もあがらないで、ひっそりしてゐる。

明したに過ぎぬもので、次に「此の歌は所を見るにえまさらず」とあるは、謙遜の辭でもあらうが、事實景色よりも劣つてゐる。「うれは」「うら」の轉、草木の莖又は幹の末。「べらなる」は、古今集をべらなる調ともいふ程に、平安朝の中頃一時盛んに用ゐられた語であるが、忽ちすたれて終つた。古今集「春のきる霞の衣ぬきをなうすみ山風にこそ亂るべらなれ」

○くれ。暮色に蔽はれる意。

○てけ。天氣。楫取は天氣の事なごよく見定めるものであるから、空模様によつて舟の進退を取計らふ事は、凡て楫取の考に一任したこの意。

○か。のこもならはぬは云々。男も船旅になれない人は甚だ頼りなくて心淋しい。

○船底にかしらを云々。船底にうつ伏してゐるをいふ。

○音をのみぞ泣く。聲をたて、泣く。「音泣く」「音に泣く」「音をこそ泣かめ」など皆同じで、單に「泣く」といふ意にも、又は聲を立て、泣く意にもいふ。

○かく思へど。人々はこのやうに心細く思ふけれど。一本に「かく思へ」ばさある。

○何さと思へらず。何さと思つて居らず平氣である。「思へら」の「ら」は完了の助動詞「り」の未然形。

○春の野にてぞ云々。春の野で泣聲を立て、薄で手をきりながら、自分が摘んだ菜を、童が持つて行つたが、親が食り食ふであらうか、或は姑が食ふであらうか。その昨夜の童が来て欲しいものだ、したならば錢を請求しよう。代價を拂はずに持ち歸つて、そのまゝ錢も持つて来ないし自身さへも来ない。「わが薄」を「若薄」の意に解してゐる説もある。「摘んだる」は、摘みたるの音便。「まほる」は、食り食ふこと、音便で「まうほる」さもいふ。「かへらや」は「かへらむや」で、唯の文句。「よんべ」は昨夜の音便。「うなぬ」は「うなるこ」「うなぬをさめ」などいふも同じで、王朝時代十二三才までの男女をいふ詞、當時小兒は垂髪で髪をあげないから、頂うなじにある意であらう、宇津保に「子だちいと多く、うなぬなごさぶらふ」「おぎのりわざ」は代價を仕拂はずに物を買ふこと。一本には、「よんべのうなるもがな、せに乞はむ」を「よんべの菜をそらごさをして」さある。

○これならず。これだけでなく。一本に「これなみに」さある、「この類で」さいふ意。「なみ」は列なみで、源氏、帚木「かの中の品にさりいで、言ひし、この列なみならむかしとおぼしいづ」同、玉葛「我がなみの人にはあらじ」などある。
○なき。和なぎで、糧なかになること。さて爰は、海は浪高く荒れるけれど、心は心

細い思ひが收つて穩かになつたさいふので、荒れる海に對して、「心は和きぬ」
と反對の現象を取り出したのは、例の諧謔である。

○行きくらしして。一日中航行して日が暮れる意。源氏、帯木「つれなくと降りく
らして」とあるも、雨が降つて日の暮れる意。

○おきな人ひさり。翁一人で、貫之をさす。

○たうめ。老女。後に出る「淡路のたうめ」のこゝ。古事記傳「和名抄に、專、
日本紀云、專領二字、讀ニ太字女乎佐女、今按專訓ニ毛波良、專一之義也、太
字女者、毛波良之古語也、今呼ニ老女ニ爲ニ太字女、とある中に、呼ニ老女ニ爲ニ
太字女、と云る、是れ太字女のたゞしき心也。……源氏物語に伊賀たうめとも
あり、又狐をたうめと云るこゝも物に見えたり、そは老女より轉れるなるべ
し、老女を多字女と云は、姥の轉れるにやあらむ云々」

○あるがなかに。大勢の人々の中で。

○こゝちあしみして。船酔の爲に心持悪く感じて。「悪しみて」の「み」は、「難
みして」「重みして」などいふ「み」と同じ用ゐるまで、「悪しんじて」といふ意。
萬葉集「さゆり花後も會はむと思へこそ今のまさかも愛しみすれ」とあるも、
愛しんすれといふ意。

【通釋】

十日、今日は此那波の碇泊所に滞在した。

【通釋】

十一日、曉に出帆して、室津に航行する。人が未だ寢て居て夜深いから、海の様子も見えない。たゞ月の光で東西の方角を知つた。かうしてゐる間に夜が明けて、皆手水を

○物もものし給はで。食事も召し上らないで。「ものし」は、爲すまいふ意の詞で、そのこゝを漠然といふ時に用ゐる。

○ひそまり。静かになるこゝ。爰は、打ち洗んでひっそりしてゐるこゝ。

十日 けふは、此の那波の泊にとまりぬ。

【語釋】

○そまり。船の行き着いて泊る所。はて此日の條に限つて特に「けふは」といふやうに、その目を取り立て、いふ意の詞を用ゐてゐるのは、此日の碇泊がこれまでとは違つて風浪の爲でなく、船碎を癒す爲である意を表したものであらう。

十一日 曉に舟を出して、室津むろつをおふ。人みなまだ寢たれば、うみのありさまも見えず。たゞ月を見てぞ、西ひんがしをば知りける。かかる間に、みな夜あけて、手洗ひ例の事どもして、晝になりぬ。今しはねといふ所に來ぬ。わかきわらは、此の所の名を聞きて、「羽根はねといふ所は、鳥のはねのやうにやある」と

つかひ、食事などをすまして晝になつた。今丁度羽根さいふ所に着いた。幼い童が此土地の名を聞いて、「羽根さいふ所は、鳥の羽のやうであるか」と尋ねる。まだ幼い子供の事であるから、人々が笑ふので、件の女の童が次の歌を詠んだ。

まことにて名に聞く所
羽根ならば飛ぶが如く
に都へもがな。

男も女も、ごうぞして早く都へ歸りたいものだと思ふ考があるから、この歌がよいさいふのではないが、その心持に共感して、忘れない。

此羽根さいふ所のことを

いふ。まだをさなきわらはの事なれば、人々笑ふに、ありける女童^{わらわ}なん、此の歌をよめる。

まことにて名を聞く所はねならば

飛ぶがごとくに都へもがな。

男も女も、いかでとく都へもがなと思ふ心あれば、この歌よしとにはあらねど、げにと思ひて、人々忘れず。

此の羽根さいふ所とふわらはのついでにぞ、また昔の人を思ひ出で、いづれの時にか忘るゝ。今日はまして母の悲しむ事は、下りし時の人の數たらねば、古き歌に「數はたらでぞかへるべらなる」といふ事を思ひ出で、人のよめる、

世の中におもひあれども子を戀ふる

おもひにまさるおもひなきかな。

とひつゝなむ。

【語釋】

尋ねる童の序に、また亡き子供の事を思ひ出して、何時も忘れる時がない。今日はまして母の悲しむ事は格別で、先年任國に下つた時の人数に數がたりないから、古歌に「北へ行く雁ぞなくなるつれて來し數は足らでぞ歸るべらなる」とある歌を思ひ出して、人の詠んだ歌。

世の中に思ひあれども子を戀ふる思ひにまさる思ひなきかな。と詠みつゝ悲しむ。

○人みなまだ寢たれば云々。「人みなまだ寢たれば」は、まだ夜の深い意味を表したもので、夜が深いから、海の様子もわからないといふ意。海の様子のわからないといふのは、自分達の舟の位置がどの邊に居るのか解らぬといふのである。一説に「船中の人はまだ寢てゐたから、屋形の戸も開けないで、それが爲に海の様子も見えないのだ」と解き、次の「たゞ月を見てぞ」といふを、「うはやの軒から落月のさし入るを見て」の意であると解いてゐるが、人の寢てゐる事と屋形の窓を閉めておく事とが、絶對的の關係にあるものと見るのが變である。のみならず、水平線上に近い落月の光がうはやの軒からさし込むといふのも實際にあり得ない事だ。

○たゞ。是のみの意。新古今集「人すまぬ不破の關屋の板庇荒れにし後はたゞ秋の風」とある「たゞ」と同じで、月を見て東西の方角を知つただけだといふ意。或は、源氏、桐壺「たゞ五六日のほどにいさよわうなれば」とある「たゞ」と同じく、僅かに、たつた、なごいふ意が。

○手洗ひ。手水をつかふこと。

○例の事ども。身じまひや食事をし、又神佛を禮拜すること。
○今し。「し」は其事を特にさりたて、言ふ意の助詞で、今丁度などいふに同じい。

○はれ。安藝郡。羽根川の川口に在る。

○わかきわらは。幼い童。「わかき」は、書紀などに幼の字を和阿志と訓み、凡て物のまだ成りまゝのはないのをいふ。萬葉に三日月を若月とも書いてゐるの
は、月の形の満ちまゝのはない意で、若の字を書いたもの。平安朝時代の物語
には人の幼穉いのを「わかし」と言つてゐる。又、この語は物の壯りに美麗い
意の美稱にも用ゐる、若年神、若山神、若山神などの「若」がそれである。

○ありける女童。以前の女童。件の女童といふに同じい。「行く人も云々」の歌
を詠んだ童を指してゐるので、「わかき童」とあるまは別の人である。だから特
に「女童」と言ひ別けたのだ。

○まゝこにて云々。「羽さいふは鳥の羽のやうにやある」と尋れたが、その言葉
が眞實で、羽さいふ此土地が眞實の羽根であるならば、その羽根をかりて飛ぶ
やうに早く都へ歸り度いものだとの意、所の名に鳥の羽の意を言懸け、鳥の羽
に託して歸京の心持を述べたもの、一寸した思ひ付きの歌である。「まゝこに

て「は、「羽さいふは云々」といふ間の言葉を受けて、それを假に肯定して言うたもの。「飛ぶ」は羽根の縁語。「もがな」は願望の意の助詞。「一説に「まことにて」を「はれならば」の副詞として、名に聞く所が名實一致して事實羽根であるならばといふ意に解く説もある。

○いかで。どうぞして。願ふ意の副詞。

○げにと思ひて。もつともと思つて。

○ついでに。連つて。つゞいて。羽根さいふ所の事を尋れた童の無都氣な可愛い態度に關聯して亡兒を思ひ出したのである。

○昔の人。亡き子供。

○いづれの時にか忘るゝ。何時になつたら忘れるか、忘れる時はない。「か」は反語。

○今日はまして。貫之が京を發つて土佐國へ下つたのは、五年前の延長八年十一月十一日であつたから、その十一日といふ日には、特に昔の出京の時の事が思出され、國で死んだ子供の事も殊になつかしく慕はれるのである。だから「今日はまして」と云うたもの。

○數はたらでぞ云々。古今集、響旅歌、題しらず、よみ人知らず。「北へ行く雁ぞ

鳴くなる連れてこし數は足らでぞ歸るべらなる。」とあり、左註に「此歌は或人男女諸共に人の國へまかりけり。男まかりたりてすなはち身まかりにければ、女ひさり京へかへりける道に、歸る雁の鳴きけるを聞きて詠めるさなむいふ」とある。歌意は、北の方へ歸つてゆく雁がなく事よ、あれは故郷から連れ立つて來た仲間が、中途で死に失せなごして、來る時よりは數が不足して歸るのであるからであるやうだといふので、伉儷を失うて歸る吾身の悲みを、雁に託して詠んだもの。

○思ひ出で。此所、文意が曖昧で、本文の文字通りに解釋すると、古歌を思ひ出して或人が次の歌を詠んだといふので、古歌を思ひ出した人と次の歌の作者とは同一人であり、且古歌を思ひ出す事が、次の歌を詠む道火線になつてゐる。然るに古歌と次の「世の中に」の歌とは何等思想上の聯絡がない。のみならず上に「母の悲しむ事は」とあるのを見るに、「下りし人の云々」は母の悲しむ事の理由を説明したものでなければならぬ。さうすると古歌を思ひ出した人は矢張母でなければならぬ。然るに「思ひ出で」から、直に「人のよめる」といふに連つて、「母の悲しむ事は」といふ係りに應ずる結びの文句がない。要するに此所に脱文でもあるのか。假に補足するならば「思ひ出で、甚しく、かく

て人のよめる」とでもいふ意味であらうか。舟の直路には、「思ひいで、」の下に「詠める。つれて來し數やたらぬと天つかり同じ思ひに鳴き渡るらしとぞいへる。また、そを聞きてある」といふ文を補うて解いてある。

○人のよめる。「人」は貫之をさす。

○世の中に云々。世の中には色々の物思ひがあるが、亡き子供を戀しく思ふ思ひ以上の物思ひはないよといふので、「思ふ」といふ語を何遍か繰返して、文字上の遊戯を試みた、極めて概念的の歌である。萬葉集「秋の野に咲ける秋萩秋風に靡ける上に秋の露置けり」後撰集「思ふ人思はぬ人の思ふ人思はざらなむ思ひ知るべく」六帖「心こそ心をはかる心なれ心の仇は心なりけり」など皆同じ巧みの歌で、文字の遊戯に過ぎない。

○いひつゝなむ。「いひつゝなむ悲しむ」といふ意。

十二日 雨降らず。文時ふみとき、維茂これもちが舟のおくれたりし。奈良志津ならしづより室津むろつに着きぬ。

【語釋】

○文時・維茂。二人とも傳不詳。紀氏の屬官であつたらう。一説に、文時は貫之

【通釋】
十二日、雨が降らない。

文時・維茂の、一行からお
くれてゐた舟が、奈良志
津から室津についた。

【漢釋】

十三日の曉に少し雨降
る。暫くたつて止んだ。
男や女が誰も彼も湯をつ
かばうと言つて、舟から
近邊の恰好な場所におり
てゆく。海を眺めるこゝ、
雲もみな波さぞ見ゆる
蟹もがないづれか海さ
問ひて知るべく。
と詠んだ。
さて月の十日過ぎである
から、月が風情がある。

の子の時文のこゝであらう。

○おくれたりし。文時・維茂の乗つた舟の一行よりおくれたのが。「しほ過
去の助動詞「き」の連體形。斯く連體形で句の切れてゐるのは、それが主格であ
る事を示すので、その句の次に「ので」「のが」といふ語を補うて解く。

○奈良志津。室津の西北約半里の所に在る。

十三日の曉に、いさゝか雨降る。しばしありてやみぬ。男女こ
れかれ湯あみなごせむとて、あたりのよろしき所におりて行く。
海を見やれば、

雲もみな波さぞ見ゆるあまもがな

いづれか海と問ひて知るべく

となむ歌よめる。

さて十日あまりなれば、月おもしろし。舟に乗りそめし日より、
舟には、紅くれなこく、よき衣着ず。それは海の神におちてといひて、

舟に乗り初めた日から、舟では紅色が濃く、立派な着物を着ない、それは海神を怖れて、身なりをやつすのだ。そのやうになりふりをかまはぬからは、この上、體裁を顧みる必要はないと言つて、何かその邊の芦陰にかこつけて「ほやのつまのいすしあはび」を、不本意な脛まで裾をまくりあげて、見せた。

何の蘆陰あしかげにこことづけて、ほやのつまのいすし、すしあはびをぞ、心にもあらぬ脛はすにあげて見せる。

【語釋】

○湯あみ。湯を浴びて身を洗ふこと。

○あたりのよろしき所。近邊の湯浴ゆあみをするに叶うてゐる所。

○おりて行く。舟から下りて行く。

○雲もみな云々。遠く空と海とが相接して、空に浮ぶ雲も皆波になつて見える。それが海で、それが空が羣れて、その區別を知らうが爲に、海人が居て欲しいものだといふので、蒼空に浮ぶ白雲を白浪に見立て、詠んだもの。人麿の作に「天の海に雲の波立ち月の船星の林に漕きかくる見ゆ」といふがあるが、雲を浪と見、空を海と見るといふ事が、理智の働きで、實際の感じではない。

○月おもしろし。月が趣がある。

○海の神におちて。舟に乗るこ、紅色の濃い立派な着物を着ない、それは海の神におそれ着ないのだと、一面によい衣服を着ない理由を説明し、一面には、既に斯く身なりをかまはない以上、他の體裁も顧みる必要がないといふ意を含

めて、次に隠し所をも隠さなかつた事の理由を述べたもの。海神が美人や美しい衣裳、財寶などに目をつけて、その爲に海の暴れるといふ事柄は、古くから人々に信じられてゐたもので、古事記、廿七卷、日本武尊東征の條に、同伴した橘姫が相模の海に身を投じて、浪の暴れるのを鎮めた事が見えてゐる。その時の事を、神明鏡には「それより相州へ越え、上總へ渡り給ひけるに、伏戸の渡りにて、波荒れて船已に覆らむさせるを、梶取り申しけるは、船中の美人を龍神の見たるを覺え候と申しければ、數百人の軍士を失はむよりはさて、最愛の橘姫と申す夫人を一人流し給へり。誠に忝し、さて船荒ることなくして、總州へ渡り云々」とある。また源氏物語、須磨「海の中の龍王いたうものめでするものにて云々」ともある。

○何のあしかげにこまづけて。此句は諸註まち／＼で、舟の直路には、「それは海の神の陰礙をなす事あるにおちてこいひて憚るなりけり。さて然か海神におちて、色ある衣だに着ぬ程の事なれば、髪かたち身もこりくづし、此上に何をかは恥ぢんとて、女ごもが、いと氣づよくなりて、何のそのと云ひつゝ、苜の葉かけにかこつけて」と解き、創見には「何の苜かけは、何處と指さず、そこらあたりの苜陰にさ打ちこめていふ意ばへなり。……委しく言へば、何か、そこ

らの芹陰にさいふにて、わざと推しあてにおぼめくも、次なるいみじきあざれをほのめき出でん料なり。事づけては事よせてにて、それによりてさいふなり」とある。由豆流は、「何のあしかげは河のあしかげにて、何は河の誤字であらうさいふ。思ふに創見の説が最も妥當であらう。要するに、全く障壁のない場所ではさすがに恥ぢて、海邊の芹陰を口實に、其處で湯浴をしたものである。

○はやのつまのいすし。「はや」は、和名抄「老海鼠、保夜、俗用ニ此保夜二字」とある。「いすし」は貽貝いしかひの肉を酢で漬けたもの。さて「はや」については、五雜俎に「海鼠一名海男子、其狀如ニ男子髣々然、淡菜之對也」とあり、貽貝については、海錯錄に「殼菜一名淡菜、形似ニ珠母、一頭尖中脚ニ少毛、號ニ東海夫人、又、或誰謂ニ之東海婦人、耶、當レ謂ニ西施不潔。」とある如く、戯れて老海鼠を男根、貽貝を女陰に比し、延喜主計式に「貽貝保夜交鮓」などあり、且、此頃の破子の贈物中に、老海鼠や貽貝・鮓などがあつた所から、男根のつれあひの女陰といつた意を、「はやのつまのいすし」と、食料品の名に寄せて、ぼかして言うたもの。「つま」は、「集め」の「つめ」であるとも、また添へる意であるともいふ説があるが、爰は單に妻（配偶者）の意であらう。海錯錄「淡菜」とある

は貽貝のこと。

○すしあはび。鮓の鮓。延善主計式「鮓鮓、貽貝富那交鮓、各四十六斤」などある。この鮓も女陰に譬へたもの。

○心にもあらぬ。不意なこと。

○脛にあげて。創見に「裳裾或は袴など脛までかゝげあぐるをいふなり。それを轉して、何によらず、あらはに物を見することを、ざればみては、脛にあぐといひけん。今の鄙言に、隠す事を言ひ表はすを、尻をまくるなどいふに似たり。又見せんとして見するなられば心にもあらすといふ」さある。さて「心にもあらぬ」を、一本には「心にもあらす」さある、「心にもあらす」は、「脛にあげて見せける」全體にかゝる副詞であるが、「心にもあらぬ」といへば「脛」にかゝる形容詞である。

【通釋】

十四日、夜明け方から雨が降るから、同じ所に碇泊してゐる。舟の主人が節目の物忌をする。精進料理がないから、正午以

十四日 曉より雨降れば、同じ所にとまれり。舟君せちみす。精進物さいじものなければ、午うまの時より後に、舵取の昨日釣りたりし鯛に、せになければ、米を取りかけて、おちられぬ。かゝる事おほく

後は、昨日、舵取の釣つた鯛を、錢がないから米と交換して、精進おさしなされた。かうした鯛と米とさかへる事が澤山あつた。舵取がまた鯛を持つて来た。その返しに米や酒をしぼくくれてやる。舵取の機嫌がよい。

ありぬ。舵取また鯛もて來たり。米酒しぼくくる。舵取けしきあしからず。

【語釋】

○舟君。舟の主人で、貫之をさす。

○せちみ。節忌の義、月毎の定つた物忌をいふ。昔は月の八日十四日十五日二十三日二十九日三十日を六齋日と云うて、此日は身を慎み心を淨めて持戒したものだ。齋は物忌の義である。持統天皇五年二月、公卿に詔して六齋を行はしめたのが、我國の六齋の起源である。大寶令の制にも、六齋日は公私とも殺生を禁斷する趣を規定してある。

○精進物。精進料理のこと。「精進」は、心を精純にして佛道を勤め懈怠しない意であるが、轉じて、身を淨め心を慎んで潔齋すること、魚鳥を食はないこと。

○午。正午。

○米を取りかけて。鯛の代價に拂ふ錢がないから、米をやつて買つたといふ意。

○おちられぬ。精進おさしなされた。即鯛を食つて精進を止められたのをいふ。

「れ」は崇敬の助動詞。

○かゝる事。錢が無く、それが爲に、米などで楯取等の釣つた魚を買ふこと。

【通釋】

十五日、今日小豆粥をにない。矢張り和がわるいから、残念にゐざるやうに僅かづつ航海してゐる間に、今日で二十日以上経過した、空しく日を過すから、人々は海を眺めて嘆息しくしてゐる。女の童の詠んだ歌。

立てば立ち居れば又居る吹く風さ波とは思ふ
 ぢちにやあるらむ
 言うても甲斐のない幼い者の詠んだ歌としては、似合はしい。

○くる。與へる。くれてやる。

○けしきあしからず。機嫌のよいこと。

十五日 今日あづき粥にす。くちをし、なほ日のあしければ、
 ゐざる程にぞ、けふ二十日あまり経ぬる。いたづらに日を経れば、
 人々海を眺めつゝぞある。めのわらはのいへる、

立てば立ちゐれば又ゐる吹く風と

浪ごはおもふぢちにやあるらむ

いひかひなきものゝいへるには、似つかはし。

【結釋】

○あづき粥。昔は正月十五日には小豆を入れた粥を食したもので、その粥を望粥もちかゆと云うた、それは陰曆十五日を望もちと云ふから、十五日粥の義で、望粥もちかゆと云つたのである。枕草子「十五日は、もちかゆのせくまゐる」然るに後世は餅粥もちかゆの意にさつて、小豆粥に餅を入れるやうになつた。起源は世風記「正月十五日煮こ小

豆粥ニ爲三天狗ニ祭ニ庭中案上ニ則其粥凝時向ニ東方ニ再拜長跪腹レ之、終レ年無ニ疫氣レニレこあるこさから起つたとも、又、高辛氏の女が正月十五日に菘中に死し、其魂が道路に迷うて行人を惱ました、そこで其女は平生粥を好んだから、此日粥を煮て之を祭ると福がないとて此儀式が始つたともいふ。

○くちをしく。「ぬざる程に」へつづく副詞。一説に、上の句につゞけて、小豆粥を煮なかつた事が残念だと解する説もある。

○なほ日のあしければ。十五日も矢張日和が悪いから。

○ぬざる。少しづつ進むこと。

○いたづらに。空しく。

○海を眺めつゝぞある。海を眺めては嘆息し眺めては嘆息してゐる。「つゝ」は動作の繰返される意の助詞。「ながめ」は眺望の意と嘆息の意との兩意に用ゐたもの。物思ひをする時は空しく空を見詰めてゐるものであるから、物思ひする事を「ながめ」と云うた。源氏「いさつれぐに眺めがちなれば」やがてながめおはします」など、皆物思ひの意。

○めのわらは。「行く人も」の歌を詠んだ女の子。

○立てば立ち云々。風が吹き立つと浪も立ち、風が止むと浪も鎮まる、して見る

【通釋】

十六日、風や浪が止まな
いから、今日も矢張同じ
場所に碇泊してゐる。海
に浪がなく平らで、何時
か早く、み崎さいふ所を
渡らうさばかり、ひたす
ら思ふ。しかし風も浪も
共に止みさうもない。或
人がこの波の立つのを見
て詠んだ歌。

霜だにもおかぬ方ぞさ
言ふなれど波の中には

さ、吹く風と起つ浪とは、互に愛し合ふ同志であらうか。
○いひかひなきもの。言うてもしるしのない意で、役に立たぬこと、詮ない事
をいふ。又、幼い者、賤しい者、愚かなこと、取り所のない事にもいふ。
○似つかはし。似合はしい。

十六日 風波やまねば、なほ同じ所にとまれり。唯海に波なく
して、いつしかみさきさといふ所、渡らむとのみなむ思ふ。風波
ともにやむべくもあらず。或人の、此の波立つを見てよめる歌、
霜だにもおかぬ方ぞといふなれど

波のなかには雪ぞ降りける

さて舟に乗りし日より、今日までに、二十日あまり五日になり
にけり。

【語釋】

雪を降りける。
さて舟に乗つた日から、
今日までに二十五日にな
つた。

○唯。ひたすら。

○いつしか。未來のことを待遠に思ふ時にいふ詞。「何時か早く」といふ意。萬葉集、旅に在りて戀ふれば苦し何時しかも都に行きて君がめを見む」

○みさき。室戸崎のこと。

○霜だにも云々。霜さへも降らない暖い地方だと言ふのであるが、沖に立つ波の中には、霜どころか雪が降つてゐる。白氏文集「誰言南國無霜雪、盡在愁人髮髮間」といふ詩句に基き、白波を雪に見立て、詠んだもの、當時はかうした古人の詩句に依據して詠むといふやうな事に知的興味を持つたものである。

○舟に乗りし日。「住む館より出で、舟に乗るべき所へわたる」とある、十二月廿一日の大津で舟に乗り込んだ日といふ。十五日の條に「けふ二十日あまり経ぬる」といひ、又こゝに「二十日あまり五日になりにけり」と言うてあるのは、舟行の捗らない爲に、人々が倦みあぐんで、徒らに日を數へて嘆息するさまを表したものの。

十七日 曇れる雲なくなりて、
曉月あかつきづくよ夜いとおもしろければ、舟

【通釋】

十七日、空を蔽うて居る雲が消えて、月のある夜明けの空が、甚だ趣きがあるから、舟を出して漕いで行く。この漕ぎ出してゆく時、大空が海に映つて、空も海も一つもの、やうであつた。道理で、昔唐の詩人賈島は「棹は穿つ波の上の月を、舟はおそふ海のうちの天を」さ詠じたであらう。いかにも尤もな事だ。その漢詩はなまじつか聞いたのである。又或人の詠んだ歌。

みな底の月の上より漕ぐ舟の棹にさはるは桂なるらむ。

この歌を聞いて、又或人

を出して漕ぎ行く。此の間に、雲の上も海の底も、同じ如くになむありける。うべも昔のをのこは、「棹はうがつ波の上の月を、船はおそふ海のうちの天を」とはいひけむ。聞きさしに聞けるなり。又ある人のよめるうた、

みなその月の上より漕ぐ舟の

さをにさはるは桂なるらむ

これを聞きて、ある人の又よめる、

影見れば波の底なる久方の

空こぎ渡るわれぞわびしき

かくいふ間に、夜やうやく明け行くに、舵取ら「黒き雲にはかに出で來ぬ。風も吹きぬべし。み舟かへしてむ」といひてかへる。此の間に雨降りぬ。いとわびし。

の詠んだ歌。

影見れば波の底なる久方の空漕ぎわたるわれぞわびしき。

このやうに歌など詠んでゐる間に、夜がだん／＼明けてゆくに、舵取ちが「黒雲が急に出て来た。風も吹くであらう。舟を漕ぎ戻して終はう」と言うてかへる。この間に雨が降つた。甚だ心細い。

【語釋】

○曉月夜。曉に月のある頃。月の十六日以後の曉をいふ。

○雲の上も海の底も云々。大空が海に映つて、水の底に空のあるやうに見える、

即ち海底と大空が一つになつて見える光景をいうたもの。

○うべも。道理で。「うべ」は、げにもつともだご承諾する意の詞。

○昔のなのこ。昔の男で、唐の詩人賈島をさす。

○棹はうがつか云々。漁隱叢話前集十九に「棹穿波底月、船壓水中天一といふ、賈島の詩の句がある、其意味は、波の底に天上の月影が映つてゐる、その波の上に棹さして漕いで行く、そして大空のうつ／＼てゐる水の上に船は浮んでゐる事だといふのである。さて原詩には「波底月」とあるを「波の上の月」「水中天」とあるを「海のうちの天」と改め、「壓」とあるを「襲ふ」としたのである。その故は、當時上流社會の教育は、枕草子二十段に、左大臣師尹が女の宣耀殿女御に教へられた言葉として、「一には御手を習ひ給へ、つきには琴の御琴を、いかに人に弾きまますむとおぼせ。さて古今の歌二十卷を皆浮べさせ給はむを、御學問にはせさせ給へ」とある如く、女子は琴を弾き、書をかき、歌を學ぶことが主要なもので、源氏物語帯木にも「うちよみ、走り書き、かい彈く爪音、手

つき口つきたごたごしからず」と云うて、理想の才媛の資格を述べてゐる。そして男子は書傳・書道・遊戯を學んだもので、女子は漢詩漢文には疎遠であり勝であつた。随つて支那の故事や詩をよく知つてゐる事は、女子としては不似合な事で、源氏物語、帚木卷の女の品定めの際にも、漢詩漢文に精通した女を評して、さうした女と對座してゐるのは實に恐しい、むしろ尋常に鬼と向つてゐる方がましであるといひ、又女として、「三史五經の道々しきかたを明かに悟り明さむこそ愛敬なからめ」と言つてゐる。本文の作者は、冒頭に斷つてある通り、女に擬してゐるので、わざと原詩の文句と異なつた言ひ振りをし、原詩をば十分に見知らぬ態度を装つたものである。

○聞きさしに聞けるなり。なまじつか聞いたのである。「聞きさし」は、少し許り聞くこと。「さし」は、その事を半ばでさし置く意の接尾語。原詩の文句と少し違へて書いてある理由を斷つたもの。

○みなその云々。水底に映つてゐる、月の上を漕ぐ舟の、棹にあたるものは、月の中にあるさいふ桂の樹の枝であらうといふので、和名抄「兼名苑云、月中有レ河、河上有レ桂、高五百丈」また西陽雜俎「舊言、月中有桂、有蟾蜍、故異書言、月桂高五百丈、下有一人、常斫之」などある傳説によつて、海底の藻を

桂に見立て、讀んだもの。前に「棹は穿つ波の上の月」さある文句から、月中の桂を聯想し、棹に障る藻さ桂樹の枝さを結びつけて詠んだ。理智的な歌である。月中の桂を詠んだ歌は、萬葉集「目には見て手には取らえぬ月内の桂の如き妹を如何にせむ」「もみちする時になるらし月内の桂の枝の色付く見れば」古今集「久方の月の桂も秋は猶もみちすればや照りまさるらむ」などある。「よ」は、「を」の意、竹取物語「あたりよりだにな歩きそ」萬葉集「古に戀ふる鳥かも弓弦葉の三井の上より鳴き渡りゆく」

○影見れば云々。水に映つてゐる影を見るさ、大空が水の中に浮んで見えるが、その大空を漕ぎ渡る自分が心細く感じるさいふので、前の「船は襲ふ海の中の天」といふ句から思付いて詠んだもの。大空の影を浸してゐる浪の上、それは一層の頼りなき、淋しさ、はてしなきの感を惹起するものだ。海を渡る心細さは、波の底に映る大空を漕ぎゆく事に、その極所を持つてゐる。「わびしき」といふ主翻句が「波の底なる久方の空こぎわたるわれぞ」と一氣に讀み下して來た句さ少しの隙もなく緊密につゞいてよく利いてゐる。「影見れば」の一句は餘分のやうに思はれる。「久方の」は、空の枕詞。「わびし」は、心細いこと、淋しいこと。

【通釋】

十八日、矢張同じ場所に居る。海の浪が荒いから舟出をしない。此碇泊所は、遠くを見ても、近くを見ても、大層おもしろい。だけれども、長の碇泊に氣を廣らして不愉快であるから、何が何やら一向感じない。従者同志は氣晴しであらうか、漢詩など歌ふであらう。舟も出さずに空しく日を過すことであるから、或人の詠んだ歌。
いそぶりの寄する磯には年月をいつともわか

○み舟。紀氏の乗つてゐる舟であるから、例の敬語を用ゐたもの。
○かへしてむ。室津へかへして終はうこの意。「てむ」は未來完了の助動詞。

十八日、なほ同じ所にあり。海荒ければ舟出さず。此のごまり、遠く見れども近く見れごもいとおもしろし。かゝれども苦しければ何事もおもほえず。をどころちは心やりにやあらむからうたなごいふべし。舟も出さでいたづらなればある人のよめる、

いそぶりの寄する磯には年月を

いつともわかぬ雪のみぞ降る

此の歌は、常にせぬ人の事なり。またある人のよめる、

風による波の磯には鶯も

春もえ知らぬ花のみぞ咲く

ぬ雪のみぞ降る。

此歌は平素歌など讀まぬ人の詠んだ歌である。又或人の詠んだ歌。

風に寄る波の磯には鶯も春もえ知らぬ花のみぞ咲く。

此等の歌を、幾分よい歌だと思つて聞いて、舟中の主君であつ翁が、これまでの船中生活の不愉快な氣晴しに詠んだ歌。

立つ波を雪か花かと吹く風ぞよせつゝ人をはかるべらなる。

此歌なごを、人が何かと批評するのを、或人が又一心に深く聞き入つて、歌を詠んだ。その歌詞は三十七文字である。人が

此の歌ごもを、すこしよろしと聞きて、舟の長しける翁、月ごろの苦しき心やりによめる、

立つ波を雪か花かと吹く風ぞ

よせつゝ人はかるべらなる

此の歌ごもを、人の何かといふを、ある人また聞きふけりてよめり。その歌よめる文字、みそもじあまり七文字、ひと皆えあらで笑ふやうなり。歌ぬしいとけしきあしくて笑ます。まねべごもえまねばず。書けりごも、えよみあへがたかるべし。今日だにかくいひがたし。まして後にはいかならむ。

【語釋】

○遠く見れごも云々。遠くを見ても近くを見ても。

○かゝれごも。このやうに趣のある面白い景色ではあるが。

○苦しければ。長く碇泊してゐる爲に、氣を腐らして、不愉快なのをいふ。

音黙つては居られないで笑ふやうである。歌の作者は大層機嫌がわるくて笑はない。その歌は人が眞似て口吟まうとして眞似るゝことが出来な
い。たゞひ文字に書いても、讀みおほせることが出来難くあらう。歌を聞いたその當座でさへ、このやうに眞似て言ひ難い。だからまして後日には、どうあらうか、甚だ覺束ない事だ。

○何事もおもほえず。面白いさも何さも感じない。

○なごごち。男同志。貫之の従者達をさす。

○心やり。氣晴し。憂き心を遣り失ふ意。

○いたづらなれば。空しく日を過してゐるから。

○いそぶりの云々。磯觸の打寄せる磯邊には、年月を今は何時であるとも區別しない、季節にかまはず常に降る雪ばかりが降つてゐる。磯に碎ける白浪を雪に譬へ、その雪が眞實の雪でない事を思はせる爲に、「年月をいつともわかぬ」と説明したもの。「いそぶり」は磯浪と同じで、磯邊に打寄せる浪。

○常にせぬ人の事。常には歌など讀まない人の詠んだ歌。

○風による云々。風の爲に波の打ち寄せる磯邊には、鶯も春も知る事の出来ぬ花ばかりが咲いてゐる。白浪を花に譬へて詠んだので、その花が譬喩である事を思はせる爲に、鶯や春さは關係のない花と云うたもの。この花は梅の花を意味してゐるのであらう。古今集「鶯の笠に纏ふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるやと」萬葉「我が宿の梅の沉枝に遊びつゝ鶯鳴くも散らまく惜しみ」など、梅花には鶯が来て鳴くものだといふやうに遠く奈良朝頃から考へてゐた。

○舟の長しける翁。舟の中の主君である翁。貫之のこと。

○月ころ。數月來。こゝは先月このかたの意。

○立つ波を云々。吹く風が立つ波を磯邊に打寄せくして、雪であらうか、花であらうかさいふやうに見せかけて、人を欺く様である。「よせ」に、浪を岸に打寄せる意と、雪が花か事よせる意との兩意を兼ね、さて、前の二首がそれぞれ、波を雪と花とに譬へて詠んであるのを受けて、それらを一首にまごめて詠んだもの、風を擬人し、磯邊の浪を人が或は雪或は花と見るのは、それは風が人を欺く所業であると言つてゐる點に、貫之の理窟深い所が見えてゐる。

○何かさ。何やかやと。

○聞きふけりて。深く聞き入る。一心に念を入れて聞く。

○みそもじあまり七文字。三十七文字。和歌の形式は、五七五七七の三十一文字である。だから三十二文字以上は字餘りとして普通は嫌ふのである。季吟は、「歌の文字あまりするに、節奏のならひさて、うち唱ふるに、口にたまりて悪しく聞ゆるは、きらふ事なり。文字餘りても、ほど拍子悪しからぬやうによむべしとかや。歌林良材、二條院讀妓、『わだつうみの沖つしほあひにかづく海人の、息もつきあへず物をこそ思へ』とよめるは、句毎に一字づゝあまりたれども、程拍子よき故に廿六字ありて、耳にたゞすこなり。又京極黃門の未來記に『忘

れぬらん恨しき思ひ思ふさても、待つべきにあらす問はんさもいはじ』さいふ歌あり。これも卅六字あるを、よからぬ體の中に書きつられ給へる云々」

○えあらで。黙つては居られないで。

○歌ぬし。字餘りの歌の作者。

○けしきあしく。機嫌がわるく。

○まれべども云々。その卅七文字の歌を、そのまゝ眞似て言うても、眞似るこゝが出来ない。「まれぶ」は、そつくりそのまゝ寫し出して言ふこと。

○えよみあへがたかるべし。讀まうさしても、讀み果すことが出来難からう。「あへ」は、敢^{あへ}で、さう爲^しようとして、未だ爲^し果てない意の詞、古今集「心ざし深くそめてし折りければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ」は、消えやうとして、未だ消えて終はない意。

○けふだにいひ難し云々。その歌を聞いた今日すら、眞似び言ふ事が出来ない。まして後には、その歌の意味を知る事は、どうあらうか甚だ覺束ない事ださいふので、こゝに記しとめぬない理由を斷つたもの。

十九日 日あしければ、舟出さす。

十九日、日和がわるいから舟出をしない。

【通釋】

二十日、昨日と同じく日和が悪いから、舟出をしない。人々が皆、心の悩みを訴へて嘆く。旅程の捗らないのが苦しく、待遠であるから、たゞ経過した日數を、今日で幾日、二十日三十日と數へるさ、あまり數が多くて、指もいたんで終ふであらう。甚だ心細く淋しい。夜は熟睡もしない。二十日の夜の月が出た。それは山際もなくて海の中から出て来る。このやうな景色を見てか、昔安倍仲

【語釋】

○日あしければ、日和がわるいから。

二十日　きのふのやうなれば、舟いださず。みな人々うれへなげく。苦しう心もとなれば、たゞ日の經ぬる數を、今日いくか、はつかみそか二十日三十日と數ふれば、およびもそこなはれぬべし。いそわびし。夜はいもねず。二十日の夜の月いでにけり。山の端もなくて、海のなかよりぞ出で来る。かうやうなるを見てや、むかし安倍の仲麿といひける人は、もろこしに渡りて歸り來たる時に、舟に乗るべき所にて、彼の國人うまのはなむけし、別れ惜みて、かしこのからうた作りなごしける。飽かずやありけむ。二十日の夜の月いづるまでぞありける。其の月は、海よりぞ出でける。これを見て仲麿のぬし、「我が國にはかゝる歌なむ、神代よ

唐さ云うた人は、唐土に渡り、さて日本に歸り來る時、舟に乗る筈の所で、唐土の人々が送別の宴を開き、別れを惜しんで、その心持を漢詩に作りなごした。それでもまだ十分と思はなかつたであらうか。二十日の夜の月が出る時刻まで、宴を張つて居つた。その月は海から上つた。その景色を見て、仲唐大人は、「自分の生國では、このやうな歌を、遠い昔から神もお詠みになり、現在には上中下の人も皆、このやうに別れを惜しく思うたり、喜ばしいこともあり、悲しい事もある時には、詠む

り神もよみたび、今は上中下の人も、かうやうに別れ惜み、よろこびもあり、かなしびもある時にはよむ」とて、よめりける歌。

青海原あほうなはらふりさけ見れば春日なる

三笠のやまにいでし月かも

とぞよめりける。

彼の國人聞きしるまじうおぼえたれども、ことの心を、男もじに様さまを書き出して、このことは傳へたる人にいひ知らせければ、心をや聞き得たりけむ、いと思ひの外になむめでける。もろこしと此の國とは、言ことことなるものなれど、月の影は同じ事なるべければ、人の心も同じ事にやあらむ。さて今そのかみを思ひやりて、ある人のよめる歌、

のである」と云うて、詠んだ歌。

青海原ふりさけ見れば
春日なる三笠の山に出
でし月かも。

さ詠んだ。

彼の國の人は、歌の意味が聞いてわかるまいと思はれたけれども、その意味を漢字の體裁に書き出して、日本語を傳へ教はつてゐる人に、話し知らせたから、歌の意味を聞きわける事が出来たであらうか、甚だ案外に感心した。唐土と我國とは、言葉が違ふけれども、照る月の光は同じである筈であるから、人情も同様であらうか。さて今その

都にて山のはに見し月なれど

波よりいで、波にこそ入れ

【語釋】

○昨日のやうなれば。天候の悪い事を言うたもの。

○うれへ嘆く。人々が互に心のなやみを訴へて嘆くこと。憂は「うれひ」「うれへ」何れにも言ふが、「うれひ」といふは、自身に憂ふること、「うれへ」は、心の憂を他人に訴ることであらうと、山口葉に言うてゐる。

○苦し。旅程の捗らないのを苦しく思ふのである。

○心もさなければ。都に歸る日が待遠しいから。

○けふいくか。今日で幾日になるかの意。

○およびも云々。日数が多くて、指折り數へる度數の多い事を、仰山に言うたもの。「および」は指の古言。

○いもれず。熟睡しない。古義に「伊さいいふも彌さいいふも、共に寝ことをいふ中に、伊は寝入ること、彌は臥すことを廣く云へり。されば伊さいいふは體語にのみ云て、用かず。朝寐・安寐・味寐・長寐などいふも皆體語なり。彌は那とも奴

當時の事を想像して、或人の詠んだ歌。

都にて山の端に見し月
なれど波より出で、波
にこそ入れ。

さも多くはたらけり。那須・奴流なすねるなど云ふ類ひなり。故に、いぬる、いたれず、
いを安くぬる。いこそれらえぬ、など多く言へり」さある。

○かうやうなるを見てや。海の中から月が昇る、このやうな景色を見てか。この
句の結びは、下文の「青海原ふりさけ見れば云々さぞよめる」さある「よめる」
の語であるべきだが、仲麿が歌を詠んだ事情を長々挿入した爲に、「見てや」
の係りを結ぶ句がなくなつて、尻切れ蜻蛉になつてゐる。

○安部の仲麿。中務大輔船守の子。靈龜二年、年十六の時、選ばれて遣唐留學生
となり、留ること數年、後、唐朝に仕へて、祕書監兼衛尉卿となり。勝寶年間
に藤原清河が大使として唐に渡つた時、仲麿も共に歸らうとしたが、海上で風
に遭ひ、再度唐に往き、爾後、重用され、寶龜元年七十歳で彼地に死んだ。「あま
の原ふりさけ見れば」の歌は、清河と共に唐を去らうとした時に詠んだもの。李
白が仲麿を哭する詩に「日本晁卿辭帝都、征帆一片繞蓬壺、明月不歸沈碧海、白
雲秋色滿蒼梧」といふがある。

○もろこし。唐土。

○馬のはなむけ。送別の宴。

○かしのこのからうた云々。王維が仲麿を送る詩に「積水不可極、安知滄海東、九

州何處遠、萬里若乘空、向國權看日、歸帆但信風、鰲身映天黑、魚眼射波紅、
卿國扶桑外、主人孤島中、別離方異域、音信若爲通」

○あかずやありけむ。何時まで、別を惜み詩を作りなごしてゐても、これで十分だとは思はなかつたであらう。

○ぬし。親しみ崇めて云ふ詞。古事記傳「主は大人と^{ぬし}同言にて能^{のうし}宇斯の切れるなり、故、古にうしは必ず某之^{なにのうし}宇斯之^の之を加へたるに云ひ、ぬしは某主^{なになし}と直に連れて、之を加へぬに云り。ぬしにも之を添へて某の主^{なに}といひ、又た々主とばかり首に云ふなごはみな後のことなり」

○かゝる歌。次のやうな歌といふに同じで「あをうなばら」の歌をさす。

○神代より云々。神代の昔から、神々も詠んだといふので、古今集序「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、猛きものゝ心の心をも慰むるは歌なり。この歌、天地の開けはじまりける時より、いで來にけり。然れども世に傳はる事は、久方の天にしては、下照姫にはじまり、あらがれの土にしては、素戔鳴尊よりぞおこりける」とある。
○あをうなばら云々。青々とした海原を遠く見やるを、今しも月がさし登つたが、あの月はかつて自分が故郷に居た時に眺めた、春日野にある三笠山に出た

月であるかマア。此歌は古今集には「天の原」とあるが、今海邊での話であるから、場所柄「青海原」とかへて言うたもの。「ふりさけ見る」は、遠く見放つこと、「ふり」は、頭を振り向ける意。古今集、禰旅歌、「もろこしにて月を見てよみける、安倍仲麻呂、天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」とあり、左註に「此歌は、昔仲麿を、もろこしに物ならはしに遣したりけるに、あまたの年を経て、え歸りまうで來ざりけるを、此國より使まかりいたりけるに、たぐひてまうで來なむとて、出でたりけるに、めいしうといふ所の海べにて、かの國の人、うまのはなむけしけり。よるになりて、月のいさ面白くさし出でたりけるを見てよめる、さなむ語りつたふる」とある。

○聞き知るまじく云々。詠み上げた歌を、耳に聞いて、直にその意味を理解出來まいと思はれたが。

○ことこのころ。歌の意味。

○男文字。漢字。假名を女文字といふ。「男文字にさまを書き出だして」とは、歌の意味を漢字の體裁に書き改めること。「さまは」、體裁で、こゝは、「男文字のさまに書き出だして」といふに同じい。

○この詞。日本の言葉。「この詞傳へたる人」は、日本語を傳授してゐる人、

通譯人。

○こゝろをや云々。歌の意味を聞きわけ待たであらうか。

○おもひの外。案外。

○めで。感歎すること。

○月の影。月の光。

○人のこゝろ。人情。

○そのかみ。その當時。仲麿が「天の原」の歌を詠んだ當時。

○思ひやりて。此語は、愁思を遣り失ふ意であるが、平安朝頃から、轉じて、想像する意に用ゐた。後撰集「思ひやる心は常に通へども逢坂の關越えずもあるかな」は、想像する意。

○ある人。貫之をさす。

○都にて云々。都に居た時、山の端から出て、山の端に沈むのを見た月であるが、今はその同じ月が、浜から出て浪に入ることだ。創見に「此歌を後撰集に海より出で、海にこそ入れさして、入れられたるは非なり。山に對しては、海さあらんが、こさわり叶ふべく思はれたるならめじ、波より出で、波にこそ入れさいへるにこそ、其のけしきありて、かつ浮きたる旅情も浮ぶものなれ。まして

【通釋】

廿一日、午前六時、舟を出す。屬僚達の舟も皆出帆する。その舟の海に浮んでゐる有様を見るに、春の海に秋の木葉が散らばつてゐるやうであつた。一通りなら願によつてとあらうが、風も吹かない、よい日和になつて、漕いで行く。一行の中には、紀氏に使はれやうとして、つき隨うて來る童がある。かうして漕いで行く間に、その童が舟うたをうたふ。それは、

海より出で、海に入るさいへるは、其語調重くして、山のはに見しなど、手がろき調べに應ぜざるのみならず、東西に海のあらむ心ちもせられて、かた／＼叶はざるを聞き知るべし」

二十一日 卯の時ばかりに舟出す。みな人々の舟いづ。これを見れば、春の海に、秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。おぼろげのねがひによりてにやあらむ。風も吹かず、よき日出で来て、漕ぎ行く。此の間に、使はれむとて、つきて來るわらはあり。それがうたふ舟うた、

なほこそ國の方は見やられるれ、わが父母ありとし思へば、かへらや。

どうたふぞ哀れなる。

かく歌ふを聞きつゝ漕ぎ來るに、黒鳥といふ鳥、いはほの上に

なほこそ國の方は見や
らるれ。わが父母あり
とし思へば。かへらや。
さうたふのが可哀相であ
る。

このやうに歌ふのを聞き
ながら漕いで行くに、黒
鳥さいふ鳥が巖の上に集
つて居る。その巖のもこ
に波が白く打寄せてゐ
る。舵取の言ふことは、
「黒鳥のもこに、白き波
をよす」といふ。その言
葉はどうさいふ格別の事
はないけれど、物心があ
つて言ふやうに聞きさ
れた。人柄に相應しない
から、怪しく思ふのであ
る。このやうに言ひく
して漕いでゆくに、舟の

あつまりをり。其のいはほのもこに、波白く打寄す。楫取のい
ふやう「黒鳥のもこに、白き波をよす」といふ。そのことば何
ぞにはなけれど、物いふやうにぞ聞えたる。人の程にあはねば、
とがむるなり。かくいひつゝ行くに、舟君なる人、波を見て、
國よりはじめて、海賊むくいせむといふなる事を思ふ上に、海
の又おそろしければ、頭もみな白けぬ。七十八な、そちやそちは海にあるも
のなりけり。

わが髪の雪と磯邊の白波と

いづれまされり沖つ島守

かちどりいへ。

【語釋】

○卯の時ばかり。午前六時頃。

主人が波を見て、白波盜賊を聯想し、國を出た時から、海賊がしかへしをするであらうさいふ事を心配する上に、海が又恐しいから、それが爲に頭が白くなつて終つた。して見るさ七十・八十さいふ老境は、海にあるものだけわい。

わが髪の雪と磯邊の白波といづれもまさにれり沖つ鳥守。

舵取判断しろ。

○皆人々の船いづ。屬僚達の乗つてゐる船も皆出帆する。

○春の海に秋の木の葉しも云々。赤壁賦「駕一葉之扁舟」などある如く船を木の葉に譬へ、春の海に秋の木葉を配して、同所に相反する二つの季節を錯綜せしめて、例の諧謔を弄したるもの。貫之「櫻散る木の下風は寒からで、空に知られぬ花ぞ散りける」なども、櫻を中心として、冬の六花を配し、二つの季節を交えた點に、貫之の諧謔の慣用手段を見る事が出来る。「し」は強める助詞、「も」は詠嘆。

○おぼろげの願。おぼろげならぬ願の意。尋常一通りでない大願。松の落葉「おぼろげならぬ心を中頃におぼろげさいふ事ありき。そは異なる言ひざまなれど、中頃の一つの詞づかひにぞありける。宇津保の物語、俊隆の巻に、山林に交る者は世の中をおぼろげに思ひ離れて、身を憂きものに思ひなしてするもの也。さあり。おぼろげならず思ひ離れてといふ心也。榮花物語、浦々の別れの巻に、此者ども立ちこみたれば、おぼろげの鳥獸ならずば、いで給はむ事難し。初花の巻には、殿あはれおぼろげにおもほせば、こそ斯くもの給はめ。こ見えたるなごを思ひ渡して知るべし、これらも、おぼろげならぬ、又はおぼろげならずさいふ心になん」源氏、若菜「怪しくはありしわざがしこは、さすが

に打覺ゆれど、おぼろげにしめたる我心から、淺くも思ひなされず」とあるも、おぼろげならずの意。斯うした反對の意に言葉を用ふのは、萬葉の歌などにもある事で、「草枕旅のやじりに誰が夫が國忘れたる家待たなくに」(ひさ日こそ人をも待ちし、長き日を斯くのみ待てばあり難なくも) など、言葉通りに解くと、「家が待たぬに」(あり難くない)の意になるが、實はその反對で、家の人が待つてゐるのに、ありがてにする事だなどいふ意である。眞淵は「おぼろげは大かたさいふ詞なり。さればおぼろげならぬ願にさあるべきを、斯く言へるは、此頃の俗語に、おぼろげならぬさいふべきを、ならぬを省きていへる俗語を以てかけり見ゆ。源氏物語にも、斯くさまに言へることあり。凡、俗語には、いひなれし詞は、理なく省きて使ふこと多し。今も然り。かゝる詞は雅言にあらずと知りて、わきまふべし」と言うてゐる。

○この間に、漕ぎ行く間に、此句は下の「うたふ」にかゝる副詞。

○つかはれんさて云々。貫之に使はれようさて、付き隨うて來る童。これは貫之の死んだ女兒の伽などして、年來付き從うて居た童女であらうさいふ。

○猶こそ云々。このやうに遠く來ても、矢張、國の方がなつかしく眺め渡される、そこには自分の戀しい父母が居ると思ふから。「かへらや」は、嗚の文句。

○あはれ。可哀相の意。

○漕ぎくるに。漕ぎ行くにの意。これは今自分の往く方を内にして、来るを云うたもの。萬葉「霞立つ長き春日を奥處おくかなく知らぬ山道を戀ひつゝか來むこ」さあるも、家の妹を戀しく思ひつゝ行かむかの意で、行く方を内にして言つたもの。

○黒鳥。黑鴨のこと。

○黒鳥のもこに白き浪をよす。黒鳥と白浪と相反する色彩を配して、例の諧謔を弄したもの。

○何さにはなけれど。どうと言ふのではないが。格別の事はないが。

○ものいふやうにぞ。風流心があつていふやうに。

○人のほどにあはれば。人柄に相應しないから。

○さがむ。怪しく思ふ。

○舟君。舟の主人。貫之のこと。

○浪を見て。浪の荒れるのを見て。此句は、下の「海のみた恐しければ」さあるにつゞくのであるが、特に此處に置いたのは、浪から白浪（盜賊）白浪から海賊の襲來に聯想した心持を匂はせたもの。

○國よりはじめて。國を出發した時からはじめて。

○海賊云々。海賊が報いをするであらうといふ事を心配する上に。「思ふは心配の意。貫之が土佐守在任中、しばらく海賊を追捕した事があつたので、彼等は今貫之の歸途を要して、返報するであらうといふ噂があつたのであらう。

○頭もみなしらけぬ。心配の爲に急に年老いて頭髮も白くなつた。此時貫之は既に七十歳前後の老齡で、白髮雪を欺く程であつたらう、それをば、海賊の心配と海の怖しさで、白髮になつたと言ふやうに、大袈裟に言ひなして、例の諧謔振りな發揮したのである。能書家の魏の章誼が凌雲の額を書いて、白髮になつたといふ故事がある。三國志「魏明帝立凌雲觀、誤先釘榜、及以籠盛二章誼、輒引上書之、去地二十五丈、既下鬚髮皓然、還語三子弟、直絕此法。」

○七十八は云々。七十歳八十歳といふ老齡は海にあるものだといふので、自分の老齡を海のせいにして、海路の怖しさを、戯れ半分に誇張して言つたもの。

○わが髮の云々。自分の頭髮の白いのを、磯邊に打寄せる波の白いのさ、どちらが勝つてゐるか、沖の島守より判断しろといふ意で、假りに島守を設けてかく呼びかけたもの。萬葉「八百日行く濱のまなこも吾が戀に豈まさらじか沖つ島守」とあると同じ巧みである。「いづれまさされり」は、普通「いづれまさされる」と連

【通釋】

廿二日、昨夜の碇泊所から、他の湊に向つて航行する。遠く山が見える。九歳程の男の童が、年の割合に心が幼い。この童が舟の進むにつれて、遠くの山も、舟と同じ方角に走るやうに見えるのを見て、幼稚な歌を詠んだ。その歌、
漕ぎてゆく舟にて見れば
足曳の山さへ行くな
松は知らずや
と詠んだ。幼い子供の歌

體形で結ぶべきであるが、歌ではかうした破格がある。「沖つ島守」は、沖の島の番人。

○楳取いへ。歌で沖つ島守に言ひかけて見たが、その島守は近くに居ないから、轉じて楳取に言ひかけたもので、楳取よ汝が島守に代つて判断しろの意。

二十二日 夜べの泊より、こととまりをおひて行く。遙に山見ゆ。年このつばかりなるをのわらは、年よりは幼くぞある。此のわらは、舟を漕ぐまに、山も行くぞ見ゆるを見て、あやしき歌をぞよめる。其のうた、

漕ぎて行く舟にて見れば足曳あしびきの

山さへ行くを松は知らずや

とぞいへる。幼きわらはの事にては、似つかはし。今日海あらけ、磯に雪降り、波の花咲けり。ある人のよめる、
波さのみひとへに聞けぞ色見れば

雪と花とにまがひぬるかな。

【語釋】

さしては似合はしい。
 今日海が荒れ、磯には、寄せ来る波が碎けて、或は雪の降るやうにも見え、或は花の咲くやうにも見える。或人の詠んだ歌、波さのみひさへに聞けど色見れば雪と花とにまがひぬるかな。

- よべのさまり。昨晚泊つた碇泊所。これは阿波の船津であらうか、今その名がわからない。
- ここさまり。他の碇泊所。これも不明である。
- 年よりは幼くぞある。年齢に比較して心持の發達して居らぬ意。
- あやしき歌。拙い歌。幼稚な歌。
- 漕ぎて行く云々。漕いで行く船に居て見るさ、船は勿論、山までも行くのを、その山に立つて居る松は知らずに居るだらうか。遠くの山が船と共に走るやうに見える幻覺を眞まに受けて、さてその山に在る松を、自分と同じ心持を持つてゐるものと信じて、「松は知らずや」と言うてゐるのは、如何にも子供らしい考である。「あしびきの」は、山の枕詞。「知らずや」は、知らずやあるらむらむの意。
- 幼きわらはのここ云々。幼い童の詠んだ歌としては、思想の幼稚なのが似合はしいこの意。
- あられ。荒々しくなること。
- 磯に雪ふり涙の花さけり。涙の磯に碎けて白く散る有様を形容したものと、「雪

【通釋】
廿三日、日が照つて、やがて曇つた。此邊は海賊の心配があること云ふか

降り」といひ、「更に涙の花さけり」と重ねたのは、古今集、貫之「雪降れば冬ごもりせる草も木も春に知られぬ花ぞ咲さける」などある如く、「雪」「花」といふ縁語を用ゐ、同時に一つ所に二つの季節の交錯を思はせた諧謔ぶりを發揮したものであらうが、その技巧が鼻につく。實朝の「大海の磯もこゝろに寄する波割れて碎けて裂けて散るかも」など、對照すること、貫之の詩的才能がわかる。雪を白浪と見た歌に、古今集「浦近く降りくる雪は白浪の末の松山越すかこそ見る」などいふがある。

○波さのみ云々。耳には一途に涙であることばかり思つて、聞けられど、さてその碎け散る色を見ると、雪と花とに見まぢがへて終ふ事よといふので、耳に聞く感じと目に見る感じの相違を詠んだもの。大波の碎ける趣も、それに對する感動も表はれてゐない。小細工に過ぎて厭味がある。「まがふ」は、見別け難いこと、混亂すること。

二十三日 日照りて、くもりぬ。此のわたり、海賊のおそりありといへば、神佛を祈る。

【語釋】

ら、神様や佛様に平安を祈る。

【通釋】

廿四日、昨日と同じ所に碇泊してゐる。

【通釋】

廿五日、舵取らが「北風が吹いて海が荒れる」といふから、舟出しない。海賊が追ひかけて来るさいふ噂が、しつきりなしに聞えて来る。

【通釋】

廿六日、眞實かどうか知らぬが、海賊が自分達一

〇日てりて曇りぬ。朝の程は日が照り輝いて、後に曇つたこの意。
〇おそり。恐れ。

二十四日 昨日の同じ所なり。

【語釋】

〇きのふの云々。同じ昨日の所さいふを、「昨日」を強く思はせる爲に、斯く語を置きかへたもの。

二十五日 舵取らの「北風あし」といへば、舟出さず。海賊おひくといふ事、たえず聞ゆ。

【語釋】

〇北風あし。北風が吹いて海上が荒れる意。
〇海賊おひく云々。海賊の追つてくるさいふ事を、碇泊してゐる舟へ、水陸の驛づたひに告げて来るのであらう。

二十六日 まことにやあらむ、海賊おふといへば、夜半ばかり

行の者を追うて來ると噂するから、夜半頃、舟出して、漕いで行く路に、神を祭る場所がある。舵取をして、幣を献上せしめるに、西風が吹いて、その幣は東の方へ散るから、舵取が禱言を申して幣を奉る、その祈禱の詞は、「この幣の散る方向へ、舟をばやく漕がせて下さい」と申上げて、幣を献上する。これを聞いて、或る女の童の詠んだ歌、

わたつみのちぶりの神
に手向けする幣の追風
やまず吹かなむ
と詠んだ。

此間に風が順風であるか

舟を出して漕ぎ來る路に、たむけする所あり。舵取して幣ねさたいまつらするに、幣ひんがしの東へ散れば、舵取の申してたてまつることは、「この幣の散る方に、御舟すみやかに漕がしめ給へ」と、申してたてまつるを聞きて、あるめのわらはのよめる、

わたつみのちぶりの神に手向する

ぬさの追風やまず吹かなむ

とぞよめる。

此のほごに、風のよければ、舵取いたくほこりて、舟に帆あげなど喜ぶ。その音を聞きて、わらはも翁も、いつしかと思へばにやあらむ、いたく喜ぶ。此の中に、淡路のたうめといふ人のよめる歌。

追風の吹きぬる時は行く舟の

ほで打ちてこそ嬉しかりけれ

ら、舵取がひびく自慢して、舟に帆をあげなごして喜ぶ。その喜ぶ騒ぎを聞いて、童も翁も、いつか早く都に歸り度いさ待遠に思つて居るからであらうか、大層よろこぶ。この中で「淡路のたうめ」といふ人の詠んだ歌、追風の吹きぬる時は行く舟のほでうちてこそうれしかりけれ。さ、いふのである。同じく歌を詠むにしても、天氣のよい事の喜びについて詠んで、同時に天氣のよい事を願つてゐる。

どぞ。天氣のことにつけつゝいへる。

【語釋】

○まこまにやあらん。眞實であらうかどうか知らぬが。此句は「いへば」につゞく。

○漕ぎくる道に。漕いで行く道に。

○たむけ。「取向け」の約、手に取つて神に捧げる意。昔は旅に行く人は、多く越えてゆく山の坂路の極つた所で、神を祭つて、一路の平安を祈つたもので、その神を祭つて平安を祈ることを、多く「たむけ」と言つた。随つて、坂路の絶頂で手向をする場所をたむけといふ。峠は手向けの訛である。又、萬葉に「大船の對馬の渡りわた中に幣さりむけて早や歸り來れ」とある如く、海を行く時にも手向をしたものである。鳥居龍藏氏の説に、「トルコ民族では地上の神はTachisと稱し即ち主の意味で、種々の物體の神となつてゐる。これらの神は、川・湖・木・草・岩・石等種々のもの、内に宿つて居るのである。日本に於て、川や木に主があるといふのこゝ、同じ考へである。Tachisは、それらの土地に居るのであつて、ヤクトが非常に困難な僻地や恐しい道路・人の足跡未だ至らない場所に遊牧して行く時には、其地の地方神に手向をするのである。之れば日本の

古代に於ける手向の風習こよく似て居り、また蒙古人・トルコ人などウラルアルタイ民族は、峠を越ゆる時に、やはり此手向を行ふのである。ヤクトは旅行中は或る物品に特別な言葉を入れて之を使用し、殊に貴重品には變名を用ふるのが慣例である。これは通常の言葉で話す、Ichte、がそれを聞いて旅人の所有物を欲しがつて、害を加へるから、それを避ける爲であるといふ、とある。

○織取して。船頭に命じて。

○幣。神に奉る物の總稱。白和幣・青和幣・木綿の類をいふ。然し爰は、旅に出る人携へて行つて、道の神に手向けるもので、種々の色の絹布をこまかに切つたもの、それを袋に入れて持ち行くのである。古事記傳「奴佐は神に手向くる物をもいひ又祓に出す物をも云、名の賤は、禱布佐にて、事を乞ひ禱ぐとて出すよて禱ぐ祓の奴佐も其罪穢を除き清め給へと禱ぐ意を以て出すなれば、神に献りし也。こ意ばへ一つなり、さて布佐は麻なり……抑神に手向るも祓に出すも、其物は種々ある中に、殊に麻をしも名に負へるは、あるが中に主とする一種に就てなり云々」

○幣のひんがしへ散れば。これは、織取が禱言を申して、幣を奉つた後の事であるが、織取の禱言を説明する爲に、先に出して述べたもの。また織取は、事實幣

の散つたのを見て、かういふ禱言を申したのではなく、風の方向で豫め幣の東に散る事を見込して斯く申したものである。だから此句は、「風の西より吹けば」さてもあれば、聞きざりにくくないが、「風の西から吹く」事と幣の東に散ることと一致するから、幣を主として言うた爲に、文意が煩しくなつたのである。○申してたてまつること。楫取が道の神に禱言を申して幣を奉る、その祈禱の詞は。「いさ」は言葉の意。

○わたつみの云々。海路の行く手にまします神に幣を奉つて一路の平安を祈る、その幣を東へ吹き散した、幣の追風が絶えず吹いて欲しい。「わたつみ」は、海神の名、轉じて、海のこと。「ちぶりの神」は、旅人の道の行手に居る神。「ぬさのおひ風」は、幣を東に吹き散した風は、やがて舟の行く方向に吹く風である。依つて、幣を東に散した、舟の追風といふ意で、幣の追風といふたもの。「なん」は願望の意の助詞。

○いたくほこりて。風が順風になつたので、楫取は自分の祈禱のしかたがよかつたから、神が受け入れて呉れたのだと、ひごく自慢したのである。

○その音。帆などあげて喜ぶ騒ぎをいふ。この音は、古事記「悪神の音」さある「おとなひ」と同じで、喧しい響をいふ。

【通釋】
廿七日、風が吹き、波が荒いから、舟出しない。誰も彼も痛切に嘆く。男の人々の吟する漢詩に、「日を望めば都遠し」とい

○いつしかさ。未來の事を待遠に思ふ意で、いつか早く都に歸り度いと。
○淡路のたうめ。「たうめ」は姥とめの音便で老女の稱。後に淡路の巨子おほいこさあるに同じ人。

○おひ風の云々。追風の吹いてゐる時は、ゆく舟の帆が帆綱をうつが如く、自分たちも手を打つて喜び樂しむ事である。帆手は、帆の横に綱を多くつけて、帆を左右に開く爲のもの、「帆手」に「手」の意を言懸け、帆綱の帆をうつのを、手拍子を打つことの譬喩に用ゐたもの。

○ていけのこまにつけつゝいへる。同じ歌を詠むにしても、皆天氣のよい事の喜びについて、詠んでゐるさいふので、裏面に、それ程までに天氣のよい事を願つて居るのだとの意を聞かせたもの。「ていけ」は「てけ」に同じい。「いへる」は「いへるよ」の意、一本には、「祈る」とある。

二十七日 風吹き波荒ければ、舟出さず。かれこれかしこく歎く。男たちのからうたに、「日をのぞめば都さほし」などいふなる事のさまを聞きて、ある女のよめる、

ふ句がある、その意味を聞いて、或る女の詠んだ歌、

日をだにも天雲近く見るものを都へと思ふ道のほるけさ、

又或人の詠んだ歌、

吹く風の絶えぬかぎりし立ち來れば波路はいさどほるけかりけり。

終日風が息まない。憎み嫌うて寝た。

日をだにも天雲近く見るものを

都へとおもふ路のはるけさ

又ある人のよめる、

吹く風のたえぬ限りし立ち來れば

波路はいさどほるけかりけり

日ひと日風やます。爪はじきをして寝ぬ。

【語釋】

○かしこく歎く。ひごく歎く。「かしこく」は、宇津保物語「これは昔仲正が親さひさしき人、物し給ひける、その御つたへにこそあめれなご、かしこく驚く」「さいつ頃ほどくしき病者をなんもて侍りて、かしこく心勞し侍るなり」などあると同じく、事の切なる意。

○心なぐさめ。氣晴し。此句の次に、「歌へる」さいふ句を補へばよくわかる。

○日なのぞめば都さほし。「望れ日長安遠」といふ詩であらう。これは船中の人の自作か、或は前人の作か明かでないが、その典據は、晋書明帝記「帝幼而聰哲、

爲三元帝所寵異、年數歲、嘗抱置膝前、偶長安使來、因問、汝謂下日與長安一
執遠上、對曰、長安近、不聞下人從日邊來上、居然可_レ知也、元帝異_レ之、明日
宴三群僚、又問_レ之、對曰、日近、元帝失色曰、何乃異_レ問者之言乎、對曰、
舉_レ目則見_レ日、不_レ見_レ長安、由_レ是_レ奇_レ之、とある明帝の故事によつて作
つたもの。意味は、太陽を望み見るこゝ、日輪は赫奕として目に映するが、都は
何れの邊にあるとも見えないから、太陽よりも都の方が遠いといふのである。
○このさま。事情。事柄の意味。「望日長安遠」なごいふ詩句の意味や、それに
關する明帝の故事。

○日をだにも云々。行き到る事の出来ない日輪をすら、空に浮ぶ雲の近くに望み
見るのに、さまで離れては居らぬ、同じ國の中の都へ歸らうと思ふ道の遠い事
よといふので、「舉_レ目則見_レ日不_レ見_レ長安」といふ句の意で詠んだもの。

○吹く風の云々。吹く風の止まない間は、いつまでも波の立ち來る事であるか
ら、波路は一層遠くあるよといふので、風の無限性、浪の無限性から、海の無
限に思ひ及んで詠んだもの、沖の方から限りなく浪が立つて來る、その浪の無
限から、茫洋たる大海原の極_{はて}なさを感じたのだ。「いさよは、いさいこ」の約
で一層、いよくなごいふ意。風の吹く限り浪はたつ、そして風の吹く事は限り

ない、だから波路はいよくもつて遠いさいふのである。「波路」は、浪。上の路で、舟路のこゝ。

○つまはじき。爪をはじくこゝで、物を疎んじ嫌ふときにする所作。源氏、帚木「いづこのさる女があるべき、おいらかに鬼さこそ向ひ居たらめ。むくつけきこゝさ爪弾つまはじきをして」落窪「爪弾をちからしくし給ひて」源氏空蟬「かの人つまはじきの心を爪弾をしつゝ、恨み給ふ」などある。雅譯に「にくき物事を見聞く時のしわざ也」とある。

二十八日 よもすがら雨やまず。今朝も。

【語釋】

○よもすがら。終夜。「すがら」は、始から終迄さいふ意の接尾語。廿七日の夜通しをいふ。

○けさも。「けさも止まず」の意。

二十九日 舟出して行く。うらくと照りて、漕ぎ行く。爪の長くなりたるを見て、日を數ふれば、今日は子の日ねなりければ切

【通釋】

廿八日、終夜、雨がやまない。今朝も降つてゐる。

【通釋】

廿九日、舟を出して漕いでゆく。日の光がうら、

かに照り輝いて、漕いで
ゆく。指の爪が大層長く
伸びて居るのを見て、日
並みを數へて見ると、今
日は子日であつたから、
切らない。月は正月であ
るから、都の子の日の事
を言ひ出して、「子の日の
祝ひに曳く小松があれば
よい」と言ふけれど、海
中であるから、むつかし
いよ。女が書いて差出し
た歌、

おぼつかな今日は子の
日か蟹ならばうみ松を
だに引かましものを。
と詠んである。海上で子
の日を迎へて詠んだ歌と
しては、どうあらうか、
餘りよくもあるまい。又、

らす。正月むつきなれば、京の子の日の事いひ出で、「小松もがな」
といへど、海中うみなかなればかたしかし。女のかきて出せる歌、

おぼつかな今日は子の日か蟹あまならば

うみまつをだに引かましものを

とぞいへる。海にて子の日の歌にては、いかがあらむ。又ある
人のよめる歌、

今日なれど若菜もつまず春日野の

わが漕ぎわたる浦になければ

かくいひつゝ漕ぎ行く。おもしろき所に舟を寄せて、「こゝやい
づこ」と問ひければ、土佐の泊とぞいひける昔土佐といひける
所に住みける女、この舟にまじれり。それがいひけらく、「昔し
ばしありし所の名たぐひにぞあなる。あはれ」といひて、よめ

或る人の詠んだ歌、

今日なれど若菜もつま
す春日野のわが漕ぎわ
たる浦になければ。

このやうに歌ひくして
漕いで行く。景色のよい
磯邊に舟を寄せて、「こゝ
は何處か」と尋れたれば、
土佐の泊だを答へた。其、
土佐と云うた所に住んで
ゐた女が、自分達の舟の
中に居た。その人が言
た事は、「こゝは、自分
が昔、暫時住んで居た所の
名と類似の名である。あ
アあア」と言うて、詠んだ
歌、

年ごろを住みし所の名
にし負へば來よる波な
も哀れとぞ見る。

る歌、

年頃を住みし所の名にし負へば

來よる波をもあはれとぞ見る

【語釋】

○うら／＼さ。「うら／＼か」に同じ。日の光の暖く靜かに輝いてゐるをいふ。

○爪のいさ長く云々。昨日迄は雨降り風が吹いて、舟も出さない爲に、氣を腐らして、何事も覺えなかつたが、今日は日影長閑に照り輝いて、心も咲み榮え、身のまほりの事に氣づくだけの餘裕が出来たのである。

○子の日なりければ云々。爪を切るに日の吉凶をいふは、今もある事で、これはふるくからの習慣らしい。日本紀纂疏「凡陰陽家、丑日除手甲、寅日除足甲、爲吉」とある。

○むつき。正月のこさ。睦月むつびの意だとも、萌月もゆつきで、草木の萌えきざつ月の意だとも、又は、元つ月の意だともいふ。

○京の子の日。昔、正月初子の日には、人々は野外に出で、小松を曳き遊宴したもので、その松をば子の日の松と言つた。家持の天平寶字二年正月の作に「初

春の初子の今日の玉簪たまはぎ手にさるからにゆらぐ玉の緒いとといふがある。之は初子の肆宴に詔に應じて詠んだのである。またこの日、若菜も摘んだもので、「倚松根摩腰、習風霜之難犯也、和菜羹暖口、期氣味之克調也」とある。

○小松もがな。子の日に千代を祝ふ爲に曳く小松があつて欲しいこの意。

○かたしかし。雖くあるよ。「かし」は、念を押す意の感動詞。

○おぼつかかな云々。今日は子の日かマア、海人ならば、小松は曳き得ずとも、せめて海松をなりと引いて祝はうものを、それも出來ず、心の辭結して晴やかでない事だ。「おぼつかかな」は「おぼつかなし」の語根。不明瞭なこそ、不確實なこそ、氣がかりなこそなどに用ゐるが、萬葉集「水鳥の鴨の羽色の春山のおぼつかなくも思はゆるかも」の解に、契沖は「辭の字をオホツカナキさよめり、辭の字の心は、譬へば盛りに燃ゆる木を、灰の下にさし入れたるが、さすがに燃え出でれど、下にふすばるやうの心なり。春山の陽氣下に満ちて、やゝもえ出れど、猶くゆるやうなるを胸に思ひのふさがりたるやうに譬へていふなり」と言うてゐる。爰に「おぼつかかな」と言うたのも、子日であり乍ら、小松も曳かず、爲に心の結ほれて晴やかでないのをいうたのである。「あまは、鹽燒き流りなごを業とする人。「海松」は、「みる」のこと。」だに「は、せめて何々なり」と

の意の助詞。

○海にて子の日の歌にては。子の日の遊びは野邊のものである、然るに海上で子の日を迎へて詠んだ歌としてのは意。

○いかゞあらん。どうあらうか、あまりよくもあるまいの意で、實は裏面に讀めたのである。

○今日なれど云々。子の日は今日であるが、小松も引かなければ、若菜も摘まない事だ。何さなれば若菜を摘むべき春日野が、自分の漕ぎ渡る浦にないからさいふ意。若菜も」の「も」は、集合の意の助詞で、「若菜も摘まず」は、「小松も曳かず」の意を言外に含めたもの、複雑を單純化したのである。春日野は、奈良の郊外で、當時奈良の都人は春になると、この春日野に出て若菜を摘んで一日の行樂を極めたもので、古今集「春日野の飛火の野守出ても見よ今幾日ありて若菜摘みてむ」一春日野の若菜摘みにや白妙の袖ふりはへて人の行くらむ」などいふがある、前の歌は、奈良の都人の詠んだものであらうし、後ののは、貫之の作であるが、彼自ら奈良の都人になつて詠んだもの。又、古今集、賀歌、「内侍のかみの、右大将藤原朝臣の四十の賀しける時に、四季の繪かけけるうしろの屏風に、書きたりける歌、春、春日野に若菜摘みつ、萬代をいはふ心は神

ぞしるらむ」こある。屏風の繪にまでも、春さいへば春日野の若菜摘みが畫かれる、それ程春日野の若菜摘みは季節を代表する娛樂であつた。

○おもしろき所。景色の趣のある所。

○土佐のさまり。阿波國板野郡鳴門村大毛島の南端に在る。今、土佐泊浦さいふ。土佐さいひける云々。土佐國に住んでゐた女。貫之が土佐國守で彼地に居つた所から、貫之の事をわざと斯く戯れておぼめかしく言ひ、實際には舟の人々は皆土佐に居た人であるのに、その女一人が土佐國に居たのださいふやうに言つて、次の歌をば、歌主の特殊的獨自的感慨を歌つたものに見せかけたのである。

○名たぐひ。類似の名。

○あなる。「あるなる」の略。

○あはれ。此語は、歡しいこゝにも、悲しい事にも、長い息をついて歎く程の事に言ふ詞。こゝは、あゝあゝと嘆息する意。

○年ごろを云々。土佐の泊は、自分が數年來住んだ所の土佐さいふ名を、名に持つてゐるから、其處に寄り來る波をも、感深く見るこゝである。「年ごろを」の「を」は、上に「おんな翁になしつべし」又、古今集「めづらしき聲ならなくに時鳥こゝらの年を飽かずもあるかな」「花の色は雪に交りて見えずとも香をだ

【通釋】

三十日、雨も降らず風も吹かない。海賊は夜は歩かないものだと聞いて、夜半頃出帆して阿波の鳴門を渡る。夜なかであるから、西東の方角も見えない。男も女も神佛に祈願して、やうくの事でこの水門を渡つた。午前四時頃から六時ごろにかけて、奴島さいふ所を通過し、田無川の沖を通る。このやうに急いで、和泉の灘さいふ所に到着

に句へ人の知るべく「な」なごある「な」と同じで、その事柄を強く思はせる意の助詞。「すみし所の名にしおへば」は、「住みし所の名を名にし負へば」といふ意を簡潔に言つたもの。「名にし負ふ」は、名に負ひ持つこと。「し」は強めの助詞。伊勢物語「名にし負はといさ言問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと」

三十日 雨風吹かず。海賊は、よるありきせざなりと聞きて、夜なかばかりに舟を出して、阿波の水門みとを渡る。夜なかなれば、西東ひんがしも見えず。男女からく神佛を祈りて、この水門を渡りぬ。寅卯とらうの時ばかりに、奴島ぬしまさいふ所を過ぎて、たな川さいふ所を渡る。かく急ぎて、和泉の灘さいふ所に至りぬ。今日海に波に似たるものなし。神佛のめぐみかうぶれるに似たり。今日舟に乗りし日より數ふれば、三十日あまり九日こゝかになりにけり。今は和泉の國に來ぬれば、海賊ものならず。

した。今日は海に波らし
いものがない。これは、神
佛に祈つたしるしがあつ
て、そのお恵みを蒙つた
のであるらしい。今日で、
舟に乗つた日から數へる
と、三十有九日になつた。
今は和泉の國に來たか
ら、海賊も恐しくない。

【釋語】

○せざるなり。「せざるなり」の略。

○阿波の水門。阿波の鳴門をいふ。「水門」は、海水の出入する口。

○からく。辛うじて。やう／＼の事で。「わたりぬ」にかゝる副詞。

○寅卯の時ばかり。寅の刻（午前四時）から、卯の刻（午前六時）にかけての頃。

○奴島。淡路國の海上にある島。今、沼島と書く、萬葉「みづの埼浪をかしこみ隠江こもりえ」の船寄せかれつ奴島の埼に「淡路の野島の埼の濱風に妹が結べる紐吹き返す」

○田無川。和泉國泉南郡の西端にある村。「田無川といふ處をわたる」は、田無川の沖を通過する意。

○からく急ぎて。一生懸命に急いで。命からがら急いで。

○和泉の灘。和泉國の海を和泉灘と言ふ。但、此夜舟の泊つた所は、田無川と黒崎との間にある、和泉灘の中の一地點であるが、或特定の地名を擧げずに總名で言つたのだ。二日の條に「和泉の灘といふ所より」こあつて、黒崎箱の浦などいふ地名を擧げてあるから、或は和泉國の海岸に、和泉の灘といふ一地點があつたのかとも思はれるが、五日の條に、箱の浦から舟出して行つた事を「いづみの灘より小津のこまりをおふ」といひてゐるから、矢張、總名と見るがよからう。

【暹霧】

二月一日、朝の間雨が降り、正午頃止んだから、和泉の灘といふ所から漕ぎ出して行く。海上は昨日のやうに平らで、風もなく波も見えない。黒崎の松原を経て行く。所の名は黒く、濱邊の松の色は青く、それに磯邊に碎ける波の色は、雪のやうに白く、岸にまるぶ貝の色は赤い色で、五色には、もう一色足りない。

この間に、今日は箱の浦

○涙に似たるものなし。涙らしい涙がない。
 ○かうぶれる。「かうむ被れる」に同じ。
 ○ものならず。物の數でない。何でもない。

二日朔日 朝のま雨降り、午の時ばかりにやみぬれば、和泉の灘といふ所より出で、濡ぎ行く。海の上きのふの如くに、風波見えず。黒崎の松原を経て行く。所の名は黒く、松の色は青く、磯の波は、雪の如くに白く、貝の色は蘇芳すはうにて、五色に今一色ぞ足らぬ。

此の間に、今日は箱の浦といふ所より、綱手つなでひきて行く。かく行く間に、ある人のよめる歌、

玉くしげ箱の浦波たゝぬ日は

海をかゞみと誰か見ざらむ

さいふ所から、水夫どもは磯におりて、綱手を曳いて、磯傳ひにゆく。このやうに漕いでゆく間に、或人の詠んだ歌、

玉くしげ箱の浦波たぬ日は海を鏡と誰か見ざらむ。

又、舟の主人公の言ふことに、「航海が此月までも延びた事よ」と嘆いて、その苦痛に堪へられないで、他の人も詠むのだから、自分も詠んでもよからうと言つて、氣晴しに詠んだ歌、

引く舟の綱手の長き春の日をよそかいかまで我は經にけり。

この歌を聞く人が思ふ事

また舟君のいはく、「此の月までなりぬること」と歎きて、苦しきに堪へずして、人もいふこととて、心やりにいへる、

引く舟の綱手の長き春の日を

よそかいかまで我は經にけり

聞く人の思へるやう、「なぞたゞことなる」と、ひそかにいふべし。「舟君のからくひねり出して、よしと思へる事を、えしもこそしひへ」とて、さゝめきてやみぬ。俄に風波たかければ、ごごまりぬ。

【語釋】

○風浪見えず。此句は、浪の方について、見えずと言つたもの。風も吹かず、浪も見えないといふ意。

○黒崎。泉南郡淡輪村。

○所の名は黒く松の色は青く云々。景色の描寫をするのに、屬裏に映じた印象を

に「なぜまア平凡な歌であるのか」と、ひそかに批評するであらう。然し「舟の主人公のやうやく考へ出して、自分ではよい歌だと思つてゐる歌を、強ひてわるく言ふ事は出来ない」と言つて、小聲に何か言つて止んだ。突然、風吹き浪が高いため、航行を中止してしまつた。

描かずに、まづ作者の頭の中に、五色といふ概念を作り上げ、それに見る所のものを、強ひて當て籤めようとした。それが爲にまづ、黒崎といふ名から、所の名は黒く、こいひ、次に青い松と白い浪を數へあげ、貝の赤色を配し、黄色を代表するものを見付け得なかつたので、「五色に今一色ぞたらぬ」と言ひすて、終つた。景色を具體的に活現させる事が出来ず、概念的な技巧的な、無味乾燥な駄洒落半分のものになつて終つた。之は彼が藝術に對する態度の缺陷を遺憾なく表はしてゐるものである。

○蘇芳。赤い色。

○今ひといろ。「今」は、もうの意、添へ加へる意の詞。

○箱の浦。和泉國泉南郡淡輪村箱作の海岸。

○綱手。船に繫いで曳く長い綱。「綱手をひきて行く」は、綱を船に繫いで、磯傳ひにその綱を曳いて進み行くこと。

○玉くしげ云々。箱の浦の海が靜かで浪の立たない日は、海を鏡と誰が見なからうぞ、誰も鏡と見るさいふので、「玉くしげ」を箱の枕詞に用ゐ、且鏡の縁語としたもの。感動の微弱な理窟ほい歌である。「海を鏡と誰が見ざらん」さいふ、言ひ方が既に理窟である。「玉くしげ」の「玉」は美稱、「くしげ」は櫛笥で、櫛

を入れる箱。

○船君。貫之をさす。

○この月までなりぬること。最初は、正月中に都へ歸り着かうと思つたのに、風浪の爲に豫定が狂つて、二月までにもなつた事よ。

○くるしきに堪へずして。旅程の長びいた苦痛に堪へられないで。

○人もいふことさ。ほかの人も詠むのであるから、自分も詠まうと言うて。

○ひく船の云々。船に綱を繋いで曳いてゆく、その綱手のやうな永い春の日を、四十日五十日まで、自分は旅に經過した。「ひく船の綱手の」は「ながき」の序であるが、單に「ながき」の譬喩に用ゐたのみでなく、此場合の作者の境遇を暗示してゐると共に、綱手を曳いて磯傳ひにゆく悠長な氣分が、歌全體の情趣を一層豊かにしてゐる。長い溜息がそのまゝ、調子の上に現はれてゐて、理智的な點がなく、此日記中での優れた歌とするに躊躇しない。

○なぞたゞごさなる。何故、マア尋常平凡な歌であるのか。「なぞ」は「何故ぞ」で、源氏・空蟬なぞ、かう暑きに此格子は下されたる」「たゞごさ」は、平談俗語さいふに同じだ、爰は、當時の風尚である理智的な技巧的な點のないのをいふのであらう。

○辛くひねりだして。辛うじて考へ出して。

○えしもこそしひへ。強ひてわろく言ふ事は 來ぬ。「しも」「こそ」共に強めの助詞。「しひへ」は、「しひね」の誤であらう。「しひ」は「強ひ」の意。「ね」は打消の「ず」の已然形。「一説に」「しひ」は「誣^しひ」で、枉げて悪くいふ意である。

○さゝめき。小聲で物をいふこと。

二日 雨風やまず 日ひと日、夜もすから、神佛を祈る。

【語釋】

○日ひと日。一日中。

○神佛をいのる。風浪の鎮まるやうに、神佛に祈願をかけたのである。

三日 海の上昨日のやうなれば、舟出さず。風の吹く事やまねば、岸の波立ちかへる。これにつけてもよめる歌、

【通釋】

三日、海の上が昨日と同じで浪が暴いから、舟を

【通釋】

二日、雨風が止まない。終日終夜、神佛に祈願する。

出さない。風の吹くのが止まないから、岸の浪が盛んに寄せては返す。この浪のかへるのを見るにつけても、羨しくて詠んだ歌、

緒をよりて甲斐なきものは落ち積る涙の玉を貫かぬなりけり。

このやうにして、今日は暮れた。

緒ををよりてかひなきものは落ち積る

なみだの玉をぬかぬなりけり

かくて今日は暮れぬ。

【語釋】

○岸の浪たちがへる。岸に打寄せた浪のまた沖の方にかへる意か。次に「これにつけても」さあるは、浪のかへるのを見るにつけても、かへる浪が羨しくての意であらう。伊勢物語に、「昔、男ありけり。京にありわびて、あづまへゆきけるに、伊勢尾張のあはひの海づらを行くに、浪のいと白くたちかへるを見て、いさゞしく過ぎにし方の戀しきに羨しくもかへる浪かな。さなむよめりける。」或は又、岸の浪が盛んに立つ。「かへる」は、其動作の何遍もく復される意の接尾語で、その事の甚しきをいふ。「たちがへる」「湧きかへる」「煮えかへる」「消えかへる」など、皆その事の甚しい意である。

○緒をよりて云々。緒紐を擦つても擦り甲斐のないのは、故郷に歸りたくても歸られない悲しみの爲に、澤山流れ落ちる涙の雫を、貫きとめない事であるよさいふので、若し涙の玉を緒に貫きとめめる事が出来るならば、どんなに悲しい

【通釋】

四日、舵取が「今日は風の模様や雲脚が甚だわるい」と言つて、舟を出さずにしまつた。だが終日波も立たないし、風も吹かない。この舵取は天候も豫測出来ない糞乞食であるよ。此碇泊所の濱邊には、色々の立派な貝や石が多い。それだから、その貝や石を人々の舟からおりて拾ふのを見て、

か、その悲しみの程もわかるであらう、随つて波風も同情してくれるであらうにさ、暗につれなく立つ涙を恨んだものである。爰にだしぬけに「緒を擦りて」と言つたのは、船中に緒をよる者がゐたので、それにつけて歌つたのであらうといふ。

四日 舵取「今日風雲のけしきはなはだあし」といひて、舟出さずなりぬ。しかれども、ひねもずに波風立たず。此の舵取は、日もえはからはぬかたゐなりけり。此の泊の濱には、くさくさのうるはしき貝石なご多かり。かゝれば、たゞ昔の人をのみ戀ひつつ、舟なる人のよめる、

寄する波うちも寄せなむわが戀ふる

人わすれがひおりてひろはむ

といへば、ある人堪へずして、舟の心やりによめる、

たゞ亡兒の事をばかり戀しく思ひくして、舟に居る人の詠んだ歌、

寄する波うちも寄せなむわが戀ふる人忘れ貝おりてひろはむ。

さうたうたから、或人が悲しさに堪らないで、舟の氣慰みに詠んだ歌、

忘貝拾ひしもせじ白玉を戀ふるをだにもかたみと思はむ。

さ詠んだ。女兒に對する愛情の爲には、親は聰明さを失ふであらう。

「玉のやうに美しくもなかつたらうに」さ人は言ふであらうか。然し又、

「死んだ子は顔が美しかつた」さいふ諺もあつて、

わすれがひ
忘貝拾ひしもせじ白玉を

戀ふるをだにも形見と思はむ

となむいへる。をんな兒のためには、親をさなくなりぬべし。

「玉ならずもありけむを」さ人いはむや、されども、「死にし兒顔よかりき」といふやうもあり。なほ同じ所に日を経る事を歎きて、ある女のよめる歌、

手をひでゝ寒さも知らぬいづみにぞ

くむとはなしに日ごろ經にける

【釋】

○かぜ雲のけしき。風の模様や雲脚。

○ひれもす。終日。

○日もえはからぬ。天候さへも豫測し得ない。「日も」の「も」は、例の複雑を單純化した言ひ方で、機取は天候の観測がその職分である筈なのに、その天候すらも

死んだ者は誰でもよく思はれるものだ。矢張り所に、日數を經過する事を嘆いて、或女の詠んだ

歌、
手をひで、寒さも知らぬ泉にぞくむさはなしに日ごろ經にける。

觀測出来ない、況んや他の事は何にも出来ないといふ意を含めた、極めて罵倒した言ひ方である。

○かたる。乞食。穢取を罵つて言うたもの。宇治拾遺「心なしのかたるはおのれがやうなるものをいふぞかし」とあるも、罵つて言うたのである。又、卑下の詞にも用ゐる。伊勢物語「そこにありけるかたる翁板敷の下に這ひ歩りきて」とあるは、自ら卑下して言うたもの。

○くさんく。さまんく。

○うるはしき。立派な。玉小櫛「すべてうるはしきふ言は、古書にては、美麗の意なれども、物語などにいへるは、たゞ美麗の意にはあらで、俗言に、きつさしてかたさいふ意、亂れず正しき意にいへり」萩原廣道は「端正の字によくあたれり、威儀の亂れず美麗にもてつけたるより轉れる也」と言うてゐる。「くさんくのうるはしき貝・石などおほかり」の句に、人々は皆磯におりて、それらの貝や石を拾うて遊んだ意を含めてある。

○か、れば。貝や石が多くて、人々は皆それを拾つて遊ぶから。

○音の人を云々。人々が貝など拾つて遊ぶ事から、死んだ子供を思ひ出して戀しく思ふのである。

○船なる人。人は皆濱邊におりて樂しげに遊んでゐるに、自分獨り亡兒を思つて、船中に暗然沈思してゐる人さいふ意味で、特に「船に居る人」さ云うて、亡兒の母をさしたるもの。創見に「まことに此濱邊には、今もいろ／＼の貝石多く、なつかしきわたりなり。皆おりたちて拾へるを見て、我が兒も居らば、同じさまにものせんをさ、彼の母なごのよまれたる也。船なる人のよめるさ、殊更にいへるにて、餘の人は、濱邊に遊べる事しるし。さる面白き濱づらに、數日舟か、りしてあらんに、女をさなき者は更なり。誰の人は、おり立ちてものせざらん。況んや今日しも終日波風なきたらんをや。もさより論なきことなれば、かたへに見せて、委しく言はざるなり。諸註たゞ貝石を見やりて思ひ出づるさするもの謬れり。心を用ゐて見るべし」

○よする涙云々。岸に寄せ來る波が、忘貝を打ち寄せて欲しい。さうすれば、自分の戀しい人を忘れるさいふ、その忘貝をおりて拾はうとの意、亡兒を戀しく思ふ情に堪へられないから、せめて忘貝でも拾うて、しばし憂き思ひを忘れようさいふ、慎ましやかな可憐な女らしい心持を詠んだもの。萬葉集一わが背子に戀ふれば苦し暇あらば拾ひて行かむ戀忘貝」とあるも、同じ趣向である。「忘貝」は「うつくしき貝なるゆゑに、見れば憂き事を忘るゝて、名づく」(契沖)

さいふ。「わが戀ふる人わすれ貝」は、自分の戀ふる人を忘れるさいふ名の忘貝さいふ意に言ひつゞけたもの。

○ある人。貫之をさす。

○堪へずして、悲しさに堪へられないで。

○船の心やり。舟の中の心慰め。

○わすれ貝云々。自分は忘貝を拾ひもすまい、なぜなら、せめて、白玉のやうな愛らしい我子を、戀しく思ひ出す事をも、亡兒の記念さしようからと言ふので、貫之の心の中には亡兒の美しかつた姿が忘れられなかつた、またその美しい可愛い姿を想ひ出す事が此上もない慰めでもあつた。白玉に譬へたのは、あながち親の慾目から許りではなく、事實さうであつたかも知れぬ。死んだ子供を矢鱈に戀しく思ふ母親よりも、亡兒の美しい姿を幻想に描いて樂しむ所に詩人としての貫之が居るやうにも思はれる。「白玉」は、亡兒を養めうつくしんで言うたもの、萬葉集卷五、「白玉の吾子古日は」同卷九、「白玉の人のその名を」源氏、桐壺「玉のをのこ御子」宇津保物語、俊隆「玉の光輝くをのこ子を生みつ」などがある。「かたみ」は、形見て、後からその人を思ひ出す爲に残しておく記念物。

○女兒のためには云々。子供に對する愛情の爲には、親は理性を失つて、愚かになつて終ふであらう。「白玉を戀ふる云々」と、我子を白玉に譬へた事を、人が非常識だと笑ふかもし知らんと思つて、その辯解をしたのである。こゝに貫之の性格が現はれてゐる。燃えるやうな情熱は、時として理性を蹂躪する、論理を超越する。然も立派な詩がさうした時に生れる。冷やかな理性の制肘を受け、論理の條理にのみ拘泥するこゝ、概念的な理智的な理窟詰めの歌しか詠めなくなる。貫之は詩人ではなくて常識家である。條理のたつた、こじんまりした歌は詠めるが、感動的な歌はよめない。憶良が自分の子を「白玉の吾が子古日」と詠んでゐるのに比して、二人の性格の相違、詩人としての相違を見る事が出来るよう。

○玉ならずもありけんを云々。玉のやうに美しくもなかつたらうに、人は言ふであらうか。人の批評を豫想して、自身から先手をうつて言うてゐる。

○死にし子顔よかりき云々。死んだ子は顔が美しかつたといふ諺もある。だから白玉に譬へても、さまで非常識な事ではあるまい。

○日をふる。日暁を經過する。

○手をひで云々。此歌は、和泉國の和泉いづみに湧き出る泉の意を言懸け、それが地

【通釋】

五日、今日やうくの事で、和泉の灘から小津の泊に向つて航海する。濱邊には松原が見渡す限り遠くつゞいてゐる。單調な眺め、長い航海に倦いて苦しいから、詠んだ歌、行けどなほ行きやられぬは妹がうむをづの浦なる岸の松原。

名の和泉である事を聞かせる爲に、「手をひで、寒さも知らぬ」といふ説明句を附け、さて泉の縁で、「何もせず空しく」といふ意を、「汲むさはなしに」と云うたもの。和泉國に泉の意を言懸けたのが此歌の趣向で、何の味もない、全く技巧本位の文字の遊戲に過ぎない。「ひで」は、浸すこと。「日ごろ」は、數日の意。

五日 今日からくして、和泉の灘より小津の泊をおふ。松原目もはるくになり。かれこれ苦しければ よめる歌、

行けどなほ行きやられぬは妹がうむ

をづの浦なるさしのまつばら

かくいひつゝ來る程に、「舟とく漕げ、日のよきに」ともよほせば、舵取ふなごごもにいはいはく、「み舟よりおほせたぶなり、朝北の出で來ぬさきに綱手はや引け」といふ。此の詞の歌のやうな

行く間に、「舟をはやく漕げ、日和がよいから」こ催促するこ、舵取が水夫どもに向つて言ふ、こは、「み舟から舟を早く漕げと仰つしやるのだ。朝の北風の吹いて来ぬ以前に、綱手をはやく引張れ」といふ。此歌のやうに聞える詞は、それは舵取の自然に發した詞である。舵取は、ひたすら自分が歌の口調めいた言葉を使はうと思つて、使ふのではない。たと聞く人が「不思議に歌らしい口調で言つたものだよ」と思つて、書き出したれば、いかにも三十一文字であつた。「今日は波が立つてくれ

るは、舵取のおのづからの詞なり。舵取はうつたへに、われ歌のやうなる事いふこにもあらず。聞く人の「あやしく歌めきてもいひつるかな」とて、書き出せれば、げに三十文字あまりなりけり。

「今日波な立ちそ」と、人々ひねもすに祈る。しるしありて、風波立たず。今し鷗かみめむれるて遊ぶ所あり。京の近づくよろこびのあまりに、あるわらはのよめる歌、

祈り來るかざまと思ふをあやなくも
かもめさへだに波と見ゆるむ

といひて行く間に、石津といふ所の松原おもしろくて、濱邊とほし。また住吉のわたりを漕ぎ行く。ある人のよめるうた、

今見てぞ身をも知りぬる住の江の

るなと人々が終日祈る。その甲斐があつて、風も波も立たない。今丁度鴨の群つてゐて遊ぶ所がある。都の近くなる喜びの餘勢で、或る童の詠んだ歌、

祈り来る風聞と思ふを
あやなくもかもめさへ
だに波と見ゆらむ。

と詠んで行く間に、石津といふ所の松原が趣があつて、汀が遠く連つてゐる。又、住吉の海邊を漕いでゆく。或人の詠んだ歌、

今見てぞ身をも知りぬ
る住の江の松よりさき
に我はへにけり。
こゝで死んだ女兒の母

松よりさきに我はへにけり
こゝにむかしつ人の母、一日かた時も忘れねばよめる、

住の江に舟さしよせよわすれ草

しるしありやと摘みて行くべく

となむ。うつたへに忘れなむとにはあらで、戀しきこゝちしばしやすめて、又も戀ふる力にせむとなるべし。

【語釋】

○和泉の灘。朔日に、箱の浦の邊りで、俄に風浪の爲に碇泊した。今其處から出かけて行くので、其地點をさして、和泉の灘と云うたもの。特稱の代りに總名を用ゐたのである。

○小津の泊。今の泉北郡大津町のこと。

○めもはるくなり。見渡される限り遠く松原の海岸に續いてゐるのをいふ。

○苦しければ。松原の遙かに引き續いてゐるのを見て、行く先も遠いやうに思はれ、心に倦怠疲勞を感じて苦しく思ふのである。

が、一日片時も、その亡
兒のこゝを忘れないか
ら、詠んだ歌、
住の江に舟さしよせよ
忘草しるしありやと摘
みてゆくべく。
さいふのである。「忘草し
るしありや」と、言うたの
は、ひたすら忘れて終は
うさいふではなくて、
戀しい心持を暫時休め
て、再び戀する時の潜勢
力にしようさいふのであ
らう。

○ゆげごなほ云々。行つても、矢張り過ぎる事の出来ない程に長くつゞいて
ゐるのは、小津の浦にある、岸の松原である。「いもがうむ」は、妹がうみつむ
ぐ意。「小津」の「小」に「麻」の意を兼ね、妹が織む麻をといふ意で、「小津」
に言懸けたもの。枕詞であるが、同時に「續む」に「倦む」意を兼ねて、單調
な航海に倦み疲れた心持を匂はせてゐる。

○かくいひつゝ來る程に。このやうに歌など詠み／＼して行く間に。

○日のよきに。日和がよいに因つて。

○御船。貫之の乗つてゐる舟を尊んで言つたもの。

○仰せたぶなり。仰せ給ふのである。御船から舟を早く漕げさ仰つしやるのであ
る。これは舵取が舟から、磯におり立つて綱手を曳く舟子どもに呼びかけたの
である。

○あさきた。朝吹く北風。

○此の詞の歌のやうなるは。此の歌のやうなる詞はの意。舵取の言葉の歌の口調
に似てゐるのをいふ。

○うつたへに。ひとへに。うちたへに。ひたすらに。萬葉「神樹かぢ」にも手は觸るちふ
をうちたへに人妻さいへば觸れぬものかも」

○歌めきて。歌らしく、

○三十文字あまりなりけり。「三十文字あまり」一文字なりけり」といふを、略して言つたもの。

○なたちそ。「な……そ」は、間に動詞を挿んで禁止の意を示す助詞。

○よろこびのあまりに。喜びの餘勢で。

○いのりくる云々。只今は風浪のたゞぬやうに、神佛に祈りつゝ漕いで行く、その風の絶間であるを喜んでゐるのに、なほ理窟もなく、鷗までさへ浪さ見えて、自分達の心を暗くするのであらうか。「風間」は風の絶間。「風間と思ふを」は「風間を」の意、思ふは軽く添へた詞、萬葉「大伴の御津の濱なる忘具家なる妹を忘れて思へや」とあるも、たゞ「忘れんや」の意。「あやなく」は、條理の立たぬこと、譯のわからぬこと。古今集「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えれ香やはかくる」と

○石津。和泉國泉南郡。堺市の南にある。

○濱邊とほし。汀の遠く連つてゐるをいふ。

○住吉。攝津國住吉郡。此地名を須美與志と唱へるは後世の事で、奈良朝頃迄は須美乃延とよんだ、古今集に「住よしと海人は告ぐとも長居すな、人忘れ草生

ふさいふなり」とあつて、此前後から住吉すみよしと云ひそめたものである。住吉神社は、表筒男・中筒男・底筒男の三神を祭つてある。攝津國風土記「所ところ三以稱住吉者、昔むかし息長足比賣天皇世、住吉大神現出而、巡三行天下、一覓み可住國一時、到いた於沼名掠之長岡之前、乃謂、斯實可住之國、遂讀稱之云三眞住吉國、乃是定三神社、今俗略之直稱三須美すみ八や八や」とある。又、書紀の息長帶比賣命が西國から海路を歸り上り給ふ所に、「忍熊王引レ軍更返屯かへりて於住吉一時、皇后聞三忍熊王起レ師以待之、命三武内宿禰懷三皇子、橫出三南海、泊三于紀伊水門、皇后之船直指三難波、于時皇后之船廻もとほりて於海中、以不能進、更またかへりまして還三務古水門、而トレ之、於レ是……表筒男中筒男底筒男三神、誨下之曰吾和魂おほづのたま宜レ居三天津渟あまのついで中倉之長峽、便因看中往來船上、於是隕三神教、以鎮坐焉、則平得度なま海」なまとあり、海路の守神である、だから萬葉集廿卷に「墨江の、あが皇神に、幣まつり、祈り申して、難波津に船を浮けす」となごあつて、海路の平安を此大神に祈つたものである。

○ある人。貫之をさす。

○今見てぞ云々。今住吉の松を見てはじめて住吉の松の若さも、又吾身の年老いた程合ひをも知つた、住吉の松は遠い昔からあるもので、だいふ年數を經過し

てゐるものと思つてゐたが、その住吉の松は依然として青いのに、自分の頭は白くなつて終つた。してみると、自分は住吉の松よりも先を越して、年をとつて終つた。住吉の松の永久に翠である姿に對して、自己の老いゆく感慨を寄せたものであるが、その寄せ方が少しも實感に即したものでなく、眞率と純一さを缺いた、理窟めいたものになつてゐる。住吉の松は古來有名なもの、萬葉集卷一「霞打ちあられ松原住吉の弟日をさめさ見れど飽かぬかも」さあり、和泉の灘から小津石津にかけて、長汀曲浦の間に、青松白砂が映帶し、それが住吉の濱に至つて盡きてゐる。古今集「われ見ても久しくなり住の江の岸の姫松幾代經ぬらむ」「住吉の岸の姫松人ならば幾代か經しと問はましものを」なごみ詠み、「住の江のまつ程久になりぬれば芦たづの音に泣かぬ日はなし」といふやうに、待つ事の久しい譬喩に詠まれてゐる。

○むかしつ人の母。昔の人、即ち亡兒の母。貫之の妻。

○わすれれば。亡き子の事を忘れないから。

○住の江に云々。住の江に舟を漕ぎ寄せよ、その岸にあるさいふ忘草をば、亡き子供を戀しく思ふ悲しい愁思を忘れる効驗があるかどうか、摘んで行かうが爲に。「わすれ草」は、萱草のこと、文選「萱草忘憂」さある所から、忘れ草と訓

【遺響】

このやうに歌を詠んで、
濱邊を眺めては、憂ひに
沈み／＼して行く間に、
遇然風が吹いて、漕いで
もく／＼、すん／＼後しざ
りして、すん／＼の事に沈
没して終ふであらう。舵

んだので、憂き事を忘れる草の意。然し歌に「忘れ草」と詠んであるのは、その草を正確にさらへて言うてゐるのではなく、假に設けて言うたもの。古今集「道知らば摘みにも行かむ住の江の岸に生ふてふ戀忘草」

〇うつたへに云々。これは「忘草しるしありやま摘みて行くべく」を詠んだ母親の心持を忖度して、こゝに説明したものであるが、同時に之は貫之の亡き兒に對する心持であり、態度である。彼は亡兒の追憶に生きてゐた。追憶は悲しい然し全然忘れ果てることは、より以上に彼には堪へられない苦しみであつた。亡兒に對する愛は、追憶となつて、彼に慰安を與へた。美しいもの愛らしいものに對する追憶の世界はやがて詩の世界である。

かくいひて眺めつゝ來る間に、ゆくりなく風吹きて、こげども漕げども、しりへにしぞきにしぞきて、ほと／＼しくうちはめつべし。舵取のいはく、「此のすみよしの明神は、れいの神ぞかし。ほしき物ぞおはすらむ」とは、今めくものか。さて「幣なまをたてまつり給へ」といふに隨ひて、幣なまたいまつる。かくたいまつれど、

取の言ふこと、「この住吉明神は、いつも物を欲しい時は風を立て、舟を進ませぬ神である。だから今日も何か欲しい物がおありなさらう」といふのは、當世風な欲深い神である事よ。さうして「幣を献上しなさい」と言ふにまかせて、幣を奉る。このやうに幣を献上するけれど、風が少しも息まないで、いよく吹きに吹き、いよく立ちに立ち、風や波が危険であるから舵取がまた言ふ事に、幣では神様の御心が満足しないから、御舟も進まないのであるやうだ。矢張嬉しいと思ひなさら

もはら風やまで、いや吹きにいや立ちに、風波の危ければ、舵取またいはく、「幣には御心のゆかねば、御舟も行かぬめり。なほ嬉しと思ひ給ふべき物、たいまつり給へ」といふ。又いふに隨ひて、「いかゞはせむ」とて、「眼もこそ二つあれ、たゞ一つある鏡をたいまつる」とて、海にうちはめつれば、いこくちをし。さればうちつけに、海は鏡のおもてのごとなりぬれば、ある人のよめる歌、

千早ちはやぶる神の心を荒るゝ海に

鏡を入れてかつ見つるかな

いたく住の江の忘草、岸の姫松などいふ神にはあらずかし。目もうつらゝ、鏡に神の心をこそ見つれ。舵取の心は、神の御心なりけり。

う品物を献上しなさい」
と言ふ。また言ふにまか
せて、「致方ない」と言う
て、「人間には眼は大切な
ものだが、その眼でさへ
も二つある、然るにそれ
をばやめて、たつた一つ
の鏡を奉る」と言うて、
海に投げ込んだから、甚
だ残念である。鏡を投げ
入れたから卒爾に海は鏡
のやうに平らになつたか
ら、或人の詠んだ歌、
千早ぶる神の心を荒る
、海に鏡を入れてかつ
見つるかな。
住吉の明神は、甚だ、歌
に詠まれる「住の吉の忘
草」さか「岸の姫松」な
ごいふ優雅なやさしい神

【語釋】

○ながめつゝ、くる。住吉の濱邊を見渡しし／＼してゆくさいふ意に、亡兒の事を想
出して物思ひに沈みつゝ、行く意を言懸けてある。

○ゆくりなく。雄略記に「不意」さ訓んである。端なく、思ひがけなくの意。

源氏・夕顔「いざよふ月にゆくりなくあくがれん事を」

○しりへ。尻方しりへの義。後方。

○しぞきにしぞき。すん／＼退く。枕草子「涙をたゞ落しに落す」などいふやう

に、同じ動詞を「に」といふ助詞で二つ重れる時は、其意味が一層強くなる。

○ほさ／＼しく、「ほさほさ」は、送々ほと／＼で、其近き邊りまで至る意、俗に、す

んでのこさ、又は、もちつさでなごいふに同じ。萬葉「わが盛りまた變をちめやも

ほさ／＼に奈良の京を見ずかなりなむ」とあるは、奈良の都を見なくなるにち

かからんかこの意。「ほさ／＼」は、「ほさ／＼」に形容辭「しく」の添つた

もので、意は同じであるが、然し萬葉「み幣なまはさり神の祝が齋いはふ杉原、薪伐りほ

さほさしくに手斧取らえぬ」拾遺集「宮造る飛彈の匠の手斧音ほさ／＼しかる

目をも見しかな」「歎きこる人いる山の斧の柄のほさ／＼しくもなりにけるか

な」後選集「人の許より久しう心地煩ひて、ほさ／＼しくなんありつるさいひ

ではない。目も熱心に鏡に對つて、その面にうつる神の心のさまを見たことである。舵取の心は神の心に一致してゐるよ。

て侍りければ「宇津保物語」ちひさくて病してほさくしかりけるに」などある「ほさくし」は、すべて危い事に言うてゐる。

○うちはめつべし。船を海にはめ込んで終ふであらう。

○明神。靈驗の明かに現れ給ふ神の意であることも、又、名ある神の義であることもいふ。

○例の神。いつもの神。何時も物を欲しく思ふ時は風を起し給ふ神であるこの意。

○今めくものか。當世風である事よ。「住吉の明神は、いつもの、物を欲しい時には風を起す神である。何か欲しい物があらせられるであらう」と言つた舵取の詞を受けて、「さては明神も當世の人心と同じく慾心の深い事よ」と驚嘆したもので、作者の詞である、「ものか」は、驚き怪しむ意の嘆辭。

○たいまつり。「たてまつり」の音便。献上すること。

○もはら。全く。「もはら風やまで」は、風が全然息まぬこと。

○いや吹きにいやたらに。「いや吹きに吹き、いや立ちに立ち」の略。いよく、烈しく吹き、いよく、甚しく立つ。

○御心のゆかねば。神の御心が満足しないから。さて爰は、「御心のゆかねば御

舟もゆかぬめり」こ、同音意義の語であやなして、諧謔を弄したのである。

○いかゞはせん。何としようぞ仕方がないこの意。

○まなこもこそ二つあれ云々。人間の大切な物としては、眼である、その眼でさへも二つあるが、それをばやめて、たつた一つの鏡を献上するまで。「まなこもこそ二つあれ」は、眼も二つあるにもせよ、下につゞく意を持つてゐて、下に反對の意を述べる時に用ゐる句法である。古今集「仇なりき名にこそ立てれ」さあつて 下に「櫻花年に稀なる人も待ちけり」（年の内にもたまさかにしか來ない人も散らすに待ちつけた、だから仇どころではない）といふ反對の意を述べてゐる。爰も「眼もこそ二つあれ」の下に、「それをば奉らないで」いふ意の句が省かれてゐるのだ、眼と鏡とを對照し、眼は二つあるがたつた一つの鏡を奉るさいつて、眼、即ち命よりも鏡を大切らしく言ひなしたのは例の滑稽である。

○うちつけに。卒爾に。たゞちに。

○ちはやぶる云々。一方では浪の荒れる海に鏡を投げ入れ、一方では、神がはたして物を欲しがるかどうか、その神の心を見た事であるよ。「かつ」は、かれとこれと事の二つ交る時にいふ詞、鏡を入れるさいふ事と、神の心を見るさいふ

事との二つが交る意を表はすので、萬葉「世の中し常斯くのみと且知れど痛き心はしぬびかれつも」は、一方に世の中は果敢ないものと知つてゐるが、一方に悲しい情が堪へられないとの意。萬葉「秋風の寒き此頃下に着む妹が形見さかつもしぬびむ」は、秋風の寒い此頃下に着る一方では、いさしい人の形見として、なつかしく思ひ出さうとの意。「鏡をいれて」は、鏡を海に投げ入れたことであるが、同時に海の面が鏡のやうに靜かになつた意を添へて、「海面の鏡の如くなつた事によつて神の心を見た意を含め、「かつ見つるかな」の「見る」は、萬葉集にも、「眞澄鏡手まそかたみに取り持ちて見れど飽かぬ君におくれて生けることもなし」「眞澄鏡直たにし妹を相見すば我が戀止まじ年は經ぬさも」など、「眞澄鏡」を「見る」の枕詞としてゐる程で、鏡の縁語に用ゐたものであるが、更に、神の心を鏡に映して見たこと云つた心持を添へて、例の諧謔を弄したものの、「ちはやぶる」は、「ちははやぶる」の略、神の枕詞。「いち」は、「稜威りやうゐ」と通うて、猛き勢をいひ、「はや」は、たげく疾ときこと、ぶる「は」形容辭である。

○いたく。「あらずかし」につゞく副詞。

○住の江の忘草岸の姫松なごいふ神。「住の江の岸」おふてふ戀忘れ草。「住の江の岸の姫松幾代經ぬらむ」などと歌に詠まれてゐるやうな優美な神ではなく、

ある人の歌に「ちはやぶる神」と詠んだ如く、猛く恐しいあらぶる神であるこの意。即ち歌に「ちはやぶる神」といつた意味を肯定したものである。「ちはやぶる」は、古事記「以爲於此國道速振荒振國神等之多在」書紀「慮有ニ残賊強暴横惡之神者」かみなどあり、猛く強い意で、あらぶる神をいふのが本で轉じて一般に「神」の枕詞となつたもの。「ちはやぶる人」(猛く烈しい人)「ちはやぶる金の御崎」(浪暴く恐しい意)なども用ゐる。一説に「風波の靜まつて海面の澄むを住みにつけ、其の澄さ姫松の姫さは共に荒きには似つかはしからねば、かく緩なして書けるならむ」と言うてゐるが、「住の江」に特にその様な意味を持たせたものでなく、單に歌に讀まれてゐる忘草と姫松とに優美の意を代表せしめたものである。

○目もうつら／＼。「うつら／＼」は「つら／＼」と同じで、「う」は接頭語、「つら／＼」は、連々で、絶えず打續く意、異心もなく心を入れて物を見るのを、「つら／＼見る」といふ。萬葉「撫子が花取り持ちてうつらうつら見まくの欲しき君にもあるかも」さて「目もうつら／＼」は、「目もあやに」「目も遙に」などいふと同じで、見る目も熱心への意。

○鏡に神の御心云々。鏡を投げ入れる事に依つて、神の御心の様子を見たのを、

鏡は物の姿を映して見るものであるから、見る眼も熱心に鏡に向つて見る事によつて、其處にうつる神の御心のさまを見た事であると、言ふやうに言ひなし、同時に、鏡のやうに靜かに和きた海によつて神の御心のある所を見たさいふ意を添へて、海の平らになつたのを喜ぶ意を匂はしてゐる。

○舵取の心は神のみ心なりけり。海のままが舵取の言うたまゝになつたから、舵取の心はやがて神の御心に一致してゐるよき表面に舵取を讃め上げ、裏面に神の御心も矢張舵取と同じ慾深い御心であつたさいふ意をほのめかして、揶揄したものだ。

【通釋】
 六日、みをつくしのある所から出て、難波津に来て、淀川の河口に入る。皆の人達女や翁が額に手をあて、喜ぶ事が比類ない。かの船酔ひの淡路の島の巨子が、都に近くな

六日 みをつくしのもとより出で、難速の津を來て、川尻に入る。皆人々、おんなおきな、額に手をあて、喜ぶ事二つなし。かの舟るひの淡路の島の巨子おほいこ、都近くなりぬといふを喜びて、舟底より頭をもたげて、かくぞいへる。

いつしかさいふせかりつる難波渦

つたさいふのを喜んで、
舟底から頭を持ち上げて、
次のやうに詠んだ、
いつしかさいふせかり
つる灘波湯蘆こぎそけ
てみ舟來にけり。
甚だ案外人が詠んだか
ら、人々が不思議に思
ふ。その中でも、心持の
わるい舟君が、ひどく感
心して、「船酔ひをして青
くなつて居られた御様子
には、不似合な上出來な
歌であるよ」と言うた。

蘆漕ぎそけてみ舟來にけり
いと思ひの外なる人のいへれば、人々あやしがらる。これがなか
に、こゝちなやむ舟君いたくめで、「舟ゑひしたまひし御顔に
は、似ずもあるかな」といひける。

【語釋】

○みをつくし。水脈津籤で、江海の深い水脈みに杵ををたて、往來の舟がその杵を
目當に漕ぐ料とするもの。水脈は河の中で水の深く流れる筋。爰にいふのは、
海の中になて、ある、みをつくしである。萬葉「みをつくし心盡して思へかも、
こゝにも本名夢もとなにし見ゆる」

○難波の津をきて。「難波の津」は攝津國難波の港で、昔は西國から上る船は皆此
處に泊つたものである。「を」は、後撰集「人をいひわづらひてつかはしける」
又は、俗に「あの人をせいん言うた」などいふ「を」と同じく、強く言ふ詞
「に」の意。

○河尻。河の海に入る所。河口。爰は淀川の河口である。

○額に手をあて、。ひどく悦ぶ時のさまであらう。源氏、玉葛「ひたひに手をあて、念じ入りて居り」榮華物語「よる晝額に手をあて、念じ奉りたり」などあるは、祈るさきのさまであり、源氏、手習「額に手をあて、怪しこれは誰そさ、しうれげなる聲にて見おこせたる」さあるは、物を見る時のさまである。

○二つなし。類ひないこと。宇津保物語「心のさがなき(意地のわるい)ことさふたつなし」

○かの船酔の淡路の島の巨子。「船酔のかの淡路の島の巨子」といふ意で、廿六日の條に、「此の中に淡路のたうめといふ人のよめる歌」さある、その淡路のたうめをさしてゐるのだ。この老女は人々の中で一番舟に弱かつたのであらう、だから「船酔の」といふ有難い形容詞を頂戴したのである。一月九日の條に、「かく行きくらして、泊にいたりて、おきな人ひざり、たうめひざり、あるが中に心地あしみて、ものも物し給はでひそまりぬ」さあるも、船酔の結果であつた事は想像されるが、然し爰に「かの船酔の」とあるを、直に九日の條にある「心地あしみて」さあるのを指してゐるものと解するのはよくない。「かの」は「淡路の島の巨子」にのみかゝるので、その即ち船酔の常習者である、かの「追風の」歌を詠んだ淡路の島の巨子の意。「巨子」は、「おほいきみ」と同

じて、第一の姉君のこゝ、男では太郎さいふに同じ、大和物語「故御息所の御姉おほい子にあたり給へるなむ、いさらうくしう」とあるも、第一の姉君の意。然し爰は尊稱に用ゐたものであらう。この老女は貫之に仕へてゐた女であるが、わざと鄭重に取扱つて、過分の敬意を拂ひ、法外な尊敬から生ずる滑稽を見せたもの。「翁人ひさりたうめひさり」と並べ、貫之と同列に置いて、恰も貫之の妻であるかのやうに見せかけ、或は「淡路のたうめさいふ人」といひ、又爰に、淡路を淡路島に言ひかけ、「淡路の島の巨子」と崇め奉つてゐる。

○船底より云々。船に酔うて船底に臥してゐたが、その船底から頭を持ち上げて次のやうに詠んだこの意。

○いつしかさ云々。いつか早くさ待ち遠に思つてゐた難波瀉に、其處の蘆を漕ぎ除けて、御舟が來た事だ。「いぶせし」は、鬱悒で、心の結ばれ塞ること、轉じて、おぼつかない事、ゆかしい事、戀しく思ふ事などの意に用ゐる。爰は、心もさなく待遠に思ふ意。蘆は難波の名物で、萬葉「海原の豊けき見つ、蘆が散る難波に年は經ぬべくおもほゆ」など詠まれ、堀川百首「難波瀉蘆の穂末に風吹けば立寄る浪の花かさぞ見る」さもある。「かさそけ」は、漕ぎ退けて、蘆を退け靡かせて舟の通ること。

【通釋】

七日、今日、河口に舟が入り込んで、川を漕ぎ上るに、川の水が濁れて、進むに困難辛苦する。舟の上るこまが甚だむつかしい。かうしてゐる間に、病人の舟君は、本来不風流な人で、このやうな歌詠むなごいふ事は、少し

○おもひの外なる人。案外人。今まで船底に呻吟して、歌など詠む元氣もなさうに思はれてゐた老女が、突然詠み出したので、意外に感じたのである。
 ○こゝちなやむ舟君。船酔の爲に心持をわるくしてゐた舟君。貫之のこま。
 ○いたく愛で。ひびく感心して。
 ○船みひしたまひし御顔云々。船酔をなさつて、青く萎れかへつて居られた御様子には、不似合な上出来の歌であるよ。「したまひし御顔」といつたのは、慙き尊んで言つたもの。

七日 今日河尻に舟入り立ちて漕ぎ上るに、川の水ひて、惱なやみわづらふ。舟の上る事いとかたし。かゝる間に、舟君のやまうご、もごよりこちぐしき人にて、かうやうの事更に知らざりけり。かゝれども、淡路のたうめの歌にめで、都ぼこりにもやあらむ、からくしてあやしき歌ひねり出せり。其の歌、
 きと來ては川の堀江の水を澆み

も知らなかつた。けれど
も「淡路のたうめ」の歌に
ほれ込んで、都に近づい
た事の悦びからであらう
か、やう／＼の事で、ま
づい歌を考へ出した。そ
の歌、

きこ來ては川の堀江の
水を浅み舟も我が身も
なづむ今日かな。

この歌は病氣をしてゐる
から、かう讀んだのであ
らう。一首で満足しない
から、もう一首、

さくこ思ふ舟なやます
はわが爲に水の心の浅
きなりけり。

此の歌は、都の近くなつ
た事が嬉しくてたまらな
いで、讀んだのであらう。

舟もわが身もなづむ今日かな

これは、病をすればよめるなるべし。ひと歌に事の飽かねば、
今一つ、

さくこ思ふ舟なやますはわが爲に

水のこゝろの浅きなりけり

此の歌は、都ちかくなりぬる喜びに堪へずして、いへるなるべ
し。淡路の御の歌に劣れり。「ねたく、いはざらましものを」と
くやしがる中に、夜になりて寝にけり。

【語釋】

○入りたちて。入り込んで。

○川の水ひて。川の水が減つて。

○憫みわづらふ。舟の進むこゝが困難で、苦しむこゝ。「憫み」と「わづらふ」も、
共に同じ意の語で、昔は、意味は同じくとも言語が違へば重ねて用ゐたもので、

淡路の御の歌よりはまづ
い。「残念に、詠まずに居
らうのに」と後悔する中
に、夜になつて、寢て終
つた。

「風の風」「豫めかゝれて知りせば」「鳴くなる聲の音のはるけさ」など、その例で
ある。

○やまうご。病人やまひびとの音便。

○こちん／＼しき人。無骨な人。無風流な人。源氏・玉葛かたち「容貌はいさかくめでたく
清げながら、田舎びこちん／＼しうおはせましかば、如何に玉の疵ならまし」

○かうやうのこそ。歌を詠むといふ風流なこそ。

○みやこぼこり。都に近づいた悦び誇り。萬葉「水江の、浦島の子が、鯉釣り、
鯛釣り誇り、七日まで家にも來ずて」とある。「鯛釣り誇り」も、釣りの利得の
あるを悦び誇る意。

○あやしき歌。貫之が自らの歌を謙遜して言うたもの。拙い歌。

○きさきては云々。長い舟路をやう／＼の事で此處までやつて來ては、また堀江
の川の水が浅い爲に、舟も滯滞し、我身も病の爲に艱難苦勞する今日である。

「きさき」は、來きさいふ動詞を二つ、「き」といふ助詞で重ねたもので、單に「來」
といふよりも意味が強い。古今集序「生きさし生けるもの」とあると同じ造句
である。「川の堀江」は、「堀江の川」に同じい。「川のぼり江」「川のぼり路」な
ど、解く説もある。「水を浅み」は、水が浅さへの意。「を」は詠嘆。「み」は「さ

に「さいふ意の接尾語、「風を痛み」「瀬を早み」「苦を荒み」などと同じ造句である。「なづむ」は、滯滞する意、又は艱難苦勞すること、萬葉「ますらをの心は無しに秋秋の戀にのみやもなづみてありなむ」「卷向の檜原まきびくに立てる春霞おほにし思はゝなづみ來めやも」などは、苦しみ憐む意。爰は、此兩意を同時に言懸けて、舟の方には滯滞する意、人の方には苦惱の意に用ゐたもの。即ち「なづむ」の一語に兩意をきかせたのが此歌の技巧である。

○これは病をすれば云々。これは作者が右の歌を詠したのである。

○ひま歌。一首の歌。

○ここの飽かれば。十分と思はぬから。

○さくさおもふ云々。早くと思ふ我が舟を憐み苦ませて進ませないのは、自分にとつて、水が親切心がないからであるよ。水底の浅い事を心の浅い意にとつて詠んだ點に、此歌の技巧がある。

○淡路の御。「御」は婦人の尊稱。「淡路の島の巨子」を云うたと同じ意味で尊んだもの。

○れたく。残念なこと。

○いはざらました。歌ますに居らうものを。

【通釋】

八日、午張り川邊に滯滞してゐて、鳥養の御牧といふ所にござまる。今晚、舟君がいつもの持病が起つてひどく苦しむ。或人が僅かの魚を持つて見舞に來た。米で返禮をする。それをば「飯粒で魚を釣る」と言はうか」など、從者の男どもがひそ／＼言ふのだ。このやうな事が、所々である。今日は節日の物忌みをするから、魚を食はない。

八日 なほ川のほとりになづみて、鳥養とりかひの御牧みまきといふところにござまる。こよひ舟君、例の病おこりていたく惱む。或人いさ／＼かなる物もて來たり。米してかへりごとす。男どもひそかにいふなり、飯粒いひばしてもつるとや。かうやうの事所々にあり。今日せちみすれば、魚用うをひず。

【語釋】

○鳥養の御牧。播津國三島郡鳥飼村。昔此處は馬を放飼した牧野であつた。

○例の病。いつもの病氣、持病。

○いさ／＼かなる物。僅かの魚を持つて見舞に來たのである。一本に、「あざらかなる物」とある。新鮮な魚の意。

○米してかへりごとす。米で返禮をする。

○男どもひそかにいふなり。此句は下の句にかゝるので、「飯粒してもつるとや」と男どもひそかにいふなり」といふに同じ。「男」は從者の男をいふのであらう。○飯粒してもつるとや。飯粒で魚を釣るといはうか。古事記、神功皇后の條に、

【通釋】

九日、待遠しいので、夜の明けないうちから、舟を曳きくして川を上るけれど、水がないから、極めて僅かづゝ進む。此の間に和田の泊のあがれ

「また筑紫の松浦瀉の玉島の里に到りまして、その河の邊に御食せず折しも、卯月の初の頃なりしかば、その河中の磯にまして、御裳の糸を抜き取り、飯粒を餌にして、其河の年魚をなも釣らける。」とある故事から、鮮魚の返禮に米をやつたのを、洒落て斯く言うたもの。「も」は詠嘆。「こや」は、「こや言はん」の意。さて此句は「飯粒してもつるこや」全體が男ごもの言うた詞である。

○かうやうのこと。魚の返禮に米をやること。

○今日節忌すれば。八日は、深齋日で、六齋日の一つである。

九日 心もどなきに、明けぬがら舟を曳きつゝ上れども、川の水なければゐざりにのみぞゐざる。此の間に、和田の泊のあがれの所といふ所あり、米魚など乞へばおこせつ。かくて舟曳き上るに、渚の院といふ所を見つゝ行く。其の院、昔を思ひやりて見れば、おもしろかりける所なり。後なる岡に、松の木ども

の所さいふ所がある。所の人に米や魚などを求めるさ、寄越した。このやうにして舟を曳いて上るに、渚の院さいふ所を見い／＼してゆく。その院は、昔の事を想像して見ると、面白かつた所である。院の後の岡に松の木などがある。中の庭には梅の花が咲いてゐる。この時、人々の言ふ事は、「これは昔有名であつた場所である。惟喬親王の御供に仕へた在原業平中将が「世の中にたえて櫻の咲かざらば春の心はのどけからまし」といふ歌を讀んだ所であるよ。いま感興の湧いた人が、

あり。中の庭には、梅の花咲けり。こゝに人々のいはく、「これむかし名高く聞えたる所なり。惟喬これたかの親王みこの御供に、在原の業平の中將の、「世の中にたえて櫻の咲かざらば春の心はのどけからまし」といふ歌よめる所なりけり。いま興ある人、所に似たる歌よめり。

千代へたる松にはあれど古の

聲のさむさはかはらざりけり

又ある人のよめる、

君戀ひて世をふる宿の梅の花

むかしの香にぞなほ匂ひける

といひつゝぞ、都の近づくを喜びつゝ上る。かく上る人々の中に、京より下りし時に、皆人子ごもなかりき。至れりし國にてぞ、

所に似合はしい歌をよんだ。

千代へたる松にはあれ
ど古の聲のさむさはか
はらざりけり。

又、或人の詠んだ歌。

君戀ひて世をふる宿の
梅の花昔の香にぞなほ
匂ひける。

と讀み／＼して、都の近くなるのを喜び／＼漕ぎのぼる。このやうに漕ぎ上る一行の人々の中で、初め京都から任國に下る時には、皆子供がなかつた。滞在してゐた國で、子供を生んだ者が幾人もあつた。その人々が皆舟の泊る所で、子供を抱いて、舟からおりたり、舟

子生める者どもありあへる。みな人舟の泊る所に、子を抱きつつ下りのぼりす。これを見て、昔の子の母、悲しきに堪へずして、

無かりしもありつゝ歸る人の子を

ありしもなくて來るが悲しさ

といひてぞ泣きける。父もこれを聞きて、いかゞあらむ、かうやうの事、歌好むとてあるにしもあらざるべし。もろこしもこども、思ふ事に堪へぬ時のわざとか。こよひ宇土野うどのといふ所にとまる。

【語釋】

○心もさなきに。待遠しく思はれるので。氣が氣でない爲に。「に」は、に因つて、の爲になどいふ意。

○明けぬから。夜の明けぬうちから。貫之「藤の花咲きぬるを見て時鳥、まだ

にのぼつたりする。この様子を見て、亡き女兒の母が、悲しくてたまらないで、

無かりしもありつゝ、歸る人の子をありしも無くて來るが悲しさ。

と詠んで泣いた。

父なる人もこの歌を聞いて、ごうあらうか、さぞ悲しい事であらう。このやうな歌は、歌がすきだからとて讀むのでもなからう。唐土でも我國でも、歌さいふものは、感に堪へない時に詠むものだと言ふことだ。今晚、宇土野さいふ所にさまる。

鳴かぬから待たるべらなり」「惜しむから戀しきものを白雲の立ちなん後は何心地せむ」とあるも、鳴かぬうちから、別を惜しんでゐるうちからの意で、同じ語法である。一説に「心もさなきに明けぬ」で文を切り、「から(空)舟を」と下につゞけて解いてゐるものもある。

○船をひきつゝ。例の綱手を曳いて淀川を溯るのである。

○ぬざりにのみぞぬざる。「ぬざる」といふ意を強く言うたもの。たゞ々々ぬざる膝行ばかりだ。

○和田のさまり。鳥飼と渚との間に此地名は今日殘存して居らぬ。多分今の牧方あたりだらうといふ。「さまり」は、船の行き着いて泊る處。萬葉「眉のまよこ雲居に見ゆる阿波の山懸けて漕ぐ舟泊知らずも」さて「和田の泊のあがれの所」とあるは、「あがれの所なる和田の泊」といふに同じで、「あがれ」は「和田の泊」の形容詞である。

○あがれの處。「あかれ」は「別る」の古言、和田の泊は難波と京とに旅客の別れる場所であるから、あがれの所といふのである。創見には「こは物を召し上れさいふあがれにて、水陸の旅人に、貨食をひさきて、あがれくと呼ばふより、あがれの所さいひならせる俗稱を、わざと例の書き出でられしなるべ

し。實にあがれと呼ぶ所の名ならば、あがれの所はいふまじきなり。石津といふ所、鳥飼の御牧といふ所などの如く、あがれといふ所を書くべし。石津の所、鳥飼の御牧の所といひては、聞えぬが如し。……もしこの被食あがれの意ならずば舟の人を呼び上ぐるのあがれにて、陸より、あがれと叫ぶ故の名にてやあらん、いづれにてもあるべし」と言うてゐる。

○米魚などこへばおこせつ。貫之一行の舟の人が、所の者に、米や魚を求めたれば、寄越したといふ意か。創見には「米をやりて魚などをへば」の誤であらうと言つてゐる。

○渚の院。伊勢物語「昔、惟喬のみこと申す親王おはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に宮ありけり。年毎の櫻の盛りには、その宮へなむおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人を、常にゐておはしましけり。時世へて久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩はれんごろにもせて酒を飲みつゝやま歌にかゝれり。今狩りする交野の渚の院の櫻にこに面白し。この木のもこにおり居て枝を折りてかざしにさして、かみなかしも、皆歌よみけり。馬の頭なりける人のよめる。世の中にたえて櫻のさかざらば春の心はのどけからまし、まなんよみたりける云々」

○昔を思ひやりてみれば。惟喬親王が交野に狩獵に行き渚の院に逗留せられた當時を想像してみること。

○こゝに。此語は今日俗に「そこで」などいふま同じ意で、下の句を起す發語のやうに用ゐられたものであらう。下の十一日の條にも「こゝに相應寺云々」さある。

○名だかくきこえ云々。評判の高かつた所である。

○惟喬親王。文德天皇第一皇子。

○御ともに。「御供に仕へた」といふほどの意。

○世の中に云々。世の中に全く櫻が咲かないならば、春に於ける人の心は、のんびりとしたものであらうといふので、春は櫻ゆゑに、風につけ雨につけ、人は心を惱ます、花の美しいだけに、散るを惜しむ心も深く、恨も長い、だから全く櫻がなかつたならばさ、嘆息したのである。然し此歌は、裏面に寓意があるので、惟喬親王を櫻に譬へたものであらうといふ。即ち惟喬親王は文德天皇の第一皇子でありながら、外威に勢力がない爲に、第二皇子惟仁親王に引越された。當時藤原氏の専横跋扈を憤る人々は、この惟喬親王に同情したもので、業平はその隨一であつた。そして惟喬親王故に色々心を碎き悶々の日を送つ

たのである、その感慨を櫻の花に托して詠んだものであらう。

○興ある人。感興を催した人。貫之をさす。

○千代へたる云々。千年も経過した舊い松ではあるが、吹く風に颯々々音たて、鳴る聲は、惟喬親王の昔と同じで、その響の清爽な感じは今も變らないわい。

「聲のさむさ」さは、松風の音の清爽な感じを、感覺的に言うたもの。新古今集の櫻色の庭の春風」さか「嵐も白き春の曙」といつた言ひ方と同じく、當時に在つては新しい言ひ方であつたらう。

○君戀ひて云々。渚の院に度々来て留まられた惟喬親王を戀ひ慕うて、幾年かを経て久しく立つてゐる、奮るき宿の梅の花は、今でも昔の通りの香に、矢張り匂うてゐる事だ。「世をふる」に「年を経る」と「奮る」の兩意を言懸けてある。
○かくのぼる人々の中に。このやうに都に上る一行の人々の中で。此句は、「いたれりし國云々」に續くのである。

○みな人。紀氏の屬官の人々。

○いたれりし國。行つて居つた國。

○ありあへる。「あふ」いふ語は、他の動詞に續けて、その動詞が示す動作を、互に又は共々に行ふ意を示す接尾語。「誇りあふ」ば、互に又は共々に誇り合ふ

こと。爰は、子を生んだ者が一人ではなく、幾人も有り合はせたこと、あちらにもこちらにもあつたこと。

○船のさまるところ。船つき場。

○おりのほり。舟から陸におりたり、陸から舟にのぼつたりすること。

○むかしの子の母。亡兒の母で、貫之の妻。

○なかりしも云々。子供がなかつた者も、子供が出来て歸るものを、有つた子供も死に失せて歸り來るのが悲しい事よ。「人の子は、單に「子」といふ意、人の「は軽く添へた詞。古今集「世の中にさらぬ別のなくもがな千代も祈る人の子のため」後撰集「人の親の心は闇にあられども、子を思ふ道にまじひぬるかな」などある「人の」と同じ。「人の子を」は「人の子なるものを」の意。

○いかゞあらん。どうあらうか、さぞ悲しい事に思つたであらうその餘意を含めてある。

○かうやうのこと。このやうな歌よむ事。

○歌このむさて云々。歌を好むとして詠むのでもなからう。歌は單に歌が好きだからと言つて、智識的に言語を羅列するのではない。

○思ふ事に堪へぬ時のわざさか。歌や詩を詠むさいふ事は、内部に情緒の興奮が

【通釋】

十日、故障があつて、漕
ぎ上らない。

【通釋】

十一日 雨が僅か降つて
止んだ。このやうにして

あつて、感に堪へぬ時に、する仕業であるとか言ふ事だ。詩の序「情動ニ於
中ニ而形ニ於言、言レ之不足、故嗟ニ歎之、嗟ニ歎之ニ不足、故詠ニ歌之」古
今集序「やまと歌は人の心を種として、萬の言の葉とぞなれりける。世の中に
ある人、事業ことわざしげきものなれば、心に思ふ事を、見る物聞く物につけて、いひ
出せるなり。花に鳴く鶯、水に住むかはづの聲を聞けば、生きさし生けるもの、
いづれか歌を詠まざりける」

○宇土野。舞津國三島郡五領村に在る。

十日 さはる事ありて、上らず。

【語釋】

○さはること。差支へ。

十一日 雨いさゝか降りてやみぬ。かくてさし上るに、東の方
に山のよこほれるを見て人に問へば、「八幡の宮」といふ。これ

棹さして漕ぎのぼるに、
 東方に山の横に長くつゞ
 いてゐるのを見て、人に
 尋れるま。男山八幡宮で
 ある」ま答へる。これを
 聞いて喜んで、人々がな
 がみ申す山崎の橋が見え
 る、嬉しい事が此上もな
 い。こゝで相應寺の邊に
 暫く舟をさめて、色々さ
 相談する事がある。この
 寺のある岸の邊に、柳が
 多くある。或人がこの柳
 の影が川の底に映つてゐ
 るのを見て、詠んだ歌、
 さゞれ浪よするあやな
 ば青柳のかげの糸して
 織るかさぞ見る。

を聞きて喜びて、人々をがみ奉る。山崎の橋見ゆ。うれしき事
 かぎりなし。こゝに相應寺のほとりに、しばし舟をさゞめて、
 さかく定むる事あり。此の寺の岸のほとりに、柳多くあり。或
 人この柳の影の川の底にうつれるを見て、よめる歌、

さゞれ波よするあやなば青柳の

かげの糸して織るかさぞ見る

【語釋】

○さしのぼる。舟に棹さして漕ぎのぼること。

○よこほれる。横たはつてゐること。

○八幡の宮。男山石清水の八幡宮。

○山崎の橋。山城國乙訓郡にある。此橋は當時有名なもので、聖武天皇の神龜三
 年に、行基菩薩が此橋を造り、橋上に法會を設けて供養した事が、水鏡に見え
 てる、續日本紀には「延暦三年七月癸酉、仰三阿波讀岐伊豫三國、令造山崎
 橋斷材」といふことが見えてゐる。

○こゝに。そこで。下の句を起す爲の發語に用ゐたもの。

○相應寺。山崎の橋の西詰にある。權僧正壹演の開基した寺。「こゝに」を「此處で」の意ださすると、次にまた「相應寺のほざりに」と重ね言うたのは、最初は漠然と言ひ、再び具體的に言ひ換へたもので、方丈記に「さびしきすまゐ、一間の庵」と重ね言うてゐるのと同じものと見られるがさうではなからう。

○さかくさだむること。色々と相談する事。京に入るについて、色々の用意手順を相談したのである。

○寺の岸のほざり。相應寺が川に臨んでゐる、その相應寺のある岸邊の意。

○さゞれなみ云々。さゞれ波が寄せて水面に波紋が出来る、その水面に生ずる模様をば、青柳の水に映る細い枝で、織るのかと思つて見る。水面に映る芽の生えそめた柳の枝を青色の糸に譬へ、水面に生ずる波紋をば綾織物に比し、兩者の間に、材料と製品との關係をつけたもので、かうした着想はそれが實感に即したものでなく、頭の中で作り上げた技巧的のものである。柳の枝を糸に譬へた歌に、伊勢女「青柳の枝にかゝれる春雨は糸もてぬける玉かぞ見る」古今集「青柳の糸よりかくる春しもぞ亂れて花の綻びにける。」「淺緑糸よりかけて白露を玉にもぬける青の柳か」などある。「さゞれなみ」は、小さな浪、「さゞれ」

【通釋】

十二日、山崎に逗留してゐる。

【通解】

十三日、やはり山崎に居る。

【通釋】

十四日、雨が降る。今日牛車を京の家へさりにや

はさらさらさ音のするのをいふ詞、細浪こなみ・小浪こなみなど書いてあるのは、皆意味によつて書いたもので、「さ」は、細小な意ではない。

十二日 山崎にとまれり。

【語釋】

○とまれり。「り」は現在完了の助動詞で、四段活用 of 已然形、佐行變格 of 未然形にのみ連る。

十三日 なほ山崎に。

【語釋】

○山崎に。「山崎にとまれり」の意。

十四日 雨降る。けふ車、みやこへさりにやる。

【語釋】

る。

【通釋】

十五日、今日牛車を持つて來た。舟の中がむさくるしいので、舟から人家に引き越す。此の人の家では、表面は喜んでゐるやうな態度で御馳走した。この家の主人の變應のよいのを見るにつけて、いよく丁寧に思はれる。色々に返禮をする。家人の立居振舞が上品で禮儀正しい。

○車。牛車をさしていふ、牛に牽かせる屋形車である。
○みやこへ。京の吾家への意。

十五日 今日車ゐて來たり。舟のむつかしさに、舟より人の家に移る。此の人の家、よろこべるやうにて、あるじたり。此の主人あるじのまたあるじのよきを見るに、うたておもほゆ。いろいろにかへり事す。家の人のいでいり、にくげならすゐやゝかなり。

【語釋】

○車ゐて來たり。車を持つて來た。凡て「牽ひ」とは、身に副へ附けるをいふ、例へば「牽ひてゆく」は、身に副へて行くこと、「ひきゐる」は、引き隨へて身に副へること。

○むつかしさ。むさくるしさ。「むつかし」は、むさい意。又はうるさく煩はしひ意。枕草子「むつかしげなるもの、縫物の裏、猫の耳のうち。」

○よろこべるやうにて。心の中はさうかわからぬが、表面は嬉しく思つてゐる様

子で。

○あるじ。雲塵。御馳走。

○またあるじのよき。自分差を如意で迎へて突れたその上に、また御馳走振りのよいのを見るにつけ。

○うたておもほゆ。餘りに了學に思はれる、「うたて」は、本からある事のいよ／＼進んで殊に甚くなるをいふ詞で、萬葉集「何時はなも戀ひすありとはあられどもうたて此頃戀の繁きも」「我宿の毛桃の下に月夜さした下儘したなやましもうたて此頃」「三日月のさやにも見えす雲隠り見まくぞ欲しきうたて此頃」など、皆いよ／＼甚しくなる意。轉の字を書くのも、移り進む意をさつて用ゐたもの。さて右の意から一轉して、事の平穩尋常でなく怪しく善くない意に用ゐる。書紀、武烈天皇の所行を言ふ所に、設たてニ奇偉之戲たてニさある。枕草子「花も散りたる後は、うたてぞ見ゆる」は、物憂く厭に見えること。また「老いばみうたてある者こそ」さあるも、疎ましく厭な様子をした者の意。然し愛は、單に度に過ぎて甚しい意に用ゐたのである。

○家の人のいでいり。家の人の立居振舞をいふ。

○にくげならず。下卑て居らぬこと。源氏帚木「父の年老い、働むつかしげにふ

【通釋】

十六日、今日夕方、都へ上る。そのついでに見る。山崎の店にある小櫃の繪も、勾餅の法螺貝の形も、以前と變らないわい。然し「それを賣る人の心ははたして元通りかどうかわからない」と云ふのである。このやうにして都へ行くに、島坂で人が御馳走した。こんな事は必ずあるさは極つて居ら

さり過ぎ、兄人の顔にくげに」とあるも、下卑て可愛くないこと。
○るやゝか。「るや」は禮で、「やか」は形容辭。禮儀正しく恭々しいこと。さてこの「るや」は、「うやまふ」「うやくし」「うや」と同じで、書紀景行天皇の卷に「無禮」こともある。

十六日 今日ゆふつ方、京へ上る。ついでに見れば、山崎のたななる小櫃こびつの繪も、まがりのほらのかたも、かはらざりけり。「賣る人の心をぞ知らぬ」とぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂にて人あるじしたり。かならずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、かへる時ぞ、人はとかくありける。これにもそれにもかへり事す。

夜になして京には入らむと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ。桂川月のあかきにぞ渡る。人々の曰く、「此の川飛鳥川にも

ぬ事だ。赴任の時よりは、
歸る時の方が、人はいろ
いろと饗應した。それら
の饗應をうけた人々に返
禮をする。

夜になつて都に入らうと
思ふから、急ぎもしない
である間に、月が出た。

桂川をば月の光で渡る。
人々の言ふことに、「この
川は飛鳥川でもないか
ら、淵瀬が少しも變らな
いわい」と言うて、或人
の詠んだ歌、

久方の月に生ひたる桂
川底なる影も變らざり
けり。

又、或人の詠んだ歌、
天雲のはるかなりつる
桂川袖をひでゝも渡り

あらねば、淵瀬さらにかはらざりけり」といひて、或人のよめ
る歌、

久方の月に生ひたる桂川

底なる影もかはらざりけり

又ある人のいへる、

天雲のはるかなりつる桂川

袖をひでゝも渡りぬるかな

又ある人のよめる、

桂川わが心にも通はねぞ

同じふかさに流るべらなり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜ふけてくれば、
所所も見えず。京に入り立ちてうれし。

ぬるかな。

又、或人の詠んだ歌、

桂川わが心にも通はれ
ご同じふかさに流るべ
らなり。

都に歸り着かうとする喜
びの餘勢で、詠んだ歌も
あんまり多い。夜が深く
なつてゆくこゝ、所々も見
えない。都に入り込んで
嬉しく感じる。

【語釋】

○山崎のたな。山崎のみせ。「たな」は「店肆也所ニ以置レ貨賣ノ物也」(崔豹古今注)とある。宇津保物語「これはてゝ、たなに女をりつゝ、物うる」

○小櫃の繪。小櫃は繪櫃のこゝこ、檜の曲げ物で作り、櫻など畫いて、色彩である。三月雜祭の折に用ゐるもの。

○まがりのほらのかた。「まがり」は、勾餅まがりもちの略、和名抄に「勾餅、形如三藤葛一者也、和名萬加利」とある。米・麥の粉を餡で練りかため、藤や葛の形にねち曲げて、油で揚げたもの。「ほらのかた」は、法螺貝の形の意。

○かはらざりけり。五年前に土佐國に赴任する時、今も變つて居らないよ。久し振りで歸京して見るこゝ、囁みみな昔の儘で、一種なつかしさの情に堪へられない、世上の事物の依然として舊態を存してゐるを見るにつけても、思ひ出す所のものは、亡き愛兒である。愛兒をなつかしく思ふ情は、やがて愛兒の玩んだ調度や食物に眼を奪はれる。そしてなつかしい哀感を誘はれるものだ。「小櫃の繪」「まがりのほらのかた」の二つを特に取出したのも、愛兒を思ふ心からである。

○賣る人の心云々。繪櫃や勾餅は變らなくても、それを賣る人の心は、果して昔

の儘かどうかわからぬと言ふのであるといふ意。下に「家をあげたりつる人の心も荒れたるなりけり」とある文の豫備である。此句は、著者以外の他の人が言つた詞のやうに裝うて書いてはあるが、實は貫之の心持を述べたものである。古今集「人はいさ心も知らず故郷は花ぞ昔の香に匂ひける」

○島坂。山城國、乙訓郡、石塔寺の南にある。

○かならずしもあるまじきわざなり。屹度あるまはきまつて居らぬ事である。即ち、するには及ばぬ餘分の事だこの意。當時國司は田舎者として嘲られてはゐたが、官吏の中では一番役得が多く、物持ちであつた。だから、役人は藏人を下りて、國司になる事を望んだもので、枕草子「昔の藏人は今年の春よりこそ泣きたちけれ、今の世には走りくらべをなんする」と云つて、藏人が叙爵されて、さて地方官にありつかうと競争をするのを悪く言つてゐる。今貫之の歸京を見て、何の縁故もない人達まで饗應した。それは貫之が物持になつて歸つたものとしての阿諛追従である。だから爰に「必ずしもあるまじきわざ」と皮肉を言つたのである。

○人はさかくありける。人は色々さもてなした。

○よるになして。夜になるのを待つて。

○桂川。西河さもいふ。保津川の下流。保津川は嵐山の下で大堰川となり、更に梅津の邊で桂川となり、京の西南を流れて淀川に合流する。

○月のあかきにぞわたる。明かな月の光によつて渡る。

○飛鳥川。大和國高市郡飛鳥を流れる川で、古今集、雜、「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の瀬ぞ今日は瀬になる」など詠まれ、無常な事の譬喩に用ゐられてゐる。

○ひさかたの云々。天上にある月に生えてゐる桂といふ名を持つてゐる桂川は、水底に映る月影も、又、水底の淵瀬も昔と變らないわいと言ふので、桂川の桂に月中の桂樹の意を言懸け、それによつて、月と相即不離の關係を持たせ、「底なる影もかはらざりけり」といふ事の當然性である意を匂はせてゐる。且「底なる影も」と言うて、水底の淵瀬も變らないといふ餘意を含めてゐる。例の覆雜を單純化した言ひ方である。「ひさかたの」は、「天」の枕詞で、轉じて、日・月・雨・雲・星など天象の物の枕詞に用ゐる。一説に「ひさかた」は、天の枕詞から轉じて天の意に用ゐたもので、「久方の雨も降らぬか雨つゝみ君にたぐひて此日くらさむ」「久方の月は照りたり暇無くあまの漁火はこもしあへり見ゆ」以上萬葉集など、天の雨、天の月の意のつゞけであるといふ。

○あまぐもの云々。土佐國から思ひやるを、恰も天に浮ぶ雲の如く遠くに思はれた桂川をば、今は袖をひたして渡つた事であるよといふので、桂川に月中の桂の意を含め、「天雲の」といふ語に縁を持たせて詠んだもの。「天雲」は、「遙か」の譬喩に用ゐた枕詞。

○かつら川云々。桂川は桂といふ名を持つてゐて、少しも人らしくなく、吾が心さ似通はないけれど、京に近づいた事を喜ぶわが心の深ささ。同じ深さに流れてゐるやうだ。

○京のうれしきあまりに。京に歸り着かうとする喜びの餘勢で。

○あまりぞおほかる。度に過ぎて多い。あんまり多い。

○夜ふけてくれば。夜がふけてに、來たから。

○京に入りたちて。京に入り込んで。

【通釋】
家について門に入るに、月の光が明るいから、大層よく様子がわかる。聞いてゐた以上に、言うて

家に至りて門に入るに、月あかければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれ破れたる。家をあづけたりつる人の心も、荒れたるなりけり。中垣こそあれ、一

もしるしいのない程ひどく破損してゐる。家を預けた人の心も、疎遠になつたのであるよ。預けた人の家は、中垣はあるが、同じ家のやうであるから、先方から望んで預かつたのだ。さうであるから、幸便のある度毎に金もしよつちう贈つた。然し今晚は、このやうに荒れはてゝゐる事よ、なご従者の人々に高い聲で喋らせない。先方の仕打ちが、甚ださうよくには見えるが、謝禮はしやうと思ふ。

さて昔の池も埋まつて終つて、單に池の跡をさめてゐるさいふだけで、

つ家のやうなれば、望みてあづかれるなり。されば便たよりごとに、物もたえず得させたり。こよひかゝる事と、聲高こゝろに物もいはせず。いとほつらく見ゆれど、こゝろざしはせむとす。

さて池めいてくばまり、水づける所あり。ほとりに松もありき。五年六年の中に、千年や過ぎにけむ、片枝はなくなりけり。今生ひたるぞまじれる。大方みな荒れにたれば、哀れとぞ人々いふ。思ひ出でぬ事なく、戀しきの中に、此の家にて生まれし女子の、もろともに歸らねば、いかがは悲しき。船人も皆子抱きてのゝしる。かゝる中に、なほかなしきに堪へずして、ひそかに心知りける人と、いへりける歌、

生れしも歸らぬものを吾が宿に

小松のあるを見るが悲しさ

窪くなつて、水のついである所がある。そのほとりに松もあつた。それがこゝ五六年の間に、千年も経過したであらうか、片枝はなくなつて終つた。新しく生えたのも交つてゐる。大體皆荒れて終つてゐるから、歎かばしい事だ。人々が言ふ。家に歸つて見るさ、一つさして追憶の種でないものさではなく、昔の事が戀しく思はれる中で、此家で生れた女の子が、さもなくば歸らないから、どうして悲しくない事があらうぞ、非常に悲しい。舟に乗つて來た一行の人々も、皆子供を抱いて喧

とぞいへる。なほ飽かずやあらむ、又かくなむ、

見し人を松の千年に見ましかば

遠くかなしきわかれせましや

忘れ難くくちをしき事多かれど、えつくさず。ごまれかくまれ、
疾くやりてむ。

【語釋】

○家にいたりて、自分の家に到着して。

○ありさま。屋敷の内の様子。

○聞きしよりもまさりて。耳に聞いてゐたより以上に。

○いふかひなく。言うてもしるしのない意。言うても役に立たぬ程に甚しいのをいふ。

○家をあづけたりつる人。留守中家の管理を頼んで置いた人。

○心もあれたるなりけり。心も「も」事柄を二つ以上重ねる時に用ゐる助詞で、家も荒れたし、同時に、人の心も自分に疎くなつたのであつたこの意。「あ

しく言うてゐる。かうした中で、矢張悲しくてたまらないで、ひそかに子を亡くした親心を知つてゐる人よ、詠んだ歌、

生れしも歸らぬものを
吾が宿に小松のあるな
見るが悲しさ。

さ詠んだ。矢張十分と思はなかつたのであらうか、又、次のやうに詠んだ。

見し人を松の千年に見
ましかば遠く悲しき別
れせまじや。

亡兒に關しては、忘れ難く残念に思ふ事が多いけれど、書きつくすことが出来ない。何れにしても、此日記は、人に見せる

る」は、竹取物語「あなゝひにおごろしく二十人のぼりて侍れば荒てまうでこす」萬葉「筑紫船未だも來れば、あらかじめ荒ぶる君を見んが悲しさ」などあると同じで、疎び荒びて善愛くない意、又萬葉「島の宮勾の池の放ち鳥荒びな行きそ君まさすさも」さあるも、人疎く遠ざかりゆく意。

○中垣こそあれ、境界の垣はあるにもせよさ下につゞく意。「中垣」は、隣家との隔てにある垣。

○物も絶えず得させたる。金錢も絶えずさらせた。「物」は、家を修繕する費用の金錢であらうさいふ。

○こよひかゝること、云々。今晚は、従者どもに、「このやうに家が荒れはてゝゐる事よ」などと、高い聲で物を言はせない。兎に角、世話になつたのだから、従者どもを制して、禮を缺く振舞をさせなかつたのであらう。

○いさはつらく見ゆれど云々。「いさはつらくは見ゆれど」さある「は」を上に置いたもの。先方の仕打が甚ださうよく見えるが、こちからの謝禮はしようさする。

○池のいて。池らしくなつて。

○くぼまり。くぼくなる。中が低くなる。

爲に記したのではないから、早く破つて終はう。

○水づける所。水のためつてゐる所。さて「池めいて云々」とあるは、元は池であつたが、今は荒れ果てゝ、淺くなり、草が生えなごして、庭さも池さもつかぬものになり、僅かに水がついてゐる所のあるさまを言つたもの。

○千年やすぎにけん。松の片枝がなくなつてゐる事を、白氏文集「松樹千年終是朽、種花一日自爲榮」などある句の意から、揶揄したもの。

○今生ひたるぞ。新しく生ひたつたのが。「今」は、新參を「今參り」新造の内裏を、「今内裏」などいふ。「今」と同じく、新しい意。「生ふ」は生ひ殖つこと、「ゆ」は芽の初めて萌え出ること。

○おほかた。大概（十のもの八九）、おしなべて、などいふ意。

○あはれ。身に泌みて歎かほしい意。

○おもひ出でぬことなく云々。家に歸り着いて庭などの「荒れてゐるのを見る」とあれにつけ、これにつけて、何一つ昔を思ひ出さぬさういふ事がなく、凡てが皆思ひ出の種となつて、音が戀しい中で。一説に、あらゆる昔の事を思ひ出す意に解いてゐる。

○いかゞは悲しき、「いかゞは悲しからざらむ」の意であらう。どうして悲しくなからう、非常に悲しい。萬葉集卷四「吾が戀に豈まさらむが」とあるも、

「豈まさらむや」といふ意である。

○船人。船に乗って来た一行の人々の意。

○心しれる人。子供を亡くした親の心を知つてゐる人。貫之の妻をさして言うたものであらう。

○生れしも云々。此處で生れた子供すら歸らないのに、そのわが家の庭に小松の生えてゐるのを見るが悲しい事よ。「やど」は、庭前の意味で、生れた子供は旅で死んだ、家には留守の間に小松が生えた、それは悲しみの親にさつては、皮肉な悪戯であり、同時に一層の悲哀を誘ふものである。

○なほ飽かずやあらん。一首の歌では、まだ満足しなかつたであらうか。

○見し人を云々。昔見たいさしい子供を、千年の齢を保つ松の如く、永久に見るであらうならば、このやうな悲しい死別をしようか、しはすまい。「遠くかなしき別」は、死別の事、同時に、亡兒の骸をば遠く土佐國に葬つて置いて、自分達だけが別れて都に歸つて来たその別れの意味を、含めてある。

○忘れがたく云々。亡兒の事について、色々と忘れ難く、残念に思ふ事が多いが、筆に盡すことは出来ない。

○やりてん。破り棄てゝ終はう。

新釋土佐日記終

序

△本書は藤原爲家の室阿佛尼が關東へ下つた折の紀行文である。彼が女性の身を以て異境の空に志したのは、止み難い悲憤の情を晴らさんが爲であつたのは言ふ迄もない。我子に對する純愛の至情と本來生具してゐる男まさりの勝氣とは、彼女をしてこの旅立ちを決意せしむるに至つた動力ではあるが、其根抵には忍むべき家督争ひが横はつてゐる。世間に普通よく見る異母兄弟の不和その紛争、年若き後妻に對する夫の盲目的愛着と服従、及びそれから生ずる幾多の悲劇、さういつたものがこの由緒ある家庭にも起つたのである。

△爲家の家は祖父俊成の代から和歌を以て宮中に仕へ、斯道の名門として聞えてゐた家柄である。殊に父定家の如きは「定家を難せん輩は冥加もある可らず罰を蒙るべき事なり」とまで崇められ、その稱讚の聲は一世に喧しかつたものである。俊

成は後白河法皇の院宣をうけて千載集を、次いで定家は後鳥羽上皇の院皇を蒙つて新古今集、後堀河天皇の勅によつて新勅撰の二集を、更に爲家は後嵯峨院の院宣をうけて續後選集と續古今集との二集を撰進した。斯くて同家は斯道に於ける世人の崇敬尊重の中心となり、所謂歌道の師範家として重きをなすに至つた。

△この師範家には俊成の頃から播磨國細川庄と近江國小野庄とを領有してゐ、それが代々子孫に傳はつてゐた。ところが爲家に至つて彼には爲氏・爲教・爲相の三子があつた。この内、爲相は阿佛尼の腹に生れ、他の兄弟とは腹ちがひである。最初爲家が年五十九で出家した折、右の領地は當然長子爲氏に譲つたものと想像される。勿論此時爲相は未だ生れてゐなかつた。その後十九年を経て、爲家の死ぬ時、彼は遺言して當時十三になる爲相に細川庄を與へたのである。然るに爲氏はこの遺言に背いて所領の分割を履行しない。茲に領地の争ひが起つた。阿佛尼はこの訴訟の爲遠く鎌倉に下つたのである。だが當時幕府の政務の繁雜は、この女性の訴

へを迅速に處理する譯に行かなかつた。彼はなつかしい都の空を眺めながら蠻地に四年の年月を總過し、終に嬉しい裁決を聞かずに、その地に此世を終つたのである。然しその後爲相もまた鎌倉に下つて、この訴訟は結局彼の勝ちになつた。

△本書の内容は之を三段に別つ事が出来る。即ち第一段は彼が旅に出かけるまでの理由を述べたもの、云はゞ本書の序である。第二段は道中の紀事。第三段は鎌倉滞在中の紀事で、重に京都と往復した歌をのせてある。一言に云ふならば本書は普通の紀行文といふよりむしろ歌日記といふ方がふさはしい。二段三段にある散文は之れ即ち歌のはしがきに過ぎない。

△凡て藝術は時代の反映であると共に、作者の個性の所産である。理知的な勝氣な彼の性格と、母性愛に燃えてゐる至純の情熱とは全篇にその影を投げてゐる。第一段の順を追うて片端から一つ々々片付けて書いてある、理路整然たる書ぶりといひ、簡潔遒勁な筆致といひ、縁語・懸詞に富んだ歌といひ、まさに彼の性格の

反映に外ならない。

△本書は當時に於ける、東關紀行・海道記等の紀行文中、純國文體の代表作である。
その題名は阿佛尼の旅立ちが十月十六日であつた所から附けたもの、其他にも「阿佛尼東くだり」「阿佛坊道記」「阿佛尼海道記」等の名がある。

著 者 識

新釋十六夜日記目次

一、いさよふ月……………	一
二、袖の雫……………	三
三、手習の歌……………	三〇
四、残る撫子……………	三六
五、近江路の旅……………	四三
六、美濃路より……………	五一
七、下戸の驛より……………	五七
八、八橋より……………	六一
九、天龍の渡より……………	六八
一〇、菊川より……………	七〇

一一、墓科川より……………	九六
一二、富士川より……………	一〇七
一三、酒匂より……………	一一九
一四、月影の谷……………	一二三
一五、權中納言よりの音づれ……………	一二七
一六、御櫛笥殿への音づれ……………	一三三
一七、姉妹への音づれ……………	一四四
一八、春の音づれ……………	一五二
一九、わらはやみ……………	一六三
二〇、時鳥の初音……………	一六八

二一、新中納言よりの音づれ……………	七六	二五、しき島の道……………	二〇一
二二、爲相よりの歌……………	一九	奥書一……………	二〇
二三、爲守よりの歌……………	九五	奥書二……………	三三
二四、秋の音づれ……………	一九		

新釋十六夜日記目次終

新釋十六夜日記

一 いさよふ月

昔、壁の中より求め出でたりけむ書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも、身の上のことゝは知らざりけりな。

みづぐきの岡のくす葉、かへすゝも、書きおける跡たしかなれども、かひなきものは親のいさめなり。

また賢王の人を捨てたまはぬまつりごごにももれ、忠臣の世を思ふなさけにも捨てらるゝものは、數ならぬ身一つなりけりと、

【通釋】

昔壁の中から見つけ出したであらう孝經さいふ書物の名にある孝さいふ書をば、現今の人の子は少しも我身の上に關係のある事だとは知らずに居るよ。亡夫爲家卿が、生前に書き残して置いた細川庄の謄狀は何處までも明

確であるが、かされなく、
効のないものは親の禁制
である。

また賢明な天子の人をお
捨てにならぬ善き御仁政
にも洩れ、忠臣の天下の
事を色々心配しての恩
薫にも取殘される者は、
取るにも足らぬ我身だけ
であるよと、心に知りな
がら、またそのまゝに諦
めて終ふ事も出来ない
で、矢張、子供の身の上
にかゝはる細川庄につい
ての心配が、暗らしやう
もなく悲しい。
其上に思ひつゞけるを、
和歌の道は、ひたすら眞
實味が乏しく、さりさめ
もない慰みだけだと考へ

思ひ知りながら、又さてしもあらで、猶このうれへこそやる方
なく悲しけれ。

更に思ひつゞくれば、やまごうたの道は、たゞ誠すくなく、あ
だなるすさびばかりと、思ふ人もやあらむ。日本の國に天の
岩戸開けし時、四方の神たちの神樂の詞をはじめて、世を治め、
物を和ぐるなかたちとなりにけるこそ、この道のひじりたちは、
記しおかれたりける。さてもまた集を撰ぶ人は、ためし多かれ
ど、二たび勅を受けて、世々に聞え上げたるは、たぐひ猶あり
がたくやありけむ。そのあとにしもたづさはりて、みたりのを
の子ども、百千の歌の古反故どもを、いかなるえにかありけ
む。預り持たることあれど、道を助けよ、子をはぐくめ、後の
世をとへとて、深き契を結びおかれし細川の流も、故なくせき

る人もあるかも知れない。が然し和歌の起りは我國に天の岩戸が開けた時、八百萬の神がたの奏された神樂歌をはじめとして、爾來、天下を治め、人の心を和げる媒となつた、歌道のすぐれた人達は書いて置かれた。さうして又、勅撰集を撰ぶ人は、其例が多いけれど、一生の間に二回勅命を受けて、代々の天皇に撰進したのは、矢張類ひが稀であつたらうか。然るに自分は其二回までも撰集の事に随つた定家爲家の名門の跡に關係して、三人の男の子供や、澤山の歌の草稿などを、

とめられしかば、あととふ法のももし火も、道を守り家を助けむ親子の命も、もろともに消えを争ふ年月を経て、あやふく心細きものから、何としてつれなく、今日まではながらふらむ。

惜しからぬ身一つは、やすく思ひすつれども、子を思ふ心のやみは、なほしのびがたく、道を願ひる恨はやらむ方なく、さてもなほ、あづまの龜の鑑にうつさば、くもらぬ影もや現るゝと、せめて思ひあまりて、よろづのはどかりを忘れ、身をえうなき物になしはて、ゆくりもなく、いさよふ月に、さそはれ出でなむとぞ思ひなりぬる。さりさて文屋の康秀が誘ふにもあらず。住むべき國もとむるにもあらず。頃はみ冬たつはじめの、さだめなき空なれば、降りみ降らすみ時雨もたえず、嵐にきほふ木の

どういふ因縁であつたらうか、預り持つてゐる事があるけれど、「歌道を助ける、子供を養育しろ、わが亡き後の冥福を祈れ。」と云うて、深い約束をして譲り置かれた細川の莊も、理由なく奪ひ取られたから、菩提を弔ふ爲に佛に捧げる燈火も、歌道を守り家を隆んならしめる我等親子の命も、共々にわれ先にと争ひ急いで消え失せようとするやうな果敢ない年月を經過して、危く且心淋しいものゝ、どうして今日まで平氣で存命してゐるのであらうか。

葉さへ、涙と共に亂れ散りつゝ、事にふれて心細く悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いきうしとてもとどまるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。

○昔壁の中より求め出たりけむ書の名。此句は單に、「孝」といふことを、斯く婉曲に述べたまでのもの。古文孝經、孔安國序に、「魯恭王使三人壞三夫子講堂一於三壁中石函一得三古文孝經二十二章。」とある處から、孝經のこゝをわざと、「昔壁の中より……書。」と云うたのである。

○人の子。單に「子」といふこと。凡て古は、たと親のこゝを「人の親」と子のこゝを「人の子」と云うたもの、伊勢物語、「世の中にさらぬ別れのなくもがな、千代もと祈る人の子のため。」萬葉集卷十八、「人の祖の立つる辭立人の子は祖の名絶たす云々。」後撰集、「人の親の心はやみにあられども、子を思ふみちに迷ひぬるかな。」

○夢ばかりも。聊かも。少しも。「夢」は、聊かさいふ意。源氏物語、未摘花の卷、「かやうの人に物いふらん心ばへなごも夢にも知り給はざりければ。」千載集、雜、「春の夜の夢ばかりなる手枕に、かひなく立たん名こそをしけれ。」

だけは容易に捨てられるけれど、子供の心を心配する心迷ひは矢張我慢出来ない。それに歌道を顧みて其衰微を慨く恨みは晴らしやうがなく、それでも矢張此の事件を鎌倉幕府の公平な裁判に訴へるならば、事理の明かないと、痛切に思案に悩んで、あらゆる謹慎遠慮を忘れ、我身をばどうなつても構はぬ必要ないものとして終うて、思ひがけなくも十六夜の月に誘はれて都を出かけようこと決必した。さうかき云ふて、自分のこの旅は、小野小町が文屋康秀に誘

◎身の上のこゝは知らざりけりな。わが身の上に關係のある事だとは知らずに居るわいなア。「けり」は、過去の意を失うて詠嘆の意に用ゐられてゐる。

「な」は感動詞。源氏物語、夕顔の巻、「にくしさを思ひたれな。」大鏡、序、「けしうはさぶらはね年なりな。」後拾遺、「契りきながたみに袖を絞りつゝ、

末の松山波越さじさは。」さて此文は、爲氏が父爲家の遺意に背いて、播摩國細川庄を強奪した不幸を嘆じたもので、たゞそれを間接に、世間一般の不孝者を慨嘆する態に述べたのである。(序文参照)

◎「みづくきの岡のくす葉。次の「かへ、く」と言はん爲の序。「みづくきの」は、岡の枕詞。「みづくき」は、瑞々しい莖で、草木の莖のこゝ。さて岡ウカとつゞく理由は、チミツチは通音で、「わななく」を「なのく」「たわやめ」を「たなやめ」といふが如く、随つて岡ウカと若ワカと相通じるのである、故に神樂の取物歌に、「天にますますまよ岡姫。」とあるをさつて、源氏物語、「乙女」の巻の歌に、「天にますますまよわか姫。」と讀んである。よつて、みづみづづししき莖ウカの稚ワカさいふ意から、水莖の岡ウカとつづけたもの。然るに「みづくきの岡」を地名であるとするは誤。「岡のくす葉」は、岡に生えてゐる葛葉、「くす葉」は、くすの葉、「くす」は蔓草の名。「くす」の葉は秋が來ると風に吹かれて、よく裏返るものゆゑ、

はれたやうにいゝ仲の男から勧められたのでもない、また業平が都を厭うて東國に下つた時のやうに住むべき場所を探し出すでもない。時節は冬になる初の晴雨の定めない、空合であるから、降つたり降らなかつたりして、時雨がしつかりなしにやつて来る。風の爲に先を争うて散る木の葉で、我が涙と共に散り亂れながら、見るもの聞くものにつけて頼りなく淋しく悲しいけれど、わが心から思立つてゆく旅の道であるから、行くのがつらいと云うても思ひこぞまる筈のものでなく

裏を見るさいふ意から、「恨み」といふに言ひかけ、又は「かへる」、「かへす」などいふ語にも言ひかけて用ゐる。「水莖の岡のくづ葉」とつゞけて用ゐた例は、萬葉集卷十、「雁がれの寒く鳴きしゆ、水莖の岡の葛葉は色づきにけり。」同書卷十二、「水莖の岡の葛葉を吹きかへし、面知る兒らが見えぬころかも。」新古今、「水莖の岡の葛葉も色づきて、今朝うら悲し秋の初風。」などある。さて本文の意は上述の如くであるが、其他「水莖」に「筆」の意を含めて、下の、「書き」といふ語にひゞかせ、「葛葉」に「恨み」の意を含めて、自分の心に深く恨むさいふ意を持たせてゐる。

◎かへすくも。かさねく。幾度も。何處までも。此語は、たしかなれども。「かひなきものは。」の兩方にかゝる副詞。即ち讓状のある事は何處までも確かである意さ、不幸の子を慨嘆する心の重れ／＼禁じられぬ意さを含めたもの。

◎書きおける跡。爲家卿の遺書のこゝ。即ち庄園の讓状。

◎かひなき。しるしの無いこゝ。詮ないこゝ。役に立たぬこゝ。

◎親のいさめ。親の遺言をさしていふ。「いさめ」は「禁」の字をイサメと訓んである如く、制へさめめる意。伊勢物語、「戀しくば來ても見よかし千早振る

て、何さなう急いで出發した。

神のいさむる道ならなくに。拾遺集、「たらちれの親のいさめぬうたゝれは、物思ふ時のわざにぞありける。」さて此文は爲家卿の遺言の果敢なくも踏みにじられた悲嘆怨恨を述べたもの。

◎賢王の人を捨てたまはぬまつりごこにもれ。賢王の人をお捨てにならぬ、普き御仁政にも取殘され。此句は次の「忠臣の云々」の句と對句にしたもの、賢王は時の天皇をさしてゐる。

◎忠臣の世を思ふなさけにも捨てらるゝ。忠臣の天下の事を色々心配して下さる仁恵にも捨てられて、その恵みをかけられぬごこ。「忠臣」は爰は鎌倉幕府の將軍をさしてゐる。

◎數ならぬ身。人數にも入らない身。さるにも足らぬ身。つまらぬ身。阿佛尼自身が謙遜してかく言うたもの。

◎一つなりけり。一人であるわい。「けり」は詠嘆の意。「一つ」は強く指したもので。「のみ」「ばかり」などいふに同じい。

◎さてしもあらで。さうしても居られないで。賢王忠臣の御仁政や恩恵に浴することの出來ぬのは、數ならぬ我身からであるとは心に知りながら、そのまま諦めて終ふことも出來ないのをいふ。「し」は意味を強める助辭。

◎この憂。細川庄についての心配。「この」に、「此」の意さ、「子の」の意さの
 兩意を含めてある。「憂」は、ウレホ・ウレへの二語あるが、「うれひ」は自身
 に憂ふる意、「うれへ」は、其憂を他人に訴る意であらうさ、山口葉に言うて
 る。

◎やる方なく。晴らしやうがなく。慰めやうがなく。さて此一文は、阿佛尼自身
 がわが身の不遇を慨嘆すると共に、今回鎌倉にまで旅立たんとする衷情を述べ
 たもの。

◎やまごうたの道。歌道のこご。カテウダ漢詩に對して歌のこごを大和歌といふ。古今
 集・序、「それやまごうたは人の心をたれとして、よろづのこごのはさぞなれ
 りける。」

◎誠すくなく。眞實味の乏しいこご。心にもない事柄を詠んでゐるのをいふ。

◎あだなるすさび。さりさめもない慰みこご。「あだ」は、はかなくかりそめの
 意。然るに諸註には浮華の意に解いてゐるが、どうであらうか。「すさび」は、
 「進み」の義、心の進むにまかせて爲すこごをいふ、慰みこご。古今集序「今
 の世の中色につき人の心花になりけるよりあだなる歌はかなきこごのみ出
 て來れば云々。」

◎ばかり。だけ。其ものを強く指定する意の助辭。

◎日の本の國。日本國のこと。然し「天の岩戸開けし時」とあるは、此國土のことではない。想ふに「天地開闢」といふこと、「天の岩戸の開けた」といふ事との二者を混同して、斯く誤つたものであらうか。

◎天の岩戸開けし時。天照大御神が御弟素戔鳴尊の暴行を御怒りになつて、天の岩戸にお隠れ遊ばした。時に八百萬の神々が天安河原に會合して、大神迎出の策を講じた結果、再び天の岩戸を開いて大御神がお出ましになつたのをいふ。「天の岩戸」は、「天石屋戸」ともいふ。高天原に於ける石窟の戸のこと。「天石屋」については、本居翁は古記事傳に、「天石屋戸は必ずしも實の岩窟には非じ。石さはたゞ堅固を云へるにて、天之石位、天之石戸、天之磐船などの類にて、たゞ尋常の殿をかく云へるなるべし云々。」と説き、伴信友は比古婆衣に、「こは、實の石屋にて、尋常の殿とは別に在る石窟殿なるべし………神代紀に、入_ニ于天石窟_一閉_ニ其磐戸_一而幽居焉。一書にも入_ニ于天石窟_一而閉_ニ其磐戸_一焉。また居_ニ于天石窟_一閉_ニ其磐戸_一。など、いづれの傳もみな岩戸・磐戸と對へ書かれたるが上に、上に天石窟と書きて、閉_ニ其磐戸_一と、其の字をさへ書かれたるところのあるを思ふべし。………また神代紀の一書に、以鏡

入ニ其石窟ニ者、觸レ戸小瑕 其瑕今猶存。さあるにても、石の戸なりし事著ければ、その幽居し給へる所の石戸なるこそ、自ら明かなり云々。」といふてゐる。

◎四方の神たち。八百萬の神々をさしていふのであらうが、「四方」といふ語は面白くない。

◎神樂の詞。神樂歌の歌詞。神樂は神の祭に奉る音樂で、神を慰め奉る爲に、音樂を奏し、歌を唱ひ、舞をまふので、其時の樂器は、和琴・大和笛・笏拍子・篳篥など、我國太古よりの古有の樂器。神樂はもと神遊カミアソビといふた、それを神樂と書いて、カケラと訓むは、神カム嘉良エラキ良伎といふ語の約つたもので、嘉良具とは、咲榮え笑ひ樂むをいふといふ説と、「上古にはカケラと云はず、ワザナギといふ。日本紀に、天の岩戸の前にて、神の俳優し給ひし事見えたり。後にカケラといふ名あり。是カミラクといふ事なり。カミをカンと轉すべし、依りてカケラといふ。轉じてカケラといふ。ラはラクの下略なり云々。」(安齋隨筆)といふ説とある。歌舞品目に、「本邦樂曲の一種にして、殊に之を貴重せらる。然るに令文に其名見えす。舊事記云、鎮魂祭日者、媛女君等、率二百歌女ニ舉其言本一。而神樂歌舞、尤是其緣者矣。といひ、古語拾遺、中臣齋部二氏、

俱掌三祠祀之職、媛女君氏、供三神樂之事、自餘各有其職といふもの、物に見えたるの原始なるにや。其事は神代に天照大神の天岩戸に籠り給ひし時より出でたりと傳ふ。然れども神代卷には神樂といふ名目は見えず。公事根源に、大かた神樂の起は、天照大神の天岩戸をさして籠り給ひし時、諸神の祈り申されたるに、天鈿女命まさきのかづらなかつらとて、ひかげを禊にして、歌ひ給ひ、庭火をたきし古より始まれる事なれば、我が朝の風俗、神代の緣起、他に異なるべきにやと見え、又殘夜抄に、此朝のあそびは、その始まり、神の代に天照大神天岩戸を閉ぢて、天の下を常闇になし給へりしに、八百萬神々よりあひて、神めで玉ふほどの遊びといふ、今の神樂、つぎには我が俗の風俗といふ催馬樂風俗とて、おろ／＼のこりたる事也と云へり。又花鳥餘情に、和琴は伊弉諾伊弉册の二神の御代よりいできたる器といへども、日本紀などには見え侍らず、又天岩戸に天照大神の籠り給ふ神宴より出できたることもいへりと見えれば、何れ吾が邦太古の事なること知るべし云々。」とある。さて爰にいふ神樂の詞について、殘月抄には、「あはれ、あな面白、あな樂し、あなさやけおけ。」といふ句ないふのであらうといふてある。阿佛尼は、我國の歌の起源を、神樂歌にあると考へてゐるのであるが、是より以前

に、伊弉諾伊弉册二神の、「あなによし、えをさこを。あなによし、えをさめを。」といふ唱和があつて是を歌のはじめとする説がある。古今集の序に、「この歌天地の開け始まりける時よりいできにけり云々。」さあるのも二神の唱和をさしてゐるらしい。

◎はじめで。はじめとして。

◎世を治め物を和ぐるなかだち。古今集序に、「力もいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、をさこ女の中をもやはらげ、猛きものゝふの心をも慰むるは歌なり。」とある所からいうたもの。

◎この道のひじり。歌聖。爰に紀貫之や其後代々の撰集の序を記し、歌學の書に歌の效驗を述べた、清輔・基俊・顯昭などいふ人々をいふのである。「ひじり」は、其道にすぐれてゐる人。

◎集。歌の撰集。古今集以下の勅撰集をさしていふ。

◎集を撰ぶ人。勅撰集の撰者。

◎二たび勅を受けて。一代の間に二回撰集の勅令を蒙るのをいふ。

◎世々に聞え上げたるは。御世々々の天皇に撰集を奏上したのは。定家卿は、後鳥羽上皇の勅によつて新古今集を、後堀河天皇の勅によつて新勅撰集を撰び、

爲家卿は、後嵯峨上皇の勅を奉じて、續後撰集、續古今集を撰んだのをいふので、「世々」とあるは、代々の天皇なり上皇なりをさすので、定家爲家の二代打續いたのをさすのではない。

◎たぐひ。類例。

◎ありがたくやありけむ。稀であつたらうか。「ありがたく」は、有る事の難き意、今俗にかたじけない意に用ゐるは、轉訛したのである。「や」は疑問の助辭。

◎そのあさにしも。定家・爲家の家のあさめに。「あさ」は、名跡、あさめ、いへのうち。「し」は強める助辭、「も」は、感動詞。

◎たづさはり。關係する。「たづさはり」は、「たづさへ」の自發的意味。「たづさへ」は、兩人互に手を執つて交ること。

◎みたりのをの子ども。阿佛尼所生の子供は五人あつて、その中長女の紀内侍は父が異なり、慶融・源承の二人は僧形である。此記中にも五人の子供の事を記してある。して見ると、爰に「みたり」とあるは、「ふたり」の誤寫で、爲相・爲守の二人をいふのであらうと、殘月抄にいうてゐる。

◎百千の歌の古反故ども。代々傳はつてゐる澤山の歌の草稿類。「みたりの子

ども」も、此句とは共に並べていうたので、二句共に下の「預り持たる」に
 づいてゐる。

◎いかなるえにかありけむ。どういふ因縁であつたらうか。「縁」の字を、エ
 も、エニとも兩様に訓むので、「縁にか」の意にも、「縁か」の意にもされる。
 前者は縁であつたらうかとなり、後者は縁があつたらうかとなつて、大體の意
 は同じである。縁をエニといふは、縁の字音のエンの轉じたもの、奥儀抄に、
 「えにさは縁といふ也。なにこそまなにはれたる文字は、かなにはに、さか
 なり。」とある。

◎持たる。「持ちてある」の約。

◎道を助けよ。歌道を助けて隆盛にせよ。

◎子をはぐくめ。爲相・爲守等を大切に養育せよ。「はぐくむ」は羽ハクク裏で、親鳥が
 其羽を以つて雛を蔽ひつゝ、み養ふことから出た詞で、一般に養育する意に用
 ゐ、また佛神の憐み守らせ給ふことにもいふ。源氏物語、手習卷、「されど觀
 音さざまかうさまにはぐくみ給ひければ此僧都に負け奉りぬ。」萬代、「諸人
 のみおやの神にましますせば、はぐくむうちに此身もらすな。」などあるは後者
 の意。

- ◎後の世をさへ。死後の冥福祈れ。「後の世」は、死後。「さふ」は、亡き人の冥福を祈ること。爰は爲家卿が、わが亡き後の冥福を祈れというたのである。
- ◎深き契を結びおかれし細川の流。深い約束をして譲り置かれた細川の庄。即ち、「道を助けよ、子をはぐくめ、後の世をさへ。」といふ三箇條を委嘱して、その目的を果す爲の料に、立派な讓狀を附して與へられた細川の庄といふ意。
- 「細川」といふ語の縁で、「庄」といはずに懸と「流」というたまでのもの。
- ◎故なく。理由なく。
- ◎せきとめられしかば。爲氏の爲に奪ひ取られたのを、「細川」「流」などいうた縁語で、「せきとめ」というたもの。「せきとめ」は、流を塞ぎとどめること。
- ◎あささふ法のさもし火も。前に、「後の世をさへ」とあるのを受けてゐるので、死後の冥福を祈る爲に佛に捧げる燈火もの意。
- ◎道を守り家を助けむ親子の命も。此句も前に、「道を助けよ、子をはぐくめ」とあるのを受けたので、歌道を守護し和歌の名門であるわが家の隆盛を圖るべき阿佛尼と爲相爲守の命もといふ意。
- ◎もろさにもきえを争ふ年月を経て。法燈と親子の命とが、共にわれ先に消えようとするやうな、頼りない年月を經過して。「きえを争ふ」とは、われ先に

競争して消え果てるのをいふので、極めてはかない状態をいふ。

◎心細きものから。「心細き」は、頼りなくして心淋しい意。「ものから」は「もの」「も」のながら。「などいふ意の接尾語。

◎つれなく。心の連らない意で、知らぬ顔をしてゐる、平氣であるなどいふ意。爰は、消えを争ふやうなばかない命の、今に死なずに平氣で生きてゐるのをいふ。

◎ながらふ。存命する。

◎惜しからぬ身一つは。死んでも惜しくない身一つは。阿佛尼自身の上をいふ。
◎やすく思ひすつれども。容易に捨て去つて、無いものと思ふことが出来るけれど。

◎子を思ふ心のやみ。わが子の上を色々心配し愛する心迷ひ。後撰集、「人の親の心は闇にあられども、子を思ふ道にまどひぬるかな。」とある歌の詞によつて書いたもの。「思ふ」は、「愛する」「心配する」などいふ意。「心のやみ」さは、愛情の爲に心の明かさを失つて、理非分別もわからぬまでに甚しくなるのをいふ。

◎しのびがたく。我慢出来ない。

◎道を顧みる恨。歌道を顧みて、その衰へるのを愴く恨。

◎やらむ方なく。晴らしやうがない。

◎さてもなほ。さうあつてもやはり。「さても」は、上の細川の庄も奪ひ取られて、法燈も親子の命も共に消えを争ふやうな状態にあるのをさしてゐる。

◎あづまの龜の鑑。鎌倉幕府の正しい裁判。「龜鑑」は、のり、きそくなどの意であるが、茲はそれを直譯して、「龜の鑑」せいひ、正しい裁判の意に用ゐてゐる。

◎うつさば。訴へるならば。前に「鑑」と言つた縁で、特に「うつす」というたもの。

◎曇らぬ影もや現はるゝと。事理の正しい裁決が受けられるかも知らん。即ち細川庄については、確かな讓狀を持つてゐるにも拘らず、爲氏の爲に横領されてゐるのであるが、さてその細川庄は的確に阿佛尼の實子爲相のものであるといふ正しい裁断を仰ぎ得るかも知れないといふ意。「曇らぬ影」とは前に「鑑」とある縁でかういうたもの、私曲情實のない明白な裁決をいふ。「や」は疑問の助辭。

◎せめて。切に。深く。無理に。強ひて。古今集、戀、小野小町、「いこそめて

懣しき時はのげ玉の城の衣をかへしてぞ着る。」などは前二者の意。源氏物語手習の卷、「いづくに誰ぞ聞えし人の、さる所にはいかでおはせしぞと、せめて聞ふな。」などあるは後者の意。即ち此詞は、迫りての意で、せめよせて切なる義である。然るに、其意から轉じて、願ひ事などの叶はぬ時、その一部分なりとも望む場合に、「せめて云々なりとも」といふやうに、止むを得ずば、ならう事ならなどの意にも用ゐるやうになつた。

◎思ひあまりて、思案に惱んで。思案に堪へないで。

◎よろづのはゞかりを忘れ。凡ての慎しみ控へるべき事どもを忘れ。婦人の身として遠く鎌倉まで訴訟沙汰に出向くなどいふ事は從順謙遜の徳に背く事で、大いに謹慎せねばならぬのであるが、それらの謹慎遠慮を忘れてこいふ意。

◎身をえうなき物になしはてゝ。わが身をどうなつても構はない必要のないものとして終つて。「えうなき」は、無要の意。伊勢物語、「昔男ありけり。その男身をえうなきものに思ひなして、京にはあらし、あづまの方に住むべき國求めにきて行きけり。」

◎ゆくりもなく。思ひがけなく。不意に。突然に。雄略紀に、「不意」の字を、

ユクリナクミ訓ませてある。「も」は助辭で意味を強める爲に挿入したもの、「引切らず」を「引きも切らず」といふに同じい。

◎いさよふ月。今にも出ようとして、ぐづ／＼してゐる月。「いさよふ」は、躊躇する、やすらふなどいふ意で、萬葉集、六、「山の端にいさよふ月の出でんかこ、あが待つ君が夜はふけにつゝ。」源氏物語、夕顔の巻、「いさよふ月に、ゆくりなくあくがれんこさを、女も思ひやすらひ、さかくの給ふほごに、俄に雲がくれて、明けゆく空いさをかし。」などあるが如く、出るのを躊躇して容易に出ない月にも、または、山の端に入らうとしてたゆたうてゐる月にも、さういうてゐる。然るに昔から、十六夜の月は、十五日以前の月の夕方迄にのぼるのに比して、少し遅れてさしのぼる所から、その月を「いさよひの月」というてゐる。して見るに、「いさよふ月」とあるのは廣い意味で、「いさよひの月」といふ時は、十六夜の月をさしてゐるのかと思はれる。さて本文の句は十六夜の月をさしてゐるのは勿論であるが、前掲の源氏物語夕顔巻の句によつて書いた所から、「いさよふ月」と、一般的な言ひかたをしたものであらう。「いさよふ月にさそはれ出でなむ。」とは、十六日に出發するといふ意を、たとひ面白く述べたまでのもの。

◎思ひなりぬる。その考になつた。決心した。

◎さりさて。旅立を決心したからさうて。

◎文屋の康秀が誘ふにもあらず。古今集、雑に、「文屋の康秀が三河の椽になりて、あがた見には、えいでたしじやま、いひやりけるかへりこに詠める、小野小町、「わびぬれば身を浮草の根を絶えて、誘ふ水あらばいなむこそ思ふ。」とあるのに據つて書いたもので、自分の旅に出發するのは、別段い、仲の男があつて、その者と楽しく行くのでもないといふ意を、故事をかりて婉曲に述べたのである。

◎住むべき國もこむるにもあらず。伊勢物語に、「昔男ありけり、京や住みうかりけん、あづまの方に行きて、すみか求むさて、友さする人ひさりふたりしてゆきけり。」又同書に、「昔男ありけり。その男身をえうなきものに思ひなして都にはあらし、あづまの方に住むべき所求めんとて行きけり。もとより友さする人一人二人していきけり。」などあるのに據つて書いたもの。即ち、自分の旅立ちば、都が厭で、他に住むべき場所を見付ける爲といふやうな、暢氣な心持や享樂的氣分から出掛けるのではないといふ意。

◎み冬たつ。冬が到來する。「み冬」は、三冬の意ではなく、御冬の義で、眞冬

さいふに同じい。萬葉集卷十七、「み冬つき春は來れど梅の花、君にしあらねば居る人もなし。」

◎さだめなき空。次の、「降りみ降らずみ、時雨もたえず。」とあるが如く、時雨の定めなき空模様をいふ。萬葉集卷八、「神無月時雨にあへる紅葉の、吹かば散りなむ風のまにく。」後撰集、貫之、「神無月降りみ降らずみ定めなき時雨や冬のはじめなるらむ。」などあるが如く、昔から十月を時雨月といひ、時雨の多い月だとしてある。

◎降りみ降らずみ。降つて見たり、降らないで見たり。「み」は、こゝろみる意で、「試る」の中止形である。此句は前掲の後撰集、貫之の歌の詞によつて書いたもの。

◎時雨。晩秋初冬の候、ひさしきりづ、降る通り雨。

◎嵐にきはふ。嵐の爲に先を争うて散る。木の葉の盛に散亂れるさまをいふ。

◎涙と共に。阿佛尼自身の流す涙と共に。「涙と共に亂れ散りつ、」とは、木の葉の繁く散る事に、涙の繁く流れる意を含めていうたもの。

◎事にふれて。何かにつけて。見るもの聞くものにつけて。

◎人やりならぬ道なれば。人がさうさせるのでなく、わが心から思立つて行く

旅の道であるから。すべて、自分の心からするのを、「人やりならぬ」といひ、わが心からなまぬのを、「人やり」といふ。源氏物語、夕顔卷、「人やりならず、心づくしに思ほしみだるゝことども。」同、帯不卷、「折々人やりならぬ胸焦るゝ夕もあらむ。」

◎いきうしきても、行くのがつらいさいうても。古今集 離別、「人やりの道ならなくに大かたは、いきうしきてもいざかへりこむ。」さいふ歌によつて書いたもの。

二 袖の雫

【通釋】
常に目を離さずに見てゐた間にすら荒れまさらつた庭も籬も、わが居ない後は一層荒れゆく事であらうと、自然見まはされて、自分を慕はしさうにしてゐる人々の別れを惜しん

めかれせざりつる程だに、荒れまさりつる庭もまがきもましてと見まはされて、慕はしげなる人々の、袖の雫も慰めかねたる中にも、侍従・大夫などのあながちに打ち屈したるさま、いご心苦しければ、さま／＼いひこしらへ、聞のうちを見れば、昔の枕さへ、さながらかはらぬを見るにも、今更悲しくて傍に書

で流す涙も、慰め得ない
である中でも、爲相・爲守
などの無精に萎れ返つて
ゐる様子が甚だ氣の毒で
あるから、色々さなだめ
て、寢室の中を見るこ
亡夫爲家卿の在世の折の
枕までも全部變らずにあ
るのを見るにつけても、
今新しく悲しくて、傍に
あるものに次の歌を書き
つける。

さどめ置く古き枕の塵
をだに、我が立ち去ら
ば誰か拂はむ。

俊成・定家・爲家などが、
代々書いて置れた歌の
草稿などの奥書をして、
しどけなくない歌だけを
選び調べて、爲相の許に

きつく。

さどめおくふるき枕のちりをだに

われ立ちさらば誰かはらはむ。

代々に書きおかれける歌の草子ごもの奥書して、あだならぬ
かぎりをえりしたゝめて、侍従の方へ贈るとて、書きそへぬる
歌、

和歌の浦にかき留めたる藻鹽草

これを昔のかたみとも見よ。

あなかしこよこ波かくな濱千鳥

ひと方ならぬあを思はゞ。

これを見て、侍従の返言いととくあり。

つひによもあだにはならじ藻鹽草

送ると云うて、書き加へた歌。

和歌の浦にかきこめたる藻鹽草、これを昔のかたみともみよ。あなかしこ横浪かくな濱千鳥、一方ならぬあさを思はゞ。

此歌を見て爲相の返事が甚だ疾く來る。その歌、

つひによもあだにはならじ藻鹽草、かたみを三代の跡に残せば。

迷はまし教へざりせば濱千鳥、一方ならぬあさをそれさ。

此返事が甚だ大人らしく理解があるから、氣樂で且可愛相であるにつけても、亡き夫に聞かせ申し

かたみを三代の跡に残せば。

迷はましをしへざりせば濱千鳥

ひと方ならぬ跡をそれとも。

この返りごととおとなしければ、心やすくあはれなるにも、

昔の人に聞かせ奉りたくて、又うちしほたれぬ。

◎めかれせざりつる程だに。目が離れずに、常に見て居た間でさへも。「めかれ」は、目離れで、「離る」は、遠ざかる、はなれるなどいふ意。古今集、春、「暮ると明くさめかれぬものを梅の花、いつのひさまにうつるひにけむ。」

◎まがき。「間垣」の意で、ついでなどの、土をもつて築いた大なるものに對して、假初に作つた庭の邊の小堀をいふ。古今集、秋、「里は荒れて人はふりにし宿なれや、庭もまがきも秋ののらなる。」

◎ましてさ。自分の居なくなつた後は、一層荒れまざる事であらうと。

◎見まはされて。自然あちらこちら見まはされて。「れ」は、「る」の連用形、能

たくて、また物思ひに打沈んだ。

動の意より一轉して、動作の自然に起つてこゞめられぬ意を表す自發の助動詞。

◎慕はしげなる人々。阿佛尼を慕はしさうにしてゐる人々。

◎袖の雫。涙のこと。玉葉、雜、「君なくてかへる涙ちにしなれこし、袖の雫を思ひやらなむ。」

◎慰めかれたる中にも。慰め得ようとしても慰めないである中でも。「かれ」は、すべてさうしようと思ふ心の堪へ得ないで、その本意を得ないのわいふ。萬葉集などには、「不得」「不勝」などいふ字を、「カネ」と讀んでゐるのも其意味である。

◎侍従。爲相のこと。侍従は、オモトビトさいふ、御許人の義で、天皇の御前に侍して規諫し、遺を拾ひ闕を補ふを職とする。

◎大夫。爲守のこと。大夫は五位のものをいふ。貞丈雜記、「大夫を清みて云ふと、濁りていふとに差別あり。左京大夫・修理大夫・大膳大夫・皇太后宮大夫などの時は、ないぶと濁りていふなり。たいふと清みていふ時は、五位の事なり云々。」公卿の子息は童子から五位である。爲守も此時從五位であつたので、爰に大夫さいふたのである。

- ◎あながちに。強ひて。無精に。
- ◎打ち風したるさま。萎れ返つてゐる有様。「屈し」は、心の晴やかでないのないうふ。「打ち」は接頭語。
- ◎心苦しければ。氣の毒であるから。「心苦し」まは、氣の毒に思ふ意、或はまた心にかよつて案じる意にもいふ。
- ◎さまざまいひこしらへ。色々さなだめること。
- ◎聞。ふしど。れどい。
- ◎昔の枕さへ。亡夫爲家が在世の時に使用してゐた枕まで。
- ◎さながら。すべて残らず。此語を、「そのまゝ」の意に解く註もあるが、それは誤。「昔の枕さへ」とある「さへ」は、或事柄の上に更に他の事柄の添加する意をいふ助詞で、従つて、變らずに居るものは單に昔の枕だけでなく其他にも色々ある意を言外に示してゐるのであるから、その關係上、此語は爰では「全部」の意を解する方が穩當である。伊勢集、九に、「あさましくいみじく悲しくて、つかまつりし人さながら集りて、夜晝泣き奉るに。」などあるも、全部の意。清水濱臣は、「さながらはすべてさういふ意なり。……此詞そのまゝにてといふ義もあれど、それはいとく稀なり。」さういふてゐる。

◎見るにも。見るにつけても。

◎今更。今新しく。

◎傍に書きつく。自分の身の傍にあつた物に書き記すのである。此句の前に、「次の歌を」といふ句を補うて解くとよく意味が明かになる。

◎さゞめおく。一首の意、旅に出掛ける後に残しておく、亡き夫の使つた枕の塵をすら、自分が出かけて行くならば、誰が拂はうぞ、誰も拂ひはしない。

◎代々。俊成・定家・爲家をさしていふ。

◎歌の草子。歌の草稿。「草子」は草藁の義、未だ清書もしない下書をいふ。

◎奥書。書後さもいふ。書物の末に其書の傳來由來等を記した文。

◎あだならぬ限。しごげなくない歌だけ。爰に「あだならぬ」さあるは、整うた歌をいふので、脆く果敢ないの反對。

◎えりしたゞめ。選ひ整へる。

◎和歌の浦に。一首の意、これは和歌の浦で書き残してある歌の草稿である、是を昔の父祖三代（俊成・定家・爲家）の記念であると思つて見ろ。「和歌の浦」は、和歌の薈さいふ意であるが、修飾的趣味と「藻鹽草」の縁さから、かく地名に言ひかけて、態と「浦」というたのである。「かき留め」は、書き留めの意

であるが、「かき」に「掻き」の意を含めて、矢張「藻鹽草」の縁語に用ゐてある。「藻鹽草」は、昔は、鹽をやくに、海水を幾度も海藻に注ぎかけて乾し、その藻を焼いて取つたもので、その海藻を藻鹽草といふのである。さて海藻は掻き集めるものであるから、すべてものを書き集めた草稿の意に用ゐる。爰もその意で、和歌の草稿をさす。「かたみ」は、形見で、遠い後までも其人を思ひ出す爲に残し置く記念の品物。

◎あなかしこ。一首の意、邪な歌風に墮落するな、わが子爲相よ、わが家は父祖三代の残された一通りでない名門の跡であることを思ふならば、と言ふ意味である。「あな」は、感動詞。「かしこ」は、恐多い意。「よこ波かくな」は、足で水を押退ける時に、横ざまに掻かずに、眞直に掻きのけるといふ意で、邪な歌を讀むなといふことを、「濱千鳥」の縁でかく言うたもの。「よこ波」は横に立つ波ではあるが、爰は其意ではない、口調がゆるせば「横に波かくな」といふべきを、歌であるからかく約めて言うたのである。「濱千鳥」は、濱邊にて居る千鳥で、爲相をさしいふ。「波」「千鳥」「あこ」は皆縁語である。「ひさ方ならぬ」は、一通りでない。

◎返言。返事。

◎遂によも。歌意、この御贈り下さつた草稿は、終ひにはまさか無駄にはなるまい、かうした記念の草稿をば、父祖三代の者どもが、よく見て歌の道を習へよと、後代に残してあるから。「よも」は、何としても、まさかなごいふ意の副詞で、此語のある文の終りは必ず未來の打消の助動詞「じ」で結ぶことになつてゐる。「あだ」は空しい意。「三代」は、俊成・定家・爲家をいふので、ついでに「見よ」の意を言ひたけてある。

◎迷はまし。歌意、邪道に踏み迷ふであらう、母上がお教へにならなかつたらば、私は、わが家が一通りでない立派な歌道の名門である事を、名門であるとも知らないで。「それとも」の次ぎに、「知らずして」さいふ意を補うて解く。

◎おさなしければ。大人のやうに聞きわけがあるから。「おさなし」は、大人の如く穩かなこと、聞きわけのあること。

◎心やすく。心の打解けて親しみのあるをいふ。或は心の安らかなこと。

◎あはれなるにも。可愛くあるにつけても。「あはれ」は、歎く詞で、「ア、」と同じい、即ち心に深く感じた時に出る詞で、悲しいこと、面白いこと、美しい事、愛らしいことなど、凡て深くシミミく思ふ程のものにいふ。

◎昔の人。亡夫爲家をさす。

◎しほたれ。鹽垂で、鹽の垂れるのは、濡れ濕つて乾難いものであるのが本で、涙の乾き難い意、物思に沈む意などに用ゐる。また昔の忌詞に、泣くことな鹽垂シホタレさうた、齋宮式に、「哭謂ニ鹽垂」とある。

三 手習の歌

大夫の傍去らず馴れ來つるを、ふり捨てられなむなごり、あながちに思ひ知りて、手習したるを見れば、

はるくくとゆくさき遠く慕はれて

いかにそなたの空を眺がめむ。

と書きつけたる、物こり殊にあはれにて、同じ紙に書きそへつ。

つくくと空を眺がめそこひしくば

【通釋】

爲守は今日まで母の傍を離れずに馴染んで來たのを、今日からは後に取り殘されて終はう心殘りを無精に心に知つて、手習をしてゐるのを見るこ、はるくくと行くさき遠く慕はれて、いかにそなたの空を眺めむ。

と書きつけてあるのが、

他の何ものよりも格別身に泌みて感じて、同じ紙に次の歌を書き加へた。

つくづく空を眺めそ戀しくば、道遠くとも

はやかへり來む。

と書いて慰める。

比叡の山から爲相の兄源承律師も、出を見送らうと云うていらしやつた。その律師も母との別れを甚だ心淋しいと思つてゐたのを、この手習なごを見て、又次の歌を書き加へた。

あだにのみ涙はかけじ旅衣、心のゆきて立ちかへるほど。

と讀んで、不吉な詞を慎しみながら、涙の流れ落

道とほくともはや歸りこむ。

とぞ慰むる。

山より侍従の兄の律師も、いでたち見むとておはしたり。それもいと心細しと思ひたるを、この手習ごもを見て、又書そへたり。

あだにのみ涙はかけじたびごろも

心のゆきてたちかへるほど。

とは、言忌こといみしながら、涙のこぼるゝを、あらゝかに、ものいひまぎらはすも、さまぐあはれなるを、阿闍梨あざりの君は山伏にて、この人々よりは、兄なり。この度の道のしるべに、送りたてまつらむとて、出で立たるめるを、この手習に、またまじらはざらむやはとて書きつく。

ちるのを、元氣よく物を言ふのにまぎらばし隠すのも、様々の事につけて身に泌みて感じるのを、阿闍梨の君慶融は山伏で、此源承・爲相・爲守などよりは年長である。自分の旅の道案内になつて御送り申さうと云うて出發なさるやうであるのを、この手習の仲間にもた仲間入りをすると云うて、次の歌を書きける。

立ち添ふぞうれしかりける旅衣、かたみに頼む親のまもりは。

たちそふぞうれしかりける旅衣

かたみに頼む親のまもりは。

◎大夫の。爲守が。「の」は主格を示す助詞。

◎傍去らじ云々。母阿佛尼の身の近くを離れずに馴染んで來たのを。

◎ふり捨てられなむなごり。後に取残されて終はう心残り。「ふり捨てられ」はふり離つて出て行かれる。「なむ」は未來完了の助動詞。「なごり」は、波残の略、風吹いて海上に立ち騒ぐ波が、風が止んでも猶鎮まらずに残つて居るをいふ。轉じて、其事の果てた後に其氣の遺つてゐるをいふ。「なごり惜し」なごいふも、其人の去つたあき、其様子が面影に覺えるのを惜しむ意である。爰にいふ「なごり」も、別れる場合の心残りの意。然るに「なごり」は、波の退いた後、汀に海潮の残つて居る意から來たのであるといふのは誤。勿論汀に海潮の残つてゐるのを、「なごり」とはいふけれど、その元は、風が止んでも鎮まらぬ波の意から轉じたのである。

◎思ひ知りて。心に悟つて。

◎手習したる。手習してゐる。「手習」は、文字を書き習ふこと。源氏物語、空

蟬卷、「たゞ手習ひのやうに書きすさみ給ふ。」「たる」は、現在完了の助動詞、テキルとも、タとも譯す。

◎はるんくさ。歌意、母上の遙かに遠く旅にお出かけになる、その行く先が遠く暮はれて、ごんなに、東の空を眺めて物思ひに沈むこゝであらうか。「はるんくさ」は、「ゆく」にかゝる副詞。「暮はれて」の「れ」は、自發の助動詞。「そなたの空」は、母君の行かれる方の空で、東の空をいふ。「ながめ」は、物を長く見つめる事で、大方物思ひのある時空を凝視するこゝにいふので、單に見渡す意ではない。

◎書きつけたる。書きつけてあるのが。「たる」は、現在完了の助動詞「たり」の連體形で、かく連體形で句を切つてあるのは、次に主格を示す助詞「が」を省いてあるので、解釋の時はその補うて解かれねばならぬ。

◎物より。何よりも。

◎あはれにて。身に泌みて感じて。

◎同じ紙。丈夫の手習した紙。

◎つくんくさ。歌意、サツトわが行く空を見守つて物思ひに沈むやうな事をするな、御前が私を戀しいならば、たまひ旅の道が遠くても、早く歸つて来よう。

「つくづく」は、心靜かに、氣を外物に散らさずになどいふ意の副詞。「な眺め
そ」の「な……そ」は、其間に動詞を挿んで、禁止の意を示す助詞。

◎山。當時は單に「山」といふと比叡山のこと。

◎侍従の兄の律師。爲相の兄である。源承律師のこと。「律師」は、僧正・僧都に
次ぐ僧官で、法橋和尚位に相當する官である。昔朝廷から賜はる僧侶の官に、
僧正・僧都・律師の三等があり、それらの官に各相應する僧位に、法印・法眼・
法橋の三等があつた、之等の僧官と僧位とを總稱して僧綱と云うた。

◎いでたら見むとて。阿佛尼の首途を見送らうと云うて。

◎おはし。ある、居る、來る、行くなどいふ意の敬語。

◎あだにのみ。歌意、母上の旅立ちに際して。無駄に涙を流すまい。満足して
お歸りになる間のお別れであるから。「涙はかけじ」は、別れを惜しんで泣く
やうな事はすまいとの意。「たびころも」は、旅に行く人の衣。爰に「涙はか
けじ旅衣」というたのは、母上の旅衣に涙はかけじの意で、即ち旅に立たれ
る母上の眼前で。泣くやうな事はすまいとの意。「心のゆきて」は、「心ゆく」
といふ語の間に「の」の字を入れたまでのもの、「心もゆかず」など、「も」の字
を置くと同じい。「心ゆく」は、わが心の其物にうつりゆく義で、氣持のよい、

心の慰む、満足するなどの意。

◎言忌。不吉な詞を慎むこと。前の歌に、「あだにのみ涙はかけじ」と、言いたのをさしてゐる。

◎あらゝかに。荒々しく。爰は、元氣よくなごいふ程の意。

◎ものいひまぎらはす。詞づかひをして、それで涙の出るのを隠すこと。

◎阿闍梨。天台真言兩宗の高僧の稱號。「阿」は發語、「闍梨」は軌範・正行などと譯すので、阿闍梨は普通、軌範となつて弟子の行爲を矯正する德僧の敬稱である。然るに吾國では、仁明帝の承和三年に、比叡・比良・伊吹・愛宕・神峰・金峯・葛木の七高山に阿闍梨を置いたのが始となつて、以後僧職に用ゐ、本密台密の高僧をそれにしたのである。爰では、慶融をさす。

◎山伏。山臥とも書く、修驗道の行者で、修驗者ともいふ。野に寝、山に臥して苦行を凝し、神験を修得する行者である。是は役小角の法流を嗣ぐものであるから、後には天台真言の兩宗に附屬し、天台宗では三井寺から、真言宗では醍醐寺から之を檢校した。

◎この人々。源承律師・侍從爲相・大夫爲守等をさす。

◎道のしるべ。道案内。母上の道案内である。

◎出で立たるめるを。出發なさるやうであるのを。「出で立たる」の「る」は敬語の助動詞。「める」は「めり」の連體形。「めり」は、所見有の約つたもの、事物の狀態が、さう見えると推量する助動詞。

◎この手習。爲守の「はるんくさ云々」の歌を始めとして、阿佛尼、律師などの歌を書きつけてある寄書ヨセガキをいふ。

◎まじらはざらむやは。仲間に入らずに居らうか入らずには居ない。寄書の仲間に入つて、それに歌を書きつけるのをいふ。「まじらは」は、「まじろ」の延語。

「や」は反語、「は」は感動詞。

◎たちそふぞ。歌意、母上の旅立ちにお供をするのが嬉しくあるよ。兄弟が互に力と頼む親の守りであるのは、實に嬉しい。「たちそふ」は立添ふで、ついで行くこと、「たち」に裁ちの意キを兼ねて、「旅」と「衣」この兩方の縁語に用ゐてある。「旅衣」は母上の旅立ちさいふ意。「かたみ」は、互にの意。「ける」は詠嘆の意。

四 残る撫子

【通釋】

自分の腹には女子は幾人もない。なゞ一人でこの近所に住む新陽明門院の許に伺候なさる。其所には龜山院の胤を宿した姫宮が一人お生れ遊ばして居るだけで、ひゞうお仕へに忙しい事もなく、紀の内侍は心を用ゐる事も眞實な様子で、大人びていらつしやるから、姫宮様の戀しく思はれる事を申上げてくれるやうに豫め頼んで置く序に、爲相・爲守などを大切に養ひ育てよさいふ趣も詳細に書きつけて、其終りに、君をこそ朝日と頼め故郷に、残る撫子霜にか

女の子はあまたもなし。唯一人にて、この近きほどの女院にようあんにさぶらひ給ふ。院の姫宮、一所生れ給ふばかりにて、心づかひも誠しきさまにて、おとなしくおはすれば、宮の御方のこひしさも、かねて申しおくついでに、侍従・大夫などのこと、はぐくみおほすべきよしも、こまかに書きつけて、奥に、

君をこそ朝日とたのめふる里に

残るなでしこ霜にからすな。

と聞えたれば、御返りもこまやかに、いとあはれに書きて、歌の返しには、

思ひおく心とどめばふるさとの

霜にもかれじ大和撫子。

とぞある。五つの子どもの歌、残りなく書きつゞけぬるも、且

らすな。

さ申上げたれば、御返事も詳しく甚だ哀れに書いて、「君をこそ」と言うてやつた歌の返歌には、

思ひおく心さめめば故郷の、霜にも枯れじ大和なでしこ。

さ讀んである。

五人の子供の歌を全部書きつられたのも、一面には甚だ阿呆らしいけれど、親の心にとつては身に泌みて感じるにまかせて、書きあつめた。さう／＼氣が弱くては、よろしくあるまいと思つて、子供等をば平氣で捨ておいて出發した。粟田口といふ所から、都から乗つ

はいとをこがましけれど、觀の心には、あはれに覺ゆるまゝに、書き集めたり。さのみ心弱くてはいかゞとて、つれなくふり捨てつ。粟田口といふ處より、車は返しつ。

◎女の子は云々。阿佛尼自身には、女の子は幾人もないこの意。

◎唯一人。紀の内侍のこ。この父は爲家ではない。

◎この近きほどの。この近邊の。「ほど」は、も量數から出た詞で、程度分量をいひ、様子・恰好・身分などの意にも用ゐ、時分・間・あたりなどいふ意にも用ゐる。

◎女院。天皇の御母・准母・内親王等の佛門に入られた御方に授ける尊號で、後に其尊號に宮城の門號を付けたのを門院といふ。爰は龜山院の女御近衛基平の女位子、新陽明門院のこ。

◎さぶらひ。奉仕すること。此語はも「さもらひ」といひ、「さ」は發語、「もらひ」は「守る」の延語で、貴人の有様を伺ひ目守つて慎しみ居るをいふので、伺候する意、轉じては單に敬語として用ゐるやうにもなつた。

◎院の姫宮。龜山院の胤を宿してお出來になつた姫宮。

て来た車は返した。

◎一所。一人。「所」は貴人を數へる時の語。

◎生れ給ふばかりにて。お生れ遊ばしてゐるだけで。「ばかり」は、「のみ」と同じく、一ありて二なき意を示す助詞。猶程度を言ひ添へる接尾語として用ゐられる「ばかり」もある。さて「院の姫宮一所……ばかりにて」の句は、一寸下文へのつゞきが意味をなまぬやうであるが、是は下に「宮の御方云々」と言はれ、爲に、まづ女院の御許に姫宮のある由を述べ、且は紀の内侍の身邊がさして繁忙でないことを斷つて、侍従・大夫などの養育を頼むに恰好である趣を聞かせたもの、此句の次に、「さしたる忙しき事もなく」といふ意を補うて解くこゝの意味が明かになる。

◎心づかひ。氣をくばること、心をはたらかすこと、心配すること。爰は、色々の事に氣をくばつてかれこれと心を用ゐるをいふ。是は紀の内侍の上をいふのである。

◎誠しき。「誠」といふ名詞に「しき」といふ形容辭の添うたもの。眞實。

◎宮の御方のひひしさ。阿佛尼が姫宮を戀しく思ふのをいふ。

◎かれて申しおく。前以つて紀の内侍に言ひ置く。姫宮の戀しさを内侍に言ひ置いたのは、内侍を戀しく思ふといふ意をもそれとなく聞かせたのである。

◎はぐくみおほす。養育して育てる。「おほす」は、生ひ立たせる意で、育てること、養ふこと。

◎こまかに。詳密に。

◎奥に。書物の終りの方、または手紙や文章の終りを、すべて、奥さいふ。爰は詳しく手紙を書いたその文の終りをいふ。

◎君をこそ。歌意、紀の内侍を、萬物を發育させる朝日と頼む、よつて都に残つてゐる可愛い子供を、霜に枯れるやうな事をさせないで、無事に育て、下さい。「朝日」は「霜」に對した語で、萬物を發育せしめたる太陽さいふ意、保護者の意に用ゐたもの、勿論朝日は霜を融かす所から相對せしめた事は言ふまでもない。「ふる里」は、昔都のあつた土地、昔自分の住んでゐた土地、又は昔自分の通うて宿つた家などをもいふ。「なでしこ」は、野山に自生する草で、常夏さも大和撫子ともいふ、園に植ゑるのは唐土から渡來したもの、唐撫子カラナデシコさうて、單に「なでしこ」さのみは言はない。「なでしこ」さは、その花の形の小さく、色の愛すべき所から名付けたものであらうか、兎も角も爰では「なでしこ」さいふ名を爰兒の意にさりなして、爲相・爲守二人のこまに言うたもの。

○聞え。申す、言ふなどの意。口に言へば耳に聞える所から、その耳の方について聞ゆさうなもの。

○御返り。御返事。

○歌の返し。「君をこそ」の歌に對する返歌。「返し」は返歌のこと。「返り」と言へば手紙などの返事。

○思ひおく。歌意、母上が色々を御心を注いで注意しなから、思ひ残し置く故郷の大和撫子は霜にも枯れまい。「思ひおく」は、新古今、「思ひおく人の心に慕はれて、露わくる袖のかへりぬる哉。」續千載、「故郷を思ひおきつつく雁の、旅の心は空にぞありける。」太平記、「故郷の妻子をば行方も知らず思ひおき。」などあるが如く、思ひ残し置く、心にさめて残し置くなどいふ意。

此語は、「思ひおく故郷の大和撫子。」とつゞくので、「思ひおく心」とつゞくのではない、前に引用した慣例を見ても此語の「心」とつゞく事の非なるは明かであるが、更に意味の上から見ても、「思ひ残してある心を留めてあつたならば」といふ事の極めて不明な拙劣な言ひ方である事がわかる。此拙劣な非慣用的な不明な、「思ひおく心」といふべしとつゞく方の解釋を用ゐてゐる註もあるが、それは誤である。「心」といふは、注意する、意を注ぐなどいふ意で、

前に「侍従大夫などのこさはぐくみ云々」とあるが如く、阿佛尼の色々を殘し置く子供の身上を心配するのをさしていふのである。此語も諸註に「心を殘し留める」意に解いてゐるのは誤。源氏物語・帶木卷、「着るべきもの常よりも心ざらめたる色あひし。」「前裁など心ざらめて植ふたり。」などある、みな心を用ゐる意。「大和撫子」は、爲相・爲守をさす。此歌の意は、「心ざらめば思ひおく故郷の大和撫子霜にも枯れじ。」とあるに同じい。

◎五つの子ども。紀内侍・慶融・源承・爲相・爲守の五人の子供をいふ。

◎且は。二つの物を交錯する時にいふ詞で、一方には、一面からはなどいふ意。いと。甚だ。

◎をこがまし。馬鹿らしい。阿呆らしい。此語は、「をこいふ話に、ノ如シ、ニ似ル嫌ホアリなどいふ意の接尾語「がまし」の添うたもの。「をこ」は、後漢南蠻傳に、烏潯の國の事が見え、其風俗の笑ふべき話が多い所から、その國名をかりて、笑ふべき事の意に用ゐたのであるといふ説と、此語は應神天皇紀に見えてゐる歌に、「伊夜袁許爾斯豆。」とあるを根據に、吾國古來からある國語であるといふ説とある。

◎覺ゆるまゝに。感じるにまかせて。「まゝに」は、「まに／＼」「まかせて」「隨

【通釋】
間もなく逢坂の關を越える時に、次の歌を讀んだ。

つて「なごいふ意の接尾語。

◎さのみ。さうく。さうばかり。

◎心弱くてはいかゞきて。氣が弱くては、ごうだらうか、よろしくあるまいと思つて。即ち殘し置く子供の upper 色々さ心配し、且は別れが惜しくて、かれこれ言つてゐるやうに、氣が弱くては、よろしくないと思つての意。

◎粟田口。山城國愛宕郡に在る。京都から東海道筋に出る出口である。

◎車。牛車で、牛をつけて牽かせる屋形車。牛車を乗用に用ゐたのは平安遷都以後で、爾來盛んに行はれ、金銀にて飾り華美に流れるやうになつたが、鎌倉時代以後は次第に廢れ、應仁の亂後は殆ど跡を絶つやうになつた。此車は京都から乗つて來たのである。

五 近江路の旅

程なく、逢坂の關こゆるほどに、

定めなきいのちはしらぬ旅なれど

定めなき命は知らぬ旅
なれど、またあふ坂さ
頼めてぞ行く。

野路といふ所は、後の方
にも、前の方にも人の影
も何も見えない。日は暮
れはじめて大層物悲しい
と思ふに、其上時雨まで
が落ちて来る。かくて讀
んだ歌。

うちしぐれ故郷思ふ袖
ぬれて、行くさき遠き
野路の篠原。

今晚は鏡宿といふ所に着
かうさ極めてゐたけれ
ど、途中で暮れて終うて
到着しない。守山といふ
所に泊つた。此處にも時
雨が矢張自分をなつかし
がつて降つて来た。そこ

またあふ坂さたのめてぞゆく。

野路といふ處は、こし方ゆく先、人も見えず。日は暮れかゝり
て、いと物悲しと思ふに、時雨さへうちそゞぐ。

うちしぐれふるさと思ふ袖ぬれて

ゆくさきさほき野路の篠原。

今宵は、鏡といふ所に著くべしと定めつれど、暮れはてゝゆき
つかず。守山といふ所にとどまりぬ。ここにも時雨なほ慕ひ來
にけり。

いとさなほ袖ぬらせとやと宿りけむ

まなく時雨のもる山にしも。

けふは十六日の夜なりけり。いと苦しくて臥しぬ。未だ月の光
は、かすかに残りたるあけぼのに、守山を出でてゆく。野洲川

で讀んだ歌。

いとよなほ袖濡らせこ
や宿りけむ、間なく時
雨のもる山にしも。
今日は十六日の夜である
わい。疲れたので苦しく
て休んだ。

まだ月の光は空に薄く残
つてゐる夜明けに守山を
出發して行く。野洲川を
渡る時分、自分の先に立
つてゆく旅人の馬の足音
だけがはつきりと聞えて、
霧が大層深い。そこで
讀んだ歌。

旅人はみなもろもろにも
朝立ちて、駒うちわた
す野洲の河霧。

十七日の晩は小野の宿といふ所にさまる。月が出

わたるほど、さきだちてゆく旅人の、駒の足音ばかりさやかに
て、霧いと深し。

旅人はみなもろもろにも朝たちて

こまうちわたす野洲の川霧。

十七日の夜は、小野の宿といふ所にとどまる。月出でて、山の
峯に立ち續きたる松の木の間に、けちめ見えて、いとおもしろ
し。こゝは夜ふかき霧のまよひに、たごり出でつ。醒が井とい
ふ水、夏ならばうち過ぎましやと思ふに、かち人は、なほたち
よりに汲むめり。

むすぶ手に濁る心をすゝぎなば

うき世の夢や醒が井の水。

とぞ覺ゆる。

て山の峰に立ち運つてゐる松の木と木の間が、區別がついてはつきりさ見分けられ大層趣が深い。翌朝此處は夜明けには間のある、霧の爲に道の紛れ易い時に、探すやうにして出發した。

醒が井さいふ水は、これが夏の時節であるならば寄らずに通り過ぎはしまいと思ふに、徒歩で行く人は矢張立ち寄つてすくひ飲むやうである。そこで、

むすぶ手ににごる心をすゝぎなば、うき世の夢やさめが井の水。

と讀んだが、眞實さう感じる事である。

◎程なく。間もなく。

◎逢坂の關。山城國と近江國との境に在つて、東國の要路に當つてゐる。此關は、奈良朝時代には三關(伊勢の鈴鹿・美濃の不破・越前の愛發)の内に加らなかつたが、桓武帝の延暦年間平安遷都以後重要な地となり、越前の愛發に代へて、此逢坂の關を三關の内に加へるやうになつた。「關」は、「せき」ともめる義、人を防ぎ留める意である。即ち、要路又は國境に設けて警固或は往來の人を取締劄塞又は通行税を徴收するを目的とする所。

◎定めなき。歌意、何時死ぬかわからない我が命は、果して生きて歸るやら、或は旅の空で死んで終ふやらわからない旅であるけれども、再び歸つて來て逢ふ逢坂の關であるを、頼みに思はせて過ぎて行く。「あふ坂」の「あふ」に逢ふといふ意を言ひかけてある。「たのめ」は、頼ましめて、人に頼ましめる義。アテニサセル、頼ミニ思ハセル、約束スル、なごいふ意。

◎野路。近江國栗太郡に在る地名である。今は矢橋村と合同して、老上村と云うてゐる。

◎こし方ゆく先人も見えす。自分の過ぎて來た方も、これから行く先も共に人影も見えない。

◎物悲し。何さなく悲しい。「物」は、物事につけて何さなく、などいふ意の接頭語、

◎うちしぐれ。歌意、時雨が降りそゞいで、故郷の事をなつかしく思ふわが袖は、その涙と時雨との爲に濡れて、到着する先の遠い野路の篠原よ。即ち、野路の篠原まで来るこ、時雨が降つて来た、故郷の事を色々懐かしく思ふ自分の袖は、その涙と時雨とで濡れた、そして自分の今晩行き着くべき先はまだ遠い事であるこ、云ふ意である。「ふるさこ」は、京都をさす、「ふる」に「うちしぐれ降る」の「降る」を言ひかけてある。「ゆくさきさほき」は、自分の到着する先の遠い意、然るに諸註に、野路の篠原を過ぎ行く道の遠い意に解いてゐるのはどうであらうか。「野路の篠原」は、本来「野路」と「篠原」とは別の地名である。まゝところが此二つの土地が相接近してゐるために、古來歌などには兩者をついで詠んである例が多い、東關紀行にも「行く人もまらぬ里となりしより、荒れのみまさる野路の篠原。」とある。思ふに口調の上からであらう。

◎鏡。近江國蒲生郡にある鏡宿のこ。大友黒主が、「鏡山いざ立ちよりて見へ行かむ、年経ぬる身は老いやしぬるこ。」と讀んだ鏡山の北に位する。

◎定めつれど。豫定してあつたけれど。

◎守山。森山・杜山など、も書く。近江國野洲郡、野洲川の左岸にある。

◎時雨なほ慕ひ來にけり。時雨が矢張り降つて來たさいふ意を、自分を離れ難く思つて後について來たさいふやうに面白く書いたもの。

◎いさゞなほ。歌意、矢張り一層袖を濡らせさいふので、自分は宿つたであらうか、間斷なく時雨の洩る此守山にマア。即ち表面は時雨に袖を濡らす意に云うて、裏面に旅情の淋しさ都戀しさの情で流す涙で袖を濡らす意を聞かせたのである。「いさゞ」は、「いさゝいさ」の約、いよゝく、一層。「まなく」は、間斷なく、絶間なく。「もる山」は、時雨の洩る意を、守山に言ひかけたもの。「し」強める助詞。「も」は感動詞。さて此歌の「袖ぬらせまや宿りけむ」さいふ句が議論の起る點であるが、是は自分で自分に命令した形に述べたので、かうした言ひ方は、自分が或事業を擇んでそれが爲に非常に苦しい目に遭つたのを、苦しい目に逢へさて、此事業を擇んだであらうかなどいふに同じい。

◎苦しくて臥しぬ。旅の一日目であるから疲勞して、それが爲に苦しくて寢たのであらう。旅の第一夜であるから眠る事が出來ず、輾轉反側に堪へなかつた意に解く註もあるがどうであらうか。「苦しくて」と、接續的意味をなす

助詞の「て」で接続してある語勢を見ても、苦しい事が原因で寝たやうに思はれる。

◎月の光はかすかに云々。十六日から後の月は有明になるのであるから、夜明けにその月が残つて居たのである。

◎あけぼの。夜のほのかに明ける頃。

◎野洲川。近江國野洲郡にある。

◎さやか。明か。

◎旅人は。歌意、旅人は皆さもどくに朝出發して、野洲川の霧の中を馬で渡つて行くことである。「こまうちわたす」は、馬を鞭で打つて渡らせる意、萬葉、「千鳥なく佐保の川門の清き瀬を馬うち渡し何時か通はむ」

◎小野の宿。近江國坂田郡にある地名である。彦根町から東の方半里ほどの所にある。

◎けぢめ。差別。「けぢめ見えて」さは、松の木が、一本々々、明かに見分けられるのをいふ。

◎おもしろし。趣の深いこと。

◎夜ふかき霧のまよひに。夜明けには間のある、霧が深くて道の紛れ易い時に。

「夜ふかき」は、夜明けの標準にして言ふ場合に用ゐる語で、未明の意。「夜ふけ」と言へば、夕方を基點として夜の遅くなるをいふ。

◎たどり出でつ。道を探すやうにして出發した。「たどり」は、手取るの意、暗い所を手で探して行く意、凡て知らぬ道や、暗い道をさぐり行くこと。

◎醒が井。近江國坂田郡にある地名、今は醒井村に屬してゐる。此地に居醒井といふ清泉があつて、古昔日本武尊が醒覺なされた泉であるといつてゐる。爰に「醒が井といふ水」とあるはその泉をいふであらうか。

◎うち過ぎまじや。立ち寄らずに通り過ぎようか、通り過ぎはしまい。

◎かち人。徒歩の人。

◎むすぶ手に。歌意、醒が井の水をすくひあげる手で、煩惱に染みてゐる我が心を洗ひ清めるならば、名聞利慾に迷うてゐる此世の夢が醒めるであらうか、「むすぶ手に」は、水をすくひあげる手によつての意。「濁る心」は、一切の煩惱に深く染みてゐる心。「すゝぐ」は、洗ひ清める。「うき世」は、人の世。「うき世の夢」さは、人の此世に於ける、名聞利慾の迷ひ。「醒が井の水」に、醒める意を言ひかけてある。

◎こそ覺ゆる。此句は前の歌の意味を受けて、「こを感じる」と。自分の心持を強

く表はしたのである。

六 美濃路より

十八日、美濃の國、關の藤川わたるほどに、ます思ひつづけける。

わが子ども君に仕へむためならで

わたらましやは關の藤川。

不破の關屋の板庇は、今もかはらざりけり。

ひま多き不破の關屋はこのほごの

時雨も月もいかにもるらむ。

關よりかきくらしつる雨、時雨に過ぎて、降りくらせば、道もいそあしくて、心より外に、竿縫の驛うまやといふ處に、暮れはてね

【通釋】

十八日、美濃の國の關の藤川を渡る時に「美濃國關の藤川絶えずして」といふ歌から、思ひつづけで讀んだ歌。

わが子ども君に仕へむためならで、わたらましやは關の藤川。

不破の關の番小屋の板庇は、今も昔も變らずに荒れはてゝあるよ。そこで讀んだ歌。

ひま多き不破の關屋はこの程の、時雨も月も

いかにもるらむ。

不破の關を通る時から、あたり一面に暗くなつて降る雨が時雨よりも長く降りつゞいて、そのまゝ日が暮れるから、道も大層悪くて、それが爲に思ひがけなく笠縫の驛さいふ所に、日はトツプリ暮れては終はないけれど泊る。そして讀んだ歌。

旅人は養うちはらふ夕暮の、雨に宿かる笠縫の里。

十九日、また此處を出發して行く。夜通し降つた雨の爲に、平野さかいふ邊は、道がいよゝ悪くて、人が通れさうもないから、水田の上をその儘

ごとまる。

旅びとはみの養うちはらふゆうぐれの

あめにやごかる笠縫のさと。

十九日、又こゝを出でてゆく。夜もすがら降りける雨に、平野とかやいふほど、道いとわろくて、人通ふべくもあらねば、水田の面をぞさながら渡りゆく。明くるまゝに、雨は降らずなりぬ。晝つ方すぎゆく道に、目にたつ社あり。人に問へばむすぶの神とぞ聞ゆるといへば、

守れたごちぎりむむすぶの神ならば

とけぬ恨にわれまよはさで。

すのまた洲俣とかやいふ川には、舟を竝べて、まさきの綱にやあらむ、懸けとゝめたる浮橋あり。いと危けれど渡る。この川、堤の方

で渡つて行く。夜の明け
るにつれて雨は降らな
なつた。
晝時分、通つて行く道に、
よく目につく神社があ
る。それを人に尋ねると、
結ぶの神と申すと答へる
から、讀んだ歌。
守れたとちぎり結ぶの
神ならば、解けぬ恨に
われ迷はさで。
洲俣さかいふ河には、舟
を並べて、それをば正木
の葛で作つた綱であらう
か、繋ぎさめた浮橋があ
る甚だ危険ではあるが、
その上を渡る。此川は一
方の堤のある方は大層深
くて、他の一方は浅いか
ら、

はいと深くて、かた方は浅ければ、

かたふちのふかき心はありながら

人目づつみにさぞせかるらむ。

假の世の往來と見るもはかなしや

身をうき舟をうき橋にして。

とぞ思ひ續けゝる。又一の宮といふ社を過ぐとて、

一の宮名さへなつかし二つなく

三つなき法のりを守るなるべし。

◎十八日。残月抄には此三字がない。

◎關の藤川。美濃國不破郡に在る小流。今は藤子川といふ。不破關の附近を流れてゐる所から此名がある。川は小流であるが、東山道の要路に當り、不破關によつて其名高く、屢々古人紀行の筆に上り、詠歌が多い。古今集に、「美濃の國關の藤川絶えずして君に仕へむ萬代までに。」と讀んである。

かたふちの深き心はありながら、人目づつみにさぞせかるらむ。

かりの世のゆき、こ見るとはかなしや、身を浮舟を浮橋にして。

さ云ふ歌を讀みつゞけた。

また一の宮さいふ神社の前を通過するさいうて、讀んだ歌。

一の宮名さへなつかし二つなく、三つなき法を守るなるべし。

◎まづ思ひつゞける。第一に思ひつゞけて詠んだ歌。「思ひつゞけ」さ云うたのは、前掲の古今集の歌から思ひ續けたさいふ意。

◎わが子ども。歌意、自分の子供が、零落して終はずに、豊かに育つ、君に御奉公申上げる爲でなくて、他の目的の爲に、かうした旅に出て颯の藤川をば渡らうか、渡りはしない。此歌は前にも述べた通り、「關の藤川」の條に掲げた古今集の歌から思ひついて讀んだもの。

◎不破の關屋。不破の關は、美濃國不破郡關の藤川の東岸、今の關ヶ原大字杉尾の大木戸坂の地にあつた。此關は古昔三關の一で、天武天皇の元年に設けられたものらしい。後、桓武天皇の時に廢せられ、其處の關屋も平安朝の末期頃は既に雨や月の漏る板屋さ化し、歌人が歌に詠む一の名所さなつた。「關屋」は、關の番小屋。

◎板庇。板の庇で、番小屋の庇のさまである。新古今集、「人住まぬ不破の關屋の板庇、流れにし後はたゞ秋の風。」

◎今もかはらざりけり。昔も今も變らず荒れはて、なるわい。

◎ひま多き。歌意、屋根に隙間の多い不破の關の番小屋は、此頃の時雨も月の光も、どんなに洩る、こまであらうか。

◎かきくらし。あたりを暗くする。「かき」は接頭語。此語はまた心のくらしむ意にもいふ。枕草子、「雪のかきくらし降るに云々。」古今集、「かきくらし降る白雲の下消えて、消えて物思ふ頃にもあるかな。」は前者の意。源氏物語、葵卷、「たゞかきくらす心ちし待れば。」同、夕顔卷、「御心ちかきくらしいみじく堪へ難ければ。」などあるは後者の意。

◎時雨に過ぎて。時雨より以上で。時雨は、類昏の義であるとも、小雨が降つて来て暫時昏くなる義であるとも、或は、「し」は添へたまでと空の昏くなる意であるとも云ふ。兔に角、晩秋から冬にかけて、晴れた空が急に曇つて雨が降つて来るかとするこ、その片端から日が照り出して雲は他所へ廻り行き、又その跡から雲が出て小雨が降つて来て、やがて晴れるのを云ふので、古歌にも、後鳥羽院、「わが袖に幾度月の宿るらむ、曇れば晴る、初時雨かな。」藤原定家、「時の間にしぐる、空の雲過ぎて、又誰が里に袖ぬらすむ。」藤原「柴の戸に入日の影はさししながら、いかにしぐる、山邊なるらむ。」などあるのを見ても、其趣がわかる。然るに爰に、「時雨にも過ぎて」とあるは、時雨よりも長くひびく降りつゞいて普通の雨のやうに降つたのであらう。

◎降りくらすば。暮れるまで雨が降つたから。「降りくらす」は、終日雨が降つ

て日が暮れるのをいふ。源氏物語、帯木巻、「つれなくも降りくらしして、しめやかなる宵の雨に。」

◎心より外に。思ひがけなく。意外に。

◎笠縫の驛。美濃國安入郡に在る。驛は驛ウマヤ又は驛家エキケともいふ。古の官人が内地交通の際、宿泊又は行李負擔に便する爲に定置した宿場。令制によるに、陸には諸道三十里毎に一驛を定置し、之を大中小の三等に區別し、各驛馬傳馬の數を定め、驛馬は事の急な場合、傳馬は事の緩なる時に用ひ、其飼養の料さして驛田を附し、各驛は驛長・驛子・傳子を置き、國司が是を管した。

◎暮れはてれど。ドツブリと暮れて終はないけれど。

◎旅びまは。歌意、旅行く人は、簑にたまる雫を打拂ふ程にひどく降る夕暮の雨の爲に、笠を縫ふさいふ名のある笠縫の里に宿ることである。「旅びま」は、阿佛尼自身の上を云うたもの、然るに是を阿佛尼以外の旅人の意に解く註もあるが、それは誤。「簑」「笠」は「雨」の縁語で、殊に「笠縫」に笠をつくる意を含めて、駄洒落的技巧を弄して讀んである。

◎夜もすがら。夜通し。「すがら」は。「さながら」の約、始めから終りまでさいふ意の接尾語。

◎人通ふべくもあられば。人が通れさうもないから。

◎水田。水のある田。

◎さながら。そのまゝで。水のある儘での意。

◎明くるまゝに。夜の明るくなるにつれて。

◎晝つ方。晝時分。

◎目にたつ。際立つて見える。よく目につく。

◎むすぶの神。「むすびの神」のこと。又は、男女の縁をつかさどる神のこと。

拾遺集、「君見ればむすぶの神ぞうらめしき、つれなき人をなにつくりけむ。」などとも詠んである。爰は、安入郡平野に在る結大明神のこと。

◎聞ゆ。申上げる。「聞ゆるさいへば。」此句の次に、「讀んだ歌」さいふ句を省略してある。

◎守れたゞ。歌意、約束を結ぶさいふ御名の神であるならば、晴れない恨みの爲に私を迷はさないで、ひたすら私を守つて、齟齬する恨みを晴らして下さい。「守れたゞ」は、「たゞ守れ」の意、即ち亡夫爲家の遺言の實現されるやうに私を守つて下さいさいふので、此句は一首の終りにつけて見ればよくわかる。「むすぶの神」の「むすぶ」に、ちぎりを結ぶ意を言ひかけたもの、「ちぎり

むすぶ」は、約束を結ぶ意で、亡夫爲家の遺言に縁を持たせて、かく云うたのである。「まけぬ恨」は、晴れない恨で、細川の庄を横領せられた恨。「まけぬ」は「むすぶ」の縁語に用ゐてある。

◎洲俣。美濃國長良川の部分的名稱。即ち長良川は、同國大日ヶ嶽に源を發して上流と西洞川といひ、南流して岐阜市の北側を掠め、三支に分れ、また再合して南向し、合渡の南で糸貫川を合せ、黒股川と稱へる。其西岸に墨股といふ町がある。養和元年三月平重衡・維盛が源行家・義圓の兵を此處に破つた。

◎まさきの綱。「まさきのかつら」で作つた綱。「まさきのかつら」は、一説には、四時常に綠色の蔓草で、薛荔といふもの、こゝであるといひ、他の一説には、葉は南天に似て黒みがあり、冬の初、美しく色付く蔓草であるともいふ。その名義についても、眞幸の意で、常に綠色である所からいふのだとも、眞幸に裂いて鬘とした所から付けたのだともいふ。古今集、神遊の歌に、「深山には霞降るらし外山なる正木の葛色づきにけり。」などあり、神樂をするには、眞柄の葛で頭を結ぶこゝがあつたといふから、何れも後説が正しいであらう。

◎懸けさゞめ。つなぎさめる。綱で舟をつなぎさめるのである。

◎浮橋。構造物を水面に浮べて交通の用に供へる橋の總稱で、木材で筏を組み、

床板を張り、水面に浮べたもの、又は船を並べ繋いで、其上に桁を渡し、板を張つたもの等がある。後者の場合は特に之を船橋といふ。

◎いさ危けれど。渡るのに甚だ危険であるけれど。

◎堤の方。「堤」は、土を高く築いて作つた、土手のこと。此川は一方に土手があつて水が深く、一方は河原になつて自然と陸につゞいてゐたものであらうか。

◎かたふちの。歌意、片淵の如き深い考はあるけれども、人目を隠す爲に、さぞ遮られる事であらう。「かたふち」は、片方の深くなつてゐる所。「の」は、「の如き」の意。「人目づつみに」は、人目を慎しむ事の爲に。「つゝみ」は、かくす、慎しむなどいふ意で、「かたふち」の縁から堤の意を兼ねて、かく用ゐたもの。「さぞ」は、さやうに、さだめて、美濃の家苞折そへに、「さぞはし」がぞにて、かくぞと言はんが如し、此詞近き世にはたゞ他のうへを推量ることのみ言へども、昔はかやうにつかひたる例多し。」とある、爰は推量の意である。「せかる」は、「かたぶち」「つゝみ」の縁語に用ゐたもの、寒きとめられる、流を支へられる意。爰は思ふ事のすらくと運ばぬのをいふ。此歌は、阿佛尼自身當時の述懐で、人目の多い此世に對しての憂悶を、たま／＼片淵を縁に讀

んだもの、「さぞ」といふ副詞が、他人の上を推量する語である所から、直接には片瀬の上を讀んだものであるとするのは面白くない。

◎假の世の。歌意、憂きわが身を漂はしいものに零落させてから、今この浮舟を繋ぎさめて浮橋にしてある上を渡つて行くのを、現世を過ぎて行くべき道に似てゐると思つて見るのも、さりさめのないことであるよ。「假の世」は、現世のこゝ。往來」は、橋の縁から斯く言うたもので、行き過ぐべき道といふ意。「はかなし」は、「はかなくし」の反對で、脆く假初なこと、しかさしないこと。さりさめもないこと、「うき舟」は、水上に浮ぶ舟、「うき舟」に、憂きを言ひかけたもの。「うき橋」に漂はしい意を言ひかけて、阿佛尼自身の漂はしい境遇を述べたもの。

◎思ひ續けゝる。浮橋片瀬などから連想して讀んだとの意。

◎一の宮。尾張國中島郡一宮町に在る眞清田神社、祭神は大己貴命。「一の宮」マシマキといふは、諸國の由緒ある神社の特名。上古は諸國の由緒ある名神大社は、それとく官幣國幣に預り、國司が神拜と稱して毎年巡拜し奉幣する例であつた。然るに平安朝の末になつて國司の政治の紊亂するに及び、其中で特に由緒のある一・二を擇んで奉幣することとなり、従つて一ノ宮・二ノ宮・三ノ宮・四ノ宮

【通釋】
二十日、尾張國下戸さひ

等の特種の名稱を生ずるに至つた。而して此一ノ宮は多くは延喜式に載せてある大社であるが、例へば常尾張國の如きは熱田神社を措いて眞清田神社を採擇してあるが如く、式外の神社を充てたものもある。

◎過ぐさて。「過ぐさて讀める歌」の意。

◎一の宮。歌意、一の宮は其神威の有難いのみでなく、その名までが懐かしく感じる。「一」といふからには、唯一無二の佛の教をお守りになるのであらう。「さへ」は、或者の上に更に他のもの、添ひ加はる意の助詞。故に「名さへなつかし。」とあるからには、其他に神威の赫々たるのが懐かしいといふ意を含んでゐる。「二つなく三つなき」とは、「無二亦無三」の意。其本來の意は、成佛の道は唯一にして、二道三道なきをいふ。法華經方便品「十方佛土中、唯有二一乘法、無二亦無三、除佛方便說。」とある。然し之は偈の文の語で、其本文は、「如来但以二佛乘法故、爲三衆生、說レ法無レ有二餘乘若二若三。」とある。

七 下戸の驛より

二十日、尾張の國下戸おろとといふ驛をゆく。よきぬ道なれば、熱田

ふ驛を過ぎてゆく。熱田神社のある所は否應なく通らねばならぬ道であるから、熱田神社へ参詣して、硯をさり出して書きつけて、奉納する歌。

祈るぞよ我が思ふこそ
鳴海潟、かたひく潮も
神のまに〜。

鳴海潟和歌の浦風へだ
てずば、同じ心に神も
受くらむ。

満つ潮のさしてぞ來つ
る鳴海潟、神やあはれ
さみるめたづれて。

雨風も神の心にまかす
らむ。我が行くさきの
障あらずな。

鳴海潟を通るに、引き潮
の時であるから、何の故

の宮へまわりて、硯をさり出で書きつけて奉る歌。

祈るぞよわが思ふことなるみ潟

かたひく汐も神のまに〜。

なるみ潟和歌の浦風へだてずば

同じころに神もうくらむ。

みつ汐のさしてぞきつる鳴海潟

神やあはれさみるめ尋ねて。

雨風も神のころにまかすらむ

わがゆくさきの障あらずな。

鳴海の潟をすぐるに、汐干のほごなれば、さはりなく干潟をゆく。をりしも、濱千鳥いと多くさきだちて行くも、しるべ顔なる心地して、

障もなく干潟の所を歩いて行く。時丁度、濱千鳥が甚だ澤山行く先に立つて飛びゆくのも、私の道案内であるといつた様子に思はれて、讀んだ歌。

濱千鳥鳴きてぞさそふ世の中に、あこめむさは思はざりしを。

嘴と足との赤い都鳥さいふ鳥は、隅田川の邊に居ると聞いてゐるけれど、此浦にもあつた。かくて讀んだ歌、

こゝ間はむ嘴と足とはあかざりし、わが住むかたの都鳥かこ。

二村山を越してから行くに、山の遠い廣々した野原で、その原の中で日も

濱千鳥なきてぞさそふ世の中に

跡とめむさは思はざりしを。

隅田川のわたりにこそありと聞きしかど、都鳥といふ鳥の、嘴と脚と赤きは、この浦にもありたり。

言とはむ嘴と脚とはあかざりし

わが住むかたの都鳥かこ。

二村山を越えてゆくに、山も野もいと遠くて、日も暮れはてぬ。

はるくと二村山をゆきすぎて

なほ末たざる野邊の夕闇。

八橋やっはしにやいまらむといふ。暗きに橋も見えずなりぬ。

さゝがにのくもであやうき八橋を

暮れて終うた。そこで讀んだ歌。

はるく、二村山を行き過ぎて、なほ末たざる野邊の夕闇。

八橋に宿らうと子供の者が言ふ。暗いので橋も見えなくなつた。そこで讀んだ歌。

さゝがにの蜘蛛手危き八橋を、夕ぐれかけて渡りぬるかな。

夕暮かけて渡りぬるかな。

- ◎下戸。尾張國中島郡下津村のこと。
- ◎よきぬ道。避けられない道で、通り道の意。
- ◎熱田の宮。尾張國名古屋市南區熱田にある神社で、草薙の寶劍を神體とする。
- ◎祈るぞよ。歌意、鳴海潟に干潟を作つて引き退く潮も、神様の御意のまゝである、斯の如き自由の神力をお持ちになる神様であるから、私の心に思ふ事も成就するやうに、私に味方して下さるやうに祈りますよ。「わが思ふこと」は、訴訟に勝つことをいふ。「なるみ潟」の「なる」に、「成る」の意を言ひかけてある。「なるみ潟」は、現在は陸地となつて昔日の影を認めないが、昔尾張國愛知郡の西方にあつた江灣で、雪月の濱ともいふ。今の笠寺・星崎二村の南に當り、鳴海町が之に瀕してゐた。故に東海道を往來する者は、濱傳ひに宮から鳴海に出て、汐の満ちてゐる時は、左の方鳴海上野といふを行つた。「潟」とは、海中の砂の水の上に高くもりあがつてゐる所。「かたひく」は、潟引く意に方引く意を言ひかけたので、潟をあらはして引き退く意と味方となる意とを含んでゐる。「神のまに／＼」は、神の御心の思ふ通りであるこの意。
- ◎なるみ潟。歌意、鳴海潟に鎮まります神様は、和歌の道を疎遠になさらない

ならば、歌道奥隆の爲の私の御願をば、私と同じ心で御受け下さるのであらう。「和歌の清風」は、和歌の意を和歌浦の地名に言かけ、歌道の意に言うたもの。「へだて」は、間をおくこと、疎々しくもてなすこと。「同じことろ」は、歌道の爲を思ふ阿佛尼と同じ心といふ意。

◎みつ汐の。歌意、潮の満ちて来るが如く、自分も鳴海湯をさして来た事だ。此處に鎮座します神も、私を可哀相だと思つて御覧になるかどうか、その見る眼を尋ねて。「の」はの如く、「さして」は、潮の満ちて来る意、指しての意との兩意を兼ねたもの。「みるめ」は、海松和布の意と見る眼の意との兩方に懸けた言葉、且「みる」は、「あはれを見る」の意と「みるめ」の意に用ゐてある。

◎雨風も。歌意、雨を降らし風を吹かすのも、皆神様の御心通りになるのであらう、然らばどうぞ私の行く先に風雨の故障のないやうに御守り下さい。「障あらずな」は、「故障をあらせるな」の意、「す」は使役の助動詞。「な」は禁止の助詞。

◎汐干。潮の干てゐること。

◎干潟。の干てゐる所。

◎をりしも。時其時。其時丁度。「し」は強める意の助詞。「も」は感動詞。

◎濱千鳥。濱邊の千鳥、或は單に千鳥といふに同じい。「千鳥」は、海邊に群れ飛ぶ水鳥、鴨に似て背と翅とは黒く、腹は白く、又尾は黒くて、燕のやうな岐がある。

◎さきだちて行く。阿佛尼の行く先に立つて飛び行くのをいふ。

◎しるべ顔。道案内であるといつた様子。「しるべ顔なる心地して」は、千鳥が私の道案内であるといつた様子であるやうに思はれて。此句の次に、「讀める歌」といふ句を略してある。

◎濱千鳥。歌意、濱千鳥が鳴いて自分を誘い行く事である。自分は此世の中に足跡を残さうとは思はなかつたのに、「跡さめむ」は、跡を残す意、「跡」は濱千鳥の縁語。然るに此語を「生きながらへる」意に解してゐる註があるが、自分世の中に生きながらへて居らうなど、は思はなかつたのを、此處に來て見ると濱千鳥が鳴いて誘うて行くでは意味が通らない。矢張爰は、足跡を残す、旅行の跡を残すなどいふ意。

◎隅田川。現今東京の東北部を流れてゐる川。

◎わたり。あたりと同じい。「わ」と「あ」とは通語。「あれ」を「われ」などい

ふさ同じい。

◎ありき聞きしかど。此句は伊勢物語の記事からして書いたもの、同書に、「なほ行きくつて、武藏の國さ下總の國さの中に、いさ大なる川あり。それを隅田川さいふ、その河のほさりに群れ居て思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかなさわびあへるに、渡守はや船に乗れ、日も暮れなんさいふに、乗りて渡らんとするに、皆人ものさびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず、さる折しも、白き鳥の嘴さ足さ赤き嶋の大きなる、木の上に遊びつゝ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば。皆人知らず。渡守に問ひければ、これなん都鳥さいふを聞きて、『名にし負はゞいざこまはむ都鳥、我思ふ人はありやなしや。』さよめりければ、船こそりて泣きけり。」とある。

◎都鳥さいふ云々。「嘴さ脚さ赤き都鳥さいふ鳥は」さあるに同じい。即ち。上に置くべき形容詞を被形容語の下に置いて、二語の間を「の」さいふ助詞でつないだもの。「白き鳥は」さいふを「鳥の白きは」さいふに同じい。「都鳥は、みやこしぎささいふ、海濱又は河邊に棲み、嘴は長くて紅色をなし、脚は長くて淡肉色である。但し日本百科大辭典には、「東京にて隅田川に浮べる一種の鷗をみやこざりと呼ぶことあるも誤なり。」とある。さて爰の文は例置法を用

ぬてゐるので、「都鳥さいふ……赤きは、隅田川の……聞きしかど、此の浦にもありたり。」とあるのなかく倒置して書いたもの。

◎この浦にもありたり。この海邊にもあつた。此句の次に、「かくて讀める歌」さいふ句を省略してある。

◎言さばむ。歌意、あの鳥に尋れて見よう、嘴と脚との赤い鳥は、何時まで住んで居ても満足と思はないで自分の住んでゐた方の都さいふ名を持つてゐる都鳥であるかどうかと。「言さふ」は、本來語らうさいふ意、尋れるの意に用ゐるは後世のこと。「あかざりし」は、飽かざりして、十分と思はなかつた意、その「あか」に「赤」の意を言ひかけてある。「あかざりしわがすむかた」は、わが飽かす住みしかたさいふに同じい。

◎二村山。尾張國愛知郡なる香掛の後の方にある山である。夫木集、「三河なる二村山を別れては此世もわれもあらじとぞ思ふ、」

◎山も野もいと遠くて。野原が甚だ廣くて山の大層遠いのないふ。

◎はるんく。歌意、二村山を遠く越えて来て。野邊の夕闇の中にまだ行く先を遠く尋れ行くことである。「夕闇」は、夕方月の無い頃の闇、月の十五日以後の夕方。萬葉集卷四、「夕闇は道たづ／＼し月待ちていませわがせ、其間にも

見む。「源氏物語空蟬卷、「夕闇の道たゞくしげなるまぎれに。」

◎八橋。三河國碧海郡にある。倭訓栞、「昔、八橋のかゝりし川は今の遇妻川なりとぞ。更科日記に、「八橋は名のみにして、橋のかたもなし。」と見ゆ。「閑田耕筆、「鳴海驛山父といふ老人の話に、今八橋といふは實の古跡にあらず、今の所より三里計東に舉母コモモといふ所あり。其の田の路に小橋數多あり。此の所なり。」大日本地名辭書、「今知立町の東に牛田・八橋の二村あり、今合せて牛橋と改む。八橋と駒場村との間、遇妻川の邊に昔橋ありしと傳へ、土人は駒場の一堆丘の側なる芝生をさして、古の杜若の茂りし跡と説く。」など、ある。此地は伊勢物語に、「三河の國八橋といふ所に到りぬ。其處をなん八橋といひけるは、水ゆく川のくもでなれば橋を八つわたせるによりてなん八橋といひける。」とあるのから、以來多くの記行文中に書き止められ、歌にも讀み入れられるやうになつた。参考の爲、この文の解釋を照會しよう。伊勢物語古意、「抑田舎に二水ニミをせくは何の爲ぞ、たゞ田に引かん料のみ、さて其水を引くには、川の左右に多くの溝を設けて、方々へまかすめり。然ばこゝは其の河水をせきとめたゞへおきて左右へ四つ宛八つの溝をなして引くなり。其状態の手の左右に四つ宛あるが如く流るゝ故にくもでなればと言へり。さて其田

面の川の左右の堤の上或はほそりなごにも里の通ふ路あるものなり。其左右の路を切て横に八つの溝あれば橋も八つわたして通ふべし。今も田舎の田面に橋を四つばかり間近く渡したる溝多し。こゝには八つまで有りて世に珍らしければ自ら所の名ともなれるなりけり。」伊勢物語新釋。「之は大なる澤にて、其水左右なる數々の小川に流れ分れたれば、田作る人の通はん爲に木を橋にかけたるが其わたりに八つありける故に八橋と所の名に言ひなしたるなり……蜘蛛手とは誓へていへる詞なれば、まさしく蜘蛛の手には似ずやありけん。……たゞ澤を中にて其水の流に出る小川の左にも右にも數多ありしにて數は定め難し。右も左も數の等しきにもあらじ。云々。」

◎さゞまらむさいふ。八橋に宿らうと供の者の言うたのであらう。

◎暗きに。暗いので。暗い爲に。

◎さゝがにの。歌意 橋のくもでの險呑な八橋を、夕暮になつて渡つた事であるよ。「さゝがに」は蜘蛛の枕詞。「さゝがに」は蜘蛛の別名である所からかく冠むらせたので、蜘蛛の有様は蟹に似て、篠原に棲むが故に、「さゝがに」といふ。「さゝがね」ともいうてゐるが、之は古は蟹をカニか、れともいうたのであらう。「くもで」は蜘蛛手で、蜘蛛の手の如く左右に分れ出てゐる意、また組手の意で、橋

【通釋】
二十一日、八橋を出かけて行くに、空が大層よく晴れてゐる。山の遠い広い原の中を踏みわけて行く。晝頃になつて、紅葉の大層澤山ある山に向つて行く。その紅葉の風に

の柱に桁など支持せしめる爲に、すぢがへてわたしてある木をいふ。さて伊勢物語にいふ「くもで」は、河の水の蜘蛛の手の如く左右に分かれてゐるのを形容したのであるが、爰にいふ「くもで」は、橋の「くもで」をさしていふのである。然るにこゝを「蜘蛛の手の如くに流れる水の上に危くかゝつた八橋」といふやうに解くのは、伊勢物語の文に囚はれた謬見である。「夕暮かけて」は、夕暮に及んでの意、「かく」は橋の縁語。

八 八橋より

二十一日、八橋を出でてゆくに、いとよく晴れたり。山遠き原野をわけゆく。晝つ方になりて、紅葉いと多き山に向ひてゆく。風につれなきところどころ、朽葉に染めかへてけり。常盤木ごもゝたちまじりて、青地の錦を見る心地す。人に問へば宮地山といふ。

散らずにゐる所々は、朽
葉色に染め更へて、終つ
て。常磐木なども其間に
交つてゐて、恰も青地の
錦を見るやうな心持がす
る。その山を人に尋れる
と、宮地山であると答へ
る。そこで讀んだ歌。

しぐれけりそむる千入
のはてはまた、紅葉の
錦色かはるまで。

此山までは以前父に伴は
れて下つた折見た心持が
するに、其上時節までが
以前と同じであるから、
讀んだ歌。

待ちけりな昔に越えし
宮地山、同じ時雨のめ
ぐりあふ世を。

山の麓にある野中の竹の

しぐれけりそむる千入しほのはてはまた
紅葉のにしき色かへるまで。

この山までは、昔見し心地するに、頃さへかはらねば、
待ちけりな昔もこえし宮地山

同じ時雨のめぐりあふ世を。

山の裾野に竹のある處に、茅屋の一つ見ゆる、いかにして何の
たよりに、かくて住むらむと見ゆ。

主やたれ山の裾野にやどしめて

あたりさびしき竹の一むら。

日は入りはてゝ、なほ物のあやめもわかぬほごに、
いふ處にとゞまりぬ。

二十二日の曉、夜ふかく、有明の影に出でてゆく。いつよりも

渡津わたうととかや

ある所に、賞葦の家の一軒見えるのが、何をたよりにして、どうしてこのやうに淋しくて住むのであらうかと思はれる。かくて讀んだ歌。

主や誰山の裾野に宿しめて、あたり淋しき竹の一むら。

日は西に沈んで終つて、いよ／＼物の區別のつかぬ時分に、渡津さかいふ所に宿つた。二十二日の朝未明に有明月の光を頼りに出かけて行く。平素よりも何さなう悲しく感じる。

住みわびて月の都を出でしかど、うき身はなれぬ有明のかけ。

もの悲し。

すみわびて月の都を出でしかど

うき身はなれぬ有明の影。

とぞ思ひつゞくる。供なる人、有明の月さへ笠きたりといふを聞きて、

族人のおなじ道にやいでつらむ

笠うちきたる有明の月。

^{たかし}高師の山も越えつ。海見ゆるほど、いとおもしろし。浦風ありて、松の響すごとく、浪いと高し。

わがためや浪も高師の濱ならむ

袖の漣の波はやすまで。

いと白き洲崎に、黒き鳥のむれゐたるは、鶺鴒といふ鳥なりけ

さいふやうに思ひつゞけた。供の人が「有明の月まで自分等と同じく笠を着てゐる。」さいふのを聞いて讀んだ歌。

旅人の同じ道にや出でつらむ、笠打ち着たる有明の月。

高師の山も越えた。海の見えるあたりが甚だ趣が深くて、浦邊を吹く風が烈しく、松風の音が甚だ淋しく、浪が大層高く立つ。そこで讀んだ歌。

わが爲や涙も高師の濱ならむ、袖の漣の涙はやすまで、

非常に白い洲崎に黒い鳥の群つてゐたのは、鷗さいふ鳥であるよ。かくて

り。

白はまに墨のいろなる島つ鳥

筆も及ばず繪にかきてまし。

濱名の橋より見たせば、鷗といふ鳥、いと多く飛びちがひて、水の底へも入る。岩の上にもゐたり。

かもめゐる洲崎の岩もよそならず

波のかけこす袖に見なれて。

今宵は引馬ひくまの宿といふ所にどゞまる。この處の大方の名をば、濱松とぞいひし。親しといひしばかりの人々なども住む處なり。住みこし人の面影も、さまざま思ひ出られて、又めぐりあひて見つる命のほごも、かへすぐあはれなり。

濱松のかはらぬ影をたづねきて

讀んだ歌。

白濱に墨の色なる鳥つ
鳥、筆も及ばず繪にか
きてまし。

濱名の橋の上から眺める
さ、鷗さいふ鳥が非常に
澤山飛び交つて、或は水
の中にも潜り込むし、岩の
上にも居た。そこで讀
んだ歌。

かもめゐる洲嶺の岩も
よそならず、涙のかけ
こす袖に見なれて。

今晚は引馬の宿さいふ所
にさまる。此土地の總名
をば濱松さ云うた。單に
親しいさ云ふだけの人々
なども住んでゐる處であ
る。其昔から此處に住ん
で來た人の姿が様々に想

みし人なみに昔をぞ問ふ。

その世に見し人の子うまごなど呼び出でて、あひしらふ。

◎山遠き原野。山など近くにはない原野。

◎わけゆく。草などの間を分けて進み行くこと。

◎風につれなきさころん。風に對して平氣で散らすにゐる所々。

◎朽葉。朽葉の如き色、淡紅に黄色の交つた色。

◎青地の錦。地色の青い錦。「錦」さは、織物の一種で、五色の糸で模様を織り

出したもの。地質が厚い。丹重ニシキの義か。倭訓栞には丹白黄の義であるさいふ。

さて常磐木の中に紅葉の交つてゐるのを、青地の錦に見立てたのである。

◎宮地山。三河國寶飯郡に在る。

◎しぐれけり。歌意、昨雨の降つた事だ、その時雨が幾度も木葉を染める最
後はまた、紅葉の錦の如き色が、朽葉色に變色するまでに染めることだ。「千
入」の「しほ」は、物を染める液汁で、其染液の中に一度浸すを一入さいひ、
幾度も浸して染めるを千入さいふ。「かへる」は、一本に「かへる」こあ
る。「かへる」は色のわるくなること、色の變る意、新古今集「小しほ山神の

ひ出されて、再びかうして自分が廻り逢うて見る事の出来た、わが命の長命の程度も、重れく身に泌みて感じる。かくて讀んだ歌。

濱松のかはらぬ影を尋ね來て、見し人なみに昔をぞ問ふ。

その昔に交際した人の子や孫などを呼び出して、其等の人たちを相手に話などする。

しるしを松の葉に契りし色はかへるものかは。」とあるも、色、變ること。

◎この山。宮地山、

◎昔見し心地。昔見た事のある心持。即ちこの宮地山までは昔來た事のある心持のするといふ意で、續古今集、羈旅の部に、「思ふこと侍るころ、父平度繁朝臣遠江の國にまかれりけるに、心ならず伴ひて、鳴海の浦を過ぐさて讀み侍りける、『さて我いかに鳴海の浦なれば思ふ方には遠ざかるらむ。』」とある、其時の旅を思ひ出して書いたものであらう。

◎頃さへかはらば。以前交に伴はれて來た事のある其上に、時節までが以前と同じで變らないから、此句の次に、「讀み侍りける歌。」といふ句を省略してある。

◎待ちけりな。歌意、以前にも越えた事のあつた宮地山は、以前と同じく時雨の降り濺ぐ時節に再び私さいであふ時を待つてゐたわい。「な」は感動詞、「同じ時雨の」さは、以前越えた折にも時雨が降つてゐたので、爰に「同じ」と云うたもの。「めぐりあふ」は、一度別れた者が、めぐり巡つて再會すること。

「世」は、時、折。

◎裾野。山の麓の野。

○茅屋。茅で葺いた家。

○見ゆる。見えるのが。「見ゆる」は連體形で、此形で句の切れてゐる場合は、其次に「のが」といふ語を補うて解く。

○いかにして。「住むらむ」にかゝる副詞。

○何のたよりに。何をよるべにして。何をたよりに頼んで。「たよりに」は、よるべ、よすが、ついで、音づれ。

○見ゆ。思はれるといふ意。此句の次に、「かくて讀める歌。」といふ句を省いてある。

○主やたれ。歌意、山の楮野に家を構へて、四邊の寂しい、竹の一群ある中に世を送つてゐる、その主人は何人であるか、知り度りものだ、さても床しい人よ。「やどしめて」は、宿を定めて、家を作つてなごいふ意。

○なほ物のあやめもわかぬほどに。日が沈んで終うて、やはり物の差別もはつきりしない時分に。「なほ」は、やはりの意。玉簪に「なほに三ツの差別あり。一にはまだの意、二には俗語やはりといふ意、三にはいよくの意也。此うちはまださやはりは相通する所も多し、又いよくの意に用る事は後世の事にて古き歌には見えず。古歌にまだの意やはりの意によめるが、ふさ聞きて

はいよゝゝの意と思はるゝが多き故に中頃より紛れて、それらはいよゝゝの意と見るから自歌にもその心によむ事出来たる也云々。「あやめ」の「あや」は物の色の明かに分かれるをいふ、「め」は其分れた際をいふ、随つて「あやめ」は差別の意。「わかぬ」は、判然しないこと。

◎渡津。三河國寶飯郡。

◎曉。明時^{アカトキ}で、夜の明るくなる時。

◎有明の影に。有明月の光に依つて。「影」は光のこと。

◎いつよりも。今まで幾朝もかうして宿を出發した、その何時もの朝よりも。

◎すみわびで。歌意、住むのがつらく感じて、月の都を出發したけれど、ついでに多い我身を離れず、いつもつき纏うてゐて、悲しい情を誘ふ有明の月影よ。「わび」は、志を得ない折に發する「ア」^アといふ嘆聲を、波行に活かしたもので、志を得ない意、不快な意などに用ゐる。轉じては、つらい、難儀だなどいふ意にも用ゐる。「月の都」は、月宮殿のこと、月の中の宮殿をいふ、また都を讚美して、月の都といふ。爰は京都をさしてゐるは勿論であるが、特に「月の都」というたのは、「月の都を出たにも拘らず猶月が我身につき纏うて來る事だ。」といふ駄洒落氣分と、今一つには本書のはじめに、「いざよふ月に

誘はれて云々。」とあるのに縁を持たせて、「月に照らされてゐる都」といふ意
とを含めたものであらう。「うき身」は、つらき身。

◎笠きたり。月がその周圍に輪の如き曇をつけてゐるのをいふ。「かさ」とは、
卷層雲が太陽又は月の面を被ふ時、其周圍に生ずる光輪をいふので、太陽のの
を日暈、月のを月暈といふ。「有明の月さへ笠きたり」と言つたのは、自分
達の笠を被つてゐるのに對して、特に「さへ」と言つたもの。

◎聞きて。聞いて讀んだ歌。

◎旅人の。歌意、旅人と同じ旅の道に出かけたのであらうか、笠を被つてゐる有
明の月は。

◎高師の山。遠江國濱名郡白須賀町の北方に聳える山。三河遠江の境をなすが故
に、諸書に兩國にかけ、又は三河國に入れてもある。山は嶮しくはないが、海
邊の眺望がよいので、古來東海道の名所として和歌に詠ぜられ、紀行文の中に
せられてある。

◎海見ゆるほど。海の見えるあたり。

◎すこく。淋しさの甚しいこと、又は神々しさの恐しいまでに感じるのをいふ。

◎浪いと高し。浪が甚だ高く立つ、かくて讀める歌。

◎わがためや。歌意、常に涙の乾く間もない私の爲に、高師の濱は立つ涙の高いのであらうか、今も私の袖には涙が絶えずにふりかゝつてゐる。「高師の濱」に、涙も高しの意を言ひかけたもの。「袖の溼」は、筑前國博多の中央を東西に通じた入海で、唐船の出入した所、今單に袖といふことを其地名に言ひかけて修飾したもの。「波はやすまで」は、涙は絶えないで、即ち涙のこさをば溼の縁で波さいうたのである。

◎洲崎、砂地の海中に突出した所。

◎鶉。黒色に富んだ大形の鳥で、頸が長く嘴が細い。

◎鳥なりけり。鳥であるわい、かくて讀んだ歌。

◎白はまに。歌意、砂の白い濱に墨色の鶉の群れてゐる有様は、自分の筆に書き現はし得るものならば、繪に書きたいものである。「島つ鳥」は、萬葉集卷十七。「しまつさり鶉飼がさもは。」などあるが如く、本來鶉にかけて言ふ枕詞で、後に轉じて直に鶉のこゝに用ゐる、鶉の別名になつたもの。即ち鶉は専ら海島に棲む所から「島つ鳥鶉」と言ひかけたもので、「庭つ鳥鶉」^{カケ}「野つ鳥鶉」^{キギス}「奥つ鳥鶉」など言つたのに同じい。「筆も及ばず」は、筆に書き現はし得るならばの意で、阿佛尼自身の筆をいふ。「まし」は希望の意の助動詞。

◎濱名の橋。昔濱名湖と海との間を通じた濱名川に架けられた橋、三代實録、「元慶八年九月、遠江國濱名橋長五十六丈、廣二丈三尺、高一丈六尺。」

◎鷗。信天翁と共に長翼類の目に屬する鳥で、概ね海面を飛翔する水禽であるが、湖水・大河にも見るこゝがある。嘴の末端は鉤狀に屈曲し、羽色は種類と幼老とによつて異なる。

◎岩の上にもゐたり。岩の上にもゐた、かくて讀んだ歌。

◎かもめゐる。歌意、鷗の居る洲崎の岩も餘所事でなく、我身の上のやうに懐しく感じる、あの岩の上を海の波が濺ぎ越えるが如く、常に涙の濺ぎかゝる自分の袖に見馴れてゐるから。「よそならず」は、餘所事でない、懐しく感じるなどの意。「波のかけこす」は、波のそゞぎ越える意で、涙の濺ぎかゝるのをいふ。「見なれて」に「水馴れて」の意を言ひかけてあるかの如く解くのは讀み過ぎである。

◎引馬。遠江國濱名郡引馬村引馬坂の地。

◎大方の名。總名。

◎親しさいひしばかりの人々。親しいと言うただけの人々で、別段に深く親しくはない人々。即ち親しいさいふ名だけの人々。是は以前人に伴はれて來た

折に交つた人々をいふのであらう。

◎住みこし人の面影。此地に昔から住んで来た人の姿かたち。即ち定住してゐる人の様子。

◎めぐりあひて見つる命のほごも。廻り逢うて再び此土地や土着の人々を見た我命の程度も。「見つる」は、廣く其土地又は土地の人々を見た意。

◎かへすく。重れく。幾度も。

◎濱松の。歌意 自分は濱松の昔と變らぬ面影を尋れて来て。昔交際した人が居らぬ爲に、岸に打寄せる波に、昔を尋れる事である。「かげ」は、形影、なごいふ影で俗にいふ面影のこと。「なみに」は、無サニの意、萬葉集、「爲世乎無見」などあるに同じい。即ち「み」は形容詞の語根に添うて、が故ニ、カ爲ニの意をなす接尾語。「なみ」に「浪」を言ひかけてある。

◎その世。以前自分が此地に、逗留してゐた時代。

◎うまご。孫のこと。

◎あひしらふ。あしらう。相手さなること。爰では、相手さなつて話などする意。

【通釋】

二十三日天龍の渡場の舟に乘るにつけ、昔西行法師が舟の中で武士に辱められた折の事が想ひ出されて、頼り少なく心淋しい。其處の渡場は組み合せた舟がたつた一つだけで、大勢の人々の往來の爲に、棹をばうて往復するので休む暇もない。かくて讀んだ歌。

水の泡のうき世に渡る
程を見よ、早瀬の小舟
棹もやすめず。

今晚は遠江國の見附さいふ、昔國衛のあつた所に

九 天龍の渡より

二十三日、天龍の渡といふ舟に乘るに、西行が昔も思ひ出でられていと心細し。組み合せたる舟、唯一つにて、多くの人のゆきゝに、さし歸るひまもなし。

水の泡のうき世に渡る程を見よ

早瀬の小舟さもやすめず。

今宵はとほつあふみ見附みつけの國府こふといふ處にとどまる。里あれて物おそろし。傍に水の井あり。

誰か來て見附の里と聞くからに

いとゞ旅寢りよの空おそろしき。

二十四日、晝になりて、佐夜さやの中山なかつまこゆ。事任ことまとかやいふ社

宿る。其土地が淋しくなつて何さなう氣味わるく感じる。傍に井戸がある。そこで讀んだ歌。

たれか来て見つけの里
さ聞くからに、いさゞ
旅寢の空おそろしき。

二十四日、晝の時刻になつてから、佐夜の中山を越える。事任さかいふ神社のある邊が、紅葉が大層盛りで趣がある。其處は山の蔭で、嵐も吹いて來ないのであるらしい。山に深く道入り込むにつれて、遠近の峰のつゞいてゐる様子が、他所の山と違つて心淋しく身に泌みて感じる。麓の里、即ち菊川といふ處にさまる。

のほご、紅葉いとさかりにおもしろし。山陰にて、嵐も及ばぬなめり。深く入るまゝに、をちこちの峯つゞき、こと山に似ず、心細くあはれなり。麓の里に、菊川といふ處にとゞまる。

こえくらす麓の里のゆふやみに

松風おくる佐夜の中山。

曉起きて見れば、月も出でにけり。

雲かゝる佐夜の中山こえぬとは

みやこにつげよ有明の月。

河音いとすごし。

わたらむと思ひやかけし東路に

ありとばかりは菊川の水。

て讀んだ歌。

こえくらす麓の里の夕
やみに、松風おくる佐
夜の中山。

曉に起き出て見るこ、有
明の月も出てゐた。それ
を見て讀んだ歌。

雲かゝる佐夜の中山越
えぬさは、都につげよ
有明の月。

河の瀬の音がひびく淋し
い。それによつて讀んだ
歌。

わたらむと思ひやかかけ
し東路に、ありさばか
りはきく川の水。

◎天龍の渡。天龍川は信濃國諏訪湖に源を發し、遠江國にて海に注ぐ大河。「渡」は、ワタリともワタシともいふ。舟にて人を渡す所。さて爰の文は、「天龍の渡さいふ舟に云々」を續くので、天龍の渡さいふ渡場の舟に乗るにつけ。」といふ意。

◎西行。鎌倉時代の歌人。俗名は佐藤義清、鳥羽上皇に仕へて北面の武士となり院の殊寵を受けた。後、保延六年十月嵯峨に行いて僧となり、法名を圓位といひ、更に西行と改めた。爾來、一箇の笠一條の杖、瓢々として山水の間に逍遙し、浪々として諸國に歴遊し、風月に嘯いて、歌を樂しんだ。さて「西行の昔」は、西行が天龍の渡で武士に侮辱せられた事をいふので、西行物語に、「遠江國天の中川（天龍川）の渡さいふ所にて、武士の乗りたりける船に便乘をしけるに、人多く乗りて船あやふくやありけん、「あの法師おりよ、おりよと言ひげれども、渡の習と思ひて聞き入れぬ様してありけるに。情なく鞭もて西行を打ちけり。血なご頭より出で、世にあへなく見えげれども、西行少しも怨みたるけしきなくして、手を合せ船より下りにけり。」とある。

◎いさ心細し。阿佛尼も西行のやうに辱められはせぬかこ心配して、甚だ頼りなく心淋しいさの意。

◎組み合せたる舟。筏舟の類であらう。

◎さし歸るひまもなし。此句は「さし歸るにひまもなし」さいふ意で、大勢の人の往來の爲に、間斷なく往き來するるので、少しも休む暇のない程に忙しいといふのであらうか。或は、「さし歸る」さいつたのは、乗せて行つて又乗せて歸らねばならぬので、悠々棹を使つてゐる暇もないといふのであらうか。兎も角も本文の文字通りの、往き歸るひまもない程に忙しいでは、此場合意味をなさない。

◎水の泡の。歌意、消えては結び結んでは消える水の泡の如く、浮沈定めない、憂い事の多い此世に生活して行く我々の様子を、あの渡船の様子に比較して見よ、早い流の上に棹さして行く小舟は、棹も休めないで働いてゐるが、我々の生活も全くその通り忙しいものである。「水の泡の」は、水の泡の如く、「うき世」に、浮世と憂世との兩意を言ひかけ、「水泡の如く浮沈定めぬ世」と上を受け、「憂い事の多い此世に生活して行く」さ下につづけたもの。「渡る」は、生活して行くこと、「舟の」縁語に用ゐたもの。「ほご」は様子^{トホアヘツマ}の意、「早瀬」は、早い流、急流。

◎さほつあふみ。「遠つ淡海」の意、現在の濱名湖は往昔は海に通じないで、一大

淡水湖であつた所から、京都に近い淡水の國即ち近江（是は近つ淡水さいふな略したのである）に對して、此地を遠つ淡水、略して「遠つあふみ」更に「さほたふみ」と云うたのである。

◎見附の國府。遠江國盤田郡見附町のこゝ。此地に昔國府があつたので、「見附の國府」と言つたもの。「國府」は、コクフとも、コフとも、或は近世は府中ともいふ。大化改新以來、國司の常住して國務を執つた處。

◎里あれて。土地が荒れて淋しくなる意。「里」は、本來「盛處」の意で、人家の盛に立並んでゐる處さいふのであらう。

◎物おそろし。何さなくおそろしい。「物」は、物ごゝにつけてさいふ意と接頭語である。「何さなく」と譯す。

◎水の井。井戸のこゝ。

◎誰か來て。歌意、誰か來て自分を見張るさいふ名の見附の里であるを聞くが故に、一層旅寐が何さなく怖しく感じる。「見附の里」に、誰か來て自分を見附けると言ひかけたもの。「からに」は、故に、さいふ意の接尾語。「いさご」は、いさごの約。「空おそろしき」は、何さなく怖しいこと。

◎佐夜の中。遠江國の名所。もこ東海道の往還に當り、日坂と金谷との間の

坂嶺である。往昔は日坂から山を登つて菊川におり、それから牧野原初倉驛に出たものであるが、足利氏の中頃から、金谷へ、新道が開けた、爾來東海道をこゝに定められた。然るに近頃は更に新道が出来て、菊川を通過せず金谷へ出るこゝとなつた。「佐夜」は教谷サヤで、「中山」の長山の義であらうか、或は佐野郡の中山といふ義か。「年たけて又越ゆべし」と思ひきや、横ほりふせる佐夜の中山。」といふ西行の歌によつて有名になつたもの。

◎事任。遠江國小笠郡東山口村字入坂にある。八幡宮のこゝ。

◎社のほど。神社のあるあたり。

◎嵐も及ばぬなめり。嵐も其處までは吹いて行かないのであるやうだ。即ち紅葉が散らすに美しい色を見せてゐる所から、其處は嵐も吹かないのであらうと推量したのである。「なめり」は「なるめり」の略。

◎深く入るまゝに。山に深く入るに随つて。

◎をちこちの峯つゞき。遠く近くの峯のつゞいてゐる有様。

◎こゝ山に似ず。餘所の山と違つて。

◎麓の里に菊川といふ處にまゞまる。麓の里、即ち菊川といふ處に泊る、かくて讀んだ歌、「菊川といふ處」といふ句は、「麓の里」を説明してゐるので、即

ち「麓の里にさゞまる」といふ句の間に「菊川といふ處」といふ説明語を挿入したも、意味は「菊川といふ麓の里にさゞまる」とあるに同じい。「菊川」は、佐夜中山の麓、金谷の西、菊川といふ川の西岸にある。

◎こえくらす。歌意。一日中、山を越えてゐて日が暮れた、その山の麓にある里の夕闇のなかに松風を吹き送つて来る佐夜の中山であるよ、「こえくらす」は、一日中山を越えて日の暮れること、「ふりくらす」なごいふに同じい。「松風おくる」は、松風を吹き送る意で、中山のなかで聞いたやうな松風の響が、其處でも矢張颯々々聞えてゐるのをいふ。

◎月も出でにけり。有明の月も空に出た、かくて讀んだ歌。

◎雲かゝる。歌意、有明月よ、おやへは都も此處も一樣に照してゐる事であるから、その隈なき遍滿平等の御心で、今自分は雲の横たはつてゐる小夜の中山を越えたさ、都に自分の旅路を氣遣つてゐる所の人々に告げて呉れよ、有明の月よ。

◎河音いとすこし。河の瀬の音がひびく淋しい、かくて讀んだ歌。

◎わたらむさ。歌意、自分が現實に其川を渡らうと、前以て思ひかけたか、思ひかけはしない、東國にあるといふことだけは聞いてゐた菊川の流をば。「や」

は反語。「東路」は、東國のこと。「菊川」に「聞く」を言ひかけてある。

一〇 菊川より

二十五日、菊川を出でて、けふは大井川といふ川を渡る。水いとあせて、聞きしにはたがひて煩なし。河原幾里とかや、いとほるかなり。水の出でたらむ面影おしはからる。

思ひ出づる都のことはおほひ川

いく瀬の石の敷もおよばじ。

宇都の山こゆる程にしも、阿闍梨あざりの見知りたる山伏ゆきあひたり。「夢にも人を」なご、昔をわざとまねびたらむ心地して、いとめづらかに、をかしくも、あはれにも、やさしくもおぼゆ。いそぐ道なりといへば、文もあまたはえ書かず、唯やむことな

【通釋】

二十五日、菊川を出發して、今日は大井川といふ川を渡る。其川は水が大層淺くなつて、大變な急流であるを評判に聞いてゐたことは違つて、渡るのに面倒がない。河原が幾里さかあるを云うて、甚だ遠い。洪水の出たらう様子が推量される。かくて讀んだ歌。

思ひ出づる都のことは
大井川、幾瀬の石の敷

も及ばじ。

宇都の山を越える折に丁度、慶融阿闍梨の見覺えてある山伏に行き逢うた。在原業平が東國へ下つた折、此山で修行者に逢うて「駿河なるうつの山邊のうつゝにも夢にも人のあはぬなりけり。」といふ歌を都の人の許にこそづけた、その昔の故事を聽と眞似たらうやうな心持がして、甚だ珍しく、且面白くも、感深くも、優美にも感じる。其山伏は急ぐ道で廻りこしては居られぬと言ふから、都への文も澤山は書き得ない。たと捨て置かれぬ所一箇所にお便りを申上げ

き所一つにぞおとづれ聞ゆる。

わが心うつゝともなし宇津の山

夢にもとほき昔こふとて。

葛かへでしぐれぬひまも宇津の山

涙にそでの色ぞこがるゝ。

今宵は手越てこしといふ處にとゞまる。何がしの僧正とかやの上り給ふとて、いと人しげし。宿借りかねたりつれど、さすがに人のなき宿もありけり。

◎大井川。源を赤石山脈の白峯山に發し、南流し、上流を田代川と稱し、中流より大井川となり、駿河・遠江の境界を劃し、駿河國志太郡島田と遠江國榛原郡金谷との間を過ぎて駿河灣に注ぐ、東海道の大川。此川は霖雨の際は水の氾濫するところが甚しい。川幅が廣く、古來橋を架けることなく、早くから船を以て渡つた。

る。その手紙に添へた歌。
わが心うつゝもなし
宇都の山、夢にも遠き
昔戀ふまで。
葛楓しぐれぬひまも宇
都の山、涙に袖の色ぞ
こがるゝ。
今晚は手越さいふ處にさ
まる。某の僧正さか都
に上りなさるさ云うて。
非常に人が混雜してゐ
る。それが爲に宿をさる
こまが六ヶ数かつたが、
さうは言ふものゝ宿泊人
のない暇な宿もあるわ
い。

◎あせて。水の涸れて川の淺くなるをいふ。後撰集、「立田川秋は水なくあせなむ、飽かぬ紅葉の流れんもなし。」などあるも、淺くなる意、轉じては、色の薄くなることにもいふ。

◎聞きしにはたがひて。評判に聞いてゐたさは川の様子が変わつて。

◎煩なし。面倒がない。

◎河原幾里さかや。河原の幅が幾里さかあるさ云うて。

◎水の出でたらむ面影。大水の出たらう時の様子。

◎おしはかる。自然と推量される。「る」は動作の自然と起つて止められぬ意の助動詞。

◎思ひ出づる。歌意、都の事を色々想ひ出す事は甚だ多い、大井川の澤山の瀬に轉つてゐる石の数も、我心に想起す都の事の数多いのには及ぶまい。「おほる川」に多い、さいふ意を言ひかけてある。「いく瀬」は、澤山の瀬。

◎宇都の山。駿河國安倍郡と志太郡との境界にある山、往古より東海道の官道が通じてゐる、是を宇津谷峠さ云うた。平安朝時代、在原業平の感興した葛細道の遺跡を以て有名である。伊勢物語、「行きくゝて駿河の國にいたりぬ。宇津の山にいたりて、我いらんさする道はいさ暗う細きに、葛かへて葉茂りて

物心細く、すゞろなるめを見ること、思ふに、修行者あひたり。かゝる道にはいかでかおはすると言ふに、見れば見し人なりけり。京にその人のもとにて、文書きてつく。『駿河なるうつの山邊のうつゝにも、夢にも人のあはぬなりけり。』

◎こゆる程にしも。越える時丁度。

◎阿闍梨の見知りたる山伏。摩融阿闍梨の見覚えてゐる山伏。本書の始に、「阿闍梨の君は山伏にて、この人々よりは兄なり。此度の道のしるべに送り奉らんとて、出でたゝるめるを云々。」とあるが如く、阿闍梨は此時母の御供をしてゐたのである。茲の本文は、「山伏のゆきあひたり。」の意が、「山伏にゆきあひたり。」の意が明かでない。「山伏の云々」ならば、伏が向ふから來て出あうた意。「山伏に云々」ならば、自分の方から其山伏に出逢ふ意。

◎夢にも人をなご。在原業平が、「駿河なる宇津の山邊の現にも夢にも人に逢はぬなりけり。」なご讀んだ。爰は、「夢にも人をなご讀める昔を云々」といふやうに續く意味である。さて業平の歌の意は、京で其人と別れてからは、現にも夢にも其人を見ないわいさいふので、最初の二句は現に自分の越えつゝある山路の有様を詞に書いて、「うつゝ」と言はん爲の序にしたもの。前の「宇津

の山」の項参照。

◎昔をわざとまればたらむ心地して。昔の故事をわざと真似たらう心持がして。「まれば」は、そのまゝを寫し真似ること、ありのまゝに語り告げること。

◎めづらか。「愛づらか」で、愛らしい意、轉じて、世間に稀なもののは殊に人に愛される事から、稀なことにいふ。

◎なかく。此語は「なこ」といふ語を活かして、それに「しく」といふ形容辭を添へたもの、意味は、笑はしい事、面白い事、風流な事、めでたき事、心にくき事などに用ゐる。

◎いそぐ道なりといへど。山伏が急ぐ道で緩りましては居られぬと言ふから。

◎文もあまたはえ書かず。都の人への文も澤山は書き得ない。「文も」とあるは、口傳も澤山は頼み得ないといふ意を言外に聞かしてゐる。

◎やむことなき所一つに。便りをせずには濟まされぬ所一箇所に。「やむことなき」は、無_レ止事_一の意で、等閑にしがたい事、捨ておかれぬ事、轉じて、高貴な人の世の常ならず貴い事にもいふ。後撰集、「二三日侍りて、やむことなき事に依りて、まかり立ちければ。」とあるは、捨て置かれぬ事の意、徒然草、「人間の種ならぬぞやむことなき。」とあるは、貴い意。爰は捨て置かれぬ意。

◎おさづれ聞ゆる。お傾りを申上げる。「聞ゆ」は、言ふ、申すなどの意、轉じては他語の下に添へて單に敬語として用ゐる。爰は敬語。此句の次に、「その手紙に書きそへた歌」といふ意の句が省かれてゐる。

◎わが心。歌意、私は今宇津の山を越えてゐるのであるが、私の心は正氣もない、夢にも現にも常に遠い昔の事を戀しく思ふまで。「うつゝもなし」は、正氣のないこと、「うつゝ」は、現々の約、現實の意、即ち眼覺めてゐる時、氣の確かなる時をいふ。「宇津の山」は、上の「うつゝ」を受けて語調をよくする爲さ、今一つには、自分が今宇津の山を越えてゐるこいふ意を表はす爲さに用ゐたもの。「夢にも」は、「夢にも現にも」の意、唯「現にも」といふ言外に聞かせた言ひ方である。「さほき昔」は、亡夫爲家の在世當時から更に溯つて俊成・定家の盛な時代をさすのである。是を遠い都の事などさ解くのは誤謬も甚しい。

◎萬かへで。歌意、宇津の山の萬楓の濃い色に染つてゐるが如く、たさひ時雨の降らぬ時でも、涙が絶間なく流れ落ちるから、其涙の爲に私の袖の色は自然と黒く變ることである。「萬かへで」は、伊勢物語にも、「萬かへで葉繁り云々。」とあるが如く、此宇津の山の名物である所から、且は二者共に美しく紅葉する

ものである所から、袖の色の焦れると言はん爲の對照に出したので、意味は、
 蕙かへでの色濃く染るが如く、さいふ意、然るを「宇津の山の蕙楓に時雨の降
 らぬ時でさへも」など解くのは面白くない。「蕙」は、蔓草。「楓」はかへるで
 さいふ、秋の末に紅に色づく喬木。「こがるる」は、蕙かへでの紅に色づく
 のに對して、態と此語を用ゐたので、色の黒く變るのをいふ。

◎手越。駿河國安倍郡安倍川の西岸に在る。

◎何かしの僧正さかや。某の僧正さか言ふ御方が。「僧正」は、僧官の第一位。

◎上り給ふ。都に上りなさる。

◎いご人しげし。旅舎に甚だ泊る人の多いのを言ふので、僧正の仕奉の人々の宿
 泊する者に、旅宿の混雜してゐるのをいふ。

◎宿借りがれたりつれど、宿をさるゝことが六ヶ敷かつたが。

◎さすが。「しかすがに」の略。しかし。さうは言ふものゝ。

◎人のなき宿。宿泊人の居らぬ宿屋。

一一 蕙科川より

【通釋】

二十六日、藁科川さかい
ふを渡つて、息津の濱に
出る。定家卿の讀まれた、
「ことこへよ思ひおきつ
の濱千鳥、泣くく出で
し跡の月影。」といふ歌な
どが第一に心に浮んで來
る。晝時分に這入り込ん
で休んだ所に、粗末な黄
楊の小枕がある。大層疲
れて苦しいから横になつ
たに、硯も見えるから、
枕許の障子に寝てゐなが
ら次の歌を書きつけた。
なほざりに見るめばか
りなかり枕、むすびお
きつと人に語るな。
日の暮れはじめる頃、清
見が關を通る。岩を打越

二十六日、藁科川とかや渡りて息津おきつの濱にうち出づ。なくなく
出でしあとの月影など、まづ思ひ出でらる。晝たち入りたる處
に、あやしき黄楊つげの小枕あり。いと苦しければ、うちふしたる
に、硯も見ゆれば、枕の障子にふしながら書きつけつ。

なほざりにみるめばかりをかり枕

結びおきつと人に語るな。

くれかゝるほど、清見が關をすぐ。岩こす波の、白き衣きぬをうち
きするやうに見ゆる、いとおかし。

清見瀉としふる岩にことゝはむ

浪のぬれ衣きぬいくかさねきつ。

程なく暮れて、そのわたりの浦近き里にどごまりぬ。浦人のし
わざにや、鄰よりくゆりかゝる煙、いとむづかしきにほひなれ

える浪の泡立つてゐる様
が、恰も岩に白い衣を着
せるやうに見えるのが面
白い。かくて讀んだ歌、

清見潟年ふる岩にこそ
さはむ、浪の濡衣幾か
されきつ。

間もなく日が暮れて、そ
の邊の海に近い里に宿つ
た。浦に住む人のする業
であらうか、隣からくす
ぶつて来る煙が甚だ△サ
クロシイ臭であるから、
「夜宿醒し」と云うた白樂
天の言葉も心に浮んで來
る。夜通し風が大層烈し
くて、浪の騒がしい音が
ひたすら枕許に聞える。
そこで讀んだ歌。

ならばすよ餘所に聞き

ば、「夜の宿醒し」といひける人の詞も、思ひ出でらる。夜もす
がら風いさあれて、浪、たゞ枕の上になちさわぐ。

ならばすよそこに聞きこし清見潟

荒磯なみのかゝるねざめは。

富士の山を見れば、煙もたゞす。昔、父の朝臣にさそはれて、「い
かになるみの浦なれば」などよみし頃、遠つあふみの國までは
見しかば、富士の煙の末も、朝夕たしかに見えしものを「いつ
の年よりか絶えし」と問へば、さだかに答ふる人だになし。

たが方になびきはててか富士のねの

煙のすゑの見えずなるらむ。

古今の序の詞まで思ひ出でられて、

いつの世の麓のちりか富士のねを

來し清見湯、荒磯なみ
のかゝる寢覺は。

富士の山を見るゝ煙もの
ぼらない。昔、自分が父の
度繁朝臣に誘はれて東國
へ下り、「さてもわれいか
になるみの浦なれば、思
ふ方には遠ざかるらむ。」
なごいふ歌を讀んだ頃
は、遠江の國までは來て
見たから、富士の煙の末
も、朝夕確に見えたのを、
何時の年から絶えたのか
と尋れると、はつきりこ
答へる人すらない。そこ
で讀んだ歌。

誰が方に塵きはてゝか
富士の嶺の、煙の末の
見えずなるらむ。

古今集の序文の詞まで思

雪さへたかき山となしけむ。

朽ちはてし長柄の橋をつくらばや

ふじの煙も立たずなりなば。

今宵は、浪の上といふ處にやごりて、荒たる音、さらに目もあ
はず。

○葦科川。安倍川の支流。

○息津の濱。駿河國庵原郡の海岸で、今の興津町のある邊。

○なくく出でしあとの月影。新古今集、羈旅部、藤原定家「こここへよ思ひ
おき津の濱千鳥、泣くく出でし跡の月影。」といふ歌をさす。歌意は。故郷
に思ひ残して置いて、別の悲しさに泣くく出て來た、そのわが出かけた跡に
残つて照る月影よ、わが旅寢の淋しさを尋ねて矣れよといふので、「おき津」に、
置く意を言ひかけ、「濱千鳥」を泣くくの序に用いたもの。

○晝たち入りたる所。晝間這入つて休んだ所。晝食でもしたのであらうか。

○あやしき。粗末な。「あや」は驚く時に發する聲、「しき」は繁き意の形容辭。

ひ出されて、讀んだ歌。

いつの世の麓の塵か富士の嶺を、雪さへ高き山さなしけむ。

朽ち果てし長柄の橋をつくらばや、富士の煙も立たずなりなば。

今晚は波の上さいふ所に宿つて、烈しい波の音の爲に、少しも交睫しない。

故に此語は驚かれる事の多いのを本として、奇怪な事、不思議な事など、凡て世の常ならぬ事に廣く用ゐる。随つて驚かれる程に粗末なものにもいふ。

◎黄楊の小枕。黄楊の木で作つた枕。「黄楊」は、黄楊科の常緑木、材質が極めて緻密堅硬で、材の組織が平等、殆んど木理を有しない、鉋削して琢磨する時は、大いに光澤を生じ甚だ美麗である。「小枕」は木枕の意であらう、萬葉集卷二に、「家に來てわが室を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕。」などある。

◎いと苦しければ、疲勞して甚だ苦しいから。

◎枕の障子。枕もこの障子「障子」は、古くサウジと言ひ、後世はシャウジといふ。室の隔てに立てるもので、襖障子・衝立障子・明障子等がある。そして古の障子といふは襖障子のことで、今は明障子のことである。

◎ふしながら書きつけつゝ、臥してゐるまゝで、次の歌を書きつけた。「ながら」は、そのまゝ、といふ意の接尾語、轉じて、「つゝ」の意、「であるが」などいふ意にも用ゐる。

◎なほざりに。歌意、假初に夢を見ることだけを借りた假の枕であるから、枕よお前は、私が深い約束を結んで置いたまゝ人に語るなよ。「なほざり」に、「直ナホ

ぞあり」の約つたもの、物事に深く心を用ゐない事をいふ。おろそか、かりそめなごいふ意。「みるめ」は、見る目で、夢を見ること、それに海松ミルメ和布を言ひかけてある。「かり枕」は、借枕と假枕との兩意を兼ね、それに「かり」に別る意を言ひかけてある。「結び」は、契を結ぶこと。「おきつ」は「置きつ」と、「息津」を言ひかけたもの。さて此歌は、「かり枕よ」と、枕を有情化して呼びかけたもの。

◎清見が關。平安朝時代に在つた駿河の關所。其遺跡は今の庵原郡清見寺の東であらうか。此關の設置及停廢の年月は明かでないが、坂上田村麿の東夷征伐の時に、關の名が見えてゐるから、平安朝の初世には既に此關があつたのであらう。更科日記にも關屋の記事が見えてゐるから、平安朝中期の末頃迄は存在したものでらしい。

◎白き衣を云々。岩の上を乗り越える波の白く泡立つてゐるのを、白い衣に見立て、岩を打越えるが、恰も白い衣を岩に着せるやうに見えるのが面白いと云うたもの。「見ゆる」は、「見えるのが」の意。此句の次に、「かくて讀める歌」といふ句を補うて解く。

◎清見瀉。歌意、清見瀉の永い年を経てゐる岩に尋ねよう、お前は今日までに

浪さいふ濡れた衣を幾重に來たか。「清見瀉」は、駿河國庵原郡の海岸にある勝地。「浪のぬれ衣」は、「浪なるぬれ衣」で、爰は單に、浪なる濡れた衣の意。「ぬれ衣」は、他に無實の意にも用ゐ、その場合も、「浪のぬれ衣」と續けても用ゐられる。即ち浪は白絹に見えるものであるから、今一つには濡れる事をも兼ねて、かく言ふのであらう。

◎浦人。浦に住む人。

◎くゆり。煙の立つこと。

◎むづかしきにほひ。むさくろしい臭。きたない臭。「むづかし」は、物の繁く煩はしいのをうるさく思ふ意の詞で、クシヤ／＼して、ムサクロシイ又はラツラハシイといふ意。

◎夜の宿醒し。白氏文集卷三「縛戎人。「朝食飢渴費三杯盤、夜宿醒臊汚三牀席。」といふなす。

◎浪たゞ枕の上に云々。たゞ枕もさに浪の立ち騒ぐ音が聞えるのをいふ。「枕の上」は、枕のほとり。枕もこ。さて此句の次にも例によつて、「かくて讀める歌」さいふが省略されてある。

◎ならはずよ。歌意、今迄は實際に來て見た事もなく、たゞ餘所事としてばか

り評判に聞いてゐた清見湯よ、荒き磯邊の波の枕もこにまで近く聞えぬ、このやうな寢覺は、まだ習はない事であるよ。「ならばす」とは、見聞して馴れてゐないこと。「よそに聞きこし」は、餘所事として今日まで評判に聞いて來た意。「荒磯波」は、浪の荒い磯邊に打寄せる波。「かゝる」に波のかゝる意。「斯かる」といふ意を言ひかけてある。「波のかゝる」とは、波の枕の上にかゝる意で、枕元近く波の音の聞えるのをいふ。

◎富士の山。古今要覽。「富士山は駿河國にあり、……其名始めて赤人の歌にあらはれ、其後國史に見えたるは、光仁天皇（續日本紀）の天應元年富士山下云々を初させり。古今集の序には烟たえたりといひ、更科の日記（安治康平の間の記）火のもえ立つも見ゆさしるし、十六日記には、古今集の序の言葉まで思ひいでられてなごいへば、貞觀の後もあるひは燃え或は熄みてあれど、正史の記載にもれたるは其の災異のさまでにあらす民に實あらぬによるなるべし。」

◎父の朝臣に云々。第七六頁參照。「朝臣」はアソミで、アソンは音便である。即ち吾兄臣の約つたもの。天武天皇十三年に八色の姓を定め、其第二位に「朝臣」を置き、主に神別に屬する諸氏に賜うた。しかし戸さして用ゐる以外に、單に姓名の下に添へて、親しみ崇める意味の辭にも用ゐた。譬へば「某の命」

「某の大人」^{ウシ}「某の子」なごいふ、「命」「大人」「子」なごいふと同じく親しみ崇める辭である。

◎いかになるみの浦なれば。續古今集中の「さてもわれいかに鳴海の浦なれば。思ふ方には遠ざかるらむ。」とある歌をさすので、歌意は、さてマア自分はごうなる身であるからで、わが戀しい都の方に遠く離れやうとするのであらうといふので、「いかになる身」さいふこまな、鳴海浦に言ひかけて修飾したもの。「思ふ方」は、戀しい都の方の意。

◎いつの年よりか絶えし。富士山の煙は何日の年からなくなつたのか。

◎問へば。土地の人に尋ねたのであらう。

◎さだかに。定かにで、明かに、確かに。

◎人だになし。人すらもない、かくて讀んだ歌。

◎たが方に。歌意、誰の方に心を寄せて従つて行つて終うて、富士山の煙のはてが見えなくなるであらうか、即ち此歌は富士山の煙を有情化して、所謂擬人法の修辭を用ゐて述べたもの、「なびき」は、人の心に従ふ意が主で、それに煙の横に流れる意を含めたもの。

◎古今の序の詞。古今集は吾國勅撰集の最初のもので、延喜の御代に紀貫之等

が勅命をうけて撰したものの、其序文は即ち紀貫之の筆になつたもの。今その序文の中、次の二首の歌に關係のある部分を、抜出して見よう。「この歌天地の開け始まりける時より出で來にけり。しかはあれども、世に傳はる事は、久方の天にしては下照姫に始まり、荒金の地にしては、須佐乃雄尊よりぞ起りける。千草振神代には歌の文字も定まらず、すなほにして事の心わき難かりけりし。人の世さなりて須佐乃雄尊よりぞ三十文字あまり一文字はよみける。かくて花をめで鳥を羨み、霞をあはれび露を悲しふ心詞多くさまじくになりけり。遠き所も出で立つ足もとより始まりて年月をわたり、高き山も麓の塵ひぢよりなりて、天雲棚引くまでおひのぼれる如くに、この歌もかくの如くなるべし。……今は富士の山も煙立たずなり、長柄の橋も造るなりと聞く人は、歌にのみぞ心を慰めける。」

◎思ひ出でられて。自然思ひ出されて讀んだ歌。

◎いつの世の。歌意、何時の時代の麓の塵が積り積つて富士の山を高く積上げ、その上雪までが高くつもる山としたのであらうか。「雪さへたかき」は、山の高い其上に雪までが高く積るといふ意。

◎朽ちはてし。歌意、富士の煙と長柄の橋とは昔から相對立して、一つは戀に

燃える我心を比較する爲に、一つは我身の古く老耄たのを嘆く相手に用ゐられて來たのであるが、其富士の煙も立たなくなつたならば、今一方の朽ちてた長柄の橋も新に造りたいものである。「長柄の橋」は、攝津國西成郡長柄川に架けられた橋。その趾は今詳かでない。長柄川は今の中津川で。往昔長柄川を浚深し、中津川を埋めたから、中津川の名が長柄川に移つて、兩名を併せ用ゐたものであるといふ。古今集、卷第十五、「逢ふこそを長柄の橋の長らへて、戀ひわたるまに年ぞ經にける。」同書、卷第十七、「世の中にふりぬるものは津の國の長柄の橋と我となりけり。」などある。「富士の煙」は、「布士の根のならぬ思ひに燃えばもえ神だにけたぬむなしけぶりな。」などあるが如く、戀に燃える我心を比するに用ゐたので、古今集序にも、「富士の煙によそへて人を戀ひ。」などある。

◎浪の上。駿河國岫崎のこゝであらうか。藻鹽草に、「波の關守と申すは、今の世に久岐賀崎と云ふ所なり。古は此道を通りけるに、汐満ちぬれば、往來の人立とまりて、女浪男浪を數へて、小浪寄りぬる時通りける故に、關守とも、浪の關戸とも申しける。」とある。その浪關のこゝを、爰に浪の上と云うたものであらう岫崎は所謂清見關のこゝ也。

【通釋】

二十七日、夜が全く明けてから後に富士川を渡る。朝の川が非常に寒い。指折り數へて見るこ此川では十五の瀬を渡つた。そこで讀んだ歌。
さえわびぬ雪よりおろす富士川の、川風こほる冬の衣手。
今日は日の光が大層のび

○荒れたる音。浪の荒れてゐる音。此句の次に、「さいふ意を補へば意味が明かに通じる。」

○さらに目もおはず。少しも眠れない。即ち浪の荒れてゐる音の爲に眼が冴えて少しも眠れないのをいふ。

一一一 富士川より

二十七日、明けはなれて後、富士川を渡る。朝川いと寒し。數ふれば十五瀬をぞ渡りぬる。

さえわびぬ雪よりおろす富士川の

川風こほる冬のころも手。

けふは日いさうらゝかにて、田子の浦にうち出づ。海人あまごものいさりするを見ても、

くさして晴れやかで、
田子の浦に出る。浦のほ
さりには海士どもの魚を獲
つてゐるのを見て、
心からおりたつ田子の
鬘衣、ほさぬうちらみこ
人に語るな。

と言ひ度い。

伊豆國の國府といふ所に
宿る。未だ夕日が暮れて
終はらずに僅か残つてゐる
時分、三島明神へ參詣す
ると云うて、次の歌を讀
んで奉納する、

あはれさや三島の神の
宮柱、たゞこゝにしも
廻り來にけり。

おのづから傳へし跡も
あるものを、神は知る
らむ散島の道。

心からおりたつ田子のあまごろも

ほさぬうちらみこ人にかたるな。

とぞいはまほしき。伊豆の國府こよといふ處にとゞまる。未だ夕日
残るほど、三島の明神へまゐるとてよみ奉る。

あはれさやみしまの神の宮柱

唯こゝにしもめぐり來にけり。

おのづから傳へし跡もあるものを

神は知るらむしき島の道。

尋ね來てわがこえかゝる箱根路を

山のかひあるしるべとぞ思ふ。

二十八日、伊豆の國府を出でて、箱根路にかゝる、未だ夜深か
りければ、

尋ね来てわが越えかゝる箱根路を山のかひあるしるべこそ思ふ。

二十八日伊豆の國府を出發して、箱路にのぼり始める。まだ夜明けまでには時間があつたから讀んだ歌。

玉くしげ箱根の山を急げども、なほ明け難き横雲の空。

足柄の山を越えるのは、道が遠いからさ云うて、箱根路にさしかゝるのであるよ。かくて讀んだ歌。
ゆかしさよそなたの雲を飲てゝ、よそになしぬる足柄の山。

甚だ險しい山か下。坂が急で人の足も止りにく

たまくしげ
玉櫛笥箱根のやまをいそげども

なほ明けがたき横雲の空。

足柄山は道遠しとて、箱根路にかゝるなりけり。

ゆかしさよそなたの雲を峙て、

よそになしぬる足柄の山。

いとさかしき山を下る。人の足もござまり難し。湯坂とぞいふなる。辛うじて越えはてたれば、又麓に早川といふ川あり。まことに早し。木の多く流るゝをいかにと問へば、海人の藻鹽木を浦へ出さむとて流すなりといふ。

東路の湯坂をこえて見たせば

しほ木ながるゝ早川の水。

湯坂より浦に出でて日暮れかゝるに、猶とまるべき所遠し。伊

い。その坂をば湯坂といふのである。やういふ事、事で越えて終うたらば、また麓に早川といふ川がある。流が誠に早い、木が澤山に流れてゐるのを、どういふわけか尋ねると、海士の焼く藻鹽木を浦邊に出さうとて流すのであると答へる。そこで讀んだ歌。

あづまぢの湯坂を越えて見渡せば、しほ木流るゝ早川の水。

湯坂から浦邊に出で、日は暮ればじめるのに、宿るはずの所は遠い。伊豆の大島まで一面に眺める事の出来る海邊を、何ぞいふかさ尋ねるけれど、

豆の大島まで見渡さるゝ海づらを、いづことかいふと問へど、知りたる人もなし。海人の家のみぞある。

海人のすむその里の名もしら浪の

よする渚なみさに宿やからまし。

鞠まりこ子川といふ川を、いと暗くてたどり渡る。今宵は酒さか勾かほといふ處にとゞまる。明日は鎌倉に入るべしとなり。

◎富士川。甲斐國に源を發し、駿河國、富士・庵原二郡の境を流れて海に入る。我國三大急流の一。

◎朝川。朝渡る川を朝川を云うたもの。是に對して、夕に渡る川を夕川といふ。萬葉集卷一、「船フネナメテ並ナメテ氏アサカ且ハワタリ川フナキホヒ渡ユフカケ夕ワタル河カ渡カ。」

◎十五瀬。富士川の中に十五の瀬のあつたのをいふ。諸註に、京都を出てから十五の瀬を渡つたのであるとあるは誤。「十五瀬をぞ渡りぬる。」の次に、例によつて、「かくて讀める歌」といふ句が省略されてある。

◎さえわびぬ。歌意、富士の山の雪から吹きおろして來る、富士川の上を吹き

知つてゐる人もない。其處には漁夫の家ばかりある。かくて讀んだ歌もあまのすむその里の名も白浪の、寄する渚に宿やからまし。
鞠子川さいふ川を大層暗くて、探すやうにして渡る。今晚は酒匂さいふ所に宿る。明日は鎌倉に着くだらうと云ふのである。

渡川風に、冬のわが袖も凍る程につめたくなつて、寒いのでつらい思ひをした。「さえ」は、寒さのしみ透るのをいふ、萬葉集卷一、「栲の穂に夜の霜降り、磐床さ川の氷凝り、冷る夜を息ふことなく云々。」などあるもその意、轉じて、月などの澄み渡ること、又は物の音のはつきりと澄み渡る意などに用ゐる。「川風」は、川の上を吹く風、拾遺集、「思ひかね妹がり行けば冬の夜の、川風寒むみ千鳥なくなり。」「ころも手」は、袖のこと、衣手の意。

◎うらゝか。長閑なこと。のび／＼として暗れやかな気分。

◎田子の浦。駿河國富士川口附近の海岸。もとは庵原郡蒲原町附近の濱を指したのであるが、今は富士の東の富士郡吉原鈴川等の海岸をいふ。萬葉集卷三、「晝見れど飽かね田子の浦大王の命かしこみ夜見つるかも。」「田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ、富士の高嶺に雪は降りける。」同卷十二、「おくれ居て戀ひつゝあらずば田子の浦の海人ならましを玉藻刈るかる。」など、古くから歌に詠まれてゐる。

◎海人。すなごりする人。

◎いさり。「すなごり」に同じい。漁獵のこと。

◎心から。歌意、自分の心から田に這入り込んで働いてゐる農夫の如く、わが

心から水の中に入りこんで漁業をしてゐる海人であるから、御前達は着てゐる衣を乾す暇もないのが恨めしいなご主人に語るなよ。「心から」は、自分の心からで、人に強制されるのでなく自發的の意。「おりたつ」は、入り込むこと、それに、「織裁」^{オリタツ}意を言ひかけて、衣の縁語に用ゐてある。「田子」は農夫のこゝこ、それに「田子浦」の「田子」を言ひかけてある。「あまごころも」は、海人の着る衣。「ほさぬうちみ」は、乾す暇もない恨、「うちみ」に、浦見^{ウラミ}裏見の兩意を言ひかけて、矢張「衣」の縁語に用ゐてある。

◎いはまほしき。言ひ度い。「ま」は未來の助動詞「む」の延音「まく」の「く」か省いたもの、「言はまくほしき」の意。

◎伊豆の國府、伊豆の國衙の所在地で、今の三島町。

◎三島の明神、今の伊豆國なる三島町にある。三島大社さいひ、中世以後、東海道の名祀となつたのである。東關紀行にも、「伊豆の國府に至りぬれば、三島の社のみしめ内を拜み奉るに、松の風木暗く音づれて、庭のけしきも神さびわたり、是社は伊豫國三島の大明神をうつし奉るに聞くにも云々。」などと書いてある。

◎あはれさや。歌意、三島明神は、自分を可憐な者とと思召して御覽下さるで

あらうか、私は神様の御加護を御願したさに、此土地にひたすら巡つて來た事である。「みしま」の「み」に、「見」を言ひかけてある。「宮柱」は、宮殿の柱で、爰は單に口調を整へる爲に用ゐたもの。「めぐり來にけり。」は、廻り廻つて來たこと、「めぐり」は、柱の縁語。

◎おのづから。歌意、和歌の道の上で、亡夫爲家が細川庄を爲相に傳へ譲つた。その遺言狀も自然とあるのに、然るに其細川庄も故なく横領せられた事であるが、神様は其等の事を御存知遊ばして、正しく御治め下さるであらう。「傳へし跡」は、爲家が爲相に傳へた細川庄の讓狀をさすので、特に「跡も」を云うたのは、傳へたさいふ事柄も、其證據も共にあるのにこの意。然るに諸註は皆祖父傳來の歌道の意に解いてゐるのは、ごつてであらう。「ものを」は、「を」に同じい、その次に反對の事柄の來る意を表はす詞で、爰は當然次にあるべき、「然るを故なく横領せられた事である。」といふ意を省略してある。諸註は斯く解かずに、單に目的を示す助詞の「を」の意に解いたり、或は胡寛化して明かに説いてない、是は「傳へし跡」といふを誤解した事から起つた謬である。「知る」に存知の意と治める意とを含めてある。「しき島の道」は歌道のこと、「數島」は元來大和國の地名であつたが、欽明帝の朝に都のあつた所から、

その名を擴張して、やがて大和一國の名にも用ゐ、數島の倭とも言ひつゞけ、更に轉じて日本の總名の如くにも用ゐた。所で和歌をば大和歌とも言ふので、移つて數島の道とも言ふやうになつたのである。

◎尋れ來て。歌意、關東への道を尋れてやつて來て、これから自分が越えはじめる箱根路をば、其處には山の峽が澤山に見えるから、その峽のあるのを縁に、わが訴訟の前途に甲斐のある前兆であると思つて見る。「山のかひ」は、「山と山との間の狭い所で、その「かひ」を效果の意の「かひ」にこりなして、「甲斐あるしるべ」と言ひ下したのである。「しるべ」は道案内の意で、「箱根路」の縁に「しるべ」と言うたまでのもの、前兆などいふ程の意。

◎夜深かりければ。夜明けまでには時間があつたがら、讀んだ歌。

◎玉櫛笥。歌意、箱根の山を急ぐけれども、まだ東の空には雲が横に棚引いて、明けさうもない。「玉櫛笥」は、美しい櫛笥で、櫛を入れる箱である、此語は、フタクオクミアシキ蓋・開・奥・身・悪などの枕詞に用ゐられるが、爰は「箱」の枕詞として用ゐたもの。「横雲の空」は、雲の横になびいてゐる空で、明け方の空の景色である。新古今集、「霞立つ末の松山はのくゞと浪にはなる、横雲の空。」「春の夜の夢の浮橋とだえて、嶺にわかる、横雲の空。」

◎足柄山。箱根火山に屬する金時山の北に連互する連嶺の俗稱で、目標とする峰頭のあるのではない、随つて史上所載の足柄山も其位置が確定しない。所謂足柄峠は相駿二洲の境に在るので、古から東海道第一の要路である。萬葉集にも足柄坂・足柄の御坂など見え、古事記による日本武尊の越えられたのも此坂である。往古は東海道の往還に専ら此坂を通つたが、後富士山が噴火して砂石が道を塞いだ爲に、延暦二十一年五月始めて箱根山中に新道を開いた。然して中古は足柄・箱根の兩道を通路としたのである。

◎箱根路にかゝるなりけり。箱根路によるのであるよ、かくて讀んだ歌。

◎ゆかしさよ。歌意、其方にある雲を聳え立たせて、我姿を其陰に隠してゐる足柄山が見度い事であるよ。「ゆかしさ」は、見度い聞き度いと思ふ心持。「そなたの雲」は、足柄山の方をさしていふ。「峠で」は聳え立たせること、天に高く沖してゐる有様。「よそになしぬる」は、遠ざけることで、足柄山が雲に姿を隠したのをいふ。さて此歌の、「そなたの雲を峠でて」は、足柄山が其方の雲を聳え立たせしめたさいふので、「よそになしぬる」も、足柄山自身が自分の姿をよそにしてゐるさいふ意、即ち足柄山を擬人法に取扱つたのである。然るに佐野氏の十六夜日記新釋には、「彼方の方の雲を立ち起らせて、悪し

いふ名の足柄山を外にして終つたのは、實にゆかしい。」と解いて、「足柄」の「足」に「悪し」の意を含めたものと見てゐる。更に關根幸田兩氏監修の口譯新解十六夜日記には、「悪人に與みして善人を傾けやうとする者が多いのに、かの足柄山は其名の悪しさいふから、彼方の悪い雲を押し遠ざけて、餘所にして終ふさは、誠にゆかしい事である。」城戸氏の十六夜日記詳解には、「かの足柄山は其名の悪しさいふから、彼方の悪い雲をおし遠ざけて餘所にして終ふので、彼の不幸の子を遠くおしのけられるやうに思はれて、誠にゆかしい事である。」吉川氏の十六夜日記精解には、「あちらの方の雲をおしのけ片寄せて、あしきものをよそにして遠ざけて終つた足柄山のゆかしい事よ。善を悪しきものにたごへて、暗に爲氏に比したのである。」など解いて、皆寓意のあるやうに見てゐるが、餘りに穿ち過ぎた結果、牽強附會に陥つた嫌ひがある。勿論秀句法の詞姿は當時盛んに用ゐられ、本書の他の歌にも懸詞が澤山あるから、「足柄」に「悪し」の意を言ひつけてあると見るのも尤もなところではあるが、然しその見方も極端になると附會の説に陥る弊がある。此歌などは、作者の當時の心持を察するに、さう深い用意があつての作ではない。足柄山を越えるべきのを、道程の都合から箱根路をさるやうになつた。然し自分の心には

昔から歌にも讀まれ、史蹟にも出てゐる、殊には昔の官道でもあつた足柄山が、何さなくなつかしく見度いやうに思はれてならなかつた。所が其足柄山の方には雲が一面にかゝつて、懐しい姿はその陰にかくれて見えない。其處で此歌が出来たのであらう。さう解くのが最も妥當で、作者の心持に合致してゐると思はれる。

◎さかしき山。険しい山。「さかし」は、萬葉集卷三、「霞降り吉志美が嶽をさがしみさ、草取り兼ねて妹が手をさる。」仁徳紀、「橋立の佐餓始^{サカシキ}積山もわぎもこも、二人越ゆればやすむしろかも。」源氏物語夕顔卷、「なごてこのかづらきの神こそさがしうし置きたれ、」かごあるが如く、険しい意で、「さかし」と濁つたものであらう、そして賢いといふ意の場合には「さかし」と清音に云うたものらしい。

◎人の足もこどまり難し。坂が急な爲に勢がついて中途で止りにくいのをいふ。

◎湯坂。箱根の蘆の湯から鷹栖山を経て湯本に下る坂路。

◎早川。箱根蘆湖に源を發し、湯本にて須雲川を合せ、小田原の近くにて海に注ぐ溪流。

◎いかにさ問へば。どうしてかく木を流すのかと尋ねるこ。

◎藻鹽木。藻鹽を煮る時、竈に焚く薪、「藻鹽」は、第廿八頁参照。

◎浦。海邊のめぐり込んでゐる處。

◎流すなりさいふ。此句の次に「かくて讀める歌」といふ意を省いてある。

◎東路。歌意、東國にある湯坂を越してから眺めるこ、早川の水に鹽木が勢早く流れてゐる。「早川」の「早」に「早い」といふ意を言ひかけてある。

◎伊豆の大島。伊豆七島の一、伊豆半島の東南海中にある。

◎海づら。海の表面の意も、海邊の意にもいふ。爰は後者の意。源氏物語帶木卷、「深き山里世ばなれたる海づらなどに這ひかくれぬかし。」伊勢物語、「伊

勢尾張の海づらを行く。」などあるも皆同じい。

◎いづここかいふ。此處の地名をば何さいふか。

◎海人の家のみぞある。漁夫の家だけがある、そこで讀んだ歌。

◎海人のすむ。歌意、漁夫の住む、その里の名も何さいふのか知らない、白波の打寄せてゐる渚に宿をからうか。「しら波」に「知らぬ」といふ意を言ひかけてある。「渚」は、波打際で、波の打寄せる岸のところ。

◎鞠子川。今の酒匂川のこと。駿河國富士山の東麓に源を發し、須走の南を經、竹ノ下を過ぎ、箱根山の北麓を遶つて相模に入り、足柄上郡の諸水を合せ、

南東流又南流して小田原町の東三十町酒勾村で海に注ぐ。

◎たぎり渡る。探るやうにして渡るこま。

◎酒勾。酒勾川の東岸の海濱にある酒勾村のこま。

◎明日は鎌倉に入るべしとなり。明日は鎌倉に着くだらうさいふのである。此句は明日は鎌倉に着くさいふこまを、慇懃婉曲に述べたまでのもので、其土地の人や供人などが斯く言うたのではない。

一三 酒勾より

二十九日、酒勾を出でて、濱路をはるくこゆく。明けはなる
海づらを、いと細き月出でたり。

浦路ゆくこゝろぼそさを波間より

いでて知らする有明の月。

渚によせかへる浪の上に霧たちて、あまたありつる釣舟、見え

【通釋】

二十九日酒勾をたつて、濱邊の路を遠く傳つて行く。夜の暮が全くあけはなれる海上から、甚だ細い下弦の月が出た。その景色を見て讀んだ歌。

浦路ゆく心細さを波間より、出でて知らする

有明の月。

渚に寄せては返る波の上に霧が生じて、澤山に浮んでゐた釣を垂れる舟も見えなくなつた。かくて讀んだ歌。

あま小舟漕きゆく方を見せじさや、浪に立ちそふ浦のあさ霧。

都から遠く隔つて終うたのも、やはり夢のやうな果敢ない心持がして、讀んだ歌。

立ちはなれよもうき浪はかけもせじ、昔の人の同じ世ならば。

すなりぬ。

あま小舟こぎゆく方を見せじさや

波にたちそふうらの朝霧。

都とほく、隔たりはてぬるもなほ夢の心地して、

立ち離れ世もうき波はかけもせじ

むかしの人の同じ世ならば。

◎濱路をはるくさゆく。濱邊の路を遙かに遠く行く。即ち長い濱路を行くのな
いふ。

◎明けはなる、海づちを。夜の明け去る海上から。夜の全く明ける海上から。

「海づち」は、海の上。「な」は、「より」の意。

◎いさ細き月出でたり。甚だ細い有明月が出た、かくて讀んだ歌。爰の「細き月」は下弦の月のことで、月の二十日過ぎの、弓状に見える有明月。

◎浦路ゆく。歌意、浦邊の路を歩み行く心淋しい感じをば、海の上から有明月が出て自分に味ひ知らせる事である。下弦の月の細い姿をば、「心細い」とい

ふ語句の上の表面的感覺に縁を持たせてかく讀んだもの。「波間」は、波と波との間で、海上といふに同じい。「知らずる」は、味ひ知らしめること。

◎見えすなりぬ。見えなくなつた、かくて讀んだ歌。

◎あま小舟。歌意、漁夫の乗つて行く小舟の漕いでゆく方向を見せまいさいふのであらうか、波の上に立ち加はつてゐる海邊の朝霧よ。

◎夢の心地して。夢のやうな果敢ない心持がして、讀んだ歌。

◎立ち離れ。歌意、都からこのやうに遠く離れ來て、わが子供等につらい思ひを、よもやさせはすまい、亡夫爲家卿の自分と同じく生きてゐる世であるならば。「よも」は、「よもや」の意、何さしても、まさかなどいふに同じい。「うき波」は、單につらいといふ意を、此歌を讀んだ海邊の縁で、かく言つたもの、即ち「浮波」に「憂き波」の意を寄せて、然もそれを主としたもの。「かけ」は、波の縁語で、つらい目に逢はせるのをいふ。「むかしの人」は、爲家卿をさしていふ。「同じ世」さは、自分と同じく存命してゐる世。

一四 月影の谷

【通釋】

鎌倉で自分の住む所は月影の谷さいふなのである。其處は海邊に近い山の麓で、風が甚だ烈しい。極樂寺の傍であるから、靜かに且淋しくて、浪の音や松吹く風の響が、しつきりなし聞える。都からの傾りが早く來ればよいと待遠に感じる時丁度、宇都の山で行き逢うた山伏の傾宜に頼んで言うてやつた人の許から、確實な幸便に託して、以前の御返事だと思はれて、次の歌を送つて來た。

旅衣涙をそへて宇都の山、しぐれぬひまもさぞしぐるらむ。

あづまにて住む處は、月影の谷つづとぞいふなる。浦ちかき山もとにて、風いとあらし。山寺の傍なれば、のどかにすごとく、浪の音・松の風たえず。都の音づれ、いつしかに覺束なきはごにしも、宇都の山にて行きあひたりし山伏のたよりに、言づけ申したりし人の御許より、たしかなるたよりにつけて、ありし御返しと覺しくて。

旅衣なみだをそへて宇都の山

しぐれぬひまもさぞしぐるらむ。

ゆくりなくあくがれ出でしいさよひの

月やおくれぬかたみなるべき。

都を出でしことは、神かみなづき無月十六日なりしかば、いさよふ月をおぼしめし忘れざりけるにやと、いとやさしくあはれにて、唯こ

ゆくりなくあくがれ出
でし十六夜の、月やお
くれぬ形見なるべき。

此歌を見ると、自分が都
を出發したのは十月十六
日であつたから、先方の
人も當夜の十六夜の月を
御心に忘れなかつたので
あらうかき、甚だやさし
く身に泌みて感じて、た
だ此「ゆくりなくあくが
れ出でし十六夜」のとい
ふ歌の返事だけを、再び
折返して申上げる、その
歌。

めぐりあふ末をぞ頼む
ゆくりなく、空にうか
れしいざよひの月

の返言ばかりをぞまた聞ゆる。

めぐりあふ末をぞ頼むゆくりなく

空にうかれしいざよひの月。

◎あづま。東國のこゝ、爰では鎌倉をさしていふ。「あづま」は、吾嬬・吾妻・吾
姫・など書く、日本武尊が碓日嶺で東南方を望み、巖に上總の海を渡らうとし
て暴風に逢つた折、妃弟橘姫が海に投じたのを追慕して、アヅマノキミ吾嬬者耶ま三嘆
られた故事から出た名であるといふ。さて其碓日嶺まは日本書紀に據るこゝ、
「自三甲斐一北轉、歷三武藏上野、逮三于碓日坂、(中略)故登三碓日嶺一而東南望
之三歎曰云々。」とあるから、上野國碓水峠の事らしく「古事記に據るこ足柄
坂での事であるやうに見えてゐる。従つて「あづま」といふ名稱は武尊三嘆以
前既に存してゐたもので、其言葉が「吾が妻」といふに通うてゐるから、尊は
吾嬬者耶ま三嘆せられたので、其土地も古事記に在るが如く足柄坂であるとい
ふ説もある。また「あ」は大の意、「つま」は端の意で、即ち國の大なる端の義
で、東國は地が廣く國が大きいから斯く言つたもの、我國西南の一端を「薩摩」
といふも小さき端の義であるといふ説もあり、またアイヌ語から出たもので、

即ち「東」といふ意のアイヌ語のアツイ・パネ（海の東岸の方へといふ意）から出て、早く東國の汎稱となつたものではないかともいふ。

◎住む處。阿佛尼の住む處。

◎月影の谷。鎌倉の地名。極樂寺の西の谷である、此處から極樂寺坂を東に越えるさ星月夜の井さいふがある。此處は即ち阿佛尼の滞在した事から有名になつたもの。

◎山寺。極樂寺のこゝ。律宗の寺で、極樂寺町、即ち稻村崎の背後にある。

◎のどかにすごくて。のんびりと靜かに且びびり淋しくて。

◎いつしかに。「いつしかさ」と同じい。「いつしか」は、「いつのまにか」といふ意さ、「いつか早う」と待つ心持にいふ意さある。爰は、いつか早う來ればよいとの意。

◎覺束なきほどにしも。待遠である時丁度。「覺束なき」の「おぼほ」、「おぼろ」の「おぼ」と同じで、判然としない意、「つか」は確と握り所の定つてゐるをいふ、随つて「おぼつかなき」は、確と握るべきつかの判然しない意で、不明瞭・不確實・不安心などの意に用ゐるものを待遠に思ふ意にも用ゐる。一説に「おぼほ」は思オボで、思ふ柄ツカのない意であるといふ。「ほど」は、頃・時などいふ意。

「し」は強めの助詞、「も」は感動詞。「ほごしも」は、時丁度さいふ程の意。

◎宇都の山にて云々。第九一頁参照。

◎たしかなるたよりにつけて。確實な幸便に托して。

◎ありし御返し。以前宇都の山で逢うた山伏に言づけてやつた歌の御返事。「ありし」は、以前のさいふ意。源氏物語、夕顔巻、「ありしながら打ち臥したりつるさま。」同空蟬巻、「ありしけはひよりは云々。」とあるも同じい。

◎覺しくて。思はれて。此句の次に、「次の歌を送つて來た。」といふ意が省略されてゐる。

◎旅衣。歌意、旅情の悲しい爲に、旅衣には涙の雨を降り添へて、宇都の山に時雨の降らぬ時にも、定めしその涙の雨が時雨のやうに降りかゝる事であらう。

前に「鳶楓しぐれぬひまも宇都の山、涙に袖の色ぞこがる。」とある歌に應じてかく讀んだもので、「宇都の山」といふに「打つ」の意を含めて「旅衣」の縁語に用ゐてゐる。「しぐらむ」とは、涙の降りかゝるのをいふ。

◎ゆくりなく。歌意、思ひがけなく、御身が都を出發した、其折の十六夜の月が、我身を離れない記念物であらうか。「あくがれ」は、「あこがれ」に同じい即ち「所在離れ」の意で、心が在所を離れて他へ行くこゝし、爰は、阿佛尼の都を

出たのをいふ。「おくれぬ」は、我身に後れずに常に附添うてゐること。

◎神無月。十月のこと。語義については、此月は諸國の神々が出雲に集つて、諸國には神が無いから、かく名付けたのださもないひ。雷の聲を収める月であるから雷無月の義であるさもないひ、又神嘗月の意で、神嘗祭を行ふ月であるからかく云ふさもないひ、十は數の極數であるから、上無月の意であるさもないひ、純陰無陽の月であるから、陽靈を神さいふ所より、陽無き月さいふ義にとつてかく言ふさもないひ、又其反對に純陰の月であるが、陽無きを嫌ふので、却つて陽月とし、カミナツキはカミノ月の意であるさもないひ、或は九月に稻を刈つて十月に酒を醸しつくるから醸成月の意であるさもないひ、伊弉册尊の崩じ給うた月であるから神去月の意であるさもないひ、皆明確を缺いてゐる。

◎いさよふ月を云々。自分の都を出發した折の十六夜を心に忘れなさらなかつたのであらうか。

◎やさしく。忘れなかつた心掛けをやさしく感じたのである。

◎この返言。「ゆくりなく云々」の歌の返事。「返言」は、返事。

◎聞ゆる。申上げる。此句の次に、「その歌」といふ意を略してある。

◎めぐりあふ。歌意、再び御身と邂逅する將來を頼みにしてゐる、思ひがけな

くも、かの空に浮かれ出た十六夜の月の如く、うか／＼と都を浮かれ出た私は、「末」は、行先のこと。將來。「空」は、大空の意と、そりこめた事なく浮き／＼してゐる意とを兼ねて、一つは大空に月の出た事にいひ、一つは浮かうかご自分の都を浮かれ出た事にいふ。「いさよひの月」は、阿佛尼自身を月にしたとへたもの。

一五 權中納言よりの音づれ

前の右兵衛督かみの御娘、歌よむ人にて、勅撰にもたびたび入り給へり。大宮院の權中納言と聞ゆ、歌のことゆゑ、朝夕申しなれしかばにや、道のほどの覺束なさなご音づれ給へる文に、

はる／＼とおもひこそやれ旅衣

涙しぐるゝほごやいかにと。

返言に、

【通釋】
前の右兵衛督爲教の御娘爲子は歌をよむ人で、詠歌が勅撰集にも度々お入りなされた。大宮院にお仕へ申して、呼名をば權中納言と申上げる。歌の事に因つて、朝夕語り馴染んでゐたからであらう

か、私の道中が気がかりに感じるなごいふ事を言うて寄越しなされた文に、次の歌が書き添へてあつた。

はるんくと思ひこそや
れ旅衣、涙しぐるゝほ
ごやいかにと。

その歌の返事に、私は次の歌を讀んだ。

思ひやれ露と時雨も一
つにて、山路わけこし
袖の雫を。

爲子の兄の爲兼の君も、同様に道中の気がかりな事など書いて、次の歌を添へて寄越した。

故郷は時雨にたちし旅
衣、雪にやいとゞさえ
まゝるらむ。

思ひやれ露も時雨もひとつにて

山路わけこし袖のしづくを

このせうこの爲兼の君も、同じさまに覺束なさなど書きて、

ふるさは時雨に立ちし旅ごろも

雪にやいとゞさえまゝるらむ。

返し、

たびごろも浦風さえてかみなづき

しぐるゝ空に雪ぞふりそふ。

◎前の右兵衛督の御姫。藤原爲子のこと。即ち「前の右兵衛督」さは、爲家の第二子爲教（阿佛尼の繼子）のこゝ。藤原爲世の子にも爲子といふがあつたが、爰にいふは爲教の子、爲兼の妹の従三位爲子のことで、始めは後嵯峨天皇の中宮なる大宮院に仕へ、後に伏見院に仕へた。當時爲兼流の和歌を代表するに足る有名な女流作家である。「右兵衛督」さは、右兵衛府の長官で、兵衛府

それに對する私の返事の歌。

旅ころも浦風さえて神
無月、しぐるゝ空に雪
ぞ降りそふ。

は宣陽門陰明門以外を警衛し、且行幸の時前後を警衛する。「則の」とあるは、前官のこゝで、右兵衛督をやめて、たゞ位だけで官のないのをいふ。

◎勅撰。勅撰集のこゝ。歌人に勅を下して、古今の和歌を撰進せしめた歌集で、延喜五年紀貫之等に命じて、古今和歌集を撰進せしめたのを嚆矢とし、以後歴代勅撰の事が行はれ、前後二十一代の撰修があつたが、後花園天皇の朝の新編古今和歌集以後廢絶した。さて爰に「勅撰にもたび／＼入り給へり。」とあるは、爲子の歌が爲兼の撰になる玉葉集、花園院の御自撰である風雅和歌集などに撰ばれて入つてゐるのをいふのであらう。

◎大宮院の權中納言と聞ゆ。爲子のこゝを「大宮院の權中納言」と申上げるさいふ意。「大宮院」は後嵯峨天皇の中宮で、「大宮院の」とあるは當時大宮院に仕へてゐたからである。「權中納言」とは、權官の事とて、權はカリさいふ意。即ち一定の人数の外に權りに人数を増して任ずるのを「權の何々」といふ。然し、爰に權中納言とあるは爲子の呼名に用ゐたので、昔御所で使ふ女房には、父又は後見人の官名、或は國名を附して、其呼名に用ゐたもの、爰は爲子の兄爲兼が權中納言であつた所から、其官名を用ゐて斯く呼んだものであらう。増鏡「うら千鳥」の卷には、此爲子のこゝを、「大納言三位爲子」としてある。

勿論其折は伏見院に仕へて居り、兄爲兼も大納言であつた。一本には、「聞ゆる人」さして次に續けてあるが、さうすれば、「その大宮院に仕へてゐる權中納言さ申す人が」といふやうに譯すさよい。

◎歌のこさゆゑ。歌の事に因つて。歌の事の爲に。「ゆゑ」は、理由・ゆかり・なごの意にも用ひ、爲になごいふ意にも用ゐる。

◎申しなれしかげにや。語り馴染んでゐたからであらうか。「申しなれ」は、話などして親しくなること。

◎道のほごの覺束なまなど。阿佛尼の道中が氣がかりに感じるなごいふ事をの意。

◎首づれ給へる文に。言ひ寄越した文に。此句の次に、「次の歌が書き添へてあつた。」といふ意の句が省略されてゐる。

◎はるくくさ。歌意、遠く御身の上を想像する事である、旅情の悲しさに旅衣の上に涙が恰も時雨のやうに降りかゝる程度が、どんなであらうか。「ほご」を、諸註は「時」の意に解してゐるが、爰はさうでなくて、程度。又は様子・なごいふ意。即ち旅の身であるから涙の乾く暇のないのは勿論であるが、其涙の繁き程度を想像したもので、さう見る方が面白味が深い。

◎返言に。返事に次の如く申し送つたさいふ意。

◎思ひやれ。歌意、御推量下さい、露も時雨も同時に山路の間を踏みわけて来た、其折の私の涙のどんなに繁く流れ落ちた事であるかな。「露も時雨もひとつにて」は、露も時雨も同時にさいふので、涙の繁き事をいふ爲の客に用ゐたもの。「袖のしづく」は、涙のことで、前に「涙しぐるほごやいかに」と、涙の深い程度を尋ねられたのに對して、爰に涙の如何に深かつたかを推量して呉れと答へたもの。諸註には袖の濡れてゐる意に解いてゐるのは、どうであらうか。千載集、「よそにしてもどぎし人にいつしかと袖の雫を問はるべきかな。」拾愚、「さこなるゝ山下露のおきふしに袖の雫は都にも似ず。」玉葉集、「君なくて歸る波路にしなれ、こ袖の雫を思ひやらなん。」など、皆涙の意である。

◎せうさ。兄人の意で、兄のこと。

◎爲兼。爲教の第二子で、長ずるに及び一新歌風を唱へて、爲氏の子爲世と相確執し、當時和歌師範家の紛争を作つた。

◎同じさまに。爲子と同様に。

◎覺束なさなど書きて。道中の氣が、りいな事など書いて、次の歌を添へてあつ

た。

◎ふるさは。歡意、都は時雨の降る十月の十六日に出發した御身の旅衣は、今はもう冬も深くなつて雪の降る事であらうから、其雪の爲に一層深さの増すことであらうか。「時雨に立ちし」は、時雨の降る時節に出發したのをいふので、「立ち」に「裁ち」の意を言ひかけて、旅衣の縁語に用ゐてある。本文、出發の章にも、「頃はみ冬たつ初の定めなき空なれば、降りみ降らずみ時雨もたえず云々。」とある。「雪に」は、雪の爲に。

◎たびごろも、歌意、旅衣に浦風が寒く吹いて、十月の時雨の降る空に、雪が降り加はるることである。「浦風」は、海邊に吹く風、「浦に」裏の意を兼ねさせて、衣の縁語に用ゐてある。

一六 御櫛笥殿への音づれ

式乾門院の御櫛笥殿みくしびどときこゆるは、久我の太政大臣の御娘、これも續後撰しよくよりうちつゞき、二たび三たびの家々の打聞うちききにも、

【通釋】

式乾門院の御匣殿と申すは、久我太政大臣通光卿

の御展で、此方も續後撰集以來引續いて再三の撰集や或は家々の歌集にも、詠歌が澤山入つてゐられる人であるから、御名も世に隠れなくあらはれてゐる。現今は安嘉門院に、御方さうして伺候なさる。私が鎌倉に下らうと思ひ起したのが、愈々明日出發するさ云うて、暇乞の爲に北白川殿へ參上したけれど、お留守であつたから、都に寝るのも今宵だけである、その旅立ちが何さなく落着かない爲に、かうして旅に出るといふ事すら申上げて終はずに、急いで都を出發したのにつけて

歌あまた入り給へる人なれば、御名もかくれなくこそ。今は安嘉門院に、御方とてさぶらひ給ふ。東路思ひ立ちし、明日とてまかりまうしのよしは、北白川殿へまわりしかごと見えさせ給はざりしかば、今宵ばかりのいでたち、物さわがしくて、かくとだに聞えあへず、急ぎ出でしにも、心にかゝりて音づれきこゆ。草の枕ながら、年さへ暮れぬる心細さ、雪のひまなさなど、書きあつめて、

消えかへり眺むる空もかきくれて

ほごは雲居ぞ雪になりゆく。

など聞えたりしを、立ちかへりその御返言、たよりあらばと、心がけまゐらせつるを、今日のはしはすの二十二日、文待ちえて、珍しくうれしさ、まづ何事もこまかに申したく候ふに、今

も、其不本意な別れが氣にかゝつて、おしりを申上げる。その手紙の文句には、旅のまゝで、其上年まで暮れて終つた心淋しい事や、雪の間断なく降る事などを色々書き集めて、終りに、

消えかへり眺むる空も
かき暮れて、ほごは雲
居ぞ雪になりゆく。

なごいふ歌を讀んで申上げたのを、引き返して先方からの御返事が来た。それには、「幸便があるならば御便りを申上げようさ心がけて居りましたのに、今日の十二月の廿二日に、丁度御身からの御手紙を待ちうける事が出

宵は御方遠おんかたながへの行幸の御上とて、まぎるゝほごにて、思ふばかりもいかゞと、本意ほんいなうこそ。御旅明日あすとて、御まわりありける日しも、峯殿の紅葉見にとて、若き人々さそひにしほごに、後にこそかゝる事ごも聞え候ひしか。なごやかくとも、御たづね候はざりし。

ひとかたに袖やぬれまし旅衣

立つ日をきかぬ恨なりせば。」

さてそれより、「雪になりゆく」と、推量りの御返言は、

かさくらし雪ふる空のながめにも

程は雲居のあはれをぞ知る。

とあれば、この度は、又立つ日を知らぬとある、御返しばかりをぞ聞ゆる。

来て、珍らしく嬉しう存じます。それにつけては、第一番に何事も詳しく申し度う御座いまするが、今晩は御方達の行幸であるとき、心に思うてゐるだけの事柄も全部申上げ得るかどうかが心外に存じます。御旅への御出發が明日ださうて御出で下さつた日も丁度、光明峯寺邸の紅葉見物に参らうと云うて、年若い女房も誘うたので、生憎御面會する事も出来ませんで、後日御身の御見えに致した事や旅立の事を耳に致しました。どうしてつと早く旅に御立

心からないうらむらむ旅衣

立つ日をだにも知らず顔にて。

◎式乾門院。後高倉院の皇女、利子のこと。もと伊勢の齋宮に奉仕せられたが、退下後は四條院の御准母となつて、皇后宮になられた。

◎御櫛笥殿。内藏寮以外に御服を裁縫する所である貞觀殿のこと、或は御匣殿別當の略稱。さて「御匣殿」は、元來は理髮の爲め御櫛笥の調度を置かれた所であらうが、後には全く御服を裁縫する所となつたので、其所の別當は上臈の女房を以て之に補したのである。恰芥抄に、「御櫛笥殿在二貞觀殿中一以三上臈女房一爲二別當。」とある。然るに此御匣殿は一條天皇以後天皇の侍妾となり、隨つて此地位から女御に進んだ例がある。後世は禁中以外の他所にも裁縫所と稱へるものを置き、其所に仕へる人を御匣殿と呼んだ。爰も矢張、式乾門院の御所で御匣殿を勤めていらつしやる方はいふのである。

◎きこゆるは。申す人は。

◎久我の太政大臣。源通光のこと。

◎續後撰。後深草天皇の御代に、後嵯峨院の院宣によつて藤原爲家の撰したも

ちになるを御知らせ下さ
らなかつたのですか、こ
書いて、次の歌を添へて
あつた。

ひさかたに袖や濡れま
し旅衣、たつ日を聞か
ぬ恨のみりせば。

そしてマアそれから、私
が「ほどは雲ぬぞ雪にな
りゆく。」と、推量して讀
んでやつた歌の御返事
は、

かきくらし雪ふる空の
眺にも、ほどは雲ぬの
あはれをぞ知る。

と讀んであるから、今度
は「立つ目を聞かぬ恨な
りせば。」とある御返歌だ
けを讀んで差上げる。そ
の歌。

の、續後撰和歌集といふ。

◎二たび三たびの。此句の下に、「撰集にも」といふ句が脱落したものであらう。本文のまゝでは意味が不明なので、其解釋にも、二度三度勅撰に入つたと解く説と、二度三度の家々の打聞にもと續く意に解く説とあるが、脱落があるものと見るがよからう。

◎家々の打聞。家々の歌集のこと。「打聞」は、聞いた事を記し置くもの、即ち手控のことであるが、爰は歌集のこと。此「家々の打聞」を勅撰集のことであるを解く註もあるが、矢張「家集」の意であらう。

◎かくれなくこそ。「隠れなくこそあれ」とあるべきを省略したものの。

◎安嘉門院。式乾門院の御妹邦子のこと。後堀河院の准母となり。皇后宮と稱へられた。

◎御方。人を敬つて指す稱。名を明確に指さずに漠然と言つたもので、俗に「某とて云々」といふに同じい。

◎東路思ひ立ちし。鎌倉に下らうと思ひ起したのが。此句はこれで切れてゐるので、次の「明日さて」といふに續いてはゐない。即ち此句の次に、「のが」といふ語を補つて解く。

心、らなに恨むらむ旅衣、立つ日をだにも知らず願にて。

◎明日さて。明日出發すると言うて。

◎まかりまうし。旅立ちの挨拶。暇乞。「まかる」は、貴人の前から退くことで「参る」の反對である、随つて都から地方に下るを「まかる」と云うた。

◎よしに。故に。

◎北白川殿。安嘉門院の御殿。

◎見えさせ給はざりし。お見えにならなかつた。お留守であつた。

◎今宵ばかりのいでたち。都に居るのは今宵一晩だけである明日の出發。

◎物さわがしく。何さなっ心が落着かないこと。

◎かくさだに。かうして旅に出るさいふ事さへも。

◎聞えあへず。申上げて終はず。

◎急ぎ出でしにも。急いで都を出發した事につけても。

◎心にかゝりて。其不本意な別れが心配で。

◎昔づれきこゆ。便りを申上げる。此句の次に、「その手紙には」さいふ句を置いて解くさ。文意が一層明かになる。

◎草の枕ながら。旅のまゝで。此句から「雪のひまなさ」までは、手紙に書いた事柄の大略を述べたもの。昔は旅に出るとき草を引結んで枕とした所から、「草

枕旅」を言ひつゞけ、また旅寢のこゝを草枕・草の枕など言うた。

◎年さへ暮れぬる心細さ。旅に出てゐるその上に年までも暮れた事の心淋しい感じ。「年さへ」というたのは、「草の枕ながら」とあるのに對して「さへ」と言つたもの、諸註は、「月日の経過するばかりでなく其上に年までも暮れた。」と解いてゐるが、どうであらうか。

◎雪のひまなさ。雪の絶えず降るのをいふ。

◎書きあつめて。色々の事を書き集めて。此句の次に、「その終りの方に。」といふ意の句が省略されてゐる。

◎消えかへり。歌意、消え入る程の悲しい胸を抱いて、物思ひに沈みながら、茫乎ボヤヤと眺めてゐる都の方の空も、我心同様に暗くなつて、距離の遠く隔つてゐる都の空は雪景色になつて行くことである。「消えかへり」は、悲しさの爲に消え入るやうに思ふこと、「かへり」は反覆の意で其事の甚しい意にいふ。「眺む」は、物思ひに沈む意と、眺める意とを兼ねてゐる。「空も」とあるは、我心も悲しさの情に暗くなり空も暗くなつていふ心持である。「空」は、都の方の空。「かきくれ」は、雪模様の爲に暗くなること。「かき」は接頭語。「ほどは雲居」は、距離の遠く隔つてゐることを、「空」の意の雲居に懸けて言う

たもの。伊勢物語、「忘るなよほごは雲居になりぬさも空ゆく月のめぐり逢ふまで。」新古今集、「思ひいでば同じ空さは月を見よ、程は雲居にめぐりあふまで。」など用ゐてある。「雲居」は雲の居る處の意で、高く遠い處ないふのであるが、爰は遠く隔つてゐる意と空の意とに言ひかけて、次の「雲になりゆく」とあるにつゞけたもの。そしてこの「雲居」は、都の空を指してゐる。

◎立ちかへり。再び引き返すこと。即ち、前の手紙の返事が引き返して來たのをいふ。

◎たよりあらばさ。幸便があるならば、色々の事を申上げようと思つて。「ば」は、前後の語句をつないで、一つは原因、一つは當然の結果となる意を示す助詞、爰は此語の次に來るべき語句を省略してある。以下手紙の文句である。

◎しはす。十二月の異名。歲果月トシノツキの意であるといふ。

◎文待ちえて。阿佛尼からの手紙を待ちつける事が出来て。

◎珍しくうれしさ。珍しく嬉しい事は。

◎まづ。何よりも第一番に。色々の用事がある中で、其等をさて措いて第一にさいふ意。

◎御方違の行幸。方違の爲の行幸。「方違」とは、方角をはづさといふ事で、今

向つて行かうとする方角が、天一神の居る方に當つてゐる時は、所謂方塞りと稱し、強ひて其方角に行くに災害があるを信じてゐた所から、まづ其方角をはづして、一旦他の方へ行つて泊つて、其處から新に志す所へ出向いたものである、其方角をはづすことを方違といふ。又現在自分の住んでゐる方角の塞る事があるを、暫く居を替へて、其開くのを待つ事をもいふ。是は王朝時代に専ら流行した習俗で、上皇・天皇・など尊い御身を以つてしても、之が爲に屢居を替へられ、又疾病などの長く癒えないのも方角の凶なるが爲であるとして、居を替へる事が屢々であつた。「天一神」とは、ナカヤマの事、陰陽家で祭る神の名。金匱經に、「天一立中央、爲三十二將、定三吉凶」とある、陰陽家の所謂十二神の主たる神の義であらう。陰陽書に、「天一遊行方角、百事犯三向之大凶。」とあるが如く、此神は巳酉の日に天上から降つて来て、四方に五日づつ、四隅に六日づつ、合せて四十四の間巡遊し、癸巳の日天上に歸り、かくて十六日間天上の紫微宮に居るといふ、この天上に在る間を天一天上といつて、八方に行つても忌むことがないといふ。

◎御上さて。御事さての意。一本には、「御上」の語がない。

◎まぎるゝほごにて。行幸などの騒ぎに忙しくて、混雜してゐる時で。

◎思ふばかりもいかゞさ。「思ふばかりも如何あらんぞ」の意。心に思つてゐるだけの事も、十分書き盡せるか、さうだらうか、甚だ不安なものだと思はれて、

◎本意なうこそ。「本意なうこそあれ」の意。心外な事である。「なう」は「無く」の音便。

◎御旅の日さて。あなたが（阿佛尼をさす）御旅に出かけなさるのが明日ださ云うて。

◎御まゐりありける日しも。御出でのあつた日丁度「し」は張める助詞、「も」は感動詞。

◎峯殿の紅葉見にこそ。峯殿の紅葉を見に参らうと云うて、「峯殿」は、藤原道家のこゝ、晩年に毘沙門谷に光明峯寺を建て、其處に住んでゐた所から、光明峯寺殿とも、略して峯殿とも云うた。爰は道家の邸をさしてゐる。

◎若き人々さそひにしほごに。年若い女房共が私を誘うたが故に。此句の次に「お會ひ申す事が出来ないで」といふ意を、補うて解く意味が明かになる。

「ほごに」は、が故に、によつてなごの意。
◎後にこそ。御身の出發せられた後に。

◎かゝる事ども。北白川殿に阿佛尼の見た事や、鎌倉に旅立つた事どもをさす。

◎聞え候ひしか。耳に致しました。

◎なごやかくさも云々。どうしてかく旅にお出になるさ、お知らせ下さらなかつたのかさいふ意で、阿佛尼の豫め知らせずに出發したのを恨んだのである。「なごや」「や」は、「か」でなくてはならぬが、此時代は既に語法など混亂してゐたのである。王朝時代の文法では、「なご」さか「誰」さかいふ疑問の下には、「や」を用ゐずに、「か」を用ゐる事となつて居たのである。「たづね」さいふ語も、少し不穩當の嫌ひはあるが、旅に出るさ云うて、なぜ私をお訪ねなさらなかつたかさいふ程の意であらう。

◎ひさかたに。歌意、御身が旅に出發なさる日を聞かないのに對する恨であるならば、たゞ其一事の爲に、一通り袖の濡れる事であらう、然るに折角の御訪問に會はなかつた事であるから、私は様々につけ、悲しく、一通りならず涙に袖を濡らすことである。「ひさかたに」は、一通りさいふ意、「様々に」「一通りならず」なごいふ意の「ひさ方ならず」の反對。「旅衣」は、四句の「立つ日」さいふにつゞく句で、旅に立つ日さいふ意。「立つ（裁つ）」「袖」「恨（裏

見」共に「衣」の縁語。「せば」は、未定の條件を言ひ表はす語で、そして其終りは必ず「まし」で結ぶ事になつてゐる。

◎雪になりゆく。「消えかへり云々」の歌をさす。

◎推量りの御返言。都の空は雪になつてゆくと、推量して讀んでやつた歌に對する返事。

◎かきくらし。歌意、あたり一面に暗くして雪の降る空を、眺める物思ひにつけても、『ほどは雲居』と讀まれた御身の心情を思ひ知る事である。「程は雲居」とは、前の阿佛尼の歌の詞をとつて、『程は雲居』と讀んだ人のあはれ」といふ意にいうたもの。一説に、「都から遠い處に居られる人の哀」といふ意にさる解釋もある。

◎立つ日を知らぬ。前の「ひさかたに云々」の歌をさすのである。

◎心から、歌意、御身自身の心からして、なぜ恨むのであらう、私の旅に立つ日を送ら、知らない振りで。出發の前日お訪ねしたので、必ずお聞きになつた筈であるから、今更恨まなくともよささうなものを。「心から」は、心の底からの意でなく、單に自身の心からの意。即ち此歌は「ひさかたに云々」の歌を送つて來た先方の切なる心情を慰める爲に、反對に強壓的に詰つてやつた

もの。

一七 姉妹への音づれ

曉たよりありと聞きて、夜もすがら起き居て、都の文ども書く中に、殊にへだてなく、あはれに頼みかはしたる姉君に、をさなき人々のこと、さまざまに書きやるほど、例の浪風はげしく聞ゆれば、唯今あるまゝの事をぞ書きつけける。

夜もすがら涙もふみも書きあへず

磯こす風にひこり起きゐて。

まだ同じさまにて、故郷には、こひしのぶおとうとの尼上にも文奉るさて、磯物などはしたくも、いさゝか包みあつめて、徒にめ刈り鹽やくすさびにも

【通釋】
明日のあけがたに鎌倉を立つて行く都への幸便があるを聞いて、夜通し起きてゐて、都への手紙なご書く中で、格別親密に身に沁みて頼み合つてゐる姉君に、爲相、爲守など、わが幼い子供の身の上の事柄を色々書き書いて送る時分、いつもの如く浪風の音が烈しく聞えるから、たつた今ある通りの事實を書きつけた。その歌

夜もすがら涙も文もか
きあへず、磯越す風に
ひとり起きゐて。

また姉上と同様に、都で
私を戀しく懐しがつて居
る妹の尼君にも、手紙を
差上げるゝとして、磯邊に
ある海草や貝殻などを一
部分づゝ、僅か包み集め
て、次の歌を讀み添へた。

いたづらにめかり磯焼
くすさびにも、戀しや
なれし里のあま。

間もなくこの姉妹二人の
返事が来た。それには甚
だ感情が罩つてゐて、見
るゝ姉君は次の歌を讀み
添へてあつた。

玉章を見るに涙のかか
るかな、磯こす風は聞

こひしや馴れし里のあま

程へてこのおとゝひ二人のかへり言いとあはれにて、見れば、
姉君、

玉づさを見るに涙のかゝるかな

磯こす風はきくこゝちして。

この姉君は、中院の中將と聞えし人の上なり。今は三位入道と
か。同じ世ながら、遠ざかりはてゝ、行ひゐたる人なり。その
弟の君も、「め刈り鹽やく」とある返言、さまざまに書きつけて、
「人こふる涙の海は、都にも枕の下にたゝへて」など、やさしく
書きて、

諸共にめ刈り鹽やく浦ならば

なかく袖に波はかけじを。

く心地して。

この姉君は中院の中將と申じた人の奥方である。その中將は今は三位入道さか云うてゐる。姉君は同じ此世に生きて居りながら、俗世間を遠く離れて終うて、佛道を修行してゐた人である。その妹の尼君も、私が「めかり陶焼くすさびにも。」と書き送つた返事を様々に書きつけて「御身を戀しく思つて流す涙の繁き事は、其涙の海が鎌倉許りでなく、都でも枕の下に満ち／＼てゐる事です。」などやさしく書いて、次の歌が讀み添へてあつた。

この人も、安嘉明院にさぶらひしなり。つゝましくする事どもを、思ひつらねて書きたるも、いそあはれにもをかし。

◎曉たよりありき聞きて、明日の曉に鎌倉を出かける、都への幸便があるき聞いて。

◎都の文。京都へ送る手紙。

◎あはれに頼みかはしたる姉君、身に沁みて力に思ひ合つてゐる姉君。「姉君」さは、阿佛尼の姉。

◎をさなき人々のこと。爲相・爲守など、わが幼い子供の身の上の事柄。

◎例の。いつもの如く。

◎唯今あるまゝの事をぞ。たつた今ある通りの事柄を。此句は次の歌を説明してゐるので、即ち序になつてゐる、この次に「次の如く」といふ句を補つて解く。

◎夜もすがら。歌意、磯邊を打ち越える浪風の音を聞きながら、終夜起きてゐて、都へ送る手紙を書いてゐるさ、悲しい情が胸一杯になつて来て、袖に流れ落ちる涙も拂うて終へないし、手紙に思ふ存分の事を書きおぼす事が出来ない。「涙もふみもかきあへず」は、涙もかきあへず、ふみもかきあへず。」の意で、

もろさにもめかり鹽や
く浦ならば、なかく
袖に浪はかけじを。
この妹の尼君も安嘉門院
に伺候してゐた人であ
る。佛の教を愼しみ守つ
てゐるさいふ事ごもな、
それからそれご考へつゞ
けて書いてあるのも、甚
だ可愛相に且面白い。

「かく」に、書くの意ご、拂ふ意ごを言ひかけてある。玉葉集、「頃もうし初雁
がれの玉章に、かきあへぬものは涙なりけり。」新勅撰集「みし人のぬくたれ
髪の面影に、涙かきやるさよの手枕」などごあるは、涙を拭ふ意。

◎同じさまにて。前の、「殊にへだてなく云々」とあるのを受けて、姉ご自分ご
の間柄ご同じ状態ごさいふ意。此句は「こひしのぶ」にかかる副詞句である。
然るに此句を下の「文奉る」にかゝつてゐるものごし、前の姉君へ手紙を送つ
たのを受けてゐるが如くに解して、「姉へ手紙を送つたご同様に。」などご釋いて
ゐるのはごうであらうか。

◎故郷にはこひしのぶおさうごの尼上。故郷に於ては、自分を戀してなつかし
がつてゐる姉の尼君。「しのぶ」は、思ひ出して心になつかしく思ふごこ。「お
とうと」は、「おさひご」の音傾で、昔は、弟の意にも、妹の意にも用ゐた。
「おさ」は深く親しむ意の詞で、人の季子は父母に愛される所から「おさ兒」ご
いひ、後には兄弟の弟を「オト」とも「オトウト」ごも云うたのである。「尼上」
ごは、尼君ごさいふに同じ、尼になつてゐるので敬うて云うたもの、次に「文
奉る」ごもあるも敬ふ心である。

◎磯物。磯邊にある物。

◎はしんく。喘々で、一部分の意。

◎包みあつめて。幾種か集め包んで。此句の次に、「書き添へた歌」といふ意の句が省略されてゐる。

◎徒に。歌意、空しく海藻を刈り取つたり、鹽を焼いたりする慰みごこにつけても、住み馴れた我故郷の尼君が戀しく思ひ出されることである。「海藻」は、和海藻・稚海藻・等、海藻の總稱。「すさび」は、慰みごこ、即ち「進み」の義で心の進むにまかせてする事をいふ、「手すさび」「口すさび」などいふは、手口の進むに任せてする意。「馴れし里」は、故郷のこと。「あま入」は、海士人の意であるが、尼の語が海士に其音の通じる所から、尼人の意を含めて、妹の尼君の上をさしてゐるのである。

◎程經て。日數が經過して。

◎おまゝひ。弟^{ナトエ}興兄の意で、兄弟姉妹のこと。

◎いさあはれにて。甚だ感情が籠つてゐて。

◎姉君。姉君の書き添へ給へる歌さいふ意。

◎玉づさ。歌意、御手紙を見るにつけても、その上に涙の注ぎかゝる事であるわい、御身が「磯こす風に」と讀んで寄越された、其磯邊を打ち越える浪風の

音を、都に居る私が現に聞くやうな心持がして。「玉づさ」は、梓の木に玉を
着けたもの、音は使に此玉梓を、音信の志を表はすしるしとして持つて行か
せたもので、随つて「玉梓の使」「玉梓の妹」など言ひつゞける枕詞に用ゐ、後
に手紙を交す世となつてから、手紙は専ら使の持ちゆくものである所から、
消息文のこゝをも玉梓といふやうになつたもの。また圓珠庵雜記には、「ふみ
を玉づさといふは異名也、萬葉には使を玉梓といへり、タマアツサき云ふべ
きを、マニアの響あれば略せるなり、あづさは萬葉十三に、弓をあづささよ
めり、弓は矢を放ちやる具なれば、思ふ心を文して言ひやるをたさへて、ほ
むる詞を加へて、玉梓とはいふ也、使をいふも此心に同じ。」とあり、殘月抄
には「師説に、玉梓は玉豆志の通音なり、字鏡艸部に、蕙苺子ハ玉豆志、苺ハ玉
豆志など見え、古語拾遺には、古語以レ蕙曰ニ都須ツスとあり、本草和名、和名
抄などには、都之太末ツシダマとよめり、今の世にもスダマといふ物にて、其實一
むらに附きてなるが故に、玉豆志の附合ツカヒとつゞけたり、妹さつづけしは、相し
たしむ心もてつゞけしなり、さてやがて使の事にも、又使は文もて行きかよふ
ものなれば文の事にも轉じていへり。」とある。「涙のかゝる」は、涙の手紙の
上にそゞぎかゝるをいふ。

◎中院の中將。未詳。

◎上。本來は天子の尊稱であるが、後に轉じて公卿の妻室をいふ。一説に「上」を身の上の意にとつて、「中院の中將」を姉君の呼名の見る解もあるが、さうではなからう。

◎今は三位入道さか。其「中院の中將」は、今は三位入道さか云ふその意。「三位入道」さか、三位で出家せられたから、さういふのである、爰も「三位入道」は姉君の出家後の名であること説く人もあるが、女を三位入道といふ事は聞きされない、矢張、夫なる中院の中將の出家後の名と見るべきであらう。要するに此の句は「中院の中將」の説明で、本文の意は「中院の中將と聞えし人の上なり」から直に「同じ世云々」につゞくべきであらう。

◎同じ世ながら云々。此句は姉君の事を述べたもの。一寸考へるさ、上の三位入道を夫の中院の中將の事とするさ、此句も矢張中院の中將の事であるやうに解せるが、然し次の「その弟の君も」とある代名詞の意から考へるさ、此句は姉上の身の上を述べたものである。「同じ世ながら」は、同じ此世に生きて居ながら。「遠ざかりはて、」は、俗世間と脱離して終つて。「行ひ」は、佛道修行の意。

◎その弟の君。姉君の妹君、即ち前に「おさうこの尼上」さあるをさしていふ。
◎め刈り鹽やく。「徒にめ刈り鹽やくすさびにも云々」の歌かきす。

◎人こふる涙の海は。阿佛尼を戀しく思うて流す涙の繁き事は。「涙の海」は、
涙の繁き事を海にたさへたので、前に「めかり鹽やく」と海邊の事を讀んであ
る歌に對して、特に「海」というたもの。是は手紙の文句である。

◎都にも枕の下にたへて。鎌倉の海に對して、都にも涙の海が枕下に滿ち／＼
てさいふ意。夜中に寢てゐても戀しさの爲に流す涙の乾かぬことを面白く言
うたのである。

◎やさしく書きて。優雅に書いて、次の歌を添へてあつた。

◎諸共に。歌意、御身と私が共に海藻を刈り鹽を焼く海邊であるならば、
たさひそれが波の打寄せる海邊であつても、却つて袖に波はかけまいのに、
然るにかうして御身と別れて暮すことであるから、追慕の情に袖を濡らすこ
とである。阿佛尼も妹も共に尼である所から、それを海士の意にさりなして
讀んだもの。「浦」は、別に何處の浦さいふ一定の浦をさすのではなく漫然と
云うたもの。「なか／＼」は、元來半分善くて半分悪いさいふ意味で、なまな
か、なまばんどゆく、なまじひ、なごいふ意、それから轉じて「反つて」とい

ふ意に用ゐる。萬葉集、「なかく、人にさあらずば酒壺に、なりにてしかも酒に染みなむ。」とあるも、却つての意。爰も、浦邊に居れば波に袖を濡らすのが普通であるが、却つてさいふ意。「波はかけじを」は、涙に袖を濡らすことを、浦の縁語に「波」と云うたもの。「を」は、前後の句を連結して、前の句が原因となり、後の句が反對の結果となり、又は意外に出る意を示す助詞で、爰も、然るに遠く離れて居る事であるから、涙に袖を濡らすことであるといふ意を言外に含めてゐる。

◎この人も。前に、久我太政大臣の女が安嘉門院に仕へてゐるとあるを受けて「この妹も」というたもの。

◎つゝましくする事ども。遠慮し慎しんでゐる事どもの意で、佛の道を慎み守つてゐる事をいふ。諸註は、「人に隠し包む事柄」の意に解してゐるが、どうであらうか。

◎思ひつられ。様々のことを、つきとくに思ひつゞけること。

◎あはれにもをかし。可愛相に且奥床しい。

一八 春の音づれ

【通釋】

まもなく年が暮れて春にもなつた。霞のかゝつてゐる景色がほんやりとして、學東ない事には、谷の入口は隣であるけれど、鶯の初音すら聞えて來ない。馴れ親しんだ都の春の空は、たまらなく懐しく、昔都に居た折の事が戀しく思はれる時丁度、又都への幸便があるさ告げた人があるから、いつもの人々の許への手紙を書く中で、「十六夜の月や後れの形見なるべき。」といふ歌を讀んで送り越された人の御許へ、
朧なる月は都の空ながら、まだ聞かざりし波

程なく年くれて、春にもなりにけり。霞こめたるながめの、たご／＼しさ、谷の戸は鄰なれども、鶯の初音だにも、音づれこず。思ひなれにし春の空は、しのびがたく、昔のこひしき程にしも、また都のたよりあり」と、告げたる人あれば、例の處々への文かく中に、「いさよふ月」と音づれ給へりし人の御許へ、

おぼろなる月は都の空ながら

まだ聞かざりし波のよる／＼。

など、そこはかこなき事どもを、書き聞えたりしを、たしかなる所より傳りて、御返言いたう程も經ず、待ち見奉る。

寐られじな都の月を身にそへて

なれぬまくらの波のよる／＼。

のよるく。

など読んで、さりさめもない事どもを書いて申上げたのを、その御返事が確實な人の手から傳つて来て、ひさう時間を経すに待ち受けて見申す。それには次の歌があつた。

れられじな都の月を身に添へて、なれぬ枕の波のよるく。

權中納言の君は熱心に歌をおよみになる人であるから、此間手ならひの爲に讀んで書きつけた歌など、書き集めて差上げる。その手紙の文句には「當地は海に近い所であるから、濱邊に出て貝など拾ふ時も、名草の濱でない

權中納言の君は、まぎるゝことなく、歌をよみ給ふ人なれば、このほど手習にしたる歌ども書きあつめて奉る、海近き所なれば、貝など拾ふをりも、「名草の濱ならねば、猶なきこゝちして」など書きて、

いかにしてしばし都を忘貝

波のひまなくわれぞ碎くる。

知らざりし浦山風も梅が香は

みやこに似たる春のあけぼの。

花ぐもりながめてわたる浦風に

かすみたゞよふ春の夜の月。

あづま路の磯山松のたえまより

波さへ花のおもかげにたつ。

から矢張貝がない、随つて慰む甲斐のない心持がして。」など書いて、

いかにしてしばし都を忘貝、涙のひまなく我ぞ碎くる。

知らざりし浦山風も梅が香は、都に似たる春の曙。

花曇ながめて渡、浦風に、霞たゞよふ春の夜の月。

あづま路の磯山松のたえまより、波さへ花のおもかげに立つ。

都人思ひも出でば東路の、花やいかにさ音づれてまし。

なごいふ歌を、たゞ筆の進むがまゝに、心にまか

都人おもひもいではあづま路の

花やいかにさ音づれてまし。

など、たゞ筆にまかせて、思ふまゝに、いそぎたる使とて、書きさすやうなりしを、またほご經ずかへり言したまへり。「日頃のおぼつかなさも、この文に霞晴れぬる心地して」などあり。

頼むぞよ汐干にひろふうつせ貝

かひある波の立ちかへる世を。

くらべ見よ霞のうちの春の月

晴れぬ心は同じながめを。

白波の色もひとつにちる花を

思ひやるさへ面影に立て。

せて書き記し、急ぐ使だ
さいふので、その手紙の
さまは、中途で書くのを
止めたさいつた體裁であ
つたのを、また間もなく
御返事を下さつた。それ
には、「これまでの氣がか
りな心持も、此文で霞の
晴れたやうに晴々とした
感じがして。」など書いて
ある。そして次の歌が添
へてあつた。

頼むぞよ潮干に拾ふ空
せ貝、かひある波の立
ちかへる世を。
くらべ見よ霞の内の春
の月、晴れぬ心はおな
じながめを。
しら波の色も一つに散
る花を、思ひやるさへ

あづま路の櫻を見ても忘れずは

みやこの花を人や問はまし。

- ◎春にも云々。建治四年の春になつたのをいふ。
- ◎霞こめたるながめ。霞の一面にかゝつてゐる景色。
- ◎たゞくし。たゞは、道を探し求めて行く時のやうな、不明瞭な不安な様をいふ語で、「たゞくし」は、判然としないこと、不安な心持などにいふ。爰は一方には、霞がかゝつて朧ろになつてゐるのをいふさ共に、一方には、鶯の鳴く音の聞えぬのを覺束なく思ふ意を表はしたもので、要するに上の句と下の句との兩方にかけて用ゐたもの。
- ◎谷の戸。谷の入口。昔は、鶯は冬の間を谷間の古巢に暮し、春が来るさ谷から里に出て来るものださ考へて居た。後撰集、「谷寒かいまだすだ、ぬ鶯の、鳴聲わかみ人のすさめぬ。」後拾遺集、「山高み雪ふるすより鶯の出る初音はけふぞ聞きつる。」などあるのは、皆さう言つた心持から讀んだもの。
- ◎思ひなれにし春の空は。心に馴れ親しんだ都の春の空は。
- ◎しのびがたく。我慢の出来ない程に戀しい、たまらなく戀しい。「しのびがた

面影にたつ。
東路の櫻を見ても忘れ
ずば、都の花を人よこ
はまし。

く戀しく」さあるべきであるが、下に「昔のこひしき」さある所から省略した
もの。

◎昔のこひしき程にしも。昔都に居た折の事が戀しく思はれる時丁度。

◎例の處々。今迄便りのある度に。いつも手紙をやつた人々。「御匣殿」「姉君」

「おさうこの尼上」などをさす。

◎いさよふ月さ音づれ給へりし人。「ゆくりなくあくがれ出でし十六夜の月や後

れぬ形見なるべき。」といふ歌を讀んで送つて寄越した人。第百廿二頁參照。

◎ほろなる。歌意、朧ろに照る月の眺めは、此土地も都の空と同様であるもの

ゝ、まだ都に居ては聞かなかつた波の打寄せる響をば、毎夜々々耳にする事で

ある。「よるく」に、寄る意と夜の意とを兼ねてある。

◎そこはかさなき事。あてごもない事。さりさめのない事。「そこはかさなく」

は、其處をはかりさなく、其處を標準といふ事なくの意で、それと體に定まつ

てゐる所のないのをいふ、口語の、ヤタラニ、何ト云フ事ナク、アテドナク、

なごいふに同じい。

◎書き聞えたりしを。書いて申上げたのを。

◎たしかなる所より傳りて。都からの返事が確かな人から自分の手許に傳つて

さいふ意。即ち「御返言たしかなる所より傳りて、いたう程も經ず待ち見奉る。」さいふ意の所である。

○いたう程も經ず。ひびう時間も經過しないで。大層月日も過ぎないで間もなくの意。

○待ち見奉る。待ちつけて見申す。此句の次に、「その歌」さいふ句が省略されてゐる。

○寐られじな。歌意。都に照るさ同じ月を身から離さずに眺めて、追懷思慕の情にくれながら、更に波の打寄せる響を聞きつゝ、寢る、馴れぬ旅寢の夜毎は安眠の出来ない事でせうよ。「じ」は打消さ推量さを兼ねてゐる意の助動詞。「な」は感動詞。「身にそへて」は、身につけて離さないこと、眺める意。「なれぬまくら」は、馴れない旅寢のこと。

○權中納言の君。爲教の女。爲兼の妹。爲子のこ。第百廿七頁參照。

○まざるゝことなく。心のまざるゝことなくの意で、熱心に、専心になごいふ意。

○このほど。この頃。

○手習にしたる歌。手習ひの爲に讀んで書きつけた歌。手すさびに書きつけた

歌。

◎海近き所云々。歌の詞書である。

◎名草の濱。紀伊國海草郡にある。貝の名所。「名草」に「慰む」意を言ひかけて「名草の濱ならねば」は、貝の名所である名草の濱でないからの意と、慰むことでないからの意との兩意を含んでゐる。

◎なきこ、ちして。「貝の無い心持がして。」の意と、「甲斐のない心持がして。」の意を含んでゐる。

◎など書きて。など詞書をして。

◎いかにして、歌意、どうぞして暫時都の事を忘れようと思ふが、忘れる事が出来ないうで、それが爲に恰も波の暇なく打寄せるが如く、絶えず自分は心が碎けて思ひ亂れる事である。「忘貝」は、貝の一種であるが詳かでない、一説には、心の憂さを忘れる爲に拾ふ貝をいふこもいふ。昔から「忘れる」といふ語の序に用ゐられ、或は直に「忘れる」といふ意にも用ゐられて、歌にも澤山に讀み込まれてゐる。爰も「忘れる」といふ意。「波のひまなく」は、波の間断なく打寄せるが如く絶えずいふ意。「波」に「無み」の意を言ひかけて、「忘れる事の無いが爲に」と上を受け、更に、「波のひまなく」と下につゞくのである。「わ

れぞ碎くる」は、自分の心の碎けるのをいふので、都を戀しく思ふ爲に思ひの亂れるのをいふ。「碎くる」は、波の縁語。

◎知らざりし。歌意、今までは自分の知らなかつた浦邊を吹く山風も、それが吹き送つて來る梅の香は、都のそれと似てゐる春の曙であるよ。

◎花ぐもり。歌意、花曇の空を物思ひに洗んで眺めつゞけてゐると、吹き渡る浦風の爲に、霞が漂うてゐる春の夜の朧月よ。「花ぐもり」は、春の花咲く頃霞がこめて長閑かに曇つてゐるのをいふ。「ながめ」は、御思ひに洗む意と打眺める意とを兼ね、「わたる」は、「ながめてわたる」(眺めつゞける意)といふ意と、「吹き渡る浦風」の意とを兼ねてゐる。

◎あづま路の。歌意、自分は都の事が常に懐しく思ひ出されて忘れられないのであるが、また其上に、東國の海邊の山にある松の樹の間から見える波までが、都の花の様に眼に映つて、一層なつかしい事である。「磯山松」は磯邊の山に生えてゐる松、一本には、「磯山風」とある。「波さへ」は、都の事が常に思ひ出されてゐる其上に波までがこいふ意。「おもかげ」は、眼前にないものが恰も眼前にあるかのやうに見えるのをいふので、轉じて、顔のかたち・姿・様子などの意にも用ゐる。「花のおもかげにたつ」とは、花のやうな姿になつて見

えることで、花のやうに見えるのをいふ。「花」は都の花の意。

◎都人。歌意、わが懐しい都人よ、若しも御身が私をなつかしいと思ひ出すならば、其折は、東國の櫻花は今はどんなですかと尋ねてほしい。「都人」は、都に居る人、爰は此歌を送る相手をさしてゐる。「花」は櫻花のこゝ。「てまし」の「て」は現在完了の助動詞「つ」の將然形。「まし」は、希望の意を含む助動詞。

◎思ふまゝに。此句の次に、「書き記し」といふ句が省かれてゐる。

◎いそぎたる使さて。急いで出發しなければならぬ使だと云うて。

◎書きさすやうなりしを。書くのを中途で止めたといつた體裁であつたのに。書く事を十分に書き盡してない、未完の體裁であつたのに。

◎日頃のおぼつかなさも。旅の空に、どうして暮して居られる事かと案じてゐた、今日までの氣がかりな事も。次の歌の詞書の文句である。

◎霞晴れぬる心地。霞の晴れたやうな晴々した心持。氣がよりの心持を霞にたとへ、其心の晴れたのを、斯く言うたもの。

◎頼むぞよ。歌意、頼みに思うてゐる事であるよ、訴訟に勝つて、鎌倉にまで下られた効果を收められた御身が、再び都に歸られる時を。「汐干にひろふうつせ貝」は、「いかにしてしばし都を忘貝」とある歌の縁でかく言うたもので

「かひある」と言はん爲の序。「うつせ貝」は、虚石花貝ウツセガヒで、石花貝の實のなくなつて虚ウツロになつたもの、故に「實無」と言ひつゞける枕詞に用ゐてゐる。「石花貝」は、海岸の石に附いて生じ、春の頃、紅の肉を吐出すといふ。「かひある波」は、「汐干」の縁で「波」と言つたもの、阿佛尼をさしてゐる、訴訟に勝つて、遠く鎌倉にまで下つた甲斐のある御身がといふ意。「立ちかへる」は、「波」の縁語で、阿佛尼の再び都に歸るのをいふ。

◎くらべ見よ。歌意、霞の中にかゝつて居る春の月の朧ろな姿と、御身の上を色々と思ふ情に結ばれて、物思ひに沈みつゝ、晴々とした私わたしの心とは同じ有様であるのを、比較して御覽下さい。「くらべ見よ」は、月と私の心とを比較して御推量下さいといふ意。「晴れぬ心」は、阿佛尼の身の上を思つて、訴訟の前途に對する心配やら追慕の情やらで結ばれてゐる心。「ながめ」に、物思ひの意と、有様の意とを兼ね含めてゐる。是は、「花ぐもり云々」の歌に應じた返歌。

◎白波の。歌意、御身は磯邊、山の松の間から見える波までが都の花のやうに見えるさ仰つしやるが、其白波の同じ色に散る沈頭を都に居て想像する私の姿までが、御身の眼の前に面影さなつて見えて欲しい。即ち、前に「あづま

【通釋】
三月の末頃、初期の瘧病
であらうが、隔日に發熱

路の云々」さある歌に對しての返しで、波までが都の花のやうに見えるところから、それならば其波を想像してゐる私までが而影に立つて欲しいと答へたもの。諸註は下の句を、「想像するだけでも、白波の姿が眼の前にちらつく」といふやうに解してゐるが、それでは「さへ」といふ助詞の意味が程かでない、それに「立て」と命令形に述べてゐる心持が明かに解かれてゐないと思はれる。

◎あづま路の。歌意、御身は「都人思ひも出でばあづま路の云々」と仰らせれたが、矢張御身の方でも、東國の櫻を見ても都の事を忘れないならば、都の花はごうであるか、御身が尋ねるであらうか。「都人云々」の歌に對して竹篋返したのである。「人」は阿佛尼をさす。「や」は疑問の助詞。「まし」は推量の助動詞。

一九 わらはやみ

やよい末つ方、わかろくしきわらはやみにや、日ませにおこること、二たびになりぬ。あやしうしをればてたる心地しなが

することが二度になつた奇態に氣力のなくなつて終つた心持がしながら、三度目の熱の起る管の明け方から起きてゐて、佛前で專心に法華經を讀んだ。その幼驗であらうか、綺麗サツパリと癒えた時丁度、都への幸便があるから、瘡病に罹つた所が法華經を讀んだ効驗で全く癒えて終つたなどいふ事を都へも告げてやる序でに、いつもの權中納言の御許へ「旅先で病氣に罹つて命も危険な程の頼りなく心淋しいのを、然し佛法の効驗でか、今日までは命をつなぎこめて。」と書いて次に、

ら、三たびになるべき曉より起き居て、佛の御前にて心を一つにして法華經を讀みつ。そのしるしにや、名残もなくおちたる折しも、都のたよりあれば、かゝる事こそなど、故郷へも告げやるついでに、例の權中納言の御もとへ「旅の空にて、危きほどの心細さも、さすが御法のしるしにや、今日までは懸げとどめて」と書きて、

いたづらにあまの鹽やく煙とも

誰かは見まし風に消えなば。

と聞えたりしを、驚きて返言とくし給へり。

消えもせじ和歌の浦路に年を経て

光をそふるあまの藻しほ火。

御經のしるし、いとたふとくて、

いたづらにあまの鹽焼く煙とも、誰かは見まし風に消えなば。

と讀んで申上げたのを、先方では屹驚して返事を早速下さつた。その歌。

消えもせじ和歌の浦路に年を経て、光を添ふるあまのもしほ火。

私自身も法華經の御利益が甚だ貴くて、讀んだ歌。

頼しな身に添ふ友となりにけり、妙なる法のはなのちぎりは

頼しな身にそふ友となりにけり

たへなる法の花のちぎりは。

◎やよひ。三月の異名、「彌生」と書く、此月は草木のいよ／＼生ひ茂る月であるから、いよ／＼おひ月といふべきを誤つて、「やよひ」というたのだといふ。

◎末つ方。末つ頃。

◎わか／＼しき。輕いといふ意であらうが、或は初期といふ意か。一本には、「わな／＼しきとある」然らば、震へるといふ意であるが、それも面白い言ひ方でない。

◎わらはやみ。今いふおこりのこと。和名抄、瘧病、説文云、瘧音虐、俗云衣夜美、一云和良波夜美、寒熱並作、二日一發之病也。

◎日まぜ。隔日。一日おき。

◎あやしう。平素とは違つて。奇懸に。爰は世の常でない意。

◎しなればたる心地。氣力の無くなつて終うた心持。「しなれ」は、荒折サビオレの意であらうかといふ、荒は心荒ココロアラシなといふ荒で、損ソコれ全からぬ意、故に「しなれ」は損はれ傷むこと。

◎法華經。妙法蓮華經の略。

◎しるし。効驗。

◎名残もなく。残つてゐる形跡もなく。綺麗さつぱりさ。「名残」は「波残り」の意で、海上に風が吹いて波が立ち、風のやんだ後までも猶浪の鎮まらずに立つてゐるのをいひ物事のすんだ後に、なほその氣の残つてゐるのをいふ。

◎おちたる折しも。癒えた時丁度。「おつ」は全快する意。

◎都のたより。都への幸便。

◎かゝる事こそなご。「かゝる事こそありけれなご」の意、瘧病に罹つた所が、法華經を讀んだしるしがあつてか今では全快して終つたなごといふ意。

◎旅の空にて云々。次の權中納言の許にやつた歌の詞書の文句。「旅の空」は、旅の途中即ち旅先なごいふ意。

◎危きほどの心細さも。命も危険なほどの心淋しく頼りないのをも。

◎さすが。危いさは言ふものゝ。

◎御法。佛法。

◎懸けさよめて。命をつなぎさめて。

◎いたづらに。歌意、私が無益に無常の風に誘はれて死ぬならば、其茶毘の煙

をば、海士の鹽を焼く煙ほごにも、誰が見ようぞ見はしまい。「いたづらに」は、「風に消えなば」にかゝるので、訴訟の本意をも遂げずに無駄にさいふ意。「風に消えなば」は、無常の風の爲に死ぬならばの意。

◎消えもせじ。歌意、死ぬやうな事はありませんまい、和歌の道に多年關係して來て、益々斯道の譽を身にそへてゐる御身は、「消えもせじ」は、「藻しほ火」の縁語に用ゐたもので、死にもしまいさいふ意。「和歌の浦路」は、歌道さいふ事を地名に言ひかけて文飾したものだ。「光をそふる」は、光彩をそへる、譽を高くするなごいふ意。「あまの藻しほ火」は、和歌の浦とある縁からさ、前に「あまの鹽やく」とある句を受けてからさで、阿佛尼をさして言うたもの。「あま」に、尼と海士との兩意を言ひかけてある。さて一首の中の、「消え」「光」「あま」は共に縁語。

◎御經のしるしいさたふさくて。阿佛尼自身も法華經の御利益が甚だ尊く感じてさいふ意。此句の次に、「讀める歌」といふ句が略されてゐる。

◎頼しな。歌意、力強い事であるわい、妙法蓮華經の廣く衆生を濟度して下さるさいふ有難い誓は、我身を離れずにつき添うてゐて、お救ひ下さる友となつて終つた。「な」は感動詞。「たへなる法の花」とは、妙法蓮華經をさすので、

其表面の字義を國語に譯して言うたもの。「ちぎり」は、廣く衆生を濟度しよ
うとの誓約。

二〇 時鳥の初音

卯月の初つ方、たよりあれば、又同じ人の御許へ、こその春夏
のこひしさなど書きて、

見し世こそ變らざるらめ暮れはて、

春より夏にうつるこそも。

夏ごろもはやたちかへて都びと

今や待つらむ山ほとぎす。

その返言あり。

草も木もこそ見しまゝに變らねど

【通釋】

四月の初め頃、都への幸
便があるから、また同じ
權中納言の御許へ、去年
の春夏の事が戀しく思は
れる事など書いて、讀み
添へた歌。

見し世こそ變らざるら
め暮れはて、春より
夏にうつる梢も。
夏衣はやたちかへて都
人、今や待つらむ山ほ
とぎす。

この御返事がまた来る。
それには、

草も木もこそ見しまゝ
に變られど、ありしに
も似ぬ心地のみして。

さあり、また「さて都人
は今や山時鳥の鳴くのを
待つであらうこの御尋ね
は」と書いて次に、

人よりも心つくして時
鳥、たゞ一聲を今日ぞ
聞きつる。

と讀み、更に、
「實方の中將が五月まで
時鳥の音を聞かないで、
陸奥の國から、都には聞
きふるすらむ時鳥、關の
こなたの身こそつらけ
れ。」とか申された事が御
座いますのです。今御身

ありしにも似ぬ心地のみして。

さて時鳥の御たづねこそ、

人よりも心つくしてほとゝぎす

たゞ一聲をけふぞきゝつる。

「實方の中將の、五月まで時鳥きかで、みちのくにより、『都に
は聞きふるすらむ時鳥、關のこなたの身こそつらけれ。』とか
や、申されたる事の候ふなる。そのためしと思ひ出でられて、
この文こそ殊にやさしく。」など書きておこせ給へり。さるほど
に、卯月の末になりければ、時鳥の初音ほのかにも思ひ絶え
たり。人づてにきけば、比企ひきの谷やといふ所に、あまた聲鳴きける
を人聞きたりなどいふをきゝて、

しのびねは比企のやつなる時鳥

雲居に高くいつかなのらむ。

など、獨り思へども、そのかひもなし。本より東路は、みちの奥まで、昔より時鳥稀なるならひにやありけむ、一すぢに、又鳴かずばよし、稀にも聞く人ありけるこそ、人わきしけるよと、心づくしにうらめしけれ。

◎卯月。四月の異名。卯花月の意で、此月は卯の花の咲く月であるから、さういふのである。

◎同じ人。權中納言の君をさす。

◎この夏春のこひしさ云々。去年の春や夏の時節が戀しく思はれる事など手紙に書いて。即ち昨年の春夏は、阿佛尼も京都に居つたのであるから、權中納言の君なども常に相會うて語りうのであるが、今は遠く都を離れて旅の空に日を送るが爲に、なつかしい物語をも交換するが事が出来ない、随つて昨年の春夏の頃、御身達と共に楽しく語り合つた其折の事が戀しいとの意、此句の次に讀み添へる歌といふ意の句が省略されてゐる。

からの『夏衣はやたちかへて都人云々』の歌は、其實方の昔の跡に似てゐると思ひ出されて、此文こそ格別優雅に感じます。』など書いてお寄越しになつた。さうある間に四月の末になつたから、時鳥の初音は、微かに聞かうと云ふ事すらも斷念した。人の噂に聞くと、比企の谷といふ所に澤山に鳴いてゐたのを、人が聞いたなどいふ事を耳にして、

忍びぬは比企の谷なる時鳥、雲ゐに高くいつか名のらむ。

など、獨り心の中に思ふけれど、そのしるしも

ない。
元來、東國は陸奥の國までも、昔から時鳥の稀な習はしであつたらうか。一向また鳴かないのなら、それでよい。然るに稀にでも鳴くのを聞く人のあつたのは、時鳥が人を區別して鳴くのであるわいと思はれて、辛氣臭く恨めしい。

◎見し世こそ。歌意、春が暮れて終うて、夏の期節に移る木々の若葉の眺めも、晚春初夏の其他の風情も、私が去年都に居た時の様子は全部變らないであらう、然るに私は東國の旅に居る身であるから、昔見た都の様子が懐しく思ひ出される事である。「見し世」は、「見し世の様」といふ意、即ち、昔見た時の有様の意。

◎夏ごろも。歌意、都の人は最早夏衣を新調してそれを着ながら、今は山時鳥の鳴くのを待つのであらう、さても美しい事よ。「夏衣」は、夏の時節に着る單の薄い衣。「たちかへ」は布帛を裁ち切つて作りかへる事。「都びこ」は、權中納言をさす。「山ほととぎす」は、單に「ほととぎす」といふに同じい、さて「時鳥」は、立夏の日から鳴くものだから考へられてゐた、萬葉集十八、四月一日宴歌に、「をりあかし今宵は飲まん時鳥、明けん朝は鳴きわたらんぞ。」などある。「夏ごろも云々」と讀んだのは、古昔は毎年四月初日に冬衣を脱して夏衣を着、十月初日に夏衣を脱いで冬衣を着始める例で、即ち夏衣と云うてゐたからである。

◎草も木も。歌意、都は草も木も昨年見た通りの趣で變らないけれど、御身が都を遠く離れてお出でになるが爲に、私の境遇は以前とは違つてゐる心持ば

かりして、寂しい事である。此歌は「見し世こそ」の歌に對する返歌である。「ありしにも似ぬ」は、以前の有様にも似ない、以前の有様のやうでもないといふ意、阿佛尼の都に居らなくなつたのをさしてゐる。

◎時鳥の御たづねこそ。「夏ころも云々」さある歌を受けてゐる文句で、句の意は直に次の「人よりも云々」の歌につゞくのである、然るに諸註には、「都では時鳥を待つて居るだらうとの御尋れですが、それについては、かうお答へを致します。」と解いて、此句の次に或文句の省略されてゐるものと見てゐるが、それは誤。本文の意から歌の意につゞいてゐるやうな書き方は源氏物語などに澤山ある。

◎人よりも。歌意、表面の意は、他の人々よりも、色々を氣を揉んでから、やつと時鳥のたつた一聲を今日聞いた事であるといふので、其裏面には、人よりも心を盡して、やつと今、御身からの時鳥の歌を頂くことが出来た事であるといふ意を含んでゐる。

◎實方の中將。藤原實方のこと、右近衛中將であつたから、「實方の中將」といふ。一條院の御時、行成卿と争ひ、其冠を打落した罪で奥州に流され、名取の笠島道祖神の前を過ぎた折、乗つてゐた馬が俄かに墮れた爲に、實方も共

に死んで終つた。其亡靈が雀となつて王城に歸り、宮中の臺盤に入つて鳴いたと云ふ事である。和歌に堪能であつたので聞えてゐる。此句から以下「この文こそ殊にやさしく。」までは矢張權中納言からの手紙の文句である。

◎五月まで時鳥きかで云々。續後撰集夏、「みちの國の任に侍りけるころ、五月まで時鳥きかざりければ、都なる人に便につけて申しつかはしける、藤原實方、『都に聞きふりぬらむ時鳥、關のこなたの身こそつらけれ。』」とあるのをいふ。「五月」は、早苗月の義で、此月に苗を植ふる事が盛であるから、斯くいふのである。

◎みちのくに。陸奥國。

◎都には。歌意、都では時鳥の鳴く聲をば飽く程聞いて珍しくもない事であらう、然るに自分は未だに聲も耳にしないのであるが、逢坂の關の此方にある我身の上こそつらく感じる事である。「聞きふるす」は、サンザ聞いて珍しくなくなること。此句は續後撰集には、「聞きふりぬ」がある。「關」は逢坂關をさすのであらうか、或は箱根關の意か。「關のこなた」は、陸奥の方を基として言うたもの。

◎申されたる事の候ふなる。一本に「なる」を「な」とある。斯る場合の「な」は、

感動の助詞である。

◎そのためしと思ひ出でられて。阿佛尼からの「夏ころも云々。」の歌が、實方の「都には云々。」と讀んだ昔の跡と同様であると思ひ出されて。

◎この文。阿佛尼からの文。

◎殊にやさしくなど。さりわけ優雅に感じるなどぞ。「やさしく」の次に、「侍れ」などいふ語が省略されてゐる。

◎さるほごに。「然有る程に」の意で、本来は「さうある間に」といふ意であるが、後世は其意も極めて軽く、俗にいふ「さて」といふ程の意で發語のやうに用ゐられるやうになつた。

◎ほのかにも思ひ絶えたり。微かに聞かうといふ事も断念した。即ち四月の初めの間は時鳥を聞かうとも思つてゐたが、四月も末になつたから、最早鎌倉では鳴かないものと諦めて、微かに聞かうといふ考すらも思ひ切つたといふ意。

◎人づて。人の噂。人のつたへ。

◎比企の谷。鎌倉の地名。比企判官能員の住んで居た所から、此名が出来たものだといふ。今日の妙本寺のあたりである。

◎あまた聲。「數聲」とある文字を國語によんだもの。

◎しのびれは。歌意、表面の意は、忍音に鳴く其聲は低い、比企の谷にある時鳥は、何時になつたら空高く聲を張り上げて鳴くのであらうかといふので、裏面に、細川庄を横領された事について、今日はひそかに不平を抱いて泣いてゐるのであるが、何時になつたら、訴訟の本意を達して、公然と横領の不都合を唱へる事が出来ようかといふ意を寓してゐる。「しのびれ」は・ひそかにこつそりこ鳴く低い聲で、時鳥の本當に鳴くのは五月であるといふ所から四月に鳴くを「しのび音」といふ。「比企」に低い意を言ひかけ「忍音は低い比企の谷」とつづけたもの。「名のる」は、名を知らせること、爰は時鳥の鳴くことにいふ。

◎そのかひもなし。さう思ふしるしもない。時鳥の事ばかりでなく、わが訴訟の事にまで亘つて廣く嘆いたもの。

◎みちの奥。陸奥國。

◎昔より時鳥稀なるならひ云々。實方中將の故事からして、斯く思ひ合せて言つたもの。

◎一すぢに又鳴かずばよし。時鳥の鳴聲の聞えないのも、此土地では時鳥が全

然また鳴かないのならば、それでよいといふ意。「一すぢに」は、ひたすら、全く、専らなどの意、

◎人わきしけるよき。時鳥が人を區別したわいと思はれて。即ち、稀にでも時鳥の鳴くのを聞く人があつたのは、時鳥が人に區別をつけて、聞かせる人さ聞かせない人さを作るのだと考へたのである。「人わき」は、人の區別。

◎心づくし。氣を揉むこと、辛氣臭いこと。古今集、「木の間より洩れ来る月の影見れば、心づくしの秋は來にけり。」

一一一 新中納言よりの音づれ

【通釋】
また和徳門院に仕へてゐる新中納言と申す方は、京極の中納言定家の御娘で、「深草の前の齋宮」と申した御許に、父の中納

又、和徳門院の新中納言ときこゆるは、京極の中納言定家の御娘、深草の前の齋宮と聞えしに、父の中納言の、まゐらせおきたるまゝにて、年經たまひにける。この女院は、齋宮の御子にし奉り給へりしかば、傳りてさぶらひ給ふなり。「うき

言が奉つて置いたままで長く年を経過なかつた。この和徳門院は、その齋宮の御子供にし申しなかつたから、新中納言の君も女院の方にお移りになつて、其處に伺候なさるのである。「濁り江にうき身こがるる藻刈舟、はてはゆき來の影だにも見ず。」なごいふ歌を、お詠みになつた民部卿の典侍の姉でいつしやる。本來この人は然るべき名のあつた人の子で、「拙い歌を讀んで、他人には聞かれまい。」と、強ひて慎しんで、歌を讀まなかつたけれど、遠い旅先にゐる私の身の上の、氣がかりな

身こがるる藻刈舟」なごよみ給へりし民部卿の典侍のせうとにてぞおはしける。さる人の子にて、「あやしき歌よみて人には聞かれじ」と、あながちにつゝみ給ひしかど、遙なる旅の空おぼつかなきに、あはれなる事ども書きつゝけて、

いかばかり子を思ふ鶴の飛びわかれ

ならばぬ旅の空になくらむ。

と、文の詞につゞけて、歌のやうにもあらず、書きなし給へるも、人よりはなほざりならずおぼゆ。御返言は、

それゆゑに飛び別れてもあしたづの

子を思ふ方は猶ぞかなしき。

と聞ゆ。そのついでに、故人道大納言草の枕にもたちそひて、夢に見えさせ給ふ由なご、この人ばかりやあはれもおぼさむ

爲に、感荷の深い事など
書きつけて、

いかばかり子を思ふ鶴
の飛びわかれ、ならば
ぬ旅の空になくらむ。

さいふ歌を、手紙の文句
さ行を別にせず書きつゞ
けて、歌のやうでもなく
書いてをられるのも、他
人よりは深く心を用ゐて
ゐるやうに見える。私の
その御返事には、

それゆゑに飛び別れて
も蘆田鶴の、子を思ふ
方はなほぞ悲しき。

と讀んで申上げる。

その序に故入道大納言爲
家卿が、私の旅寢の枕許
にも離れずに附き添うて
ゐて、夢にお見えになる

さて、書きつけて奉る。

都まで語るも遠しおもひねに

しのぶ昔の夢のなごりを。

はかなしや旅寢の夢に迷ひきて

覺むれば見えぬ人の面影。

なご書きて奉りしを、又あながちにたより尋ねて、返言し給へ
り。さしもしのび給へりしも、折柄なりけり。

あづま路の草の枕はさほけれぞ

かたれば近きいにしへの夢。

いづくより旅寢の夢に通ふらむ

思ひおきつる露をたづねて。」

なごのたまへり。夏のほごは、あやしきまで、おとづれも絶え

さいふ事など、此人だけは身に沁みくさ感じなざるであらうかと思つて、書きつけて差上げる。そして、

都まで語るも遠しおもひに、しのぶ昔の夢の名残を。

はかなしや旅寝の夢に迷ひ来て、さむれば見えぬ人の面影。

なごいふ歌を書い 差上げたのを、先方でもまた強ひて幸便を尋ねて、御返事を下された。新中納言の君が、あのやうに自作の歌を世に發表しなかつたのも、それはたゞ場合故であるよ。さて先方からの御返事には、

て、覺束なさも一方ならず。都の方は、志賀の浦波たち、山・三井寺のさわぎなど聞ゆるもいとど覺束なし。

◎和徳門院の新中納言。和徳門院に仕へてゐる新中納言。「和徳門院」は仲恭天皇の皇女、義子内親王のこと。「新中納言」は女房の呼名である。

◎京極の中納言定家の御娘。京極の中納言定家の御娘でさいふ意、此句の下に「にて」さいふ語が省略されてゐる。「京極の中納言定家」は、藤原定家のこと、俊成の子で和歌に秀で、後鳥羽上皇の殊寵を受けて新古今集を撰した。一本には「定家」の二字が無い。

◎深草の前の齋宮。後鳥羽院の皇女、熙子内親王のこゝ、最初伊勢の齋宮にお仕へになつたが、後に退いて尼となられ、深草齋宮と稱へられた。「深草」は其住んで居られた所の名。「前の」さうたのは、既に齋宮を退かれたからである。「齋宮」さは、天皇の歴代毎に、伊勢大神宮に差遣して、奉仕の任に當らしめる、未婚の皇女、又は女王。「齋」は、忌み清まつて敬ひ崇ぶ意、故に「齋宮」とは齋戒沐浴して大神を敬ひ崇ぶ爲の皇女といふ意。此外、賀茂神社にも奉仕する皇女がある、それは齋院サイケンといひ、齋宮齋院の二者を總稱して齋

東路の草の枕は遠けれど、語れば近きいにしへの夢。

いづくより旅寢の夢に通ふらむ、思ひおきつる露をたづねて。

なご仰つしやつた。

夏の間は、不思議な程都からの便りも絶えて、氣がかりに思ふ事も尋常一通でない。都の方は琵琶湖の波が立ち騒ぎ、延曆寺三井寺などの八釜敷い騒ぎが、評判につて来るのも、甚だ不安に感じたる事である。

王さもいふ。

◎聞えしに。申した御許に。

◎父の中納言。父なる中納言の意、定家卿のこと。

◎まぬらせおきたるまゝにて。奉つて置いたそのなりで。お仕へ申させる爲に奉つておいたのである。

◎年經たまひにける。數年經過せられたが、「ける」は過去の助動詞「けり」の連體形で、上に「ぞ・なん・や・か」の係のないのに連體形で句が切れてゐる場合には、その句が主格である事を示すので、其句の次に「のが」といふ語を補つて解く。

◎この女院は。和徳門院は。

◎傳りてさぶらひ給ふなり。齋宮の御許から和徳門院の方に移つて來て、引續き其處に伺候せられるのである。

◎うき身こがる、藻刈舟。續後撰集、戀の部に、「濁り江にうき身こがる、藻刈舟、はてはゆきゝのかげだにも見ず。」とある歌をさすのである。意は、濁つた入江に浮かんで漕がれてゆく藻刈舟の往來する姿すらも最後には見えなくなる、それと同様に、つらい私の胸はあなたを思ふ情に燃えて、最後には死んで終ふ事であらうといふので、「うき」に憂きと浮きとの兩意をかけ、「こがる」

に、漕こがるこ焦こるこの意を懸けたもの。「藻刈舟」は、藻を刈り取る爲の小さい舟。「かげ」は「濁り江」の縁語。

◎民部卿の典侍。藤原定家の女。續後撰集には、後堀川院民部卿典侍と見え、堀川院に仕へてゐた人。「典侍」は内侍ナイシノツカサ司の次官、詳しくは、ナイシノスケ、略しては單にスケといふ、天皇別殿に渡御の際に劔璽を捧持し、又は御食膳を勤仕する、鎌倉時代以後は天皇の寢席に侍するやうにもなつた。禁秘抄に據るに、多くは公卿殿上人の女を之に補したが、また天皇の御乳母である人は、諸大夫の女であつても特に典侍に任じた。さて典侍の呼名は、姓を附して藤典侍・橋典侍・源典侍などと呼び、又は父の官名を附して大納言典侍・宰相典侍・帥典侍などとも呼んだ。

◎せうご。爰は姉の意。

◎さる人の子にて。有名な人の子で、「さる人」は、然るべき聞えのある人。

◎あやしき歌。拙い歌。人に驚かれる程の拙い歌。

◎人には聞かれじ。人には聞かれまいといふので、「人には聞かせじ」といふの意、使役・受動の別はあるが、意味は同じい。

◎あながちに。無理に。強ひて。

◎つゝみ給ひしかぢ。新中納言の君が、遠慮し慎んで、強ひて歌を讀まなかつたのをいふ。「つゝみ」は、遠慮し慎むこと、隠すこと。

◎遙なる旅の空おぼつかなきに。遠い旅行先の阿佛尼の身の上が氣が、りであるにつけて。

◎あはれなる事。感情の深い事柄。新中納言からの手紙の文意を大概に述べたのである。

◎いかばかり。歌意、我子を愛する情の深い御身が、其子供等と別れて行かれて、何程多く、なれない旅の空で、悲しさに泣く事であらうか。「いかばかり」は、どのくらゐ、なに程なぞいふ意、又は限りも無く多い意、愛では、「なくらむ」にかゝつてゐる。「子を思ふ鶴は、子を愛する鶴の意、鶴は子を愛する情の深い鳥である所から、親の子を愛する切なる情を譬へて、「焼野の雉夜の鶴。」なぞいひ、或は白氏文集などにも、「夜鶴憶し子籠中鳴。」なぞとある。随つて鶴は、阿佛尼の子を思ふ情の深いのにたとへて讀んだもの。「飛びわかれ」は、鶴に譬へた縁で、阿佛尼の子供等と別れて鎌倉に居るのをいふ。

◎文の詞につゞけて。手紙の文との區別を立てずに、それにつゞけて書いてあ

るのをいふ。

◎書きなし。「書き成して、書いて其様につくりこしらへること。

◎人よりは。他の人よりは。

◎なほざらならずおぼゆ。深く心を用ゐてゐるやうに思はれる。「なほざり」はなほぞありの約、「なほ」はタゞの意、物事に深く心を用ゐないことにいふ。

◎御返言は。「いかばかり云々」の歌に對する、阿佛尼の御返事はの意。

◎それゆゑに。歌意、仰せの通り子を思ふ情が深いが故に、此鎌倉まで別れて來ても、子供の身の上を思ふ方面は、矢張身にしてみても可愛く感じる事です。

「それ故に」は、「いかばかり云々」の歌の意を受けて、「子を思ふ情が切であるが故に。」の意。「あしたづ」は、葦邊に居る鶴のことで、後世は廣く鶴をさ

していふ、一説に「あしたづ」は求食鶴の意であるともいふ。「たづ」について

も上代は鶴ツルも鶴タビもオキトリも共に總て多頭タツと云うたのだといふ説もあり、「多

頭」は鶴のことで、鶴が本名で多頭は別名であるといふ説、其反對に多頭が

本名で鶴は別名であるといふ説もあり、多頭を田鶴タヅと書いて、田に居る鶴の

ことだといふ説もあるが、要するに多頭は鶴のことで、歌詞などには専ら多

頭といふは其音の響のよ、いからであらう。爰も前の歌のまゝに阿佛尼自身を

鶴にたとへたもの。「子を思ふかた」は、子を思ふ方面で、「かた」に鴻カガの意を言ひかけて、「あしたづ」の縁語としたのである。然るに「かた」を方角の意に解して、子供の居る都の空の意に解いてゐるのはどうであらうか、「方角」と解いては、「子を思ふ方」といふ句が意味をなさない、「かた」は矢張「方面」とか「點」とかいふ程の意。「かなしき」は、身にしてみても可愛く思ふこと。「松の落葉」に、「かなしきは身にしてみても思ふことに廣くいへる詞なり、悲歎の意をいふやうなれど、これは殊に身にしてみても覺ゆれば自ら其心に言へるが數多あるが故に、さ思はるゝになん云々。」とある。一本に「悲し」を「戀し」とある。

◎故入道大納言。亡夫爲家卿のこと。

◎草の枕にもたちそひて。旅寢の枕邊にも離れずに附いてゐて。

◎この人。新中納言をさす。

◎この人ばかりやあはれさもおぼさむ。この新中納言だけはいたはしい事だとも思召すであらうかとの意。「おぼす」は、思ふの敬語。

◎都まで。歌意、思ひつゝ、れる夢に、戀ひ慕ふ昔の人が見えた、その夢の名残りたば都まで告げてやるのも距離の遠い事だ。「語るも」といつたのは、語るのも距離が遠いし、昔の夢も遠い過去の事であるとの意。「思ひれ」は、思ひつ

、寢る事。「しのぶ」は心に思出して懐しく思ふ事。「昔の夢」は爲家卿の夢。

◎はかなしや。歌意、鎌倉にまで迷うて來た私の旅寢の夢の中に、亡き魂の迷ひ來て現はれて、夢が醒めるさ見えなくなる亡き人の姿は、さりさめもないものであるよ。「迷ひきて」は、亡靈の迷ひ來て現はれる意さ、阿佛尼自身の鎌倉にまで迷ひ來た意さを兼ねてゐる。「人の面影」は、爲家卿の面影である。

◎さしもしのび給へりしも折柄なりけり。此句については色々の解釋があつて一定しないが、まづ其等を舉げてから自分の考を述べよう。その一は此句を新中納言の手紙の文句と見るのであるが、其中に更に兩説ある。第一は、「さしもしのび給へりしも」さは、爲家卿の靈が左様に阿佛尼の夢に通ふ程に慕うて行つたのもさいふ意、「折柄なりけり」は、訴訟の爲に鎌倉まで下つた折柄であるからであるよの意であるとするもの。第二は、阿佛尼が左様に爲家卿を慕うたのも、恰も其時であるよといふ意で、新中納言も夢に爲家卿を見たのが、阿佛尼の夢に見たのと同じ時であつたのをいうたのさいふ意で、前説の解は次の「いづくより云々」の歌に關聯し、後説の解は次の「あづま路の云々」の歌と相應じる點があるさなすので、その「かたれば近きいしへの夢。」さあるは、新中言も阿佛尼と同じ様の夢を見たさいふ意ださなすのである。其

他の解釋は此句を手紙の句ではなく阿佛尼の言であるさなすので、「さしもしのび給へりしも」は、新中納言が左様に自作の歌を隠して居られたもの意、「折柄なりけり」は、場合故であるよの意であるさ見るのである。思ふに此句は、阿佛尼が新中納言の次の二首を送り越したのに對する感想を述べたもので、新中納言が今度二度までも自作の歌を阿佛尼の許に送て來つたのを見るさ、今迄強ひて自作の歌を隠して發表しなかつたのも、何も拙い歌を人に聞かれまいなごいふ考からしたのではなく、たゞ場合柄であるわいと意、即ち前に「さる人の子にてあやしき歌よみて人には聞かれじ云々」と言つた新中納言に對する推斷を、爰で取消して、新に「折柄なりけり」と、改めて説明したものである。さて此句を手紙の文句と見る時は、此句と次の歌との間に、何等の聯絡もない事になる、此句から次の歌にうつるには此間に何等か他の文句がなければならぬ。他の詞書から歌にうつる書き方、長い文句から歌につらなる形式を考へて見ても明かに此句が次の歌につられて書いたものでない事は首肯する事が出來よう。然るに次の歌の意から此句を解釋して、兩者の間に連絡のあるが如く解くのは牽強附會の嫌がある。「さしも」は左様にの意。「し」は強める動詞、「も」は感動詞。「しのび」は、隠れし事。「折柄」は、普通

に折も折きて、丁度其時などの意であるが、爰は「折故」の意。「けり」は詠歎の意。

◎あづまぢの。歌意、御身が獨東國に旅寢をしてをられる鎌倉は、この都から遠く隔つてゐるけれども、古の事を御覽になつた夢を、かうして御手紙で御話すると、その古の事も、つい此頃の事のやうに思はれ、鎌倉もちき近くの土地であるかのやうに感じるのです。「草の枕」は、阿佛尼の鎌倉に於ける旅寢をさすので、次の「夢」の縁語である。「近き」は、距離も近く感じるさいふ意と、昔の事も近頃の事のやうに思はれるさいふ意とを兼ね含んでゐる。

◎いづくより。歌意、爲家卿の魂が、亡き後に思ひ残しておいた戀しい御身を尋ねて、何處から御身の旅寢の夢にまで通うて現はれるのであらうか。此歌は、四・五・一・二・三の順に改めて解けば明かである。「夢に通ふ」は、夢に見えること。「おきつる」は、思ひおきつること、おきつる露との兩意に言ひかけたもの。「露」は旅寢を草枕とも言ふ所から、旅寢の縁語に用ゐたもの、爰は阿佛尼をさしてゐる。一説に、「思ひおきつる」は、生存中に後年の事を思ひ置いた意で、阿佛尼所生の子の爲に、庄園の讓狀を書き置かれたのをいふさがあるが、それ程までに深入りして見なくともよからう。

◎夏の程。夏の間。

◎おとづれ。消息。都からの音信をさす。

◎覺束なさも。都の事を氣が、りに思ふ情もさいふ意。

◎一方ならず。一通りでない、尋常でない。

◎志賀の浦波たち。「志賀」は近江國琵琶湖のほざりにある地方。近江國に騒ぎの起つたのを、琵琶湖の波の荒れる意に言うたもの。

◎山。比叡山延曆寺のこと。

◎三井寺。園城寺のこと。略して單に寺門、又は寺さいふ。近江國滋賀郡大津市の西北に在る。「山・三井寺のさわぎ」とは、延曆寺・園城寺の僧徒の騒ぎ立つた意で、帝王編年記に、「弘安元年五月十二日巳時、日吉神輿三基入落、依三圓城寺金堂供養一也。十六日日吉神輿各歸坐。」とある事件を言ふのであらう。さて「志賀の浦波たち」といふのも、「山・三井寺のさわぎ」といふのも、共に同じ事柄を言うたもので、別の事柄ではない。

◎聞ゆるも。評判に傳つてくるのも。

◎いさゞ覺束なし。手紙が來ないので氣が、りに思ふ其上にいよく不安に感じることの意。

一二一 爲相よりの歌

辛うじて八月二日ぞ使待ちえて、日頃より置きたりける人々の文ごもとり集めて見つる。侍従の宰相の君の許より、五十首の和歌をよみたりけるとて、清書きまがきもしあへず下されたり。歌もいとをかしくなりにけり。五十首に、十八首點合ひぬるもあやし、心の闇のひが目こそあるらめ。その中に、

こゝろのみへだてずとも旅衣

山路かさなるをちの白雲。

とある歌を見るに、「旅の空を思ひおこせて讀まれたるにこそは」と、心をやりてあはれなれば、その歌の傍に、文字小く返言をぞかきそへてやる。

【通釋】

やう／＼の事で八月二日に、都からの使を待ち受ける事が出来て、平常から中絶してゐた都の人人からの手紙などを、一時に取纏めて見た。侍従の宰相爲相の許から、五十首の歌を讀んださうて、清書きまがきもして終はずに、草稿のまゝで送つて來られた。見ると歌も大層優雅になつた。五十首の中十八首まで、よい作ださ首肯されたのも不思議で、子を思ふ心迷ひから

の見あやまりがあつたら
う。その歌の中で、

心のみ隔てすこても旅
衣、山路かさなるをち
の白雲。

さ詠んである歌を見る
に、旅先を想像して詠ま
れたのであらうと、推量
して可愛相に感じるか
ら、その歌の傍に、小さ
い文字で、次の如く返事
を書き添へて送る。

戀ひしのぶ心やたぐふ
朝夕に、行きてはかへ
るをちの白雲、

また前の歌と同じ旅の題
で、

かりそめの草の枕のよ
なくを、思ひやるに
も袖ぞ露けき。

こひしのぶ心やたぐふ朝ゆふに

行きては返るをちの白雲。

また同じ旅の題にて、

かりそめの草の枕のよなくを

思ひやるにも袖ぞ露けき。

とある處にも、また返言をぞ書きそへたる。

秋深き草のまくらにわれぞなく

ふりすてゝこし鈴蟲の音を。

又この五十首の歌の奥に、詞を書きそふ。大方、歌のさまなど

記しつけて、奥に昔の人の歌、

これを見ばいかばかりかと思ひつる

人に代りて音こそなかるれ。

と詠んである所にも、その傍にまた次の如き返事を書き加へた。

秋深き草の枕にわれぞ泣く、ふりすて、來し鈴虫の音を。

またこの五十首の歌の終りの方に、詞を書き加へる。その文意は大體歌の體裁の事など書き記して、その末に、爲家卿の歌を、

これを見ばいかばかりかと思ひつる。人にかはりてねこそ泣かる

れ。
と書きつける。

と書きつく。

◎辛うじて。やうやくの事で。久しい間、待ちに待つて、やうやうの事で。

◎使待ちえて。使を待ちつける事が出来て。使は京都からの使である。

◎日頃より。平常から。

◎置きたりける人々の文。久しく中絶して居た都の人々からの手紙。「置きたりける」は、間を置く意で、久しく中絶してゐたのをいふ、

◎こり集めて見つる。多くの人々からの手紙を一時に取集めて見たのをいふ。

◎侍従の宰相の君。爲相のこそ。

◎清書もしあへず。清書も爲しおほせず。即ち草稿のままなのをいふ。

◎下されたり。送り越した。京都から鎌倉への送り届けであるから、「下す」というたもの。

◎をかしく。面白く。優雅に。爲相の歌の上達した事ヲ褒めたのである。

◎點合ひぬるも。よい歌だと言首肯されたのも。歌などを閲覽する場合に、自分の心に合せて同感したものに點をうつを合點ガッテンといふ、下學集辭門に、「合點同心之義也」とある、今爰では「合點」といふ語を訓讀して「點合ふ」というたもの。

後世に、心得た意を合點するといふも、之から出たのである。

◎心の闇のひが目。子を思ふ心迷ひからの見あやまり。第一六頁参照。

◎ころのみ。歌意、母上と私とは心ばかりは隔てなく常に通うてゐるけれども、御身は旅に出られて、山路の幾重にも重なつてゐる遠い彼方、白雲のたなびくあたりに居られる事であるから、如何にしてお暮しなさるやら知る事も出来ないで、愈々戀しく思はれる事です。「旅衣」は、阿佛尼の旅に居られるの
 かいいたもの。「ちの白雲」は、遠方の白雲で、「白雲」に「知らず」といふ意
 を言ひかけられたもの。「衣」雲の縁語に、「へだて」「かさなる」などいふ語
 を用ゐて修飾してある。一本に「心こそ」とある。

◎思ひおこせて。彼方から此方を想像して。「思おこす」は、想像する意の場合
 は、サ行ト二段の活用、思ひ立つ意の時は、サ行四段活用。

◎よまれたるにこそは。よまれたのであらう。此句の次に「あはれ」といふ句が
 省かれてゐる。

◎心をやりてあはれなれば。推量して、可愛相に感じるから。「心をやり」は、
 心を晴らす意にもいふが、爰は推量すること。「心を慰めて」など解いてある
 のは誤。「あはれ」は可憐な意。

◎その歌の傍に。爲相の「心のみ云々」の歌の傍にの意。

◎こひしのぶ。歌意、私のあなたを戀ひ慕ふ心は、朝夕都の方へ行き來してゐる遠方の白雲に伴うて、あなたの許に通ふ事であらうか。「たぐふ」は、伴ふ、ならび副ふなどの意。「や」は疑問の助詞。「行きては返る」は、都の方に往返する意。「わちの白雲」は、爲相の歌の詞を、そのままに用ゐたのである。

◎同じ旅の題。前の「心のみへだてずとも云々」の歌に對して「同じ」といふたもの。

◎かりそめの。歌意、母上の假初の旅寢の毎夜々々を想像するにつけても、涙で袖が濡れる事です。「よなく」は、毎夜の意。「な」は「ノ間」の約つたものであるとも、或は、「菜」の意であるともいふ。「袖を露けき」は、涙で袖の濡れること、「露」は「草の枕」の縁語。

◎秋深き。歌意、秋も半ばを過ぎた、草深い田舎の旅寢に、私は都に置いて來た子供等の事を思つて泣く事である。恰も草の根に鈴蟲の鳴いてゐるやうに。「秋深き」は、秋の末になつたのをいふ、「深き」は下の「草」にもかゝつて、「深き草の枕」さつとくひである。「ふりすて、こし」は、都に捨て置いて來たさといふ意で、「ふり」は「鈴」の縁語。「鈴蟲の音を」は「鈴蟲の音を泣く」の意で、「われぞなく」の「なく」にかゝるのである。「鈴蟲」は、秋の夜、鈴の音に似た

聲でなく蟲、此蟲と松蟲との區別については、古今集頃は、リンリンと鳴くを鈴蟲というて色が黒く、チンチロリンと鳴くを松蟲というて、銜色のものをさしてゐたのであるが、源氏物語の時代から、反對にチンチロリンと鳴くを松蟲リン／＼と鳴くを松蟲といふやうに考へたのである。さて爰は、「鈴蟲」を「子供」に譬へたもの。「音をなく」は、單に泣くこと、或は音を出して泣くといふ意。「秋」草「なく」は、鈴蟲の縁語である。

◎五十首の歌の奥。五十首の歌の終り。

◎大方。大體。

◎歌のさまざま記しつけて。歌の體裁の事など書き記して。前に、「詞を書きそふ」さある。その歌の内容を概括的に説明したもの。

◎昔の人の歌。「爲家卿の歌」といふ意で、次の「これを見ば」の詞をさしてゐるのであるが、次の歌は爲家卿の家集にも見えてゐない、加之此歌は其意味から見ても、阿佛尼自身の作である事が明かである。本居豊頼氏は歌といふ文字は誤つて爰に挿入されたもので、本來は「昔の人の」から直に次の歌につゞいてゐるので、昔の人がこれを見るならばといふ意であると言つてゐるが、肯綮に當つてゐる説のやうに思はれる。

◎これを見れば。歌意、亡夫爲家卿がこの爲相の五十首の歌を見るならば、どれ程喜ばれる事であらうかと思はれた、其本人に代つて私が泣かすには居られない事である。「これ」は、爲相の五十首の歌をさす。「いかばかりか」とは、何程喜ぶ事であらうか。「思ひつる」は連體形で、「人」にかゝつてゐる。「音こそなかるれ」の「るれ」は、動作の自然と起つて止められぬ意の助動詞「る」の已然形。「音こそなく」は、「音をなく」「音のみぞなく」などと同じい、爰は阿佛尼が悲しさの爲に涙を流すのを、爲家卿に代つて泣くと言つたもの。但し爲家卿の場合は嬉し涙に泣くのをいふ。

一三三 爲守よりの歌

侍従の弟爲守の君の許よりも、三十首の歌を贈りて、「これに點合ひて、わろからむことをこまかに記したべ。」といはれたり。今年は十六ぞかし。歌の口なれば、やさしく覺ゆるも、かへすべく心の闇と、かたはらいたくなむ。これも旅の歌に

【通釋】

侍従の弟の爲守の君の許からも、三十首の歌を贈つて來て、「これに點を付けて非難すべき事柄を、詳しく記して下さい。」と

言はれた。この子は本年は十六歳であるぞよ。それらの書き贈られた事柄が、和歌の詞であるから優美に感じられるのも、何處までも子を思ふ心迷ひからであると思はれて、笑止千萬な事である。爲守も旅の歌には、私の身の上を思つて讀んだ見え。私が鎌倉に到着したまでの日記を、この爲相・爲守の許に送つたのを讀まれたのであるやうだ、その歌の中には、次、やうなものもある。

立ちわかれ富士の煙を
見てもなほ、心細さの
いかにそひけむ。

またこの歌についても、

は、こなたを思ひてよみたりけりと見ゆ。下りしほどの日記を、この人々の許へつかはしたりしを、讀まれたりけるなめり。

立ちわかれ富士の煙を見てもなほ

心ほそさのいかにそひけむ。

又これも返しを書きつく。

かりそめに立ち別れても子を思ふ

おもひを富士の煙ぞぞ見し。

◎點合ひて。詠草に點をつけての意。此句は爲守から阿佛尼に批點を御願ひする意であるから、「點合へて」としなければ、文相が整はない。

◎わるからむこそ。「わるからむこそ」に同じい。非難すべき事柄。

◎たべ。「賜へ」に同じい。

◎今年は十六ぞかし。爲守が今年十六歳であるのをいふ。殘月抄には、常樂記

次のやうな返歌を書きつける。
かりそめに立ち別れても子を思ふ、思ひを富士の煙とぞ見し。

に、「嘉暦三年十一月八日曉月房逝去、終焉歌、『むとせあまりよませの冬の長き夜に浮世の夢を見はてぬるかな。』とあるを引いて、弘安元年は爲守の歳は十四であると言つてある。曉月房は爲守の法名、「むとせあまり」は、「むとせあまり」の誤で、即ち六十四歳で死んだのである。すると嘉暦三年は皇紀一九八八年に當るから、それから逆算して行くと、皇紀一九三八年の元弘元年には十四歳の筈である。「十六」とあるは誤である。

◎歌の口。歌の詞の意。「口」といふを、口調の意、又は「讀みはじめ」の意などに解してゐる註もあるが、どうであらうか。「歌の口なればやさしく覺ゆるも。」とは、歌の詞であるから、爲守の言うてよこした事柄が優美に感じるもの意で、徒然草に、「和歌こそ猶をかしきものなれ。あやしの賤山がつのしわざも、いび出づれば面白く、恐しき猪も臥猪の床さへばやさしくなりぬ。」などあると同じ心持から言うたものであらう。

◎かへす。繰り返して。前に爲相の歌をほめた所にも、「あやししく心の闇云々」とあるのをうけて、爰に「かへす」と云うたのである。

◎かたはらいたくなむ。「かたはらいたくなむある。」の略、笑止千萬な事であるさいふ意。「かたはらいたくは、カタハライタク傍痛で、傍に聞いてゐるのも心痛く感じ

る事、見る目の笑止に思ふこと、片腹痛カタハライタクと書くは、あて字で意味がない。源氏「おのがじ、心をやりて、人をばおとしめなご、かたはらいたきこと多かり。」
 ◎これも、爲守も。

◎こなたを思ひて。阿佛尼の身の上を思つて。「こなたは阿佛尼自身をさす。

◎下りしほごの日記。都を出發してから、鎌倉に下り着いた間の日記といふ意であらう。

◎この人々。爲相・爲守などをさす。

◎讀まれたりけるなめり。日記を種々して歌を讀まれたのであるやうだ。「なめり」は、「なるめり」の略。此句の次に、「その歌」さいふ意の句を省いてある。

◎立ちわかかれ。歌意、母上が都をば出發して旅に行かれてから、途中富士の煙の立ちのぼるのを見ても、矢張心淋しい頼少い感じが、ごんなに添ひ加はつた事であらうか。立ち、細い、煙の縁語である。此歌は本書の前に出てゐる阿佛尼の「たが方になびきはて、か云々」の歌に對して讀んだもの。

◎書きつく。歌の側に書きつける意。

◎かりそめに。歌意、ほんの暫時の間別れても、子供の上を思つて私の胸に燃える情炎を、富士の煙と比較して見た事である。「おもひ」の「ひ」に「火」を言

ひかけて煙」の縁語にしたもの。「煙さぞ見し」は、煙と比較して見た、煙さ何れが勝つてゐるか較べて考へたさいふ程の意、即ち「胸の思ひ」の決して富士の煙にも劣らぬ意を聞かせたもの。

二四 秋の音づれ

また權中納言の君、こまやかに文書きて、「下り給ひし後は、歌よむ友もなく、秋になりては、いとゞ思ひ出で聞ゆるまゝに、獨り月をのみながめあかして」など書きて、

東路の空なつかしき形見だに

しのお涙にくもる月影。

この返言、これも故郷のこひしさなどかきて、

通ふらし都の外の月見ても

【通釋】

また權中納言の君が詳細に手紙を書いて、「御身が鎌倉にお下りになつた後は、歌をよむ相手もなく淋しいのに、秋になつては一層淋しくてそれが爲にあなたを御思ひ出し申すにまかせて、獨り月ばかり眺めつゝ物思ひに沈みながら夜を明かして

をります。「など書いて、次の歌を讀み添へてある。

東路の空なつかしき形見だに、しのお涙にくもる月影。

私のこれに對する御返事は、これも故郷の戀しく思はれる事など書いて、次の歌を讀み添へてやつた。

かよふらし都の外の月見ても、空なつかしきおなじ眺めは。

都からの歌など、この後澤山に積つてゐる。また後に書き添へよう。

空なつかしき同じ眺は。

都の歌どもこの後多く積りたり。又書きつくべし。

◎こまやかに。詳しく。

◎下り給ひし後は。阿佛尼の鎌倉に下られた後は。以下手紙の文句である。

◎歌よむ友もなく。歌をよむ相手も無くて。此句の次に「淋しい」といふ意の語句を省いてある。さうでないさ次の「いさゞ」の語が意味をなさなくなる。

◎秋になりてはいさゞ云々。秋になつては普通でも物淋しいのであるから、一層淋しくて、阿佛尼のこさを懐しく思ひ出し申上げるにまかせて。「聞ゆる」は、敬語の助動詞。「まゝに」は、隨つて、まかせてなどいふ意の接尾語。

◎月をながめあかして。月を眺めて物思ひに沈みつゝ夜を明かして。「ながめ」は、眺める意と物思ひに沈む意とを兼ねてゐる。

◎など書きて、此句の次に、「次の歌を添へてあつた」といふ意の語句が省かれてゐる。

◎東路の。歌意、御身の居られる東國の空が懐しく思ひ出される所の、記念の月すら、追慕の涙の爲に曇つて見えない記念の月影であるよ。「形見」は、記

念で、前に「ゆくりもなくいさよふ月に誘はれ出でなんぞ思ひなりぬる。」
さあるが如く、十六夜の月に浮かれて都を出た縁から、月をさして阿佛尼を思
ひ出す記念としたのである。「しのぶなみだ」は、思ひ出して懐しく思ふ爲に
出る涙。「月影」は、月の光で、前に「かたみ」と云うたものを、再び茲に具體的
に言ひ出したもの。

◎故郷の戀しさをかきて。都を戀しく思ふ事など書いて、次の歌を讀み添へた
といふ意。

◎通ふらし。歌意、私が都の外なる鎌倉の月を眺めても、都の空が懐しく思ひ出
される物思ひは、御身が東國の空を懐しく思ひなされる物思ひと似通うてゐるら
しい。「通ふ」は、似通ふこと。「同じ」は、前に「月をのみ眺めあかして」
さあるのを受けて言うたもの。

◎都の歌。都の人々から送つて來た歌。

◎又書きつくべし。又後に書き添へようといふので、茲で一旦本文の筆をとどめ
たのである。

二五 しき島の道

【通釋】

わが日本國は、天地開闢の昔から、天の岩戸隠れの折、風雅な神樂歌を歌うて、大神を外にお誘ひ申した。それだから天の岩戸開きの事蹟をば、和歌の功徳についての恐多い先例であるさ云うて、以後は聖天子の御代の政道も歌の力で明かになり、人の心に浮ぶ思想感情を基として、色々の事柄を歌に讀んだ。その歌に對しては鬼神までも深く感動して、爲に四海の波も靜穩になり、空吹く風も靜かに枝に音立てない。降る雨も五風十雨さいつたやうに規則正し

しき島や やまこの國は あめつちの 開けはじめし 昔より 岩戸をあけて おもしろき 神樂のことは 歌ひてし さればかしこき ためしとて ひじりの御代の 道しるく 人の心を 種として よろづのわざを 言の葉に 鬼神までも あはれとて 八島の外の 四つの海 波もしづかに を さまりて 空ふく風も やはらかに 枝もならさず 降る雨も 時定まれば 君々の 御言のまゝに 従ひて 和歌の浦路の 藻鹽草 かき集めたる 跡多し。それが中にも 名をとめて 三代までつぎし 人の子の 親のとりわき 譲りてし その誠さへ ありながら 思へば賤し 信濃なる その はゝき木の そのはらに 種をまきたる さがとてや 世にも仕へよ 生ける世の 身を助けよと ちぎりおく 須磨と

く降る。さういふ譯であるから自然歴代の天子も和歌に力を入れられ、随つて勅命を受けて和歌を撰進した歌集が多い。その勅撰集の中でも名を後世まで残して、父子三代まで引きつゞいて撰進の命を蒙つた人の子孫である爲相が、親の格別に譲り與へたその真心のある確かな譲状までも持つて居りながら、考へるさ、その子は賤しい母の腹に生れた罪だといふのでか「陛下の御代にもお仕へ申せ、また一生涯の生活をも助けよ。」と約束して譲りおかれた、須磨明石のつゞきにある細川の

明石の つゞきなる 細川山の 山川の わづかに命 かけ
ひとて つたへし水の 水上も せきとめられて 今は唯
陸にあがれる いをのごと 楫を絶えたる 舟のごと 寄る
方もなく わびはつる 子を思ふとて 夜の鶴 なくく都
出でしかご 身は數ならず 鎌倉の 世の政 繁ければ
聞え上げてし 言の葉も 枝に籠りて 梅の花 四とせの春
に なりにけり。ゆくへも知らぬ 中空の 風にまかする
故郷は 軒端もあれて さゝがにの いか様にかは なりぬ
らむ。世々の跡ある 玉づさも さて朽ちはてば あし原の
道もすたれて いかならむ。これをおもへば 私の 歎の
みかは 世のためも つらきためしと なりぬべし。行先か
けて さまぐくに 書き遺されし 筆の跡 返すぐもい

庄を、僅かに露命を繋ぎ
さゞめる網にしてゐたの
に、それを爲氏に横領さ
れて、今はたゞ水を離れ
て陸にあがつた魚の如
く、或は楫の緒の切れた
船の如く、たよる所もな
くこまり抜いてゐる。自
分はその子供の身の上が
可哀相で、それを訴へる
爲に、泣く／＼都を出發
したが、我身は鄙しくて
人數にも入らない、且鎌
倉の政事が繁雜であるか
ら、申上げた訴訟の言葉
も、中途で握り潰された
まゝ、梅の花咲く四年目
の春さなつて終つた。な
るがまゝに打捨て、ある
故郷の家は、軒端も荒れ

つはりと 思はましかば ことわりを 糺たごすの森の ゆふしで
に やよやいささか かけて問へ。みだりがはしき 末の世
に 麻はあさなく なりぬとか 諫めおきしを 忘れずば
ゆがめる事も また誰か ひき直すべき とばかりに 身を
顧みず 頼むぞよ。その世を聞けば さてもさは のこる蓬
ご かこちてし 人のなさけも かゝりけり。同じ播磨の
境とて ひとつ流を 汲みしかば 野中の清水 よどむとも
もこの心に 任せつゝ ごとこほりなき 水莖の 跡さへ
あらば いとゞしく 鶴が岡への 朝日影 八千代の光 さ
しそへて あきらけき世の なほも榮えむ。

長かれとあさゆふ祈る君が代を

やまと言葉にけふぞのべつる。

てどのやうになつたであらうか。

俊成・定家・爲家等代々の人の書き残された文章も、そのまゝに亡びて終ふならば、和歌の道も頽廢して、このさきどうなる事であらうか。

この事を考へるに、私一人の歎きばかりではない。世間一般の爲にもつらい事となるであらう。將來に互つて書き残された亡夫爲家の讓狀が、どこまでも偽りであると思ふならば、道理の曲直を正す紅の森の神にお尋ねしろ。

道徳情誼の亂れてゐる末世に、正義の士は跡かた

◎しき島や。「大和」の枕詞。「しき島」は、古事記に、「天國押波流岐廣庭天皇アマクニオシハルキヒロヒロノスメラミコハシキシマノオホミヤトニホシマシテアシタシロシメシキ者坐二師木 島 大 宮一治ニ天 下一也」シマとあるが如く、元來は大和にある地名であつたが、欽明天皇の朝に都のあつた所から、土地の名も名高くなり、大和の國の別名の如くになつたもの、隨つて、「しき島」即ち「大和」であるから、「しき島のやまさ」を重ねて言うたもので、それが後には「しき島ややまさ」も言ふやうになつたのである。

◎やまこの國。日本國。「大和」も元來畿内にある一國の名であるが、上古は専ら此地に都のあつた所から、轉じて天下の總名となつたもの。

◎あめつちの開けはじめし昔。天地開闢の昔。

◎岩戸をあげて云々。天照大神が天岩戸にお隠れになつた時、諸神が相談して、神樂の舞を舞ひ、歌を奏して、大神を誘ひ出した故事をいふのである。(第九頁參照)

◎おもしろき。優雅な。風流な。

◎神樂のこさば。神樂歌のこさ。

◎歌ひてし。此句で一旦意味が切れてゐるので「歌ひてしよ」といふ意。此句が連體形であるので、間を隔て、「ためし」に連つてゐるを解くのはいいか。

もなく失せて終つたさか
いふ、かの北條泰時の諫
め置いた詞を忘れないな
らば、また誰が不正な事
をば正しい事とするであ
らうかよ、深く思ひ込ん
で、我身の賤しい事をも
振返つて見ずに、一心に
幕府の公平な裁判を頼ん
でゐるぞよ。

その昔の事を聞いて見る
よ、「残る蓬の敷をことわ
れ」と歎いた、俊成の女
の心情も、さてマアそれ
では、自分の心のやうで
あるよ。その俊成の女
の越部の莊も、わが細川
の莊も、共に同じ播磨の
國にある事とて、同じ境
遇を經たから、譬へば野

◎かしこき。恐多い。有難い。「さればかしこきためしとて」は、さうであるか
ら、天の岩戸開きの事蹟をば、和歌の功德についての恐多い先例であると言
うての意。此句の次に、「和歌の力」でこいふ意を補うて解くよ、意味が一層明
かになる。

◎ひじりの御代。聖天子の御代。「ひじり」は、日知の意で、天皇は天照大神の
御子として、天津日嗣をしらしめすから、日知と申すのである。然るに漢土で
は王の徳ある者を聖人といふ所から、日知に聖の字を充て、轉じて後には聖人
のこゝを「ひじり」とも云ひ、又法師の徳行ある者をも聖人といふた所から、
徳行のある僧をも「ひじり」といふやうになり、更に轉じては廣く僧侶をも「ひ
じり」と言ふやうになつた。

◎道しるく。政道が顯著で、政道の明かなのをいふ。

◎人の心を種として。人の心に浮ぶ思想感情を基として、古今集序に、「やまと
うたは人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。」とあるによつて
書いたもの。「種」とは、歌は人の心に思ふ事柄を基として、それから生れ出
るものであるから、恰も草木が地中の種から芽を出すのに譬へて言うたもの。
◎よろづのわざ。あらゆる事柄。

中の清水は停滯してゐても、その本來の趣を知つてゐる者は、猶其處に立寄つて水を汲んで飲むが如く、今たさひ細川莊が爲氏の爲に横領せられてゐても、爲家卿の本來の趣意を汲んで、それに隨ひながら、自分に味方して突れるであらう。明確な謙状さへあるならば、いよ／＼幕府の政事は正しきに加擔して、鶴が岡のほごりに輝き出る朝日の光はいよ／＼永久の光を輝き加へて、幕府の威光が長く輝き、政道の明かな御代のいよいよ榮える事であらう。

反歌

◎言の葉。言の端の意で、元來は假初言をいふのである。さて歌は言のはしを表はすものであるから、言のはし言ひならうたもの、古今集に「言の葉」と書いたのは、心を種さいふのに對して、「端」を草木の葉によせて、かく書いたもの。此句の次に、「表はし」といふ意を補うて解く意味が明かになる。

◎鬼神までもあはれさて。鬼神までも深く感動して。「鬼神」と續けた語は我國の昔にはない、支那では人の死んだ亡靈を鬼といひ、悪い陰氣を鬼といふ。「神」とは量り知る事の出來ぬものをいふ。爰は、恐ろしい荒神といふ意であらうか。「あはれ」は、深く物に感じた折に發する感動の聲。故に「あはれさて」は、ア、ア、と感動すること。古今集序に、「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ。」とあるのによつたもの。一本には、「あはれとて」「靡くめり」としてある。

◎八島。大八洲のこと、我國の古名。「大」は美稱、「八」は借字で彌の意、「八雲」「八重垣」などいふ「八」と同じく、數の多いのをいふ。元來我國は海上に散在する幾多の島々から成る所から「大八洲」と云うたもの。然るに後世、「八」の文字に拘泥して、八島を以て附會の説を立てたので、古事記などには、「淡道之穗之狹別島・伊豫之二名島・隱伎之三子島・筑紫島・伊伎島・津島・佐渡島・

君が御代の永久に榮えよ
と、朝夕祈つてゐる私の
心持を、和歌に今日はい
めて述べた事である。

大倭豊秋津島」を以て八島に擬し、「故因三此八島先所生、謂三大八島國。」とあるが、信じるに足りない。

◎四つの瀉。四海のこと。

◎波もしづかに……枝もならさず。天下泰平の有様を言つたもの。「海」といふたから「波」といひ、「空ふく風云々」は、西京雜記に「太平世、風不レ揺レ枝。」などあるのによつて書いたもの。増鏡にも、「帝偏に世をしるしめして、四方の海波しづかに、吹く風も枝を鳴らさず、世治り民安くして云々。」とある。

◎降る雨も時定まれば。雨も無闇に降らずに時を定めて規則正しく降るから。是も泰平の有様をいうたもの。論衡に、「太平之世、五日一風、十日一雨、風不レ鳴レ枝、雨不レ破レ塊。」とある。

◎君々の御言のまゝに従ひて。歴代の天子の勅命のまゝに隨うて。勅命によつて勅撰集を撰進したのをいふ。

◎和歌の浦路。「和歌」といふ事を地名にかけて修飾したのもの。

◎藻鹽草。歌のこと。「和歌の浦」及び「かき集め」の縁語に用ゐてある。「第二八頁參照」

◎かき集めたる跡。從來の勅撰集をさしていつたもの。「かき」は「掻き」で、接

頭語。

◎それが中にも。澤山の勅撰集の中でも。

◎名をさめて。名を後世まで留め残して。

◎三代までつぎし人の子の。三代まで引續いて撰集の命を蒙つた人の子供が。即ち俊成・定家・爲家の三代が相ついで撰集の事に與つたのをいふ。爰は「つぎし人」とつゞいてゐるので、普通に「人の親」「人の子」などいふ場合の「人」とは同じでない。「子」は爲相をさしていうたもの。

◎親のさりわき譲りてし。親が特別に譲り與へた。爲家が播磨國細川庄を特に爲相に譲つた事實をいふ。

◎そのまこと。爲家の眞實の心と、讓狀の證據の意に言うたもの。

◎思へば賤し。「思へば」は思ひめぐらすとの意で、「まがまてや」にかゝり、「賤し」は、下の「そのは、き木」にかゝつて、賤しい母に言うたもの。

◎信濃なるそのは、き木のそのはらに。「は、き木」とは、遠くから見ると笹の形に見え、近く寄つて見ると、一向それらしい木も見えないで、見失ふ木であるといふ所から、此木を有るさは見えて逢はぬ意にたさへ、新古今集、「曾の原やふせやに生ふる帯木の、ありさは見えてあはぬ君かな。」など讀んであ

る。「その原」は、信濃國下伊那郡智里村字晝神を上るここ二里、木曾に通じ
る御阪嶺の麓、宇園原にある、原の名。此地は昔の驛路に當り、此原に布施屋
を置いて行人を休息せしめた所から、一に伏屋の里といひ、古歌に「曾の原
やふせや」とつゞけ詠んでゐる、帯木の名所である。さて此句は、「はゞき
木」に母を、「その原」に腹を言ひかけ、「母の腹」といふだけの意を、かく長く
言うたもの。

◎種をまきたる。腹に生れたこをいふ。

◎さがさてや。賤しい母の腹に生れた罪だといふのでか、阿佛尼が自身を卑下し
て、賤しい腹と言うたもの。

◎世にも仕へよ。陛下の御世にもお仕へ申せとの意。此句と次の句とは爲家の遺
訓である。

◎生ける世の身を助けよ。一生涯の生活を助けるとの意。前の句と此句とは、細
川の庄を以て、君に仕へ生涯を助ける所の資としるとの意。

◎ちぎりおく。約束し置く。

◎須磨と明石。地名に、澄んで明かな意を言ひかけて、細川庄が爲相の所有で
ある事の明かな事實である意をよせ、且は次の「細川」「山川」の縁語としたも

今の櫓のこゝ。

◎寄る方もなく。たよる方もなく。楫の失せた舟の縁語。

◎わびはつる。嘆息し抜いてゐる。

◎子を思ふさて。我子の上を心配に思ふさ云うて。

◎夜の鶴。阿佛尼自身を「夜の鶴」に譬へ、且次の「なくく」の縁語に用ゐてある。

◎なくく。泣きながら。「夜の鶴」の縁語に用ゐてある關係上、「鳴くく」の意をも含めてゐる。

◎身は數ならず。我身は物の數にも入らない程の賤しいものであるのをいふ。

◎鎌倉の。鎌倉幕府のさいふ意。

◎世の政。天下の政治。

◎聞え上げてし言の葉も。申上げた訴への言葉も。上訴の言葉も。

◎枝に籠りて。上訴の事柄が握り潰された儘で少しも抄取らないのを、「言の葉」の縁で、「枝に籠る」というたもの。即ち、木の葉の枝に籠つて芽の出ない意に綾なしたのである。

◎梅の花四ませの春になりにけり。「言の葉」「枝」の縁語で、「梅の花」といひ、

併せて次の春さ言はん爲の序としたもの。梅の花咲く四年目の春さなつたとの意。即ち弘安三年の春になつたのをいふ。「枝に籠りて」といふを、諸註は梅の蕾の枝にこもつて咲かぬ意に譬へたものとして解いてゐるが、爰は單に「言の葉」といふ縁から「枝にこもる」と言ひつゞけたもので、葉の枝に籠つて芽ばえぬ意に言つたものと見るのが自然であらう。

◎ゆくへも知らぬ。吹いて行く方向もわからないといふ意で、「風」にかゝる形容句である。「ゆくへも……風にまかする」は、何處へ吹いて行くのか、其方向もわからない所の、空吹く風の爲すが儘にゆだねておくといふ意で、なるがまゝに打捨てゝあるをいふ。「中空」は、虚空のこと、空といふも同じい。

◎故郷は。故郷の家はの意。即ち次に「軒端」とあるのに依つて、「故郷の家は」とあるべきものを省略したのである。

◎軒端もあれて。家も荒れはてゝ。「軒端」は、軒のはしであるが、爰は家さいふ全體を代表せしめたもので、所謂提喻の詞姿を用ゐたのである。

◎さゝがにの。「いかさま」の「い」にかゝる枕詞。即ち「い」に蜘蛛の網の意を含めたもの。

◎いか様にかはなりぬらむ。どういふ状態になつたのであらうか。「か」は疑の

助詞。「は」は感動詞。

◎世々の跡ある玉づさ。俊成・定家・爲家等代々の者の書き残された文章。「玉づさ」は、爰は文章のこゝ、即ち歌に關する記録。

◎さて朽ちはてば。そのまゝに亡びて終ふならば。世間の人にも讀まれないで、家に埋れたまゝ、失せて終ふならば。

◎あし原の道。我國のこゝを、葦原の瑞穂國、葦原の中つ國など言ふ所から、和歌の道といふ意を、「葦原の道」と云うたので、數島の道といふに同じい。

◎すたれて。衰へて。

◎いかならむ。どうなる事であらうか。

◎私の歎のみかは。私一個人の歎ばかりか、一個人の歎ばかりではない。「か」反語。「は」感動詞。

◎世のためも。世間の人々にまつても。

◎つらきためし。歎くべき前例。

◎行先かけて。將來に亘つて。

◎書き遺されし筆の跡。書き遺された文章。爲家の遺言状をさす。

◎返すくも。重ねく。繰返しく。

◎思はましかば。思つたならば。「ましか」は推量の助動詞「まし」の已然形、それに「ば」が連つて既定の条件を表はす。

◎こさわり。道理。

◎糺の森。「糺」に是非曲直を詮する意の「正す」意を言ひかけて、「道理を正す糺の森」と言ひつけたもの。「糺の森」は、山城國愛宕郡下鴨村にある森で、賀茂御祖神社の境域をなしてゐる。同社の祭神を多々須玉依姫といふので、其森を糺の森といふのであらうか。同社をも一つに糺の宮といふ。其地が鴨・高野二川の會流する所にあるので、一つに川合森とも云うてゐる。

◎ゆふしで。木綿で作つたしで。「木綿」は、楮の皮で織つた白い布。「しで」は、^{シデ}垂で、今も櫛や注連繩に紙を切つて垂れ下げるやうに、木綿などを玉串などに垂れ下げたもの。さて「ゆふしで」は神前の幣物に懸けるものであるから、糺の森の神前に木綿垂を、捧げ神に願つて是非曲直を尋ねるといふ意を、かく言うたもの。即ち、「ゆふしで。」は「かけて」の序に用ゐたもの。

◎やよや。呼び掛けの感動詞。

◎みだりがはしき。道徳情誼の亂れてゐる意。

◎末の世。澆季のこゝ、人情道徳の浮薄になつた世。

◎麻はあさなく云々。新勅撰集、北條泰時、「世の中に麻はあさなくなりけり、心の儘の蓬のみして。」といふ歌をさすので、一首の意は、笥子勸學篇に、「蓬生三麻中、不レ扶而直。」とあるが如く、麻は其性の直き所から、是を正義に譬へ、世の中に正義といふものは、跡かたもなく廢絶して終つた、我心のまゝに振舞ふ悪人のみでさいふので、蓬を邪惡な者に譬へたもの。

◎諫めおきしを。北條泰時の諫めおいた事を。

◎ゆがめる事。正しくない事。曲事。

◎また誰かひき直すべき。再び誰が引き直して正しい事と見るであらうか、正しい事はすまい。

◎さばかりに。「ま」は助動詞で、「前のみだりがはしき末の世に……ひき直すべき。」といふ句を受けてゐる。「ばかり」は、「のみ」と同じく、一ありて二なしいふ程の意の助詞。「専ら……と思ひ込んで」さいふ意。

◎身を願みず頼むぞよ。我身の賤しい事をも願みないで一心に幕府の公平無私な裁判を頼みにしてゐるぞよ。

◎その世を聞けば。その當時の世を聞くぞ。「その世」は、次にある俊成の女の訴訟のあつた時代をさす。

◎さてもさは、さてマアそれでは。此句は下の「かゝりけり」につゞいてゐる。
◎のこる蓬さかこちてし人。「残る蓬の数をこさわれ」と歎いた人。本書の奥書にも見える通り、藤原俊成の女が、父から譲られた播磨國越部の荘の收入を、地頭の非法によつて、横奪されたので、幕府に訴へ出る時、泰時の「世の中に云々」の歌を本歌として、「君ひさりあさなき麻のみを知らば、残る蓬が数をこさわれ。」と讀んで、其歌を送つて勝訴になつたといふ事實をさすのである。「かこち」は、かこつける、言ひ譯する、又は嘆くこと。

◎人のなさけ。人の心。俊成の女の心をさす。

◎かゝりけり。「斯くありけり」の意。阿佛尼自身の心のやうであるよ。

◎同じ播磨の境さて。訴訟に勝つた俊成の女の領地の越部の荘も、わが細川の荘も同じ播磨の國にある事というて。「境」は、國といふに同じい。

◎ひさつ流を汲みしかば。同じ境遇を経たからといふ意。越部の荘が地頭の非法の爲に横領せられたと同じく、細川の荘も亦爲氏の爲に横領せられたのといふ。

◎野中の清水よどむさも。古今集雜、「古の野中の清水ゆるけれど、もその心を知る人ぞ汲む。」とある歌から、一つには次の「もその心に任せつゝ」と言ふ比

喩に用ゐ、一つには野中の清水の停滞してゐるのを、細川庄が爲氏の爲に横領されて捗々しく爲相の手に渡らぬのに譬へたもの。野中の清水は停滞してゐても、本來の趣を知つてゐる人は、其處に立寄つて水を汲んで飲むが如く、今たとひ細川庄が爲氏の爲に横領されてゐても、それをば元の心に任せながらさうふ意。「野中の清水」は袖中抄に、「顯昭云、野中の清水さは播磨の稻見野にあり、……件の清水見たる人の申し、は、めでたきしみづなりと云々。但考ふるに能因歌枕に云、野中のし水さは、もこの妻を云ふさいへり。今案云、その故もなぐ、もこのめなのなかの清水といふべきに非ず、……野中のし水のぬるくも、もこのその清水を知りたらん人の汲まんやうに、昔、心をつくしいみじく覚えし人の、衰へたらんをも、もこの有様しりたれば、なほむすぶよしをよめりけるを本として、もこのめなば野中のし水さは云ひ習はしたるにこそ。」

◎もこの心に任せつゝ。元の状態に随ひながら。爲家卿の遺言に随つて爲相の所有とするのをいふ。此句は下の、「あきらけき世のなほも榮えむ。」とあるにかゝつてゐる。

◎さゞこほりなき。「よごむ」に對した言葉で、滲滞のない事、爰は明確な意。

◎水莖の跡。筆の跡で、文章のこま、即ち爲家卿の讓状をさす。

◎いさゞしく。いよ／＼。甚しく。下の、「さしそへて」にかゝる副詞。

◎鶴が岡べ。鶴が岡のほさり。鶴が岡は鶴が岡八幡宮のある所、鎌倉幕府の所在地である。

◎八千代の光。永久の光。

◎さしそへて。照り加へて。「さし」は照り輝く意。「鶴が岡べの朝日影八千代の光さしそへて」は、鶴が岡のほさに輝き出る朝日の光が、永久の光を輝き加へてさしふので、鎌倉幕府の威光の益々永久に輝き渡るのをいふ。

◎あきらげき世。政道の明かなよく治まる代。

◎なほも榮えむ。いよ／＼榮えるであらう。「なほ」は愈々の意。さて「いさゞしく鶴が岡べの云々」以下は、是非曲直の明かな正しい判決を得るであらうといふ意を、正しい裁判は、政道の明かな昭代の賜物である所から、斯の如く腕曲に述べたもの。

◎長かれこ。歌意、君の御代の永久に榮えよと、朝夕祈つてゐる我心をば、和歌に今日始めて讀んだ事である。「やまこ言葉」は和歌の意。是は前の長歌の反歌である。即ち長歌に讀み残した事柄、又は長歌の意を總括したものを、今一度短歌にうち反して歌うたものを、反歌といふ。

奥書(一)

【通釋】
 「殘る蓬さかこちける。」
 と。長歌にいうてある所の裏書に、次の文句があつた。「皇太后宮大夫俊成卿の御女が父からの譲りであるさうて、播磨國越部の莊さいふ所を受けついで領有して居られたのを、地頭が其土地の收入を妨害する事が多くて、その昔、前の武藏守泰時の許へ、格別に訴訟をするといつた趣ではなくて、差上げられた歌。それは新勅撰集にも入つ

「殘る蓬と、かこちける」といふ所の裏書に、皇太后宮の大夫俊成卿の御むすめ、父の譲りとて、播磨の國越部の莊といふ所を、傳へ知られけるを、地頭の妨げ多くて、昔、武藏の前司へ、異なる訴訟にはあらで、まゐらせられける歌、新勅撰にも入り侍るとやらん、「心の儘の蓬のみして」といふ歌を、かこち申されける歌。

君ひとり跡なき麻のみをしらば

のこる蓬の數をことわれ。

とよまれければ、評定にも及ばず、廿一ヶ條の地頭の非法を皆とどめられて候ひけり。その後、野中の清水を過ぐとて、

て居りますかといふ『心のまゝの蓬のみして』といふ歌にこそよせて詠まれた歌である。

君ひさり跡なき麻のみをしたらば、のこる蓬の数をこそわれ。

と讀まれたから、評定もせずに、廿一ヶ條の地頭の非法を全部禁じられました。その後彼女が野中の清水を通過すると云うて、

忘れぬもこの心のありがほに、野中の清水影をだに見し。

と讀まれたのも、その領地の越部の莊へ下られた時の歌で御座います。

【通釋】

忘れぬもこの心のありがほに

野中の清水影をだに見し。

とよまれたるも、その越部の莊へ下られける時の歌にて候ふ。

新勅撰に入りて侍りし。

永仁六年三月一日書之

奥書(二)

この阿佛房と申す人は、定家の息爲家の室なり。公達五人まし／＼候ふ。播磨の國細川の莊を爲家より譲りおかれ候ふを、爲氏他腹に依りて、押領候ふ訴訟の爲に、鎌倉へ下られ候ふ時の道の日記にて候ふ。爲氏も陳狀の爲に鎌倉へ下向。兩人

この阿佛尼と申す人は、定家卿の子なる爲家卿の奥方である。其腹に御子さんが五人あらせられる。播磨國細川の莊を、爲家卿からその子供に譲り置かれましたのを、爲氏が異母兄弟であるが爲に、横取り致しました訴訟の爲に鎌倉へ下られました時の道中の日記で御座います。それが爲に爲氏も陳狀する爲に鎌倉へ出かけ、兩人共に鎌倉へ死なれた。訴訟は爲氏の方へは味方をせられませんでしたといふ事である。阿佛尼は安嘉門院に仕へて、呼名を四條と申す女である。爲相の母で

共に鎌倉にて死去せられし。訴訟は爲氏の方へはつけられず候ひしとぞ。阿佛は安嘉門院の四條と申す人なり。爲相の母なり。

◎裏書。古昔ワックスボーン卷子本の行はれた時代に、其裏面に註釋など記入したのをいふ。後世綴本になつてから、其書の傳來・由緒などを、本文の終末にしるした。所謂裏書（又は書後とも云ふ）など同じ意味のものである。野槌、「昔の本は厚紙にて巻本なるが故に、註釋文は勸文を其裏に書きて看るをもて、裏書と云ふさ見えたり。古へ紙のすくなかりし世の風俗なるべし。今さち本になりし後は、そのうち書を本文の次に書き出せるもの多かり。」さて茲の裏書も最初は眞に紙の裏面に書いてあつたものだが、後に本文の終末に裏書として書き出したのである。「裏面」にさあるは、裏書に次の文句があつたこの意。

◎皇太后宮の大夫。皇太后宮職の長官。「皇太后宮職」は皇太后宮に關する大切の事務を掌る所。「大夫」は、清んで云ふ時は五位の通稱、濁つていふ時は職の長官。

◎俊成卿の御むすめ。實は俊成の姪で、越部の禪尼と云うた。歌道に勝れてゐ

ある。

た爲に子にしたのださいふ。俊成は平安朝末期の歌人、千載集を撰んだ人。傳へ知られけるを。譲り受けて領して居られたのに。「知る」は、わがものさして領有すること。

◎地頭。諸國の莊園公領の田土を管掌させる爲に置いた職員で、源頼朝の時、守護職と共に之を諸國に置いたのである。

◎武藏の前司。北條泰時のこま。前司は前任の國司。國司とは朝廷から諸國に置いた地方官で、國衙に居つて政務を司つた四分官、即ち守介・椽目の總稱である。泰時は前に武藏守であつた。

◎異なる訴訟にはあらで。格別の訴訟では無くて。訴訟さいふ變つた趣ではなくてさいふ意。

◎まぬらせられける歌。奉られた歌。此句から直に「君ひさり云々」の歌につゞくのである。

◎新勅撰。後堀河天皇の朝に藤原定家の撰したもの。「新勅撰にも……かこち申されける歌」は、「まぬらせられける歌」さある歌、即ち次の「君ひさり云々」の歌を説明してゐるので、當然括弧の中に入れて考へるべきである。

◎心の儘の蓬のみして。前に掲出した。泰時の「世の中に麻はあさなくなり

けり、心の儘の蓬のみして。」といふ歌をさす。

◎かこち。不平をいふ。事よせること。爰は後者の意。

◎君ひさり。歌意、貴殿が嘗て「世の中に麻はあさくなりけり云々」と云はれたが、私一人が、今では跡を絶つてゐる正義の者である事を知るならば、後に残つてゐる悪人どもをば、其理非曲直を正しなさい。「君」は泰時をさしていふ。「ひさり」は、「ひさりの麻の子」とつゞく意で、「君が一人」といふやうに、君を形容してゐるのではない。「麻のみ」に「麻の實」と麻の身との兩意を兼ねて、我身の上をさしたるもの。「蓬の敷」は、敷ある蓬の意で、多くの悪人をさす。「こさわれ」は、道理を明かにして事の善悪を判別すること。

◎評定。多數の者が集つて事を相談して決定すること。爰に「評定にも及ばず」さは、人々の相談にもかけずに、泰時一人の考で決定したのをいふ。

◎非法。法に違つてゐること。

◎さやめ。禁じること。

◎野中の清水を過ぐさて。俊成の女が野中の清水を過ぐるさての意。

◎忘れぬ。歌意、人々の忘れ得ない當初の趣のあるやうな様子で、野中の清水は今も獨水が澄んでゐて、底に映る影をさへ見た事だ。この裏面には、棄て

去る事の出来ない真心があるらしくて、非法を行つた地頭ごもも、其心が清らかになつた事だといふ意を含めてゐる。「忘られぬ」の「れ」は可能の助動詞。「ありがほに」は、あるやうな様子で。「影をだに見し」は、水の清らかに澄んだ事をいふ。さて此歌は、前に掲げた古今集歌の、「古の野中の清水ぬるけれど、もとの心を知る人ぞ汲む。」といふ歌を本歌として讀んだもの。

◎永仁六年。「永仁」は、伏見天皇の御代の年號。阿佛尼は弘安六年に没したから、永仁六年は没後十五年に當る。「永仁六年三月一日書之」さあるのは、此奥書を書寫した年月日で、同時に此日記を書寫し終つた月日である。

◎阿佛房。阿佛尼のこと。

◎室。大臣以上の奥方をいふ、後には轉じて一般の人の妻をいふ。

◎公達。攝家及び清華（太政大臣を先途として、大臣大將を兼ね得る家柄）の子息をいふ。

◎他腹。腹違の子。

◎押領。さしおさへてさるること。よこごり。

◎陳狀。鎌倉時代に訴訟の時、訴狀に對して被告から辯疏する書付を陳狀とも答狀ともいふ。「陳狀の爲に」は、陳狀を差出す爲に。

◎死去せられし。「死去せられき」さあるべきである。「し」は過去の助動詞「き」の連體形で、上に「ぞ・なん・や・か」の係のないのに連體形で結ぶのは破格である。

◎つけられず。味方されないこと。訴訟の敗けになるのをいふ。

◎安嘉門院の四條さ申す人。安嘉門院に仕へて、その呼名を四條さ言ふ人。

新釋十六夜日記 終